明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治三十九年十二月五日発行
毎月一回五日発行

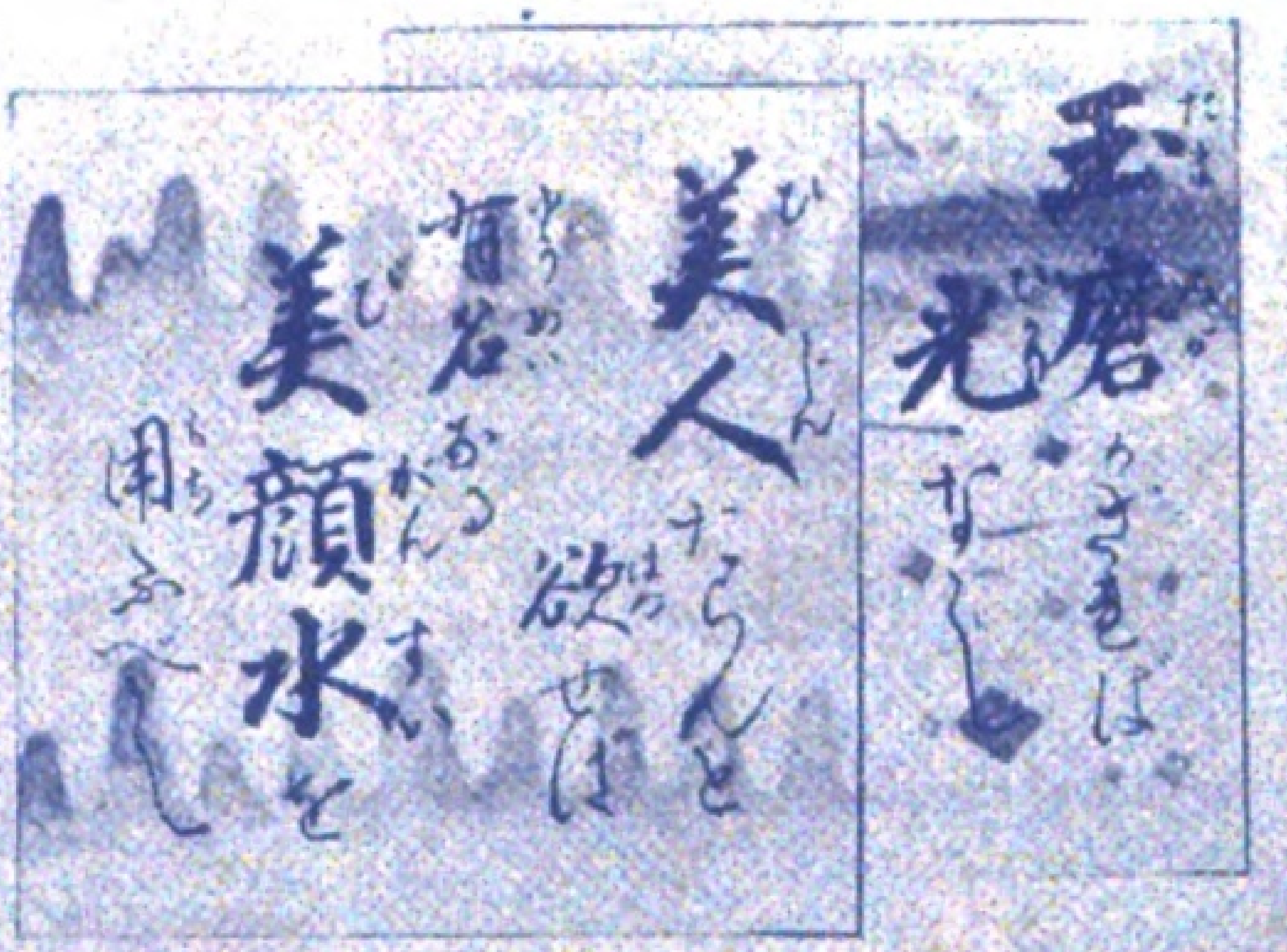
女學世界



第六巻
第十六號

博文館發行





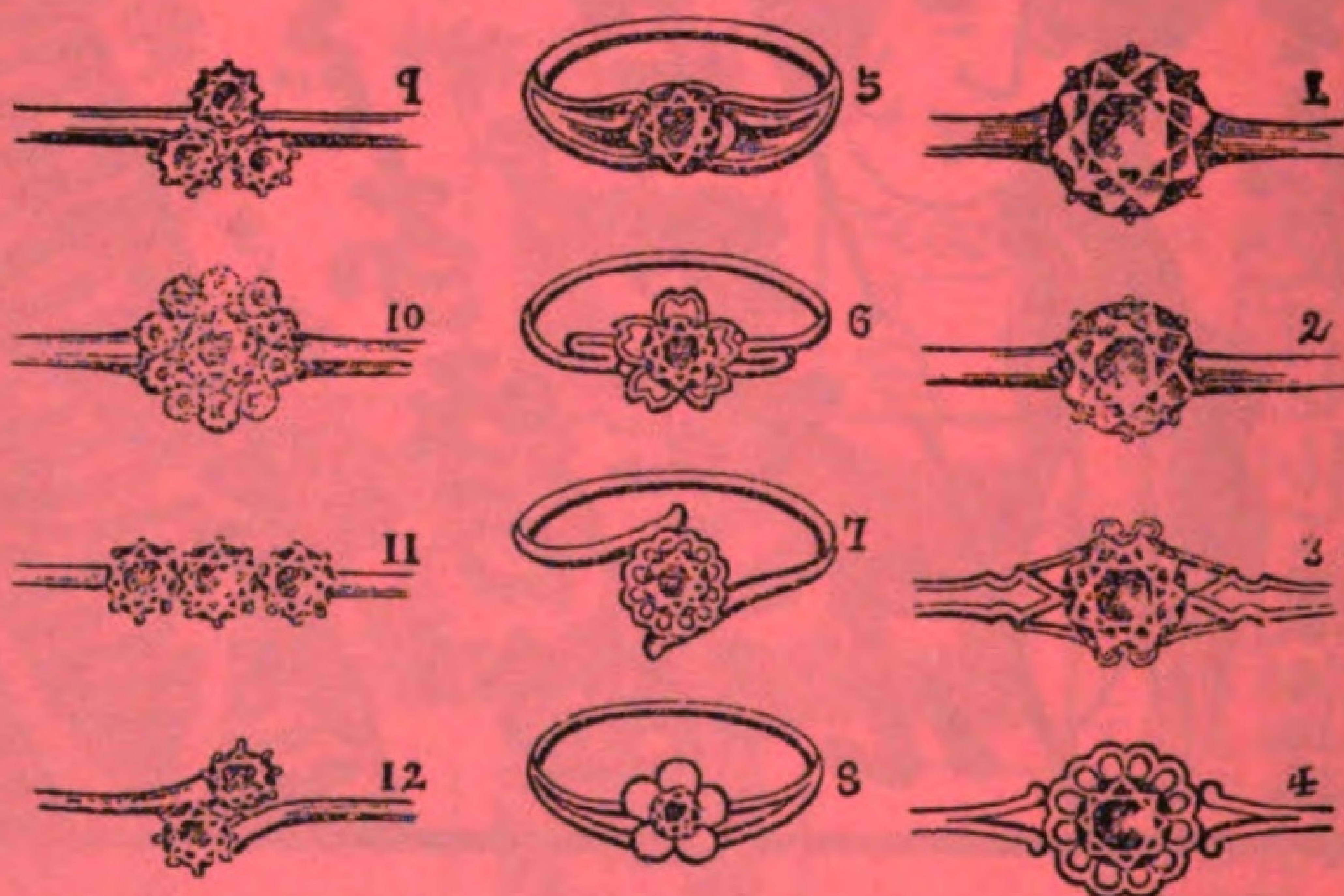


色を白くし、きめをこまかにし、つやを出し、うつくしくなる。殊に化粧に用ふる時は、おしろいの意のままにつき、むらにならず。常に用ゆれば花の顔せ雪の肌となり、真の玉を欺く美しき顔となるべし。

賣弘所は全國有名なる小間物化粧品賣藥店にあり


SAVON
SAVON
EAU
歳末の御贈答品
として最適當せる商品切手の外・・・・
香油、香水、白粉、石鹼、手巾、肩掛、ボーア、
襟巻、半襟、帽子、帛紗、風呂敷、銀貨入、
など種々取揃置申候間澤山御注文被下度奉願上候。敬具。
尚地方より御注文の案内として『冬衣裳』と題する美麗なる冊子、印刷致候に付御一報次第早速送呈可申上候
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店
振替貯金口座番號三百番

女學世界 第六巻第拾六號 目次



金剛石入金指輪

(1)甲價貳千圓(2)甲價九百五拾圓乙價八百圓丙價七百五拾圓(3)甲價七百五拾圓乙價六百圓丙價五百圓(4)甲價參百圓乙價貳百五拾圓丙價貳百圓(5)甲價貳百圓乙價百八拾圓丙價百六拾圓(6)甲價五拾圓乙價百卅五圓丙價百廿圓(7)甲價壹百圓乙價八拾五圓丙價七拾圓(8)甲價六拾圓乙價五拾五圓丙價五拾圓(9)甲價貳百廿圓(10)甲價參百七拾五圓(11)甲價參百六拾圓(12)甲價貳百圓乙價百五拾圓

(附記)

當店調製のダイヤモンド入製作品は何時にても原價にて他店と交換又は些少の割引にて買戻し候

貴金屬宝石
美術携帶品商
婦人粧飾品

大西白牡丹

東京市京橋區南傳馬町三丁目
特 電話本局 三十番

(甲の一)

女（甲の二）

(甲の四)

夜なべ



榊原蕉園女史筆

女(乙の一)

每號 皇太子妃殿下賜上覽

新年號豫告

（四十年一月一日發行 三卷第一號）

二大附錄

聲と姿……岡田三郎助先生筆

岡田先生が特に本誌の爲に揮毫されたる苦心の近作、表情の美、色彩の巧、相俟つて新年の藝術壇に雄視せむ（石版極彩色十數度刷、額繪版上等用紙密刷）

明治文壇 **出世作一覽**

之れ本誌記者が細査の上に成れるもの、明治の文士は如何なる作を出して世に名を成せしか、此表を見れば一目瞭然、永遠に座右に具へて可なり

女子文壇

每月一日發行
外に四回增刊
一册大判百卌頁
價 一册拾錢
八册前金七〇
拾六錢郵稅不要

作文練習唯一雜誌

體裁の美觀

表紙は例の山中古洞先生が高尙艷麗なる筆に成り金刷の極彩色、**繪葉書**も閨秀畫家の手に依つて花鳥の圖按、**水彩畫**は三宅克己先生の妙腕に俟ち、表紙見返しの**繪手本**も益す懇篤に描かれ、口繪**寫眞版**は殊に材料を精選すべし。

內容の盛觀

卷頭に執筆さるゝ諸先生は大塚楠緒子、與謝野晶子、羽仁もと子、小山內八千代子の女流名家、本誌の本領たる諸孃の**寄稿**は**全紙**に**滿載**し、**銀側時計**以下の**重賞**を懸けて募りたる**新作**の**詩文**花の如く雲の如し、加へて**課題**の**文藝遊戲**の企ては**天下に獨步**す。

（乙〇三）

發兌元 東京市京橋區大鋸町十二（振替口座壹七貳九番） **女子文壇社** 賣捌 全國各地雜誌書店



THE GEM
ゼム
懷中良藥
衛生家必携
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衞生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢　百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢　九百粒入一圓
容器入ゼム二十錢
日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

(その四)

夕陽



三宅克己筆

女(丙の一)

勤儉貯蓄と和洋裁縫大全

（本編 貳拾七册
續編 參册
計 參拾册）

本書は斯道の大家として世に識られたる小出先生が十有七年の星霜を積んで玆に漸く公にせられたる良書にしてしかも**參拾册**と云ふ此の大部の本を買ひ求めんとする皆さんは明年一ヶ年丈一日僅に**參錢參厘**、づゝ**貯蓄**なされば何の苦もなく買ひ得らるゝので御座います貯蓄の効用も玆に至りて偉大なるを覺へます皆さん御奮發なさゐませ

●豫約金は十二ケ月間に割附拂の事
●此の簡易なる豫約方法は十二月廿日限り斷然撤回致します
●豫約方法主要項目入用の向は端書にて申込あれ進呈す

豫申約込所

東京堂（東京神田）　前川書店（大阪久寶寺）　積善館（廣島鹽屋）　木文書店（仙臺大町）
東枝律書店（京都佛光寺）　宇都宮書店（金澤片町）　博向堂（福島本町）　久保田商店（東京神田）

發行所（豫約申込所）　**女子裁縫高等學院出版部**
東京市青山原宿貳百九番地（振替貯金口座番號一二九五）

●此の簡易なる豫約方法は來る貳拾日を以て斷然撤回致します然れば餘す處の日數僅に貳週間に過ぎませぬ諸卿よ時機を失せざる樣此の際至急御豫約相成りませ。

斯くの如き親切重寶なる婦人雜誌あり

婦人世界

十二月 三日發行 毎月一回 第十二號 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九十錢 一年分一圓七十錢

口繪

◎美麗なる彩色石版畫て凡三葉 ◎名家新婚寫眞 ◎後藤男爵家庭

◎買物は如何になすべきか……星常子

△如何なる買物の方法が經濟的なるか

△品物と價格とは如何に檢査すべきか

◎わが良人の禁酒實驗（小野雪子）

良人の飲酒を憂る妻君は一讀せられよ

◎弦齋夫人の料理談……

△大根は如何に料理すべきか

△大根は如何に煮るべきか

△豚は如何に料理すべきか

△豚の刺身は如何にすべきか

△澤庵は如何に漬けるべきか

◎寒氣に對する育兒上の注意……加藤博士

兒を愛せらるる母君は讀まれよ

◎歲暮贈答品の選擇法……近藤蕉雨

◎障子の張換へ方……天野誠齋

△糊は如何に溶くべきか

△紙質は如何に選ぶべきか

△油障子は如何に張るべきか

◎女子高等師範教授岡田みつ子の面影……

◎ひびしもやけ豫防法及び治療法（遠山學士）

◎姙娠の生理と病理……醫學士伊庭秀榮

◎後藤男爵夫人處世實驗談

婦人の日常生活法

村井弦齋

△月經時は如何に處置すべきか

△病氣の時は如何にすべきか

△下痢は如何に手當すべきか

△腹痛は如何に手當すべきか

△齒痛は如何に手當すべきか

△腦充血は如何に手當すべきか

△腦貧血は如何に手當すべきか

△大醉は如何に手當すべきか

△蟲齒の害は如何に手當すべきか

△火傷は如何に手當すべきか

△リウマチスは如何に手當すべきか

△切創は如何に手當すべきか

△シャクリは如何に手當すべきか

△汽車には如何に乘るべきか

△汽船には如何に乘るべきか

△外國へは如何に旅行すべきか

◎明治四十年 家庭日記

家庭辭書を兼ねたる新式の日記にして家庭に關する事は悉く備はる

總クロオズ金文字入美本八百四十頁 定價五十錢 郵税十錢

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番） 賣捌全國書店

（丙の三）

HIGH-GRADE ORGANS & PIANOS
Manufactured by
"NISHIKAWA & SONS"
HINODECHO YOKOHAMA

宮內省御用西川風琴



高尚なる音樂の嗜好も家庭の和樂を增進す



東京代理店銀座三丁目十字屋樂器店

壹號	金拾八圓	三十九鍵
貳號	金拾九圓	三十九鍵
參號	金貳拾壹圓	三十九鍵
四號	金貳拾八圓	三十九鍵二列笛
五號	金參拾參圓	四十九鍵
六號	金參拾八圓	四十九鍵
七號	金四拾五圓	四十九鍵二列笛
八號	金五拾圓	六十一鍵
九號	金五拾八圓	六十一鍵二列笛
十號	金六拾八圓	六十一鍵 四個ストップ 二列笛
十一號	金八拾圓	六十一鍵 七個ストップ 二列笛
十二號	金百圓	六十一鍵 九個ストップ 二列笛
十三號	金百拾五圓	六十一鍵 十一個ストップ 五列笛
十四號	金百參拾五圓	六十一鍵 十一個ストップ 五列笛
十五號	金百六拾五圓	六十一鍵 十三個ストップ 三列笛
十六號	金貳百參拾圓	六十一鍵 十五個ストップ 五列笛
十七號	金百貳拾圓	六十一鍵 九個ストップ 二列笛
十八號	金百參拾圓	六十一鍵 十一個ストップ 三列笛
十九號	金貳百拾圓	六十鍵 十三個ストップ 三列笛
二十號	金貳百七拾圓	六十一鍵 十五個ストップ 五列笛

大坂代理店南區順慶町四丁目武內樂器店

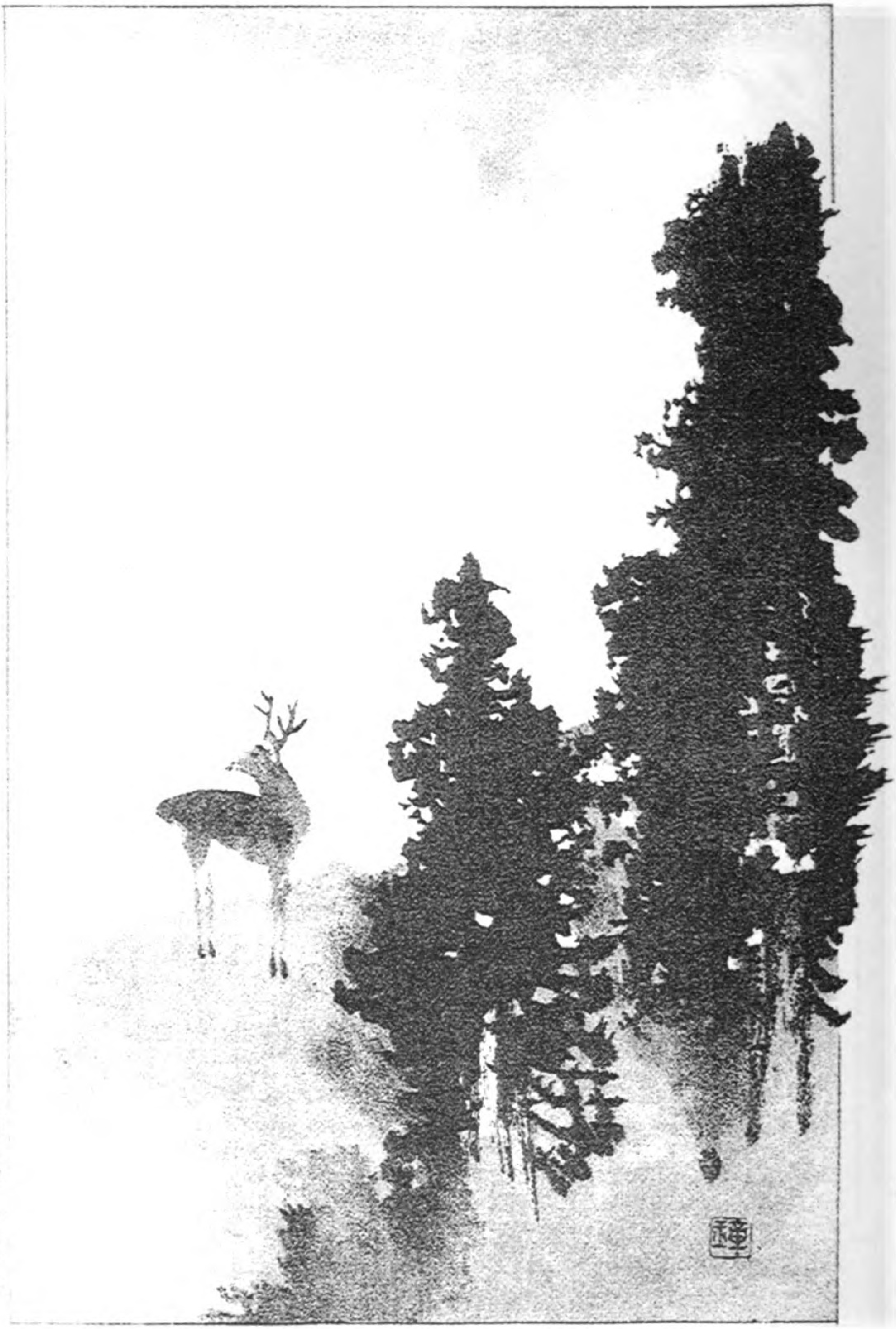
日本元祖

西川オルガン及ピアノ製造所

横濱市日之出町二丁目
電話八百四十一番
(定價表ハ御申込次第進呈ス)

女(丙の四)

鹿鳴



川端玉章筆

水禽



跡見玉枝筆

謹告

弊店一手販賣の山葉風琴及鈴木ヴァイオリンは本年十月一日より定價を下記の通り改定し一層品質を精選し博く御需用に應じ可申此段謹告候也



山葉風琴改正定價表

品名	定價
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二六、〇〇
第參號	三三、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	三七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一三五、〇〇
第拾四號	一四〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	二五〇、〇〇
第拾八號	三〇〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座用オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇

鈴木ヴァイオリン改正定價表

品名	定價
號外A品	二、〇〇
同B品	三、〇〇
同C品	四、〇〇
壹號品	五、〇〇
貳號品	六、〇〇
參號品	七、〇〇
四號品	八、〇〇
五號品	一〇、〇〇
六號品	一三、〇〇
七號品	一五、〇〇
八號品	一八、〇〇
九號品	二三、〇〇
拾號品	二六、〇〇
拾壹號品	三〇、〇〇
拾貳號品	三五、〇〇
拾參號品	四〇、〇〇
特製壹號品	五〇、〇〇
同貳號品	六〇、〇〇
同參號品	七〇、〇〇
同四號品	八〇、〇〇
同五號品	一〇〇、〇〇
同六號品	一二〇、〇〇

弓	定價
號外品	〇、七五
壹號品	一、〇〇
貳號品	一、五〇
參號品	二、〇〇
四號品	二、五〇
五號品	三、〇〇
六號品	三、五〇
七號品	六、〇〇
八號品	八、〇〇
九號品	一〇、〇〇

箱	定價
壹號品	一、五〇
貳號品	二、〇〇
參號品	二、五〇
四號品	三、〇〇
五號品	三、五〇
六號品	四、五〇
七號品	七、〇〇
八號品	八、〇〇

東京市京橋區竹川町三十番地
合資會社 共益商社樂器店
電話新橋五二九 電略〔ヨキ〕

(一〇一)

(丁の二)

醫學博士 井上通泰君監修

家庭衛生叢書

▶十一編◀

目次

▲全部拾貳册 洋裝大判
毎月一回發行
正價（●壹册貳拾錢●參册五拾七錢●六册壹圓拾錢●拾貳册貳圓拾錢▲郵稅一册六錢宛）
◉十一編既成發行

東京 博文館 本町

登錄商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及需用者諸彥の稱讃を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候●御注文之品は直ちに御屆可致候●代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入 洋酒食料品商
東京新橋竹川町
三組屋 大塚琢造
電話新橋七三六番

女（丁の三）

山雀に梅もどき



戸田玉秀筆

さゞん花



柴崎美方筆

皇后陛下
東宮妃殿下 の御用命を拝する名譽の白粉

無鉛
優等

御園白粉

長谷部仲彦氏發明
東京芝胡蝶園製造

御園白粉は煉製、水製、粉製の三種と高貴化粧水御園とき水、洋風御化粧御園クリーム、御顔ふき御園打白粉、濃厚化粧水四季の花とあり、何れも本邦無比として非常の好評を博せり

發賣元 東京日本橋 橘町四丁目 丸見屋

（戊の一）

女文選評

投稿募集懸賞

投稿期限を來春一月廿日迄延期し更に弘く現代才媛の傑作を募集す陸續投稿を賜へ（附錄として別に當代女流大家の雄篇傑作を添ふ）

選評 宮崎三昧先生擔任

文題 投稿者の隨意たるべし

字數 長短隨意されど冗長を忌む

發行 來春三月一日まで

定價 菊判二百頁以上金參拾錢

注意 投稿には必ず宿所姓名を詳記し且剽竊文の沒德を自ら戒められたし

特選
- 天 純金指輪 壹人
- 地 ハンドオルガン 壹人
- 人 銀時計 壹人

秀逸
- 一等 言海 參人
- 二等 女文早まなび 拾人
- 三等 文の手ならひ 卅人

懸賞當選は本書内に於て發表し別に當選の通知をなさゞる規定とする故當選者は本書に插入したる賞品請求紙を以て當選者たる申告をなすべし本會はこれを證とし賞品の贈附をなすべし

投稿所 東京市下谷區櫻木町貳番地 女子國文學會

發行所 東京市本郷區西片町拾番地 衆星閣

女（戌の三）

女學世界
第十六號
壹割引
此處切り拔き御注文の方は

（切取線）

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の奇麗な程快きものはなし○此皮膚を奇麗にすると云ふことは平素の食物と衛生に依るとは云へ○彼の歐米人が艶の美はしく皺の少なきは日ノ出クリームを缺くべからざる化粧品として使用しつゝある所以にして○日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他各位の實驗上明かであります

美人トナル秘密

冬季は尤も必用

色を白くしキメを細かにするは勿論ヒビ、シモヤケ等を全治する外日ノ出クリームは電氣乳劑なれば○皮膚を摩擦する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故△老年に至るも皺の寄ることなく○如何に其花の如き若き姿を永く保ち得るでしようか彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐは無論日本流の薄化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく○又つき惡き眞の無鉛毒の白粉を使用前日ノ出クリームを用ゆれば極めて美しく付き○眞正の美人となることは獨乙國醫學博士エ、エ、ボーン氏の證明する所さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか初め溫湯にて顔手足を洗滌し能く拭ひし上日ノ出クリームの少量を○指先きにて充分擦り込たる後ハンカチーフ或は軟紙にて拭ひ去るべし○尚ほ白粉を用ひらるゝ方は前記の如く拭ひ去りたる後白粉を使用さるゝ時は衛生上有効なるのみならず櫻花の滿開せし如く美麗を極むべし

右化粧用日ノ出クリーム品切の處今回入荷仕り候間御注文被下度候尚毛髮用日ノ出クリームはコスメチツク、香油等より適度に亂髮を止め毛髮を保護養生する煉香油の如き品なり何れも佳香馥郁にして未生的に充備せり●化粧用●毛髮用、何れも金壹圓郵税拾錢小瓶參拾錢郵税四錢

日ノ出クリーム輸入元
歐米化粧品專門商
東京日本橋區村松町廿二番地
須原啓三郎商店

近時粗惡の僞品を販賣する不正商店あり、必ず日ノ出の商標と日ノ出クリームの文字に御注意あらんことを

○外害豫防ゴム製

婦人の衛生器現れたる



定價 一個
甲 金壹圓
乙 金七十五錢

子宮サック

効能及使用方 一名さよごろも

子宮サック はゴム製にて嶄新の發明御婦人方の衛生上必ず携ふべき要用の具器なり子宮サック を用ゆるときはいかなる場合といへども麻毒痳毒下疳等の傳染することなく又子宮を疵傷する患なし子宮サック は懐妊を望む御婦人は用ゆべからずこれを用ふるときは懐妊せざればなり子宮サック は月經の際額水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ子宮サック の使用方は本品を添て委細傳授すべし

○子宮サック入用の御人は御注文次第東京市内は無遞送料にて御届申上候其他地方は郵送料一箇に付金十錢にて全國何處を問はず御郵送申上候

月やくはらい
子宮サック
發賣所
通經丸本舗
東京兩國米澤町二丁目一番地角
萬珠堂藥舖
電話浪花一一三八

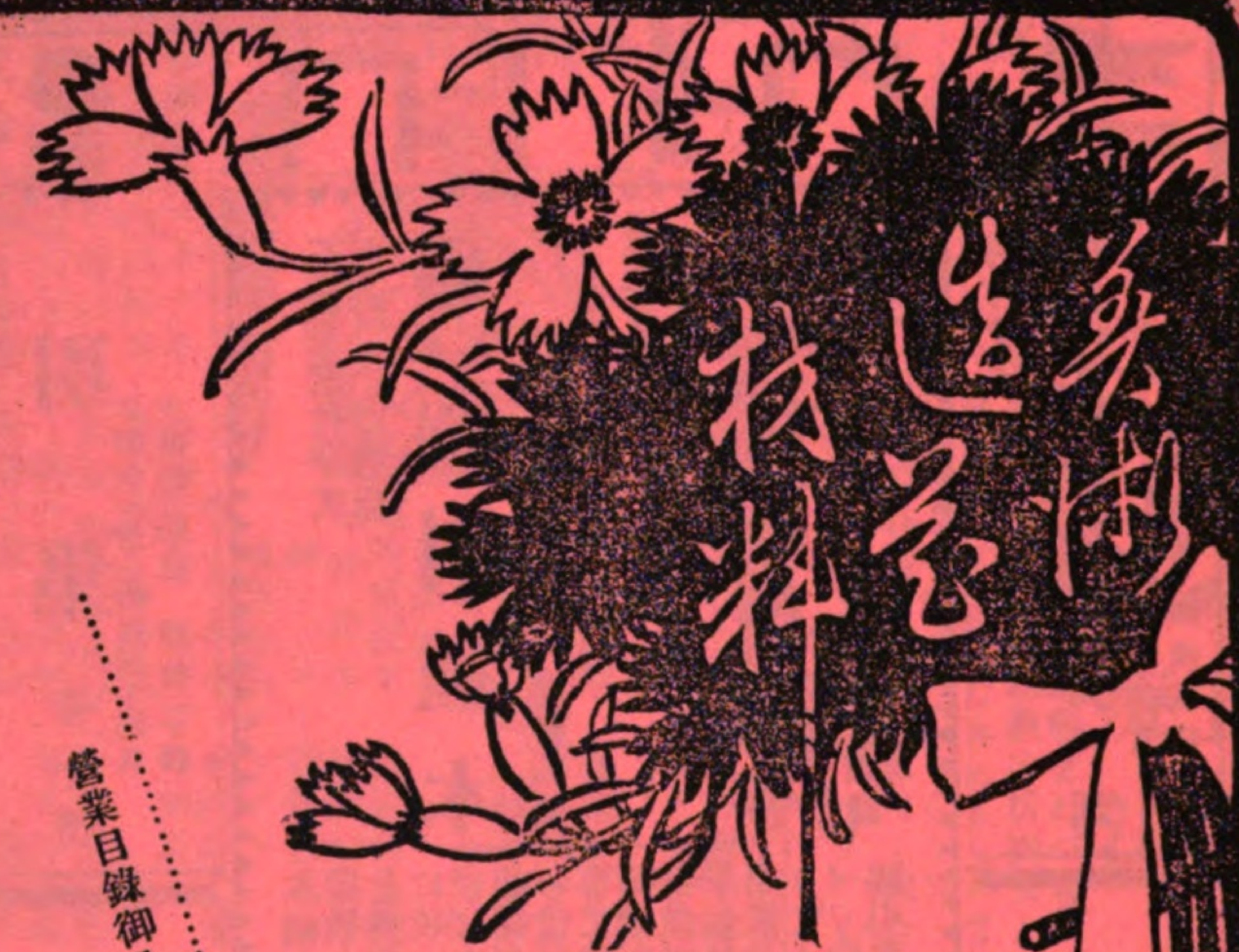
特約大賣所
一 吉田安五郎
東京々橋區銀座通、 佐々木玄兵衛
東京日本橋區坂本町角 徳田多助
東京日本橋通四丁目 津村順天堂
東京日本橋通二丁目 北島茂兵衛
大阪道修町二丁目 資藥卸會社
大阪高麗橋一丁目 檜尾商店
京都四條通新町 武田都堂
京都三條小橋 雲路大藥堂

女（戌の圖）

みぞれ



島崎柳塢筆



各女學校御用

附屬品並に造花器械類一式

東京市日本橋區橫山町一丁目十六番地

天野卯兵衛

電話(長)浪花
一六四三番

(切取線)

營業目錄御入用ナレバ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候

縣　郡　町村

女學世界
第六卷第十六號

女(己の一)

子宮病

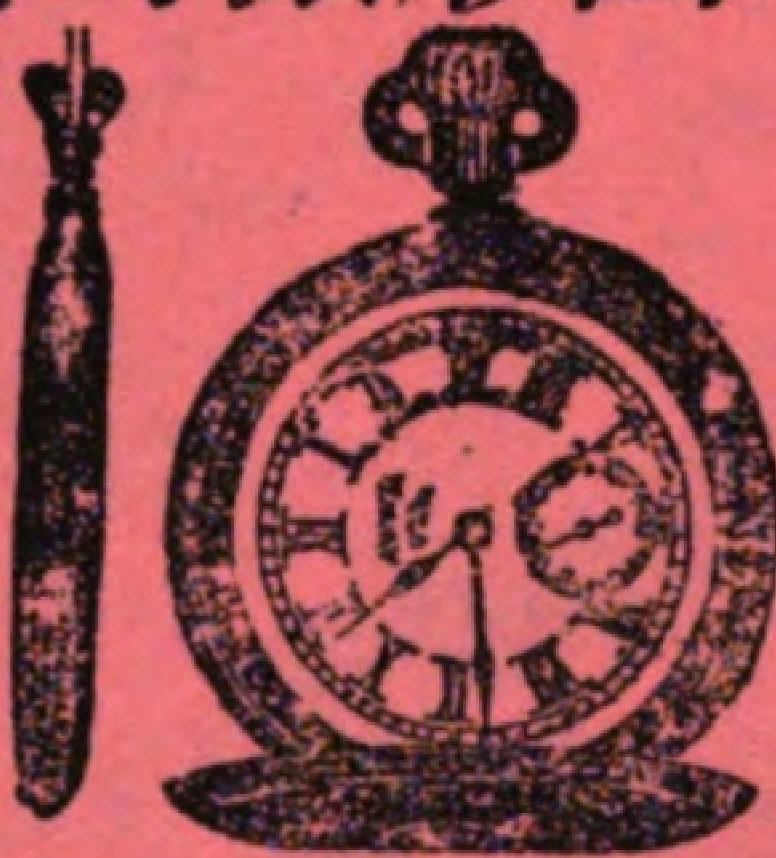
自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらい色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安す〳〵と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町　笹岡りん

優美高尚極薄手形

米國形銀時計



本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尚にして而も側の銀質等總て米國ウオールサム製に遜色なき良品なり

價拾三圓半　銀側兩蓋中蓋附16 17 18形機械金梨子地寶石入二枚車別爪石巻上向アンクル龍頭引出針廻し

價拾貳圓半　右同品乙號

價拾圓半　銀側兩蓋機械ニッケル惣寶石入別爪巻上向アンクル

價九圓半　右同品乙號

極薄手形太文字　鐵針

注意　◉保険三十ヶ年　◉送料内地拾錢　臺、清、韓參拾錢　◉代金引替は卅錢前金○振替爲替口座百七十三番

注意　大景品附此廣告を切抜き御注文書同封の御方には鎖磁石、一切の附屬を添へ景品として進呈す

東京銀座壹　伊勢伊時計店

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也◉郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衛生書院

☞ 空前の新藥

シピリス丸

一名掃毒丸

◉徽毒◉そう毒◉りんどく等◉徽毒性より來るふきでもの其他毒氣多き人服用するときは毒を大小兩便にとり輕きは七日分重きは十四日分服すれば奏効顯著健全の身となる徽毒患者は早く試み給へ

正價　三日分金三拾錢　七日分金六拾五錢　十四日分金一圓廿錢

◉專賣　東京神田區錦町一丁目十四番地　博藥館

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

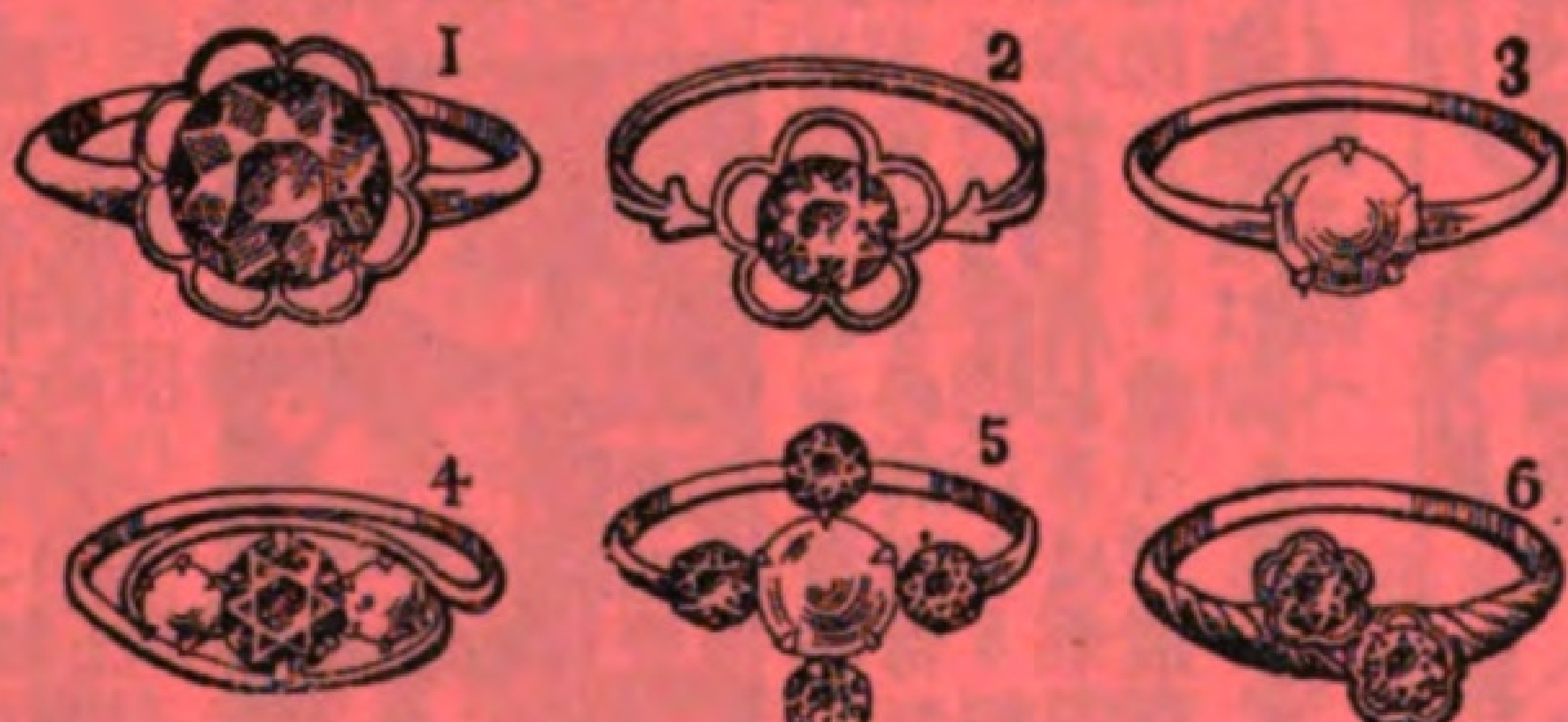
女(己の三)

千葉縣野田町
釀造元 茂木佐平治

天下一品
最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

新式寶石入指輪



(1) ダイヤモンド入 五十圓以上二百圓迄

(2) ダイヤモンド入 四十圓以上八十五圓迄

(3) 眞珠入 八圓以上卅圓迄

(4) ルビー及び眞珠入 十圓以上廿圓迄

(5) ルビー及び眞珠入 十七圓以上

(6) ルビー眞珠或はサフハヤ入 八圓以上廿五圓迄

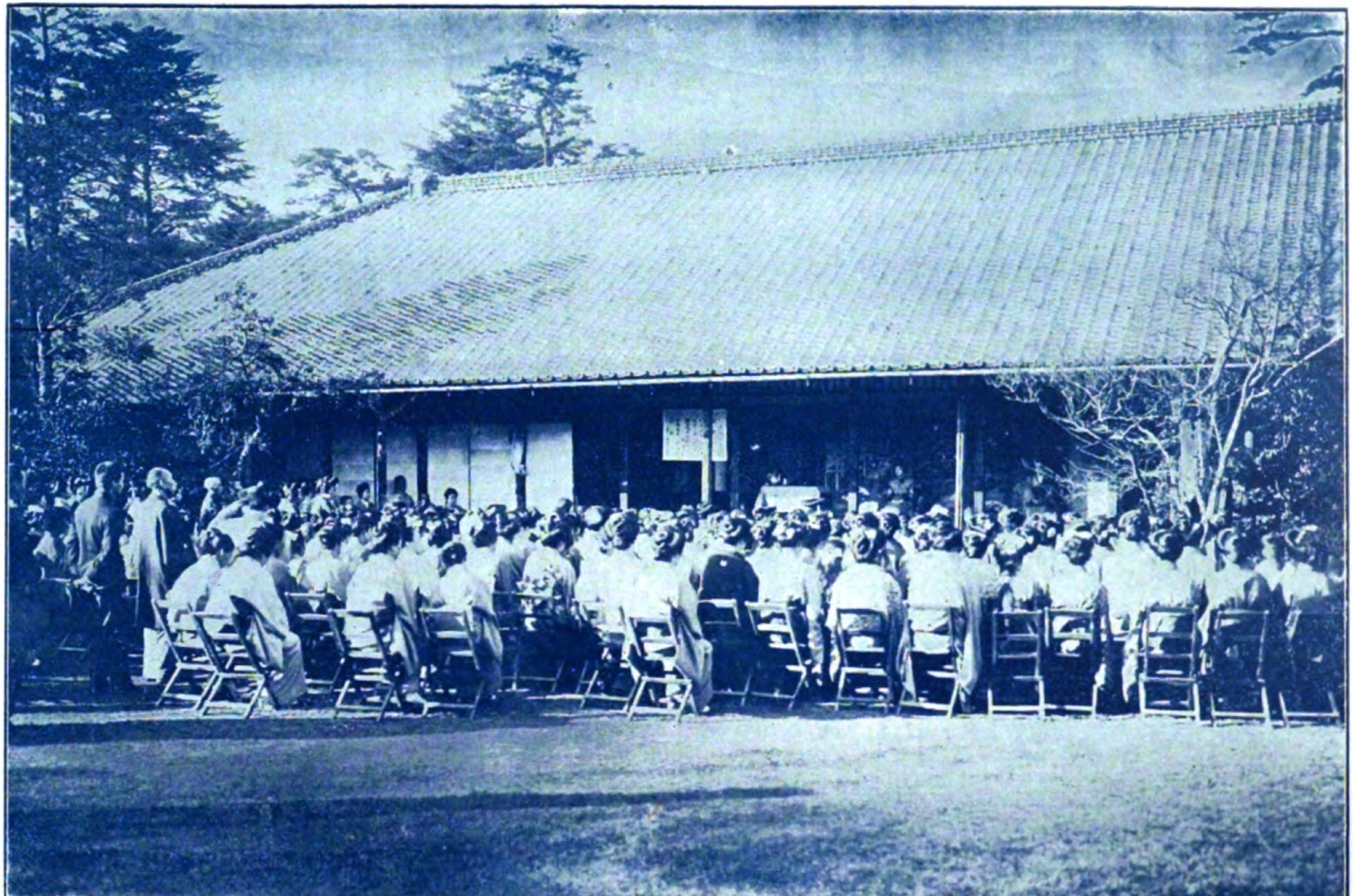
右の他彫刻指輪金製帯止、流行品一式取揃有之候、市内御一報次第速に貴覽に入れ中べく候

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
電話本局二〇四〇番

ロッキー山の雪



大日本婦人教育會大會



會場正面の椅子によれるは閑院宮妃殿下その右方が毛利公爵母堂左方演壇に立てるは男爵毛利五郎氏なり

田家の雪



米國の新聞秀作家



（記事參照）

隱岐敬次郎君譯
女子衛生學
正價三拾錢郵税四錢

西田敬止君著
育兒と衛生
正價廿五錢郵税六錢

楠田病院長
楠田謙藏君校閲
產科婦人專門醫
稻生鑑次郎君纂著

實習產婆學 上卷
通常產

洋裝大判美本紙數三百餘頁
正價金七拾錢　郵税拾錢

本書は斯道の專門醫にして、多年產婆養成の經驗ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛國ペナール、アブラン兩氏の著書を始め、多くの佛獨兩國の學者の著述を參考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるゝ產婆書に比して異彩を放てるもの多く插圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんとを務めたれば產婆生徒の講習用としても、開業產婆の參考用としても、實に間然する所なき良書なり。

醫學博士　濱田玄達先生校閲
醫學士　伊庭秀榮君著

複習問答 簡明產婆學



婦人の職業中最も其任に適するものを產婆學とす方今斯學に關する新書少きにあらずと雖も多くは其書長篇に亘り其文硬澁に傾き以て平易通俗に解を與へたるものなし伊庭氏玆に見る所あり**產婆學研究生**の爲め其講餘の**複習本**たらしめん事を期し最も**平易**なる**問答體**を以て**斯學**の**要義**を說述せり而して斯學の**泰斗濱田玄達先生**の**懇篤**なる**校閲**を受くるを以て本書の**精確**を證するに足るべし請ふ續々愛讀を賜はらんことを。

全一冊四六判
紙數二百廿頁
正價金五拾錢
郵税六錢
既成發行

東京　博文館　本町

女(庚の二)

好評第三版

群馬縣師範學校長 羽田貞義
新潟縣長岡高等女學校教諭 小澤錦十郎 兩先生合著

母のための教育學

全壹册
和裝美本
定價金五拾錢
郵稅金六錢

本書は著者が學理を緯とし經驗を經として懇切に家庭教育を説かれたる無二の良書なり
家庭教育を全ふせしめ以て一家の繁榮と社會の幸福を增進せしめんと欲する人又は將來母たらんとせる人否な家庭教育の任に當る人は本書を讀まざるべからず
學校教育の完成を期する者も亦本書を讀まざるべからず如何となれば家庭が如何なる主義方針で教育しつゝ居るか又教育せんとするかを知るは教育家に最も必要なる要件なればなり
本書の特長一二を擧ぐれば

一、本書は家庭教育の範圍を最も廣く解し第一胎教、第二小學校以前の家庭教育、第三小學校時の代家庭教育、第四小學校以後の家庭教育の四期に分ち、之れを科學的に説明せるにあり
二、心身の發達を基礎として各時期の體育智育德育を説きたるにあり
三、文章を談話體にして解し易からしめしこと
四、餘論として道德の概念心理概論及教育の方法を説きたり殊に心理學を著者の經驗上より具體的に説き難解の心理學をして容易に解せしむるに勉めたりし事等にあり

發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 振替貯金口座第二八〇九番 目黑書店

女(庚の三)



進歩金牌受領

五二共進會ニ於て
宮内省御買上の
榮を賜ふ

専賣特許

蒸氣こて

（和洋服安全のしの器）

本器ハ蒸氣の力を以てのしこと故キリを吹く面倒なく

洋服地、絹地、縮緬

木綿の別なく實ふよく利き少しも地質を損ずる憂ひなし

發賣元 東京麹町三丁目 千歳商會

家庭用 金参圓
中形 八十錢

第三改正 日本藥局方

參版出來

全一冊中判並製紙數六百頁
正價六拾錢 郵税拾錢

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壱円、三週分六十五錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢

本舗 東京銀座壱丁目 大阪南久宝寺町堺筋東 山田安民



全國各藥店ニて取次販賣す

婦人科
小兒科 専門

午前宅診
午後往診

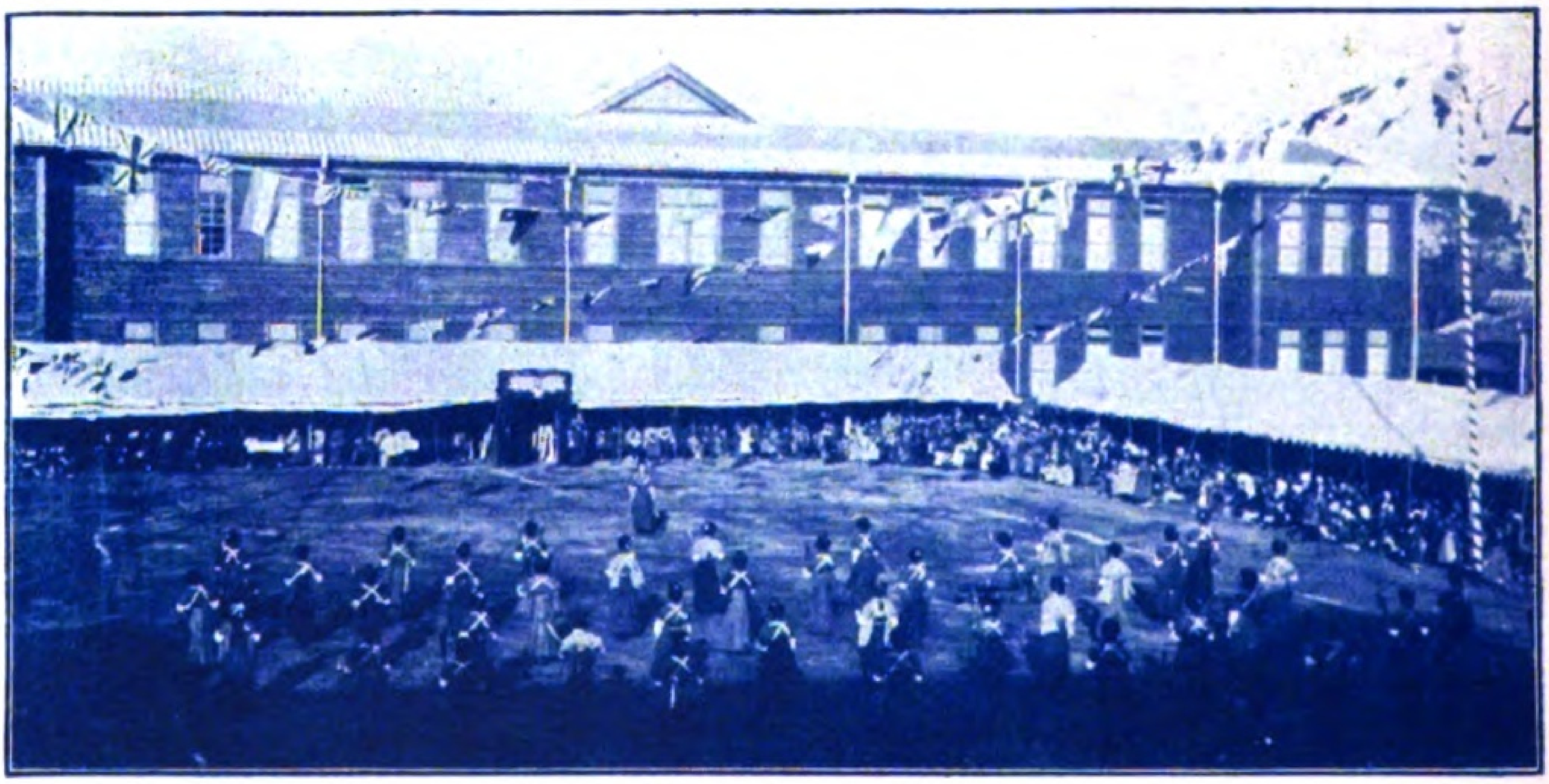
東京市麹町區飯田町四丁目九番地

女醫 鷲山彌生

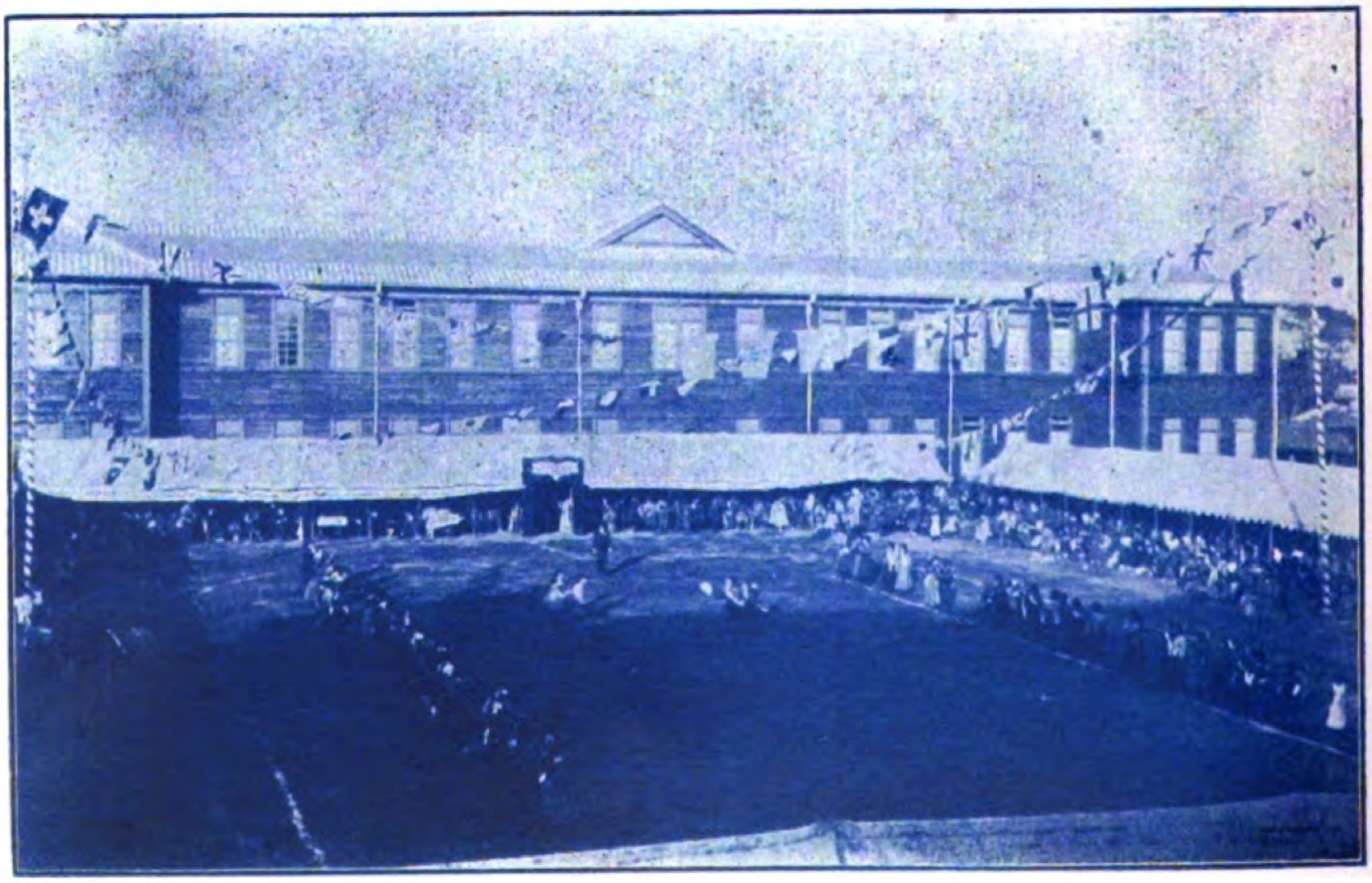
女（庚の四）

東京府立第二高等女學校秋季運動會





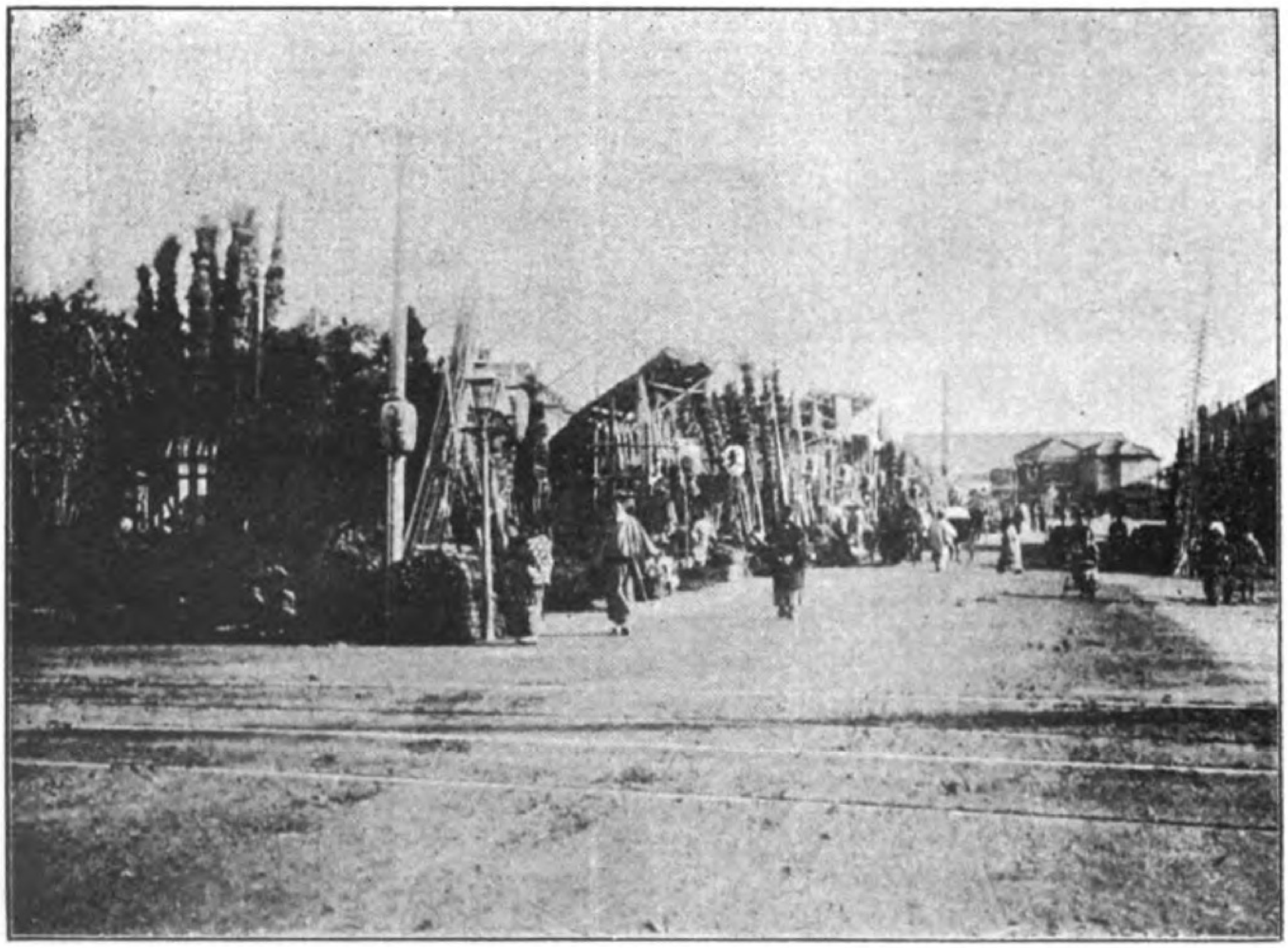
棍棒體操



旗送り

歳の市





HAIR-ROLLS. U. S. Patent.



米國最新流行
束髮前髮じん

ヘヤロール

▲流行の「エス巻」結に最も必要
▲輕き事「ハチ」の如く伸縮自在
▲頭部を冷して「フケ」を除去す
▲鬢を出すには、なかほどを緑にてくゝり長くせば格好宜し

日本一手販賣元
東京京橋區檜屋町一番地
日加商店

賣捌所
各地小間物和洋店

●ヘヤタイは貴婦人用の束髮元結にして切る事又は結ぶ手間を省き一本あれば半年の壽命を保つ德用便利の品





美術

漆器

蒔繪

御婚禮道具
ぜんわん
家具其他
盃
製造

ぬりもの陳列場設置有之候間御随意に御縦覽多少に不拘御用向被仰付被下度偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區
室町貳丁目

木屋本店
林九兵衛

電話本局（九百九十三番 千七百十番）
電信略名（キ、九）

第一高等學校教授
英文學專攻文學士　畔柳都太郎先生校閲

法學士　辻宏吉君著

新式英和日用書翰文

曩きに『新式英語作文書取法』を著し斯界に便益を與へられたる、法學士辻宏吉君今亦た本書を大成せり、所編別つて普通及び商業の二となす、作例饒多、説明懇篤にして、蓋し日用萬般の事項に渉り、英語書翰文を作成するに聊かの遺憾なし、實に無二の好伴侶良指導たるを疑はず、苟も外國通信を主さどるの士及び斯學の研究者は、必らず一本を供ふるの要あり。

既成發行

全一册

洋裝上製總クロース
紙數　四百八拾九頁
正價　八十錢
郵税　八錢

巖谷小波君著



全一册

四六判裝幀優美紙數約三百頁
正價六拾錢郵税八錢

再版出來

『**笑の國**』は、文壇の笑上戸、兼ねて笑はせ上手なる例の小波山人が、輕快の筆と洒落の想とを以て新たに建設する所なり．我と笑はん人々は、疾く來つて笑へかし．夫れ天國は近づけり笑の國は開かれたり矣．

東京　博文館　本町

女(辛の三)

（辛の四）

遠州流挿花大會出品



遠州流家元本松齋一得宗匠

婦人の作業





（東京市小石川博文館印刷所内における國定教科書製本所の女工と其の工場にして上圖は中山法華經寺本堂門前の撮影なり）

(其の二)

通俗作文全書

全部二十四冊洋裝四六判
並製紙數各三百頁
正價一冊參拾五錢
郵稅一册六錢宛

記事論說或は紀行敍事等の雄篇大作より、尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般の藝術の駸々進步するに反し作文の技のみ獨り退步の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目は下に列記す。

第一編 **文章組立法** 大和田建樹君著

第二編 **書簡文作法** 同

第三編 **美文作法** 田山花袋君著

第四編 **商業作文法** 天城安政君著（未刊）

續刊

- 書簡文範
- 女子消息文範
- 中等學生文範
- 論說記事文範
- 祝賀弔祭文範
- 言文一致文範
- 紀行文範
- 英和商業作文
- 雅俗はがき文範
- 支那時文軌範
- 英文作法
- 才媛文集
- 寫生文範
- 日記文範
- 古今名家文話
- 明治時代文範
- 古今名家尺牘文
- 古今文人逸話
- 古今名句集
- 作文熟語類集

東京 博文館 本町

第二回新學期開始

◉會員大募集＝目下入會の最好機なり

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義録』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます
▲世間の講義録は乾燥無味で面白味がありません。本會講義録は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜録の外に、美くしい家庭小説を毎號附録とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。
▲本會講義録は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義録發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也
▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり
▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり
▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり
▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し
▲報知新聞評　講義録多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義録の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼ 端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會

（王の四）



女學世界

第六巻 第拾六號

十二月五日發行

家庭暦

休日｛日曜 二日 九日 十六日 廿三日 三十日｝

●行　事＝歳華流るゝが如く年將に暮んとす月の十三日よりは年の市立つ其日割は十三、十四日湯島天神十五日深川八幡十七、十八日淺草觀音廿一日は神田明神廿三日は芝明神廿四日は愛宕廿五日は平河天神廿八日は兩國なれども廿五日よりは諸處にてもしめ飾松杯賣る○中旬より諸家煤拂をなす○廿五日耶蘇誕生日○諸學校は廿五日より官廳は廿八日より休暇○廿日過よりは忘年會を開くもの多し○三十一日大祓あり年の名殘心ぼそし

●遊　覽＝此月は見るべきものなく殊に一年中最も多忙の時なりされど枯野には閼屋の里、飛鳥山、淺茅ヶ原、綾瀬の堤、目黑、雜司ヶ谷など老人の杖を曳くによし

●節　物＝初雪○炭○ふとき○冬枯○冬田○枯尾花○冬木立○柚子湯○水鳥○鴨○鴛鴦○霜柱○餅搗○年の市○から鮭○ゆく年○歳の暮○除夜○大年○大晦日

●食　品＝ひらめ○うぐひ○はも○たら○鮟鱇○新鹽鮭○乾海苔○根いも○栗○大根○ねぎ○鳥獸肉

過ぎ易きひのくま川の年の暮水かふ駒のとまる瀬もなし



婦人俱樂部

在紐育 M、T、生

△俱樂部の嚆矢

世界の婦人中、最も活動的なるは、米國婦人に如ものなし、米國婦人の活動は、其俱樂部を以て、中心となせり。婦人俱樂部は、今より三十五年前、ボストンと紐育に於て、始めて組織せられたるものにして、爾來各州各市に其組織を見ざるなく、今日に於ては、其數千に上り、今や社會の一勢力となるに至れり、就中最も活動的にして、全國各地婦人團體の模範となれるは、市加古に於ける隔週俱樂部と、市加古婦人俱樂部とす。

△市加古の華

隔週俱樂部は、社交的に組織せられ、俱樂部員は、重に第一流の婦人より成り、女流作者及び女醫等も亦網羅せられ、其會日に至れば、花嫁あり、老婦人あり、少女ありて、各思ひ〳〵の粧を凝らし、華美なる室內の裝飾と相映じて、さながら市加古全市の華を、こゝに集めしかと想はる。開會の時に及べば、各自交る〳〵立ちて、各興味あり、利益ある談話を試み、憚る所なく、其所感を述ぶるを例とせり。されば此會の開かるるや、文學論に氣燄を吐くもあり、巴里の觀光より歸りて、其華奢を誇るあり、家庭問題を提供するもの、

歴史に、科學に、宗教に、道德、哲學の諸問題に至るまで、之を聴くを得べく、圓轉滑脱の辯を弄ぶものあり、滑稽諧謔を交ゆるものあり、極端なる急進論者は、往々倶樂部の門戸を開放して、男子の入會を許し、兩性を合して、諸種の問題を研究すべしとの議を出すものあるも、女子は、女子の天地を獨占するに如かずとの、多數意見に壓せらると云ふ。

△活氣場に溢る

市加古婦人倶樂部は、婦人の權利を擁護するの目的を以て、組織せられたるものなり。されば隔週倶樂部の文學的趣味を帶べるに異りて、社會的に活動するを旨とす、見渡せば八百有餘の會員は、市加古全市の各階級を代表して、各活氣を帶べる顔色を現はし、其服裝に至るまで、人目を惹かしめ、無數の席の、後高く排列せられたるを前にして、演説者は低き位地に於て、演壇を占め、拍手湧き、喝采起り、有ゆる婦人問題は、こゝに議決せらる。此倶樂部の議事に上るものは、概ね隔週倶樂部の如く、穩和なる性質の問題にあらずして、常に社會の革新に係るもの多く、殊に慈善事業の問題は、毎會論壇に花を咲かせ、甲論乙駁、滿場沸然の觀を呈して、舌戰の種となれりと云ふ。而して其市政等に關する議決の如きは、こゝに選擧せられたる委員によりて、市長及其他の公人に對して、交渉を開始せらるゝを例とせり。

△六部四室

市加古婦人倶樂部は、六部に分たれ、各部に各一人の部長を置きて、各部員を統一し、各部員は、其部長の下に、各其部に關する諸種の調査を行ひ、事務を執れり。即ち――社會改良部――慈善部――教育部――家政部――文藝部――科學哲學部――是れなり。而して其劇場の如き大建築は、四室に分たれ、別に會議室を備ふ。即ち――安眠室――食堂――圖書室――體操場――是れなり。されば部員は、此倶樂部に來りて、勉學するものあり、運動するものあり、又下婢の如きは、其休日に於て、安眠を貪らんが爲めに來るものありと云ふ。すべて部員は、こゝに來れば、必らず何等

かの慰藉を與へられ、又其活氣を皷舞せらるゝを以て、爭ふて之に集り、常に其寂寥を感ずるとなし。

△會長と玄關番

此倶樂部は、有名なる女醫ステープンソンの發意に成れるものなりしが、ステープンソンは、爾後會長に推されて、常に此會の牛耳を執れり。倶樂部の性質は、既に女性の保護に在るを以て、如何なる事業を問はず、凡そ女性に關する問題は、皆此倶樂部に於て、解決を試みられざるなきと共に、如何なる女性をも棄つるとなく、之に保護を加へつゝあり。此倶樂部に來たるものは、曾つて其會合日に於て、哀むべき盲目の少女が、ロングフェローの詩を歌ひつゝ、玄關を逍遙して、來會者を迎へたるとありしを目擊せしものあるべし。此少女は、曾つて其兩親を失ひ、倚るに人なく、住むに家なきものなりしが、倶樂部は之を保護して、教養せるものなりと云ふ。

△部員の多種多樣

倶樂部員は、第一流の婦人より、二流三流最下流の婦人に至るまで、各階級を通じて、之を網羅し、女醫、女辯護士、女流文學家、女教育家、女工、下婢等、頗る多種多樣にして、年長者は、年少者に對するに、子に對するの感情を以てし、年少者は、年長者に對するに、其母に事ふるの感情を以てすとは、此倶樂部に於ける、部員交際法の要旨なり。されば部員は、互に和氣藹々として、靑風堂に塡ち、其議論の火花を散すとあるに拘らず、交情甚だ密にして相和し相倚りて、以て男性の壓迫に堪ゆるを圖り、女子の品位を養ふに力めつゝあり。米國に於ける婦人の地位が、其高尙を保つを得たるは、まことに此種團體が、諸方に存在して、以て會員の人格をこゝに、養ふに因れり。

△女權の擁護

今市加古婦人倶樂部が、過去三十餘年間に於て、女權の擁護者を以て、自ら任じたる事業の、例を擧ぐれば、左の如し。

△女工下婢等の賃銀に對して、不正なる支拂を爲せしもの、又は殘酷なる待遇を與へしものあるときは、倶

樂部は其女工下婢等の權利主張に對して、有力なる援助を與ふ。

△兩親が其子女を虐待したるものあるときは、之を倶樂部に伴ひ來たりて、其保護の下に養育す。

△妻が夫の虐遇を受けたる場合には、倶樂部は妻の離婚に對して、有力なる援助を與ふ。

△母が其子の爲めに虐遇せられたるものある時には、倶樂部は母の爲めに援助を與ふ。

而して倶樂部は、此等の事件を、有効に處理せんが爲めには、法律家を顧問として、常に雇ひつゝありと云ふ。又是迄此倶樂部の議に上りたる議題にして、最も花々しき論戰を見たるものを擧ぐれば。

△近代婦人の進歩　△婦人は何故に其事務に從事するか　△文藝上に於ける理想主義　△共同勞働論　△科學と高度なる生活　△共同敎育　△母の權利等にして、又以て此倶樂部が婦人問題に關して、多方面に活動せるを知るに足れり。

△事業の成績

更に此倶樂部の行ひたる事業にして、世上に其成績を認められしものを擧ぐれば。

△不當なる俸給を受けし女工下婢の雇主をして、相當の給料を支拂はしめたること。

△不幸にして私生兒たりし子女を、公生兒たらしめたること。

△女子雇人の口入れを行ひたりしこと。

△外國婦人の困窮せるものを、保護せしこと。

△寃罪の爲めに牢獄に繋がれたる女子の爲めに、女子の辯護士を法廷に遣はして、其無罪を明かにせしめ、之を救ひたること。

△從來女子は弱者の地位に立てるを以て、男子のみ罪多しとせしも、女子の不正行爲、亦之を免れざるを以て、同性の品行矯正に努めたること。

△會員中の女醫聯合して、看護婦學校を設立し、此處に養成したる看護婦を率ひて、病院及監獄に出張し、其病者の看護に從事せしこと。

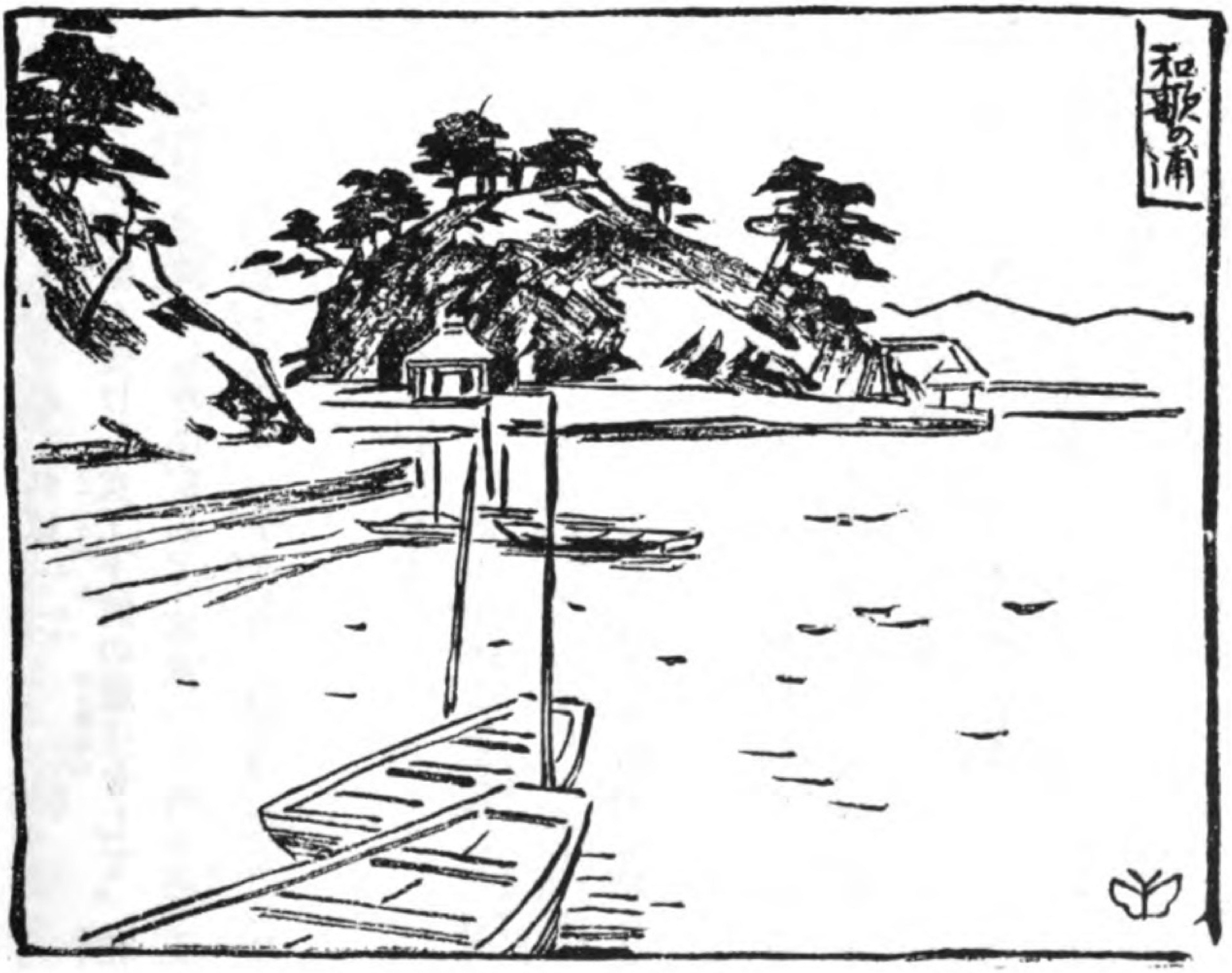
△貧民の爲めに浴場を設けたること。

△保護者なき貧兒を集めて、之を養育し、學校に通學せしめたること。

△會員は隨時、停車場等に出張して、旅人が土地不案内の爲め、途方に迷へるものに對し、之を安全の場所に導きたること。

等にして、其他市加古市の市街を清潔にする目的を以て、市の改良組合を作り、更らに之を擴張して、一般市民の生活狀態をも、改良するの計畫を立てたり。

凡そ米國婦人の活動なるものは、概ね斯の如くにして、之が爲め一般女性の品位を進めつゝあり。されど又中には、倶樂部が男女兩性を合せるものありて、或は却つて墮落の機會を與ふるものなきにあらず、若し長を採り、短を去つて、之を我國の女流社會に應用せば、女流社會は女流社會に於て、一の制裁力を生じ、又其奬勵法を見出すことあるべきか。是れ女子の社會的に活動を試むべき、第一着歩の事業と云ふも不可なきなり。



美的衛生

醫學博士　三宅秀氏



いふまでもなく、衛生とは身體を健全にして無病長命を保つ方法で、美術とは形態、音聲、色彩等を以つて五感を樂しませる術である。で此の衛生と美術其他或は美と云ふことは如何なる關係あるかと云ふに、一體吾々の身體に快き感を與へる事程衛生の道に適つた事は無いので、又此の感が無かつたならば吾人は一日も健康を保つことが出來ぬ。去れば衛生の方から言へば此の美や美術と云ふことは最も大切な事であつて實に美感は最上の衛生術である、故に吾々は常に美の思想を養ふて、之を衣食住等有ゆる方面に應用せざれば、完全なる衛生は到底期し難いのである。

△手際好き食物と滋養ある食物

先づ食物の事から言つて見ると、今日何れの女學校でも教へてゐる割烹術は、單だ食物の味を美にするのみが能事で無く、其の色の配合や手際を好くする事などをも考へて、食べる人の目を樂しませることに苦心をして居る。是れ或は單だ其の目映を好くするのみの考からかも知れぬが、實は之は大に衛生に適つた仕方と考へる。世の多數衛生家は、滋養物でさへあれば如何に爲て食べるとも衛生に適ふものと思ふてゐるが之れは甚しき誤りで、如何なる滋養物でも製方が拙ければ之を食べても美味しくも無ければ又滋養にも爲ら

ぬのである。

△衣服の主用は身を飾るにあり

衣服の如きに至つても多數衞生家は單だ寒さを防げば事足るやうに言つてゐるが、之れに就ても余は普通の衞生論には反對せざるを得ぬ。衣服は勿論寒さを防ぐの用を爲さねばならぬに相違ないが、其れよりも尙ほ大切なる用は身體を飾ると云ふ事であらう。前にも述べた如く實に人間は美の感無くては一日も生存するとの出來ぬもので、衣服は多く此の必要を充してゐるものと考へる。見よ裸體を隱すは身體の美を增す爲であらう、之れに種々なる色彩刺繡等を施すのも無論美を增す爲であらう。即ち衣服の大部分は殆んど美の應用に依つて成立つてゐるのである。

△裝飾ある住居と裝飾なき住居

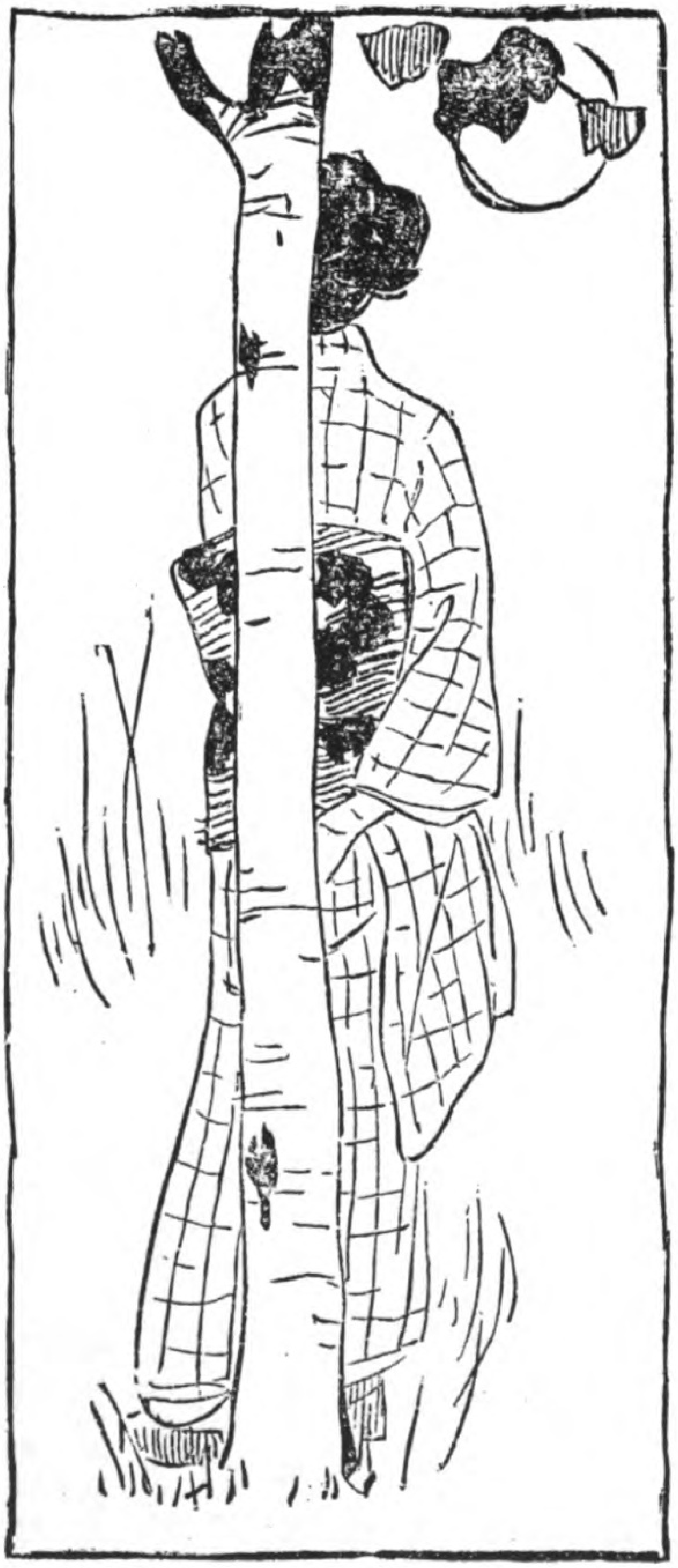
住居に就ても亦然り、住居は丁度衣服の外圍のやうなもので單だ雨露を凌げば足るとは、普通衞生家の考であるが、之れでは吾人の生活に最も大切なる美快感を惹起すとが出來ぬ。であるから余は假小屋のやうなものなら格例なれど苟くも一家團欒の住居たる以上は是非共之れに裝飾を施さなければならぬと思ふ。設令お粗末なる家にもせよ額や掛物や一枝の野花を以つて室内を飾ると云ふとは食物衣服等に美の應用の缺く可らざるが如くに必要な事であらうと思ふ。

美と衞生とは斯の如く離る可らざる關係があるので衞生を說くには美が如何程吾人の生活に應用されて居るかと考へねばならぬ。然るに今日諸方の衞生會では美と云ふ事を一向顧みぬのは甚だ遺憾な次第で、何卒世間の人が逆に美の方面から衞生を說くやうになつて欲しいと思ふ。

△衞生と身體の美

以上衞生には美の缺く可らざる事を述べたのであるが、之れと反對に身體の美に取つては衞生は又缺く可らざるものと爲つてゐる。先づ體格の美に就て言つて見ると、之を美術的に批判する事は余の專門以外であるが、之を醫學的に言へば體格の美には十分の原則があるので、そして如何にして其の美を保ち得べきかは

全く衛生法に支配されるので、其の方法手段に就ては幾十回の講義をも續けるヿが出來る。次に容貌の美は如何と云ふに、先づ頭の方から話して見ると、美なる毛髪は婦人の寶物であるが、其の美も主として衛生の如何に因るので粗食をしたり、不攝生をしたりして忽ち毛髪に影響を及ぼすのである。又顔面の光澤の無きは美人としての要件を缺くのである、が之れも不衛生の結果である。又鼻の格好、歯並の具合なども其の衛生法の如何に依つて美醜孰れへなりとも成るもので、立派に美人と爲り得る素質を有し作ら往々にして面貌の美を失ふ人がある。爪の格好や膚觸なども矢張り衛生に關係がある、此等を數へ上ぐれば殆んど際限は無い。



△言語動作の美と心の美

次に身體の美と關聯した言語動作の美に就ていはんに。言語動作を美に爲るには如何にすれば可いか。之れは普通の衛生論のみで貫徹するヿは出來ぬであらう言語動作を美に爲んには第一に各自の心を美に爲るヿ

が必要である。心が美に爲れば顔付なども活々として、醜い顔も何處となく愉快氣に爲り、從つて總ての言語動作の上に迄も心の狀態が現れて來る。滋養一天張の狹い衞生論では此の邊迄も說く事は出來ぬであらうが一體衞生と云ふものは心からして直して行くのでなければ不可と思ふので、衞生に心の美迄も保たせるといふ考であるから、言語動作の美も矢張亦衞生の賜と見るのである。

男女兩性の特色

平岩愃保氏

基督教では男女は互に同等の價値を有する貴きものと說き、佛敎にては女子は非常に卑しいもの〻やうに說いてゐる。更に道德家をして言はしめたならば又夫夫の說はあらうが、余は玆には斯かる宗敎や道德と云ふ見地を離れて別に男女兩性の特色を述べて見やうと思ふ。

△身體上の特色

先づ身體の上に於て男女の間に如何なる差異があるかと云ふに、其の身體の外形特に容貌などの具合に於て雙方の間に著しき差異があるやうなれ共、併かし乍ら此れは歐米や日本の如き文明國人に就てのみ見られる現象で、野蠻人となると斯かる區別を認むるとは甚だ困難である。彼の亞弗利加內地の土人は固より、太平洋の眞中に在る布哇島の土人の如きですらも、其の外觀を一見したるのみでは到底男女を區別するとは出來ぬ。又加奈陀地方に住む亞米利加印度人の如きも、たゞ其の着物の具合に依つて僅かに男女を見分け得る位のものである。近く我が北海道のアイノ人を見ても、男子と思ひの外女子であるので往々驚かされるとがある。即ち文明人こそは女子は嬌しく美しい顔を爲て居るが、野蠻人に至つては女子迄が黑い頑丈な顔を爲てゐるので、容貌を以つて兩者を區別すると云ふとは餘程六ケ敷爲つて來る。

然らば文明人たると野蠻人たるとを問はず判然男女

を區別し得る標準は何かと云ふに、則ち生理學上兩者に特別なる相違があるので、女子は子を生むやうに出來て居り男子は子を生まぬやうに出來て居ると云ふ一點である。余輩が特更に玆に此の特色を述ぶる所以は即ち男女の職分は此の特色に基いて岐れるものと信ずるからである。蓋し女子は子を生むが故に勢ひ子女の養育者、家庭の主宰者として內部に於て勢力を占め、男子は然らざるが故に家庭以外の社會に活動して外部に於て勢力を占むるに至るので、是れ實に男女身體上の特色に基く自然の要求であらうと思ふ。



然るに近來は先天的に定められた此の限界を破壞せんとする思想が處々に萠して來てゐるが余輩は之を目して夢幻の如き空想なりと爲すのである。例へば近頃亞米利加の某雜誌に、夫は內に居て搖籠を脇に置き子供の守を爲乍ら靴足袋を繕ひ、妻は帽を被り鐵砲を擔ひ砲丸入を腰にぶら下げて將に戶外に出掛け

んとする繪が載つて居る。之は無論四五十世紀の未來を想像したもので、今日男女の職分に内外の區別あるは全く因襲の然らしむる所であつて世の中が進歩すれば必ずしも恁かる舊慣に束縛さるべき者で無いと云ふ事を諷刺爲たものであらうが、去りとは餘りに想像に過ぎたる考で、男女本來の特質に背き迚も行はるべきことであるまいと信ずる。

△心性上の特色

次に男女兩性の心性如何を考ふるに、あら／＼左の如き點に於て各々特色を示してゐる。

(一)男子は勇にして女子は怯である。勿論男子の中にも臆病者もあれば、女子の中にも巴御前やジャンダークのやうな勇者もあるが、然れ共概して言へば先づ上のやうな傾向を示してゐる。

(二)又男子は智に傾き女子は甚く情に傾いてゐる。從つて男子は熟慮し女子は直覺する。女子は直覺するが故に又常識に富んで居る。

(三)右の傾向あるが故に從つて男子は理論に偏して論爭することを好むが、女子は慰安者として溫言以つて人を和げて行く。即ち一方は論じて人を服さしめんとし、他方は嬉ばせて人を服さしめんとするの相違がある。

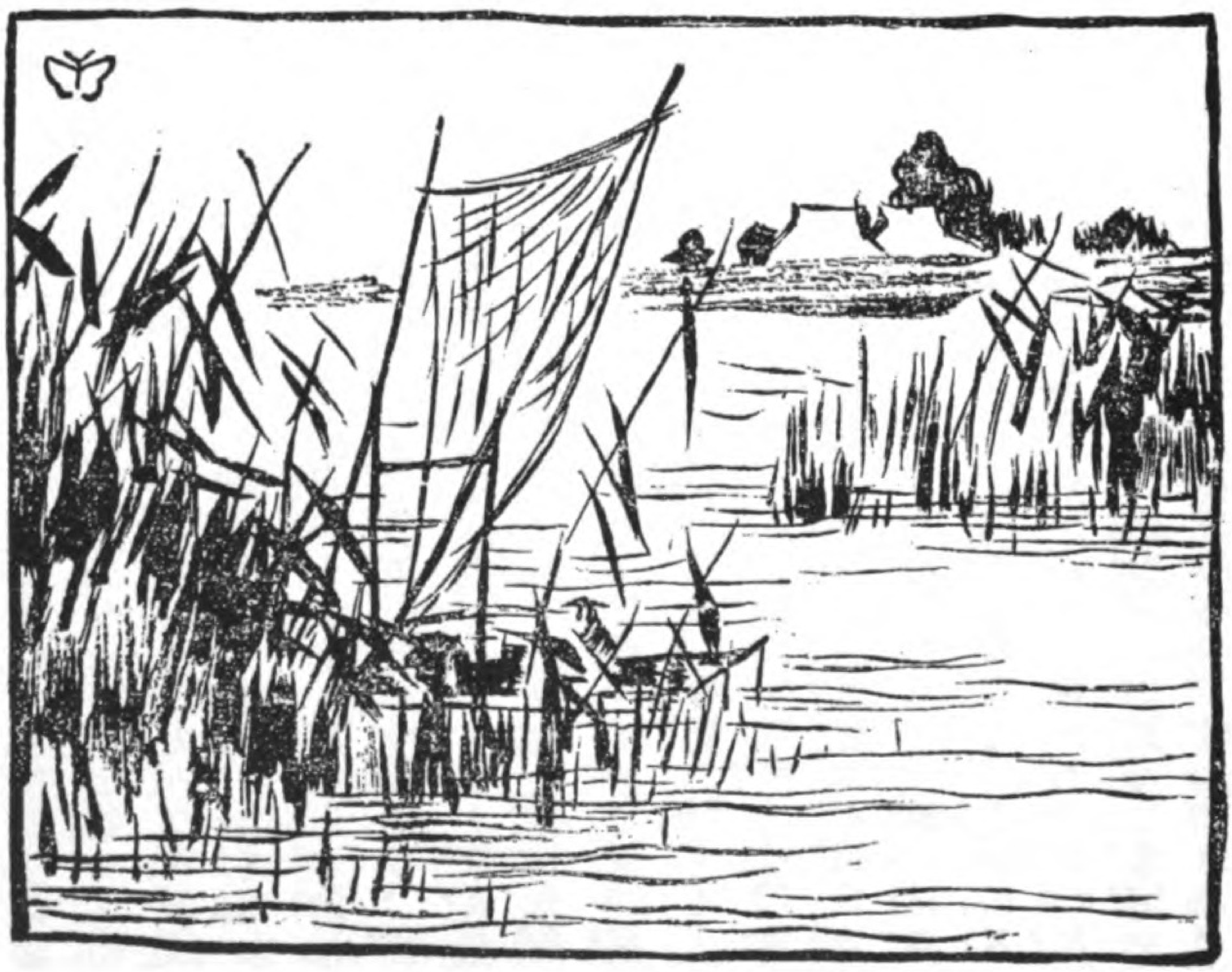
(四)又男子は義烈にして松の亭々たるが如くに氣高い所あるが、女子は憐憫の心に富んで蔦の這ふが如くに美しい所がある。

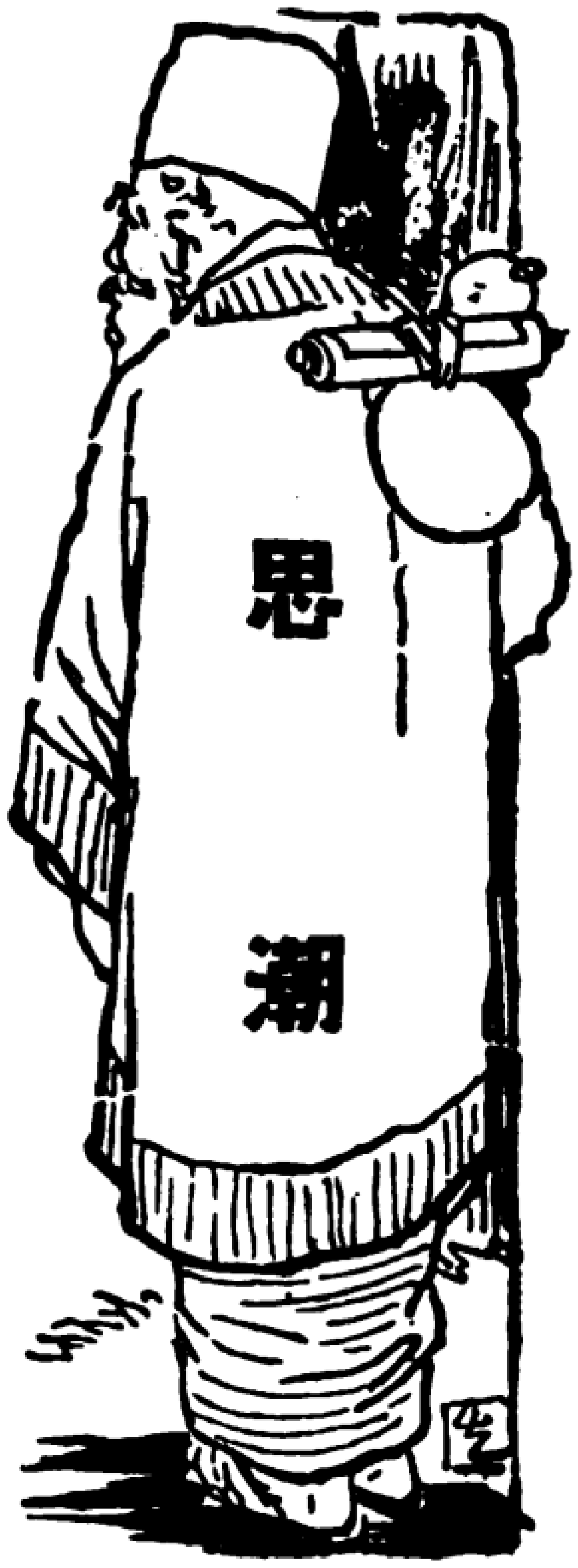
其他數へ擧ぐれば色々あらうが、右に掲げた所を見ても知らるゝ如く、其の心性の上に於て男子の缺く所は女子之を具へ、女子の缺く所は男子に於て之を具へて居る。於是乎、兩性間に有無相通ずるの必要を生じて、男子は女子を要し女子は男子を要し、玆に男女相愛するの念が起るので、此の兩性が相配合して初めて完きものと爲るのである。即ち男と女とは先天的に雙方互に助け合ふべきものと爲つてゐるので、彼の淋しき獨身主義なるものは到底吾人に滿足を與ふべきものにあらずと云ふことは特に注目すべき點であらう。

△情に働く婦人の地位

終りに男女兩性の罪或は墮落に就ての特色を一言しやう。一體人は何に依つて墮落するかと言へば、智の働きに依るにあらず多くは情の働きに依るのである。然るに前にも述べた如く、男子は智に傾き女子は情に傾くが故に、墮落に對しては女子は甚だ危險な地位を占めて居る。蓋し男子は一旦情を亂して墮落するとも能く智を以て、之れに打克つことを得て十分回復の見込はあるが、女子に至つては一旦情を亂すや其の智を以つては到底之を抑制されずして無恥慳貪甚だ濟度し難きものと爲るので、之れを改めしむることは殆んど不可能と言つて可い。

見よ、東は布哇南北亞米利加の隅々より西に南洋諸島、支那、滿洲の北の端に至る迄も散布されたる或種の日本婦人を。由來女子は憶病者なるに而かも男子でさへも躊躇する北米の寒天地アラスカ、クロンダイの邊陬迄も押出して行くは何故なるか。惟ふに彼等が一旦墮落して最早回復の望無しと見るや、儘よと捨鉢根性を起して俄かに弱く爲りたる結果が、遂に彼の始末と爲つたのであらう、恐るべきは女の情である。





簡易生活の眞相

秋霜生

序言

近來我國でも簡易生活と云ふ呼び聲が、稍や高くなつて來たやうだが、歐洲諸國に於ける此簡易生活論の流行は、非常の者である、否歐洲諸國に於ては、單に議論ばかりでなく、盛んに實行されて居るが、一體簡易生活と云ふことは、何う云ふことであるかと云に、夫れは讀んで字の如く簡易の生活で、更に平たく云へば質實な生活、手輕な暮らし方を云ふので、竟畢華美な暮らしの反對である、で今日何故に此簡易生活論が斯樣に盛んになつて來たかと云へば、世が益す文明に進むに隨つて社會は愈よ複雜になる、のみならず所謂る禮儀三千威儀三百で、虛禮虛儀、虛飾が益す盛んになつて、其代り簡易とか質朴とか云ふ風は追々消え失せる、而して日一日と華美贅澤の風が增長する、其處で衣食住は勿論其他諸事萬端總て流行々々と新奇を競ふから、夫れと共に生活難が加はる、故に美衣美食して立派な邸宅に住む、二頭馬車に乘りて居ても、裏面は火の車で、大切の米櫃は何時も、雷鳴を發すると云ふ有態、表面は立派でも中心の煩悶と苦痛とは、實に名狀すべからざる程であるから、衣食住は如何に立派でも、少しも幸福を感せざるのみならず、終には身を滅ぼし家を亡ぼさねば止まぬやうになる、夫れのみならず、一方に於ては生活費が益す嵩むから、若い男にも女にも妙齡になつても、婚資のない爲めに家庭を造ることか出來ないと云ふ者がだん／＼殖えて來る、是れは實に人生無上の恨事ではあるが、所謂一利一害で

文明の進歩には必ず伴ふ現象であるが、歐洲では其文明が我國よりも、ずつと前に進歩しただけありて、永年の間此弊害に惱まされたことは、夫れは〳〵非常の者であつた、分けて佛蘭西では、妙齡の婦人で、生活の困難とか或は婚資がないとか、嫁入仕度がないとか云ふ理由で、婚嫁が出來ずに、所謂嫁かず寡婦となる者が、一村に何十人と云ふ程殖えて來て、天下の女子をして其痛恨に泣かしめたが、其時（今より三十年許り前）ワグナーと云ふ有名の學者が、此弊害を矯正する爲め、始めて簡易生活と云ふ書物を書いて、極力華美の生活を排して、質實な



生活の福音を宣べた、所が丁度世間が華美で複雜で而して虚飾の形式や生活に、惱まされ居た時であるから、此書物は非常の大受けで、第二のバイブルとまで持て囃され、忽ち歐洲全體に傳播され、今日でも盛んに行はれて居るが、我國でも文明の進歩につれ元祿風とか桃山風とか華美虚飾の風が日々盛んになつて來て女學生間などには、殊に奢侈の風が盛んになつて來、又一方に於ては、夫れと共に生活難が年一年、甚だしくなり、容易に家庭の人となることが、出來ないと云ふ有樣だが、此

を救濟するには此簡易生活主義を實行するより外に道がないと思ふ、以下順を追うて、簡易生活の何物なるかを述べて見やう。

複雜の世の中

今の世の中は實に複雜の世の中である、虛禮虛飾の贅澤極まる世の中である、簡易生活主義の開山ワグ子ルは、其著簡易生活の卷頭に、此複雜虛飾なる窮窟の世の中を巧みに描き出して居る、曰く。

プランシャール家にては、上を下への大騷ぎなり何となれば令孃敏子の結婚も次の火曜との觸れ出しなるに今日は早や金曜なればなり祝の品を持參せる懇意の客が祝儀をくど／＼しく宜べて引下れば御誂への品遲れましてと出入の商人が包を肩にして伺候する入違へ引違へて取次の目も廻る程になりまして家族の者又結髮の二人と來ては之でも我身かと思ふばかり極まつた座り場所もなし、朝の間は仕立屋、小間物屋、道具屋寶石屋、裝飾屋、食料屋と應對してそれが濟めば買物歩き何處も一分の遑もなき世界なり生命拾ひをした氣になつて歸れば又もや饗宴の數々、結髮の宴、披露の宴、何やらかやらと立續けに夜に入りやう／＼家に歸れば留守の間の祝品、殊に手紙が幾久しく御榮え遊ばさるべくだの、目出度御祝ひ申上候のやれ偖は當日列席の通知やら、斷りやら、出入の商人より注文品の間に合はぬ言譯まで、中には思懸けぬ故障の報知に折角纏まつた手順を變へねばならぬもあり、憐れなる哉プランシャール家、此樣子にては期日までに支度整ふ事思ひも寄らず、さりとて取懸らぬ前は見込違ひなど思ひもかけぬ事なりしに。實は一月も前から此調子にて息もつけず、休む暇もなし、第一心を息める遑もなければ、いつそ生きて居るのではない位なり。

實にワグ子ルの描き出した通り、如何にも今の世は複雜の虛飾の世の中で手輕と云ふ事は一つもない、思想と云はず、行爲と云はず、必要にも娛樂にも更に死ぬにも手輕には死ねぬ世の中である、早い話しが今日の生活の手輕からぬことは、道具立の業々しいのを見

ても判る、最も收入の増加と共に道具立が業々しくなるのは、强ち咎むべき事ではない、又文明の進歩と共に世の中が複雜になるのは、一面から見れば人類の進歩であつて、誠に結構ではあるが、唯だ虚榮心を滿足させる爲めに、收入以上の生活を營み生活費の超過の爲めに煩悶し、且つ複雜なる形式の裡に藻搔死さするとは實に馬鹿の骨頂である、然し誠に馬鹿の骨頂であることは三尺の童子も知つて居る、知つて居りながら矢張り其馬鹿な眞似さして居るのは、何う云ふ譯であらうか、夫れは人間には詰らぬ虚榮心があつて、外見を張りたがるからである、世の中の人が風通を着れば、我も亦風通を欲し、人が抱へ車を置けば、我も亦收入に頓着せず抱へ車を置くと云ふ風に、譯もなく人の眞似を爲たがる、夫れで幸福かと云ふに、反對に生活費の嵩む爲めに悶え死をして居る、天下に是程馬鹿な話はあるまい。

簡易生活の大敵

斯樣に今の世の人は、複雜なる形式の裡に藻搔いて居るが、此煩悶から脫するには簡易生活を實行するより外に手段はない、然り簡易生活が今の世の人を煩悶苦痛から救ひ出し、之を幸福ならしむる唯一絕好の手段である、啻に個人を幸福ならしむる唯一絕好の手段なるのみならず、又國家富强の基礎を鞏め、更に世界人類を幸福ならしむる最良の方法である、然らば簡易生活主義は如何にして實行すべきかと云ふに、先づ差し當り日常の生活を手輕にする、換言すれば衣食住其他諸事萬端出來る丈け華美贅澤の風を去り、成るべく質素に成るべく手輕にする、譬へば衣服について云ふならば、人は先づ自分の健康の爲めに、次に自分の接觸する人に不快の感覺を起させぬ爲めに、淸潔の衣服を着る必要がある、併し淸潔の衣物を着る事と贅澤の衣物を着る事は全く別物である、前者は賢者の爲る事で、後者は愚人の爲る事である、今の若き人殊に婦人などには、身體の營養に必要なる滋養物をすら十分取る事もせず、空氣の流通よく日光のよく入る室に住

むことをせずに、儉約に儉約して、美衣美服を買ひ求め、之を着て喜んで居る、之等は愚人と云ふの外はない、啻に愚人なるのみならず、身分不相應の美服を衣て、人に身分よく富有なる人であると思はしめて、自分の虛榮心を滿足させて居る人は、既に墮落の海の津頭に立つて居る人である、此虛榮心が簡易生活主義の最大の勁敵である、簡易生活主義を實行して、一身を幸福ならしめやうと思ふ人は先づ何より先に、此下らぬ虛榮心を打ち破るが肝要である。

總じて女子は、虛榮心の最も强い者で、或る西洋の學者は、女は頭の腦天から足の爪先まで虛榮心で堅まつて居ると云つたが、實際其通りで、極端に云へば食ふ者を食はずに、親や良人に不自由の思ひを爲せても、尙ほ美着物を着て、人に誇耀かしたがる者は婦人である、人が黃金の指輪を嵌めて居れば、自分も黃金の指輪を嵌めたがる、人が琥珀の帶を締めて居れば、自分も夫れを欲しがり、羽ショールが流行すれば、羽ショールを欲しがり、而も夫れが自分の思ふ通りに得られない時には、自分の體面が全く潰れて了つたかの如く、又自分の一分が立たないかの如くに煩悶する、懊惱する、之は婦人の虛榮心の一例であるが世間に何が馬鹿らしいと云つて、婦人の此虛榮心程馬鹿らしい者はあるまい、此虛榮を張ると云ふ事の馬鹿らしい事は、婦人自身と雖も知らない譯ではあるまいけれども、知らず〳〵つまらぬ世間の體面とか流行とか云ふ者の、犧牲になつて憐れむべき虛榮心の虜と墮落するのであらう、能く世間に傳へらるゝ、立派な紳士の夫人が呉服店などで萬引を働くのは其實證である、兎に角此虛榮心を打破しなければ簡易生活の實行は、六づかしい、虛榮心を打破するには、鞏固なる意志を要する、世間の浮華なる流行や、下らぬ體面論などに頓着しないだけの識見を要する、此意志と識見さへあれば、簡易生活の實行は、必ずしも爾う困難ではなからうと思ふ。

簡易生活の實行者

奢侈が百惡の基なるは今更ら事新しく云ふまでもな

い、大にしては一國を滅ぼし、小にしては一身を滅ぼす、故に古來興國の君主は必ず質素の生活、即ち簡易生活の實行者である、北條時賴の母松下禪尼が、自ら障子の破れをば、小紙を切りて繕ひたるは、今尚ほ美談として小學生徒の讀本に揭げられて居るが、其又子たる時賴は斯う云ふ賢母の感化を受けただけありて、身天下の執權職と云ふ重任に在りながら、生味噌を肴にして酒宴を催ふす程の極端なる簡易生活を實行し、老後には一簑一笠で野に臥し山に寢ね六十餘州を行脚し、民の疾苦を察した程であつた、時賴に限らず北條氏は總て簡易生活の實行者



であつたから、陪臣でありながら九代も續いたのだ、德川幕府十五代の基を開いた家康の如きも、又非常なる簡易生活主義の信者で、身天下の將軍でありながら常に麥飯を用ゐ、或日侍臣が精米を進めたら頗る不機嫌で、『我今如何なる精米を食すとも隨意なり、然るに自ら好みて麥飯を用ゐるは、身に節儉を用ひて、多くの士を養ひ民を安んぜんが爲めなり、汝等我心を知らずして斯の如きことを爲す』と云はれて、大に訓誡を加へられたことは有名の話である、例を昔に求むるまでもなく、現今不世出の英主として許さ

れて居る獨逸皇帝の如きも、又非常の簡易生活主義であるが、外國新聞の記す所に依れば『皇帝夫妻は朝五時に寢床を離れ、皇帝は直に將官の略服を着け、皇后も頗る質素の服裝をして、皇帝の爲めに手づから珈琲の用意をし、暫らくして夫妻相對して朝餐の卓に就かるゝのであるが、卓上には只だ茶と卵と冷肉とを供へらるゝばかりで、極めて簡易の食事であるが、九時からは兩陛下相携へて一時間戸外の運動をさるゝ、此戸外の運動は皇帝自から鞭を取りて馬車を驅らるゝのが通常である云々』何と簡易の生活ではないか、之を一寸次の室から茶を以て來さすにも、下女を使ふ自稱奥樣やお孃樣に比較すると、誠に天淵の差である、又米國の大統領ルーズベルト氏の如きも、此主義の信者で、米國新聞の記す所に依れば、『ルーズベルト氏は朝餐に鷄卵一個と小ひさなパンとコーヒーとを用ゐる丈で、晝餐もまた頗る質素なもの彼れが一日の盛餐たる晩餐に於て、三鉢の料理が出るのが普通で、時としては二鉢の事もある、彼れ及び彼れの家族は、此の質素な生活に滿足して、樂しい家庭を作つて居る』云々、此點に於て、我皇室の供御なども頗る質素なるやに漏れ承はる所があるが、兎に角斯樣に興國の君主は皆簡易生活主義の實行者であるが、個人にありても又此の通りで、簡易生活主義者は、一身を幸福ならしむるのみならず、又身を立て家を興し、之を大にしては、一國富强の基を定むる者である。

結論

以上長々と述べて來たことを約めると、つまり奢侈や虛飾を排して、質實健朴を取ると云ふことになるが是れは尋常一樣極めて平凡の眞理で、誰でも知つて居ることであるが、併し之を實行するとなると樂ではない、一體眞理と云ふ者は凡て平凡の者で、魔術や手品のやうに、奇妙人を驚かす者ではない、故に此簡易生活主義でも、何も爾う奇妙不可思議の説ではないが、今日まで世の人が世間の奢侈虛飾の風潮に眩されて、目に見えなかつた、否氣が付かなかつたのである、で

兎に角説は平凡であるとしても、之れからの社會に處して幸福を求めやうとするには、之より外に手段がないのである、ワグナルの簡易生活が第二の聖書として世に持て囃さるゝのもつまり其處である。

尚ほ一言注意して置きたいのは、簡易生活主義は決して、貧乏人に向つて諦め主義を敎える者でなければ亦金持に向つて吝嗇主義を勸めるものでもない唯だ收入相應に最も健全なる、最も進歩したる文明的生活法を說くのであつて、固より簡易々々と云つて、彼の水草を追ふて遊牧すると云ふ亞弗利加の土人や、穴居時代の太古の人民の眞似を爲ろと云ふのではない、兎に角文明の進むに從つて益す世は複雜となり、又贅澤になり、生存競爭は愈よ烈しくなるから、之れから家庭を作らうと云ふ靑年男女は勿論、新婚の若夫婦、又は現に人の母として妻として一家を主宰しつゝある者はよく〳〵此簡易生活主義を翫味するがよい。

上流社會に於ける
婦人の暗黒面

泊　子

巫山の雲をや偲び給ふ、楚臺の雨をや慕ひ給ふ、去る程に上には最と甚う憔悴れさせられて物も食し召さず、翠帳の奥深うのみ終日搔き籠らせ玉ひて心細げに獨り咽び入り給ふ。

其の頃蘭燈影淡れて、秋は更け行く細殿の夜な〳〵、き、と何やらむ呻く樣なる聲に驚きて枕欹つれば、怪しや恐ろしや、更に物の氣も無く洋風の三層樓寂として純白のカーテンを洩るゝ明星の閃き。

まこと止ん事無き際の御家庭すら斯うではありませぬか、朽梁渡り難く荆路走り難かり、高峯の嵐は速かに避くべきものをとて、三年某高家に忠勤を勵みて事へ奉りし女の、折に振れては雨夜の徒然を、人恐がらせの話しは此れでありました。

誰れで御座いましたか、巴里の市へ這入ると、四邊の光景が燦爛として人目を眩するばかり華美かで、盛装せる若い男女が如何にも快濶相に生々として前途の光明に憧れて居る樣に見えてるに係はらず、夫れでつて、嘗つて我れ〳〵が羅馬の古城の秋風に榮華の跡を吊うた時と同じ樣に、何となしに哀れつぽくてうら寂しい樣な感じがしてならぬと申されました、其れは成る程、文明と云ふ美しい名の殘酷な惡魔の手に由つて、世の中が進歩して行けば行く程、人々が奢侈に赴き輕佻に趨り、知らず〳〵の間に行ふ幾多虛飾の罪惡が、やがて來るべき果敢ない運命の先驅者となるのであると云ふ事を意味して申したので御座いませうが、心ある人をして、直ちに然か感じさせる其の第一の原因は、實に上流社會に於ける婦人の墮落にあると云ふ事であります、三越の時好に憂き身を窶して幾日御前に拗ねさせ給ふは未だ〳〵罪無くて可愛ゆらしけれど、彼のね叔父さん處のね等と、侍女の手前臆面も無く同好の方々と、御居間近う電話口の品定め、時には箱根か逗子か、男とは能う見られまじき眉細く美しきを倶して微行ばせ給ふ貴婦人方の在す間は、我が國とても、巴里の現狀を向ふ側の火事視して高見の見物は、些と潛越な譯ではあるまいかと思はれるのである。

蘭麝の香氣廊の暗夜に殘りて、絹八丈の御振り袖風にも搖がず、紅緒の御草履する〳〵と音も無くて御手燈仄淡う深夜の書生部屋を訪れさせらるゝ何樣仰せ給ふ姫上。恥かしけれど參る參らせ候の散らし艶書、山茶花香る邊り蝶と舞ひて、幽艶らしう黃菊折り添えしを、水色のリボンにて確かと結び合はせ給ふ何やら、御手箱の奧深く秘めさせらるゝ何とか申し上げ奉る新華族の令孃。痛はしや、御坐敷牢とかとて、夢にも昔戀しき御方の俤偲び給ひては都に近く濱千鳥の跡を塡めて、此處伊豫の松山か、房總の煙波汨沒する處、友なしにして獨り寢にのみ泣かせ給ふ、竹の末葉ならねど何れ濟からぬ流れの末は、勿體なけれどおほけ無き御邊りの秘め事。御前公の用を帶びさせられて彼の地に留まり給ふ幾年、夫人甚く寢覺めの淋しがり遊ばし

てか、ぬり椽に端近う月に物思し玉ふ夜半、御枕頭冷いやりの御風邪や召せし、御前御歸朝の曉、體の弱ければとの一言に、白羽二重のお肌着ずた〳〵に裂きて、流石に思ひ切り能く昔の姫に歸り給ふ。

這麼具合に一々數へ上げて居つたら限りもありませぬが、如何に貴婦人だからと仰つしやつた處が、素足に蹴返す花色木綿の裾短く引き紮げて、廣棧の前掛けすら大事がる私共とは違つて、其れは日頃お召しになつて居らつしやる御手廻りの品〲の、四邊眩く美しく輝いて居る樣に、其の御心の中迄が、御綺麗で入らつしやるかと云へば、よしや、犂牛の兒は時として羊に似る事ありとも、女は何處迄も女、婦人は何處迄も婦人、砥砆の石は決して珠とは云はれ無いので、人間本來の性は別に自ら其の品ありと、失禮ながら斷言し得るのであります。

成る程、水は高きより低きに就いて流れるものでは御座いますが、傾斜の度合に依つては時に遲速の相違もあらうし、又其の低地の水とても時に汎濫すれば、何時迄も〳〵舊の儘にじつとして居るものでも無からう、落葉の滴り、木の葉の雫、何れが其の因を成せしか其源を爲すか存じませぬけれど、我等の道德、時代の思潮時代の感化、時には雨と化り風と變はる種々の複雜した事情がこんがらかつて、下流の汚水が汎濫して却つて上流に逆流する事も



あれば、高地の濁流が低地に向つて非常な勢ひで滔々として流れ込む事もあらう、否やもう何時の時代になつても、善きにも惡しきにも上の好む處、下見て之れに倣ふは人情の自然であるから、衣食足つて猶ほ且つ禮儀を顧さる厄介な貴族のある間は、下流の濁らざらんとして濁らざるを得ざるは數の免かれざる次第で、罪の源泉は自ら定まる筈と思ふのでございますよ。

其れは勿論世は樣々であつて、白元結二筋切つて離せし投げ島田の後ろ姿を、つく／＼美しと御覽うじまして、可惜貴婦人の品格も考へさせられず、御撫で肩にふうわりと如何はしき柄のお羽織、大方新橋邊りん阿娜だらうと道行く人に影口利かれて、唯譯なく無上に嬉しがり遊ばす酔興なお方もある位であるから、何處ぞの姫上が御振り袖の京染め模樣を忘れ兼ねてか、やがては緞子の蒲團の上にありし昔を偲ぶ果報さ、「銚子出た時や涙で出たが、今じや銚子の風も厭や」と歌ふ樣になるのも、禮に習はざる野人としては、然もある可き事であらうと思はれる、ヒステリーとやら御病名だけ伺ひては、何と無く上品で有り難けれど、私は介意はぬが……介意ひはせぬが、夜の會と云ふと其の怎うも、夫人の勢病が……如何樣募ると御意遊ばすか知らねど、私共には些と解し兼ぬる御實家方への氣兼ね御苦勞、夫人が／＼で時には公の用をも事缺き給ふ前の何とやら云ふ大臣の君在せしと聞いたら、亭主の胸倉捉まへてこづき廻す位は、習はねばこそ性相遂き下賤の人等にあつては、何とも思つて居ないのであらうと思はれる。

況して婦人の多數は、一定の確乎たる見識のあるでも無く主張の自覺の信念のとあると云ふでも無ければ云はゞ浮草の唯水に漂ふ如く、秋草の唯風に靡く如く、西でも東でも人の趨く處人の好む處、理由も無く根據も無く、要するに附和雷同する底のものなのであるから堪まらない、而して其の多數の婦人の限り知られぬ魔力が、如何なる社會の方面へも手を延ばして盛んに其の歩武を進めつゝあるのであるから、やがて來ん所謂巴里の前途の運命は、何時か我れ等の頭上に演せら

る可き、悲劇開幕の初頁となるのではありますまいか。
噫、私共の第一に憂ふ可きものは、米人の排日熱でも無ければ、獨露の友間苦肉的外交政策でも無い、敎育が振はぬの實業が發達せぬの、軍備が斯うの戰後の經營が怎うのと云ふは、畢竟、表面上の末の話しで、我が國の前途をして危うせしむるものを、此處で忌憚なく極言すれば、實に一部上流社會に於ける腐敗墮落ではあるまいか。



第一彼れ等には一定の職業と云ふものが無いから、其れで無爲に苦しむで、上句の果は小人閑居して不善をなすの動機を多く作り得るのであると云ふ人もある、成る程然うかも知れぬ、否や眞實く然うに違ひは無からうと思はれる、殊に貴婦人等と御座遊ばしては、朝から晩迄姿見の前で御化粧遊ばす位が一番の日課、御着替へと仰つしやればお腰卷迄添えて參らする腰元もあれば、御寢臺の御側近う御湯呑の水加減迄注意して差し上ぐる侍女もある、云ふ迄も無く權力と金力とで買ひ得べき人生の有らゆる幸福、有らゆる滿足は總べて何事でも意の如くならぬと云ふ事は入らつしやらぬ筈であるが、併し、人間と云ふものは、如何なる場合にも自分の境遇を幸福と感じ滿足に思ふ事は、決して出來ぬものである。だから其の上とも何か物足らぬ樣な氣がして不平も起

きる、慾望も募る、昨夜も御前の御歸館が遅かつた、向島の例のゝ格子戸をお潜り遊ばしたのではあるまいか、怎うも然うらしい、御容子が變だとか何だとか必要の無い事迄閑に任して、考へては妄想を逞しうするから、其處で終にヒステリーと來るは當然である、御家門の手前巣鴨へも遣はされず、公には唯病氣とのみ披露して、奥庭の四疊半、秋風徒らに寂れて世を味け無く暮させ、申すが結局である、其でも少しは氣の利いた側になると、御前は御前、自分は自分と高を括つて甚く墮落して仕舞ふ、飽食暖衣して爲す事もなく遊んで居る位なら、一層博奕をだにせよと孔子様が仰つしやつた事もあるが、成る程甘い事を云つて居らつしやる、新疊の香氣高き高麗縁の十二疊、今も貴婦人御徒然の手すさび、引き札の花の勝負が一夕三千金とは扨ても恐ろしや。

何爵何々の御邸前、時には何の意味か知らねど、不景氣な顔を捻りながら塲末の小通りを、夕暮れ寒む狀につゝ立つて居るお巡査さんのけろりとした顔を、外ながら物まれる事もある。

止みなん、天地は宏く自然は公平なり、鳥も通はぬ山間幽谷に自然ながらの清香を放つ草花もあれば、暖かな小春日和を浴びて南向きの土椽に稻穗こく人の、自ら衿を正さしむるもある、清新の氣は田園到る處にあり、我れ等は柳下惠に遠く及ばざればこそ、共に朝に立ち共に言ふ必要なき貧者の兒と生れたを、深く自ら賀するのである。

處世十訓

○溝に落ちんよりは迂回するに如かじ
○好運は一度必ず人の家を訪ふものなり
○眞話は心の音樂なり
○敗北したる間際に勝利の機會潜む
○名譽の止まる時は智慧の減ずる時なり
○耳を廣くし、舌を短かくせよ
○多く物を有する人必らずしも幸福あらず
○希望は我が動力なり
○謹まるゝよりも寧ろ慎まるべし
○謙讓は名譽の門なり

◎家族旅行

ハモニカ女史

野邊は色つきて置き餘す露玉の如し、朝風靜かなる秋の日、梢には柿、籬には菊、各所の紅葉郊外散歩の好時期となりました。

家の主人が其日の業務を了へてセッセと家路へ急ぐ、内では主婦が夕飯の仕度を整へてお歸りを待つ、疲れてお歸りになつた夫を何くれとなく勞はり慰め申して、ゆつくり夕飯を家内揃ふて濟さましてから主婦は片付や明朝の準備を終りまして落付しやうになります、そこで、家族は各々好みのものを持ち出してランプの下に丸くなつて語つたり、笑つたり一家團欒の樂しい時となりました。

扨て斯う云ふ風に樂しい時があるから皆様には試みられないでせうが家族打揃ふて郊外散歩の樂しみも前者に比して讓りません、家には家風葬式とか種々六ケ敷いこともあるし、まゝ、主人が一ヶ月中一日も休まれぬ業務に從事して居るとか、家内に病人があるとか其他いろ〳〵の障害の爲めに望めども出來ぬ家庭もありませうが、然しそれ等は別物として家の中にばかり引籠つて居ては無味單調で大抵は同じ事を毎日毎日繰返へすやうなもので實際の智識には疎くなる、氣晴しなどは思も寄らず、身體にあまりよくない事でと申せば女子は内に在りて家事を整理しす暇も緩せにすべきものでないから家を空らにして散歩などとて贅澤に出あるいては業務を缺くのみならず彼に如何なることの出來ぬと云ふ事もなければ以ての外の事である、内に在りて忠實に家を守るを貴ぶべしなどの論もありませうが、然しそれには種々の豫防策がありませう。

尾崎市長夫人が毎日一二時間外出を試みなければ倦んで歸つて來た夫を充分に慰めることが出來ないと申されましたが、尤なことです、然し此種の外出は凡ての家庭に急用は出來ないでせうが一週一度位家族打連れて散歩をすれば種々の大なる智識が發見されます、子供は子供の思想を以て或物を觀察し親は親の思想を以て觀察するので家に歸へりて其日見聞した事に付いて語る時に趣味は一層多くなり和樂も一層深くなるもので御座います。

嘗て私は東京の或高等小學第四年生の女生徒の理科を教授して居りました時植物の部へ入り、稻の處に進んで參りました、此四年級は十二名ばかりでしたが田舍地方より東京へ移轉して來た二人の生徒の外他の十名ばかりは稻を見た事がないと申すことでした、田舍へ行た事がありませんか……參りました、避暑に大磯、箱根……そんなら汽車の窓から見ましたでせう、避暑地で散歩の時は……氣が付きませんでした、或は知りませんなどの答でした、私は田舍出で御座いますから稻の事は詳しい、毎日戴いてる御飯を知らない者はあるまいと思つて居たら豈計らんや右の始末、困つたものだと思ひましたが私も未だ若い身であるし生徒を率ゐて稻見に行くとも出來ませんから殘念ながら圖にある丈け

で說明し一粒のお米に四十八手かゝるものだと云ふ話で終つたとが御座います、斯う云ふ風に日常自分の身體を養つて居るお米の源も知らないで何々學校出身などとはペダント極つた話でありますまいか。

家庭打揃ふて出かけられぬ譯は多くは虛榮、我儘、費用等から來るではありますまいか、兎角人間と云ふものは滿足の出來ぬもので其慾望は際限がない、多くは實價以上に見られんことを欲するもので當世流行の[illegible]も此處から湧くので、虛榮心强い人の精力を削ぐものはありますまい、殊に女性として外見を張り女學校位卒業した處で慢氣を起し外見が惡いとか、友達の前が耻かしいとかとて價以上に張りたくなり奥樣風を裝ひ四五十圓の收入に女中を雇ひ一寸出るにも縮緬の羽織と云ふやうな淺墓さ。追々子供も多くなれば背負たり抱たり手を引たり隨分世話のやけるものですから、こんな事なら出ぬ方が增しだなどと自分達の事のみ考へて大切な小供の養育にあまり意を注がぬがあります。成程夫は流行の洋服に妻は軟か物納裾はずたく〳〵步いては見ともない、裾は一度にして切れ損じて仕舞ふ、そこで直ぐ乘物と來る、晝飯時には身仕度相當の所へ入らればならぬ、四五圓は忽ちかゝる、一ヶ月の會計そこで狂ふと云ふ工合で、なか〳〵散步は出來ませぬ。元來散步は身體の運動ばかりでなく精神の休養であれば後腹が痛だり、嫌つたりしてはとても永續は出來ません。

茲にいさゝか我家散步の方法を擧げて皆樣の御笑草にせんもと〳〵我家には虛榮と云ふものは大の禁物ですから外見を張ると云ふとは決して致しません私共は午後からでも出かけ升、即ち旦那樣ぶらす、奥樣ぶらす、着物とても惜しからず、それ故面倒な事は少しもなく、又地方と違ゐまして午後お腹を充す丈けの食物は何處にでも御座いますから適當の所へ上ります、何も惡い事をするのでないから人品の下る譯でもありません然しいくら見えに構はぬとも品格は落さぬやう常に心掛けて居ります。

小石川の自宅より目黑不動迄一人前十五錢一日の散步賃です、まづ本鄕切通迄徒步、それより電車品川停車場で下車し、小路を辿つて參ります、ポツ〳〵步いて不動堂に着き種々觀たり書いたり、田舍者には珍らしからぬ男瀧女瀧の人造瀧、百姓家の米搗バツタリよりも小さいなど評して堂の後の階下に腰打かけ携へ來りしパン菓子を食し勞れも拔けたと思つた頃ぞろ〳〵出かけて芝三田に出で小さき小綺麗な飯屋に入り壽司と大福餅で二人前十二錢にて午飯を濟し電車にて歸宅しました、其時は隨分くたびれましたがこの手段で東京の名處近在は大抵見物しましたお陰で身體も太り、足も達者になりました。

△教育遊戲國旗合せ

去年內外出版協會で家族合といふものを案出し子供の遊戲として極めて無邪氣に、おもしろきものなりしが今度牛込眞美會にて工風發賣する國旗合せは世界各國の旗を三つに切りて之を合せる趣向にて家族合せは文字のみなれどもこれは赤、青、綠いろ〳〵の色彩ありて幼童の遊びとしては一層おもしろきものなり。

演劇と青年男女

伊藤銀月

▲角力取が締込に身を固めて、土俵の上にシコを踏むところを見ると、其勇ましく形のよさが、實に何とも云へない、けれども、其着物を着て居るところを見ると、いやはや、天下にこれ程ザマのわるく意氣地のないものがあらうか、と思はれる。

▲縮緬か何かをゾロリと着下して、裾は履物にからまり、袖口は手の甲を呑むばかり、まるで着物のお化けのやうで、あるく姿のいやらしさ加減ッたらありやアしない。

▲角力取と云ふものは、所謂人氣商賣とかで、締込をしめてゐる時の外は、多少(或は大に)幇間的臭氣を帶んでゐる、だから、こんなダラシのない風をする必要もあるのだらうが、それは兎に角、スルリと、紅絹裏か何かの黒縮緬、或は小紋縮緬、さなくば羽二重の小袖を脱ぎ棄てると、其下から躍り出すのは、銅を鑄、鐵を鍛へた、金剛神のやうな荒男であるから、其變化に云ふべからざる趣味があるのである。

▲正月場所に、裸體で溜りへ出て、前の二組ばかりの勝負の濟む迄、あの寒さに凝と胡坐の膝を動かさずに居るは、流石に鍛へ込んだ力士の身體と感心されるがそれよりは、十兩以上の力士に限り、紅絹裏の一枚小袖をフハリと肩に掛けて出るがいゝ、愈々、常陸山なら常陸山、國見山なら國見山と呼出される、應(口へは出さぬが)と立ち上がると、小袖がスルリとすべり落ちる、自慢の體格が、始めて看客の眼を牽く、かう云ふ段取りにした方がいゝのである。

▲要するに、それは理想の角力取であるかどうかは別問題として、着物を着て居る時のダラシない極と、裸體になつた時のダラシある極とを對照させるところに、角力取に有せらるゝ趣味は發揮するのである、角力取を見るなら此點に注目しなければならぬ、角力取を描くなら此點に着筆しなければならぬ、角力取に扮する

なら此點を描寫しなければならぬ。

▲ところが、芝居の角力取を見ると可笑しい、其着物を着て居る時に扮するのが、更にゾロリとしたダラシない風は無く、勇氣凛々、肩昂り骨發ゑ、障る者は取つて投げさうな意氣込みに見える、ものをいふにも、聲を尖らして鼻息で人を吹き飛ばしさうにする、甚だ實際とちがつて居る。

▲けれども、芝居で強い角力取を見せるには、これより外に方法がないのである、實際の強い角力取は、天下の人既に其強さを知つた上で見るのだから、着物を着て居る時の風が如何にダラシなくとも、之が爲に其強さを疑ふ餘地は開かれないが、芝居のは、着物を着て居つゝ而も其強さを示さなければならぬ、即ち、角力取の表裏兩面を引き離して、平面に並べて見せなければならぬのである、だから、實際とちがつたところ即ち芝居の本色である、無論芝居其物には高尙な性質が無ければならぬが、或る意味に於ては、實際より淺薄露骨であつて、極端に云へば、或る一面より見て淺薄露骨でなければ芝居にならぬのである。

▲右は其一例に過ぎぬが、すべて之に準ずることが出來るのである、だから、我々は、今の所謂新俳優が角帽乃至角帽上がりと束髮とを主人公にした芝居を見ると、藝の巧拙は別問題として、先づ其淺薄露骨に厭な感じを起さなければならぬ、何となれば、それは我々何れもが毎日やつてゐる事で、我々は寧ろ、舞臺で見る芝居以上の芝居をやつてゐるからである、あんな淺薄露骨なのではなく、モット深い、モット細かい芝居をやつてゐるのである。

▲だから、芝居は我々の知らない時代の事を演るに限る、時代の回想に伴ふ美感を呼び起して、之に訴へるに限る、今の事を書いた今の小說を其儘芝居にするのは、少し世の中の味を知つた者から見ると、其厭な點の爲めに美感を損はれることが少なくない。

▲自分は思ふ、今の靑年間に見る、一種氣障でたまらない淺薄露骨な男女の關係は、多く、今の世の中を寫したつもりの新演劇にかぶれるが爲めであると、芝居

を手本にして實地を履むの誤りであると。

▲若し、まことの角力取が、芝居の角力取を見てそれに感服し、角力取はあゝでなければならぬと云つて、着物を着た時と裸體になつた時との變化を無くして了つたら、どうだらう、今の青年男女が、芝居以上にいくらでも深く細かい事が出來る癖に、芝居を學んでわざと行爲を淺薄露骨にするのは、これと同じ馬鹿さ加減ではあるまいか。

▲どうか、新演劇と云ふものは、諸君の爲てゐる事を眞似るのだと思つて貰ひたい、且つ諸君自らも進んで彼等の手本になつてやり給へ、世の中はそれで纔に趣味を保たれるのである、役者が、諸君の表裏兩面を引き離して一平面に並べて見せるのを、諸君が更に學んで、わざと自分の行爲を淺薄にするは、義理にも譽められた事ぢやない。

▲風景や人間の容貌を稱して畫の如しと云ひ、亦風景畫や人物畫を稱して眞に違はずと云ふ、詰まり、雙方がなすり附け合ふので、是程便宜な譽め言葉がないと共に、是程俗惡愚劣な譽め言葉も亦無いのである。

▲實際、ほんとうに畫のやうな風景や人間があつたらそれは美でなくつて醜だ、眞に違はぬ畫があつたら、これも巧でなくつて拙だ、又、寫眞を以て物の在るが儘を寫したものと誤解して居る者がある。現に、寫眞を目の前に置いて、それと實際との相違、及び其實際と相違する點に寫眞の本色のあることが分らない人がある、どうも困つたもんだ。

▲芝居が實際を眞似るのゝまちがつて居るのみならず實際が芝居を眞似るのは更に多くまちがつてゐる、芝居が實際を眞似る結果は、趣味の高い人が觀に行かなくなつて、俗惡愚劣の徒に持て囃される役者が跋扈すると云ふだけに止まつて、社會は其爲めに大した損害も受けぬが、實際が芝居を眞似るの結果は、世の中の大損失である。

▲世人は、學生及び學生上りの間に、素人芝居の流行するを見て、注目すべき現象としてゐるやうである。寧ろ、之を注目すべき現象としてから、餘程歷史が進

行したのである、モウ、素人を役者とする程に期が熟したのである。

▲けれども、それは大した注目すべき事でもない、俳優化した文士が果して河原乞食の渦中に捲き込まれずに、良く、超然として、新舊の河原乞食的根性の輩の上に、自己の品位を保ち得るや否や、これさへ、問題にする程歯答へのある問題ではないが、唯だ一つ、今の青年男女の處世の態度が、演劇化し、俳優化して、滔々淺薄露骨に趨くのを、國家の爲めに憂ふべき現象として痛嘆するのである。

▲役者にかぶれ、芝居にかぶれた幕末の旗本八萬騎及び江戸市民は、果して何を爲し得たであらうかと、結末大に振はない事を云つて筆を止める。

（十一月四日、多摩川上流の客中に記す）

早起

諺に早起は三文の得ありといへり、事業を成すものが早起せざるべからざるの必要はこの諺によりて知るべし、萬事競爭の盛んなる今日にありて、苟しくも好き位地に生活せんと欲せば勿論、苟しくも家を滅すべき懶惰者、愚物にあらざれば必らず早起を守らざるべからず、或哲人の金言に重大なる事柄を決行するは翌朝まで眠に就かしむるを善しとすとあるが如く凡て何人を問はず朝は其腦力極めて新鋭なるにより物事を爲すに迅速にして且つ誤謬少なし、事を成すもの此時を捨ていづれの時をか擇ぶべけんや、今玆に喋々と理論を述ぶるまでもなく普く世間の實際を見渡すに早起早臥の家は概して勤勉にして節儉を守り繁榮富裕にして家門甚だ睦じく之に反して寢起晩臥の家は概して懶惰奢侈にして生計頗る紊亂し、家内に風波を免かれず、是れ勉强の者は終日の刻苦に心身疲勞するを以て夜分に至れば早く寢室に入りて神氣を休め明朝精神の再び活潑に復する時をまちて更に十分の力を業務に盡さんと期するにあり、之に反して懶惰の者は終日の厭倦に堪へ難くして日の暮るゝを待ち構へ太陽の沒するや否や飲酒放蕩に心を奪はれて頭腦は甚だ鈍り事を成すに堪へざるに至るものなり。



魯鈍者の教育

藤井靜子

腦の發育が不充分であつた結果として、學齡期になつても、理解力が缺乏して居る爲めに、順當に學校を卒業することが出來やうかと、親をして眉を顰めさせるやうな兒童は、如何に敎育したならば、良き結果が得られるでありませうか。白痴とか、癡愚とかいふやうな極端なものなら、一層醫療に依る方が、安全ではありますけれども、魯鈍なる兒童になりますと、此の種の始末には實にまう困るのであります。これ等の兒童は、精神健康な兒童と、同一の敎授法によるといふことは、自他の爲めに、大に不得策であります。補助學校とか、補助學級とかに入れて貰ふといふことが必要であります。我が國には、設備のある處が少い爲めに、普通同等の學校に入學させてあります。がこれは將來社會の生存競爭の上に、非常の影響がありはせぬかと思ひます。魯鈍者といふものは、腦力の發達には伴はない自負心の強いもので、他日社會的活動をするやうになつた時、社會に捨てられて、人が自分と齒せぬ時、猜疑、嫉妬の心の爲め、恐るべき犯罪者となりはせぬでありませうか。かやうな現象は、常に見聞する處であります。

元來この魯鈍者といふものは、どどして此の世に生

れるでありませうかといふに、多くは遺傳にもよりますけれども、飲酒家によつて、多く造り出されるのであります。姙娠中の驚愕とか、墜落とかいふものは、多く死兒となつて生れますけれども、偶々生れても魯鈍者以下の不具者となるのが普通であります。魯鈍者は飲酒家の子でなくつても、飲酒家の乳によつて育てられました兒童は、腦の發達が鈍くなります。故に愛兒を里子にやるといふことも、乳母を撰ぶといふことも、共にその病の有無、體質、品行などばかりではなくて、飲酒の程度をもよく調査せねばなりません。これは酒精中毒によつて起る所の現象に外ならないのであります。魯鈍者といふものは、宇宙間の事物に對する理解力が缺乏して居る爲めに、總ての方面に向つての智識が啓發されない故に、何事をさせても常識以下であります。けれどもひとり、慾情の發現は、能く年齡に伴つて行きます。殊に色慾に至つては、己れが慾情の犧牲に供する爲め、恐しき殺人の犯罪をなすことがあるのは、往々耳にする處であります。斯樣なる結果を致すのも、これ皆家庭教育の任にあるものゝ罪であります。魯鈍者であつても、悖德を喜ぶものではなく、唯物の道理を解釋する力がないため、かやうなことを敢てするに至つたもので、家庭の教育者が、その腦力に鑑みて、相當の教育法を採り、相當の學校に送らなかつたといふ粗漏に基くものであります。

さらばかやうなる兒童は、如何なる方法を以て誘導し、如何なる方法を以て教育して行くべきでありませうか。補助學級の設備がない以上は、學齡期に達したならば、各家庭に於て、毎日時間を定めて、誠に規律正しく、卑近の事を捉へて、比喩的にこれを教授して行くといふことが最も必要なことであります。中流以下の家庭に生れた魯鈍者に、不良の徒の多いといふのは、腦力の發達などは少しも顧みないで、唯一日も早く尋常科若しくは高等科を卒業させて、己れが多足にしやうといふ考をもつ親の多い爲めで、一定の給料を得るやうになつても、社會が自分の智力相當にしか用ひぬといふことを悟らないで、徒らに他を恨むといふ

のに原因します。さもなくて、一二年を晩くしてから小學に入れたならば、思ひの外の結果を收めて、成長と共に腦力の發達の充分になることがよくあります。

今これを學校側から論じて見ませうならば、學事奬勵の任ある官省は、學齡期に達した兒童ある家に向つて、學校をも指定して、その入學を促します。これによつて入學して來た多くの生徒を收容して敎授するのであります。その中には、車力の子もあれば、富豪の子弟もありますし、健康な子もあれば、病身な子もありますし、利潑なのもあれば痴鈍な子もありませう。此の中にて、病身な兒は、可哀相といふ言葉の下に、敎師なり、他の上級の生徒なりの勞を受けますけれど、精神上の病氣ある、この憫むべき魯鈍者に對する人々の感情はどうでありませうか。あの兒は理解が惡くつていけぬ。あの兒は馬鹿である、あの兒は、今日も乳兒でも分りさうな事柄を解し得なかつた、などといふ非難の聲の下に、排斥されるでありませう。私は、かやうなる最も憫むべき兒童に對して、深き同情を有つてるものであります。しかも私は、敎師に向つて、此の種の兒童に特別の注意を



拂ふことを、勸告するものであります。身體の病氣は自身人に訴へることも出來ますけれども、精神上の病氣は、人の疎外を受けるばかりも哀であります。馬鹿な子程可愛といふ親心は、その兒童の將來にまで及ぼす考ではなくつて、周圍の感情の、その兒童に對してどんな風であるかといふのに過ぎません。かやうな事は、却て輕く見做して濟む處のものでありますが、腦力と學問との關係を考へるといふことは、誠に必要なことではありますが、學識に乏しい母親などには、或は困難なことかとも思ひます。それには兒童教育につきて學識經驗共に充分な教育家か、または小兒科醫に相談するのが宜しくあります。多くの生徒と交つて居つても、魯鈍者はその容貌と風采とによつて、速かにこれを知ることが出來ます。また一二時間教授する時には、その魯鈍の度合をも知ることが出來ます。若し魯鈍者が一學級の中にあつたならば、その注意し易き場所に移して置いて、他の兒童の進歩に伴はずともこれを不問に附して、放課後または、他の兒童の歸りし後に於て、一二時間づゝ、その日の最も簡易なりし事項につきて、その理解法を授けます、それには、忍耐と温和とが必要であります。またかやうな兒童が學校から歸つて來た時には、家庭の主宰者たる母親は、他の兒童よりも多くの睡眠時間を與へるやうにして、腦の疲勞を治します。かやうな兒童に用を命じ、ある作業を課する時には、決してその心を刺戟して、怒を發せしむるやうの言語擧動のないやうにせねばなりません。さうかといつて、愛に過ぎて、氣隨の心を養ふことのないやうに、温和であつて、しかも威嚴ある樣にせねばなりません。

以上のやうな魯鈍者の中には、小學校在學の頃は、不滿足ながらも、他の生徒の尾について、全科を卒業したものも、中學或は高等女學校に入學する樣になつてから、その程度が高尚な爲めに、その腦力はこれに堪へ得ないで、一層茫然となつて、頭痛さへ訴へることがあります。これは家庭教育の任にあるものゝ罪で、一腦力相應の學校と學問とを選ばなかつたのと、就學の

時期を急いだのとによります。また小學校在學の中途に煩つた重病の爲め、かやうな結果を見ることもあります。かやうな兒女には、簡易な學科で、しかもその好む處のものを選んで學ばせるやうにし、腦の疲勞を減少する工夫をつとめねばなりません。私がある友達に、腦の發育不全な子をもつた親が唯資格々々といつて、高尚な學校に入れて、卒業後も、資格も何もない淺學の人と薄給や低き官に甘んじさせるのは、無駄骨折であるといひました時、應用力がなければこそ猶澤山の高尚な學問もさせねば、學問の少い人とでも一處に居ることは出來ぬと申しました。高尚な理屈ばかりは知つて居ても、一向に活動力がなくつて、年と共に腦の衰弱を見るよりか、永久に衣食



の道に外れないで精神の衰弱の少い方を、私は最も喜ぶべきことかと思ひます。

病院の聞書

岸上質軒

茲に書記す所は、多くは長與博士の主宰せる、胃腸病院の診察室で、待つて居る間耳にはいつた談である。同病院は院長以下、看護婦に至るまで、頗る親切丁寧であつて、病症の事から、飲食物其他の心得まで、細かに説明し、此方から聞けば、幾らでも話すのである。そこで便宜のため、同種類のものは、種々の話と綜合したのもある。

○海酸漿類の危險

男の子より女の子に、急性腸加答兒の多い原因は、父兄の不注意から、能く洗ひもせぬ海酸漿を、口に入れさせる爲である、薙刀酸漿といふは、赤螺の卵で、種々の海酸漿は、何れも海中に棲む、貝類の卵

である。中に黒色の、蟲の糞の如き物がはいつて居るのは、卵の腐敗したのであるから、少しでも、腹の中にはいれば、急性腸加答兒を起すのである。水で能く洗つた物ならば、宜しいが、一切弄そぶことを、禁ずる方が、何よりである

○下痢には灌腸すべし

院長常に言はれるのは、病は藥ばかりで、治るものではない。藥が半分、食物が半分で、治してゆかなければ、ならぬのであるが、藥で通じを附けるのも、藥で下痢を止めるのも、共に宜しくない。(下痢にも便秘にも、共に消化力を强くする、藥を用ゆるのである。)下痢を止めるには、最も消化よき、食物を喫べ、激しき下痢でなければ、藥を飲むに及ばない。灌腸を四五日も、續ければ治る。灌腸をするには、夕食前にするが宜しい。先づ灌腸器(醫療器械を賣る所、又生藥屋にもある。一切揃へて、亞鉛のが五六十錢、眞鍮のが七八十錢である。)を買つて、それに温湯四合に、食鹽一撮を入れゝば、それで宜いのだ、罐中の水が、殘らずなくなつてから、二十分間の後、厠に上るのである。

○胃病の見舞に柿

小生は先日、病氣見舞に、柿を貰つたので、大に悦いたが、「石阪先生に尋ねましたら、胃病(生の病氣は大腸加答兒が、主因なりき)には、一切の果物は惡いが、只柿ばかりは、宜しいとの事で……」と聞いて、二度吃驚。誰も知て居る通り、多くの果物の中で、下痢を起させるもの、即胃腸病に最も惡いのは、柿が一番である。普通の醫者に罹つて居る者が、石阪流の食物を喫たら、危險此上なしである。

○自轉車の害

胃腸病院患者の一人「明日は七時前に、來いとの事ですが、汽車では迚も間に合ひませんから、自轉車で參りましては……」、醫員之を遮つて、自轉車で病院に來るのは、腸を壞しに來るのである。近來健康な人が肺心臟及び腸を、甚だしく傷めて居る、人の多いのは皆自轉車競走の結果である。中にも腸を傷めて居る人

が、一番多いと謂はれた。之を聞いて考へた。富士登山の流行も、同様の結果を、來しはしまいか。

○粥は下痢を起す

日本の人は、病氣といふと、直に粥を喫る習慣があるが、粥は醫者の診斷を受けた上、極和かな飯でも、消化出來ぬ人の外、妄に用ゐては、却て害がある。第一粥は下痢を起す。成るべく粥は、喫ぬが宜しい。



○ムシズは胃液が餘る

胃腸の病は、初めは、極めて消化のよい物を、喫べねばならぬが、是が續くと、遂にムシズのはしる事がある。健康の人が、消化のよい物ばかり喫るのも、同一の結果を生ずる。即ち透明にして、ねばり唾が、腹の中から出るので、是は胃液が餘るのである。棄てて置けば、遂に腹痛を起すのである。もし斯様いふ事があつたら、肉類を多く、續けて喫て、便が一日一回づゝ、出る樣になれば、健全に復したのである。

○健康なる人

健康なる人は、一日一回厠に上るのが、通則である、一日二三回あるか、或は二三日ないのは、必ず胃腸に病のあるのである。併し腸は習慣のつき易い、物であるから、勉めて慣らせば、終に斯様なるのである。

○慢性胃擴張

併し二三日以上、通じのないのは、多くは慢性胃擴張であるから、直に醫者の診斷を受けねばならぬ。胃擴張は別に苦痛を感じないので、「私は通じの遠い方

です」などといつて、幾年も經過して、胃は擴がる丈擴がつて、胸にあるべき胃が、落ちる丈落ちて、婦人ならば子宮を壓迫する。食物は胃にはいらないから、喫てもまづいし、喫たくもないといふに至る。是は十年以上も經過して、胃擴張の極點に、達した人であるが、斯ういふ人は幾らもある。最初一週間もなかつた時、專門の醫者の、治療を受ければ、治るのである。通じの遠いのは、容易ならぬ事であるから、醫者の診斷を受けるのが宜い。

○醫者も解らず

慢性胃擴張の徴候は、子宮病に酷似して、居る所から醫者も本人も、胃擴張とは氣が附かずして、子宮病の治療をして居る内、胃擴張の爲に、短命に死するのである。それ故徴候は何樣であるにもせよ、長く通じのないのは、必ず胃擴張であるから、早く胃腸專門の醫者に、罹るが宜しい。

○電氣治療

慢性の極に達した胃擴張は、外部から診察して、胃擴張と確定したらば、電燈で其位置を確かめる。それから胃を洗つた上で、一日一回電氣をかけて、少しづつ揉み上げるのである。其中にも一日一回づつ、少しなりとも、便通がある。勿論長くかゝるのである。又元の位置に復する事も出來ないが、幾分か上る。上るだけ上げてしまへば、短命に終る事もない。

○強て虛弱の人となす

滋養物といつて、別にあるのでない。健康な人なら何を喫ても、滋養になるのである。腸胃の弱い人なら消化し易い物を喫れば、滋養になる。併し小兒をもつ人は、力めて消化し易い物を、喫させねばならぬ。「うちの子供は、胃が丈夫だから」といふて、何でも構はず喫させる。終に生もつかぬ、虛弱の人となる。餘り馬鹿げた話ではないか。

○消化し易き食物

半熟雞卵（生雞卵を三分間熱湯に煮て、直に取り出すべし。鍋で煮て、一齊に出すを要す。一ツづゝ出す時は、最後の雞卵は、茹雞卵となる）。刺身。洗ひ。小魚

類。生の牡蠣（酢をかけては惡し。）豆腐。百合。甘藍胡蘿蔔、大根、馬鈴薯（極和らかに煮るべし。脂氣の少き海魚（煮るがよし）。和らかに炊きたる飯。

○消化し難き食物

辛き物と酸き物とは、消化不消化は扨置き、胃を刺激する物なれば、多く喫れば、胃を傷く。其他植物性の脂、鹽魚類。漬物類。貝、鰕、蟹、章魚の類。魚及び野菜の干したる物鹽漬魚の類。鹽からき物。堅き物。餡及び餅の類。極甘き物（又齒を損ふ）。かき餅鹽煎餅の類總ての菌。果物（下痢を起す物多し。野菜にては、牛蒡、筍、葱類（玉葱も）、蓮根、慈姑。細に調べたら、まだ幾らもあるであらうが、常食とする物を、選んだのである。又若い時、齒の丈夫なのを自慢して、堅い物を無暗に喫れば、因果は覿面、老後齒齦でむぐ〳〵遣る樣になる。

○輕便食パン

藥種店にて「酒石英」と「重炭酸曹達」とを求め、二者を混合したるもの七匁を、饂飩粉一升に入れて、團子にまるめらるゝ程の水をいれて練りかため、適宜の大きさに丸めて、蒸籠にてふかすべし。若し粉に砂糖をまぜ、或は中に餡をつゝまば、美味にして體裁よき饅頭となるなり。

妾の自炊生活

小式部

過ぎし三十六年、春まだ淺き三月の末、妾は兩親より遊學の許可を得て、上京の途に就きました、吁、此の時の喜び、年頃の希望の協つた此時の心持は、何に譬へやうものもありませんでした。

元より年齒もゆかぬ少女の身で獨旅の事ですから、兩親は大層氣遣つて、途中の事や上京後の心得まで何や角や注意して呉れました、東京と云ふ所は油斷のならぬ處、構へて惡魔の手に誘惑されなよ、幸ひ叔父が牛込に一戸を構へて居る故、之へ賴つて行くやうにとの命令難有く承つて、イエ、大丈夫、御心配遊ばすな、女たりとて一旦志を立てゝ郷關を出づる以上は、一廉の學問を爲遂げた曉ならでは、決して〳〵還りませぬ、誓つて成業を期しますると、立派に言つて退けて兩親の膝下を辭したのであります、其故上京すると

直ぐ指圖通り牛込の叔父の家へ參つて、父の依賴を傳へ、其家へ身を寄することに致しました。

扨、其より善い鹽梅に、何うかと案じた學校の選拔試驗にも首尾克く合格して、入學を許されましたので妾は嬉しくて〳〵此時許は天にも昇るやうな心持でした。けれど學校の授業の始まる迄には、なほ一週間の餘日がありましたから、此の間を利用して、ちと市中の見物でもしたらよからうと言はるゝを好い事にして叔母に連れられ毎日々々其處此處と見歩きました、折しも到る處に櫻の花はニコヤカに笑つて、楊柳はソヨソヨと風に吹かれて、恰も自分を招くやうなのには、愈々面白く成て、上野の動物園、博物館、淺草の水族館、珍世界、向島の花やら、日比谷の月やら、處々方々を浮かれ心で、何方が西か東か頓と方角さへ分らず只だ無意識に叔母の後に跟いて、俥に乘つたり電車に乘つたりして遊び廻つたのですから、道順の記臆どころか、自分で自分が分らぬ位、まるで夢裡を走るやうな心持でした。

▲いよ〳〵明日から

愈々明日から始業と云ふ前夜、手早く登校の用意を調へ了つて、臥床に入りましたが、翌日の登校を想ひ浮べると、妙に精神が亢進り、眼が冴えて急に眠られませんでした、さて翌日は未明より起き出でゝ庭の掃除や、座敷の拭き掃除、ランプ等も綺麗に致して置き其から此家には十歲を頭に五人の子供がありますので其等の髪を結つてやつたり、帶を締めてやつたり、又は下女に加勢してやつたり、親類の家とは云へ、同居の身は仲々用事の多いものであります、左う右うしてゐる内に叔父さん御夫婦が御目醒に成つたので挨拶をして、朝の御飯を待つて居りましたが、下女が愚圖愚圖して居た爲め、到頭始業時間に遲れて登校する樣な事になりました。

すると主任の先生が洋行歸りの御方で、西洋人は時間や規則を克く守ると、其の例を引かれて登校匆々嚴しい御小言、妾は下女の所爲で遲刻したと思ふと、殘念でなりませんから、歸ると早速此事を叔母に話して

明朝からは最う少し早く爲て戴きたいと願つたのであります、甚だのに翌日も矢張又た勝手元が手間取つて、遲刻しさうでしたから、御飯を戴かないで登校致しました所が、之が爲め大ひに叔母の機嫌を損じ、後で惡い事をしたと後悔しました、其の後は叔母も氣の毒に思つたと見えて、私の御膳丈は特別に早く拵へさせましたが、何うやら下女は蔭でブツ〱言つて居る樣でした。

▲女は損なもの

妾の通ふた學校は、專門的で程度が高う御在ましたから、田舍で少し許り勉强した妾



共には餘程骨が折れました、ソレに進行が速いのですから、家で十分に勉强して置かないと仲々追付いて參れませぬ、所が叔母といふ人が生憎昔物で、學校生活の經驗などは少しも御存知なく、從つて書生に對する思ひ遣りが無い方故、妾が學校より歸れば、机に向ふよりは世間話でアハハハ笑つた方が氣に入りまた一心不亂に研究してゐる最中でも、子供が泣けば少しは看て吳ても善さゝうなものと

云ふ顔付をなさるので、據なく勉强を止めて子供に愛想をせねばならず、然うさへすれば叔母の感情に滿足を與へて機嫌が好いのであります、其からまた客來があると、下女よりは妾に取次に出ると仰有る、其丈なら宜いが、勉强室が別にありませぬので、客が座敷を塞げて居る間は讀むことも書くことも出來ませぬ、時には又た反物を買つて來られて、仕立屋の縫つたのは氣に食はぬからと強いて私に縫はすのみならず、小供までが姉さん〳〵と、慕つて呉れるは難有いが、姉さんでなくては嫌よと些少の事にも妾の手を煩すなどいろ〳〵の障害が起りますので、早く起きて遲く寢ても自分の肝腎の勉强時間は中々見出されないと云ふ有樣です、斯う云ふ塲合、男子ならば吾は關せず焉と無頓着にも過されませうが、女の身なればこそ、家内の些事にも氣を措いて手傳はねばならず、ヤレ横着者の生意氣のと惡口言はれるが厭さと、針程の事にも氣兼氣苦勞が要るか知れません、本統に女は損なものだと熟々思ひました、叔母を惡く云ふ譯ではありませぬが書生の經驗のない人の眼から見ると、女として家事の手傳ひをする位は當前、もつと働いて呉ても宜からうものとの考を持たるゝに違ひない、シテ見ると此方で力めてなす事も先方には氣に入らず、氣に入らねば些細の事にも不平の起りたがる道理、是では迚も落付いて勉强に身を入れる事は出來ませぬ、遙々勉强が目的で來て書生の身に勉强の出來ぬ程困る事はありませぬものを、何うして斯樣な處に長居が出來ませう、何うか思ふまゝに勉强の出來る所へ移りたいものだと思つたのも、強ち自分の我儘ばかりではありませぬ。

▲親類の監督

或時、不圖風邪に冒されて臥りました折、病氣とはいへ寢て居て迷惑をかけるのを、然うでなくてさへ氣の毒氣の毒と心苦しく思つて居る矢先に、襖の外で『人に世話ばかり燒かせて本統に厄介な姉さん』と言ふ聲が耳に這入りましたので、妾も餘りだと思ひ、覺えず夜具の襟を嚙みしめました、嗚呼、旅に出てこそ初めて親の恩を知ると、父母の難有さを熟々感じたので御

在ます。

すべて郷里の親達は、親類と云ふものを信用する所から、娘を親類に預て置けば、親切に監督するは無論の事、面到も看て呉よう、世話も燒いて呉よう、又た當人の勉强にも都合が宜からう、而して社會からも親類に居ると言ば彼是と批難される虞もなく、當人もまた左う云ふ派目に蹈み入て機會もなか



らうから、大きに安神であると、一圖に信用し切つて居りますが、親類と申せど預けられた娘の身には他人も同然、心配氣兼の要るは仕方がないとして、大事の勉强時間を潰されても親類だけに苦情が言へづ、誠に困る事が多いものです、ですから同じ親類に托するにしても、其邊を能く考へて其の家の家風と氣風を見極めた上にしなければ何にもなりませぬ、

是は妾の經驗から申上げるのです。

▲遂に轉宿

叔父は親身でも叔母は他人ですから、元より氣象の要るは覺悟の前でした、さりながら這麼風で打過ぎて落第でもしたら、其こそ大變だと思ひましたから、思ひ切つて故鄕の承諾は得なかつたのですけれど、女先生の宅に寄宿を願ひ出で、到頭其方へ轉宿する事に致しました、すると叔父夫婦は妾の此の處置を見て大立腹、上京當時に可愛がつて吳れた優しい面相とは打つて變つて、怖しい目付で妾を睨んだものです、然し其の後は不機嫌をも構はず、務めて度々訪問致して居りましたので、後には漸と機嫌が直りました。

▲此家にも亦一經驗

妾の寄宿を快く承知して下された女先生は、學校でも評判のよい、殊に生徒間に人望のある親切な御方で此宅には私共の樣な女學生ばかり十人程寄宿して居りましたが、其の方々は二階の八疊二間にズラリと机を並べて、熱心に勉强なすつて入らッしやる、而して主人の先生が、時間を嚴しく仰有る丈あつて規律が正しう御在ますから、銘々の仕事がチャンと極つて居つて餘計な事に手を出す面倒もなく、又た家事の手傳ひをする必要もなく、不審があれば何時でも先生に伺はれもしますから、以前に比べて勉强の出來るとは夥しいものです、で、妾は結構な所へ參つたものだと大層嬉しく思ひました、そして妾が此家で多勢の女學生達と寢食を共にした事は、女と云ふものゝ性質を研究する上に實に好い機會でありました。

『女同士の打連れて』などゝ唱歌や新體詩の歌つてあるのを聞くとさも優しく、打解けて愉快さうに思はれますし、又た誰やらが年若の女の集つた所を見て『實に活きた花園』と稱へられたといふ話を聞きますと、如何にも優美で都雅の樣に思はれますが、實相を見ると、仲々何うして這麼ものではありませぬ、妾が多勢の中で研究した所を發表致しますと、外──鄙混と定義して差支ない所か、左う云ふ折が女同士の間には數々起るので御在ます。其故、妾は自身には可成く衝

実を避けて、他の喧嘩の調停に無駄骨を折つた爲め、管らなく貴重の時間を潰して、先生から度々お小言を頂戴したもので御在ます

▲一同解散

幾程もなく妾共が恩師と頼んだ先生は、或る事情の爲め地方に轉任遊ばすことになりましたので、乍殘念一同解散することにしては一ト先づ其家を引取りましたが、再び叔父の家に舞戻つて厄介になりますのも、業腹ですから二三日は同級の方の家に置いて貰つて徐ろに後圖を計ることにしました、此の時分は妾も最う大分東京の事情に通じて居りましたので、今度は方面を変へて、自炊生活をして見ようと思ひ立ち、其の同級生の紹介で、本郷駒込なる某邸の一室を借用することに取極めました。



▲自炊生活の理想條件

何故妾が自炊生活を選んだかと申しますと、種々の便宜があるからです、即ち第一には勉强が十分に出來ること、第二には獨立自由で誰に遠慮氣兼も入らぬこと、第三には經濟的であることの此の三ケ條が大眼目でありました、ソレに某邸の御主人は某省の高等官で、至極眞面目な人でありますから、世間から兎角の非難を受くる心配のない上に、一間を借切つてある事故、他との煩い交渉もなくて、暢氣に思ふまゝの勉强が出來、且つ十分經濟的に節約も出來ようとの見込で、此の新しい生活が自分には愉快に思はれたのであります。

▲室の樣子

妾の借りた部屋は、床の間半間に違ひ棚のある四疊半で、備後表の足觸りも心地よく、天井と云ひ、壁と

云ひ、すべてが小綺麗に出來て居ります、東の障子を明けると、狭い庭ながら小石を敷詰めた中に、棕梠二本と熊笹三株が植つて、其の向ふは隣の土藏で仕切られて居ます、北は壁一重越で此邸の客座敷、南は丸窓で、其の外には躑躅と葉蘭が行儀よく仕付られ、松と櫻の古木が高く枝を交へて居る其の周圍を、山茶花の白と赤とが一つの株に成つて自然に垣根を作つた有様は、中々風雅であります、而して西は襖を開けると一間四方の板の間、其の先は廊下で奥様の部屋に續いて居ります。

▲小さな床に單簡な裝飾

室内裝飾と申した所が、高が書生の身分で事々しくするのも何ですから、只だホンの少許飾つたまでゝ、三尺の床の間の正面には、父が妾の出京を祝つて下すつた懸物『無遠慮者有近憂』をかけ、床の上に父の寫眞を飾り、其の前に一輪挿の花瓶と枕時計とを置き、違ひ棚には可愛らしい人形入の玻璃箱を載せ、壁上には郷里の兄より贈られたビスマークの肖像をかけて置き、其の右手の丸窓に對して机一脚、本箱、火鉢といふ順序で、いつも整然として置きました。

▲押入の内

押入の上の段には、書籍、雜誌、ノートブック類を積み重ね、其の側に手文庫、下の段には一方に夜具蒲團、一方に柳行李二個、並んで化粧道具と髪結道具の箱二個を收めて置きました。

▲一つの戸棚、二つの箱

縦横一間四方の板の間に綺麗な薄縁を敷いて、一つの戸棚が据えてあります、是は即ち食器入、其の側に卅爐と炭籠とを並べ、それから椽側の隅の方に二つの箱、其の一はランプ、石油鑵、蠟燭、提灯、燐寸入、他の一は靴、下駄、雪駄入、而して三つの小竿、是は手拭かけ、拭巾かけ、雜巾かけ、四つの釘、是は洋傘かけ、雨傘かけ、金盥かけ、箒、塵打かけ。以上の品丈が、、、つまり妾の自炊生活になくてかなはぬ重要の道具でありました。

▲時間割

そこで毎日の時間割を左の如く規定致しました。

五時――起床、尤も目が醒めたからとて直ぐに起きはしません、起上る前約三十分許は寢床の中で學科の暗誦を致すのです。

六時――御飯たき――掃除――髮結――化粧。六時半　皇城遥拜――勅語口唱。父母の肖像に禮拜して日頃の訓を思ふ。新聞紙を讀む。

七時――庭前散歩――呼吸運動。

七時半――朝の食事。

八時十分――登校――午後三時まで

三時半より五時半――英語の稽古(櫻井女塾へゆく)

六時――歸宅――入浴――買物。

六時四十分――晩の食事。

七時より九時――復習――豫習。

九時より十時――本日の反省、――翌日の準備――日誌の記入――

畢つて就眠。

▲獻　立

平生は次の如く規定て置きました。

▲朝　味噌汁(豆腐と玉葱の實、但し時季によつて變化あり)　生卵子壹個、香の物

▲晝(辨當)麵麭半斤(バタ或はジャムを着けて食す)

▲晩　不定

尤も日曜日と祭日と嬉しい日と悲しい日とお目出度い日と、それから特に注意すべき日などには、御馳走を何ぞ二三品拵へ、友達を招んで、樂しく戴きますけれど、普通の日は可成く時間を費らない、手の掛らないものをと心懸けますから、どうせ碌な物はいたゞけませぬ。

▲月々の經濟

收　入

一親元より送り越す金額　拾五圓

支　出

一學校授　業料　貳圓五拾錢

一英語授業料　壹圓

一間　代　貳圓

一諸種の會費　五拾錢

一米　代　壹圓八拾錢

一肉　類　壹圓

一副食物一切　壹圓五拾錢

一入　浴　料(二十回)　五拾錢

一　書籍若くは衣服費　八拾錢
一　筆墨紙　參拾錢
一　郵税　九拾錢
一　洗濯費（育兒、石鹸代）　參拾錢
一　郵便貯金　參拾錢
一　雜費　五拾錢
一　豫備費　壹圓
計　拾五圓也

右の樣に豫算を立てゝ置きますものゝ、扱て之を實行するとなると、決して十露盤ヅクに行くものでありませぬ。毎月不足勝で困りました故、そこで一法を案出しました、其の法は前月の末に送つて貰つたのを、月が變るまで封を切らないで其儘納つて置き、翌月の一日に成た所で、初めて封を開き、爲替を取つて來て頭から

月謝、間代、會費。を支拂つて了ひ、次に米、炭、石油、醤油、味噌。を何れも一ケ月分丈買入れて了ひ、貯金もチヤン〱と一定の額を預け入れて了ふのです、而して殘つたのを日割にして、其の一日分宛を財布に入れて持て居ります、斯う致しますと、定つた金額の外は使ひたくも手許に持て居りませぬから、一寸辛抱します、それから纏まつた物の欲しい時には、例へば一圓するものならば、毎日五錢宛殘して置いて、其が二十日經つて一圓に成つた時に買ふのですけれども急に要るものが出來たとか、金を出してやらねばならぬとか、いふ樣な、不時の出費には、豫備費の一圓で補ふことにしてあります。斯う云ふ場合に當つては、此の一圓が實に神樣のやうに尊く思はれます、妾は他の女學生達の樣に御守札は持ちませぬが、其の代り此の一圓札のお蔭で助かる事が多いのです。

▲お金の無い時

臨時の費用が嵩んで、豫備費も遣ひ込んで、懐中無一物といふ身輕な時は、實に吾れながら慘憺なものです、何が辛いと言つて旅に出て、御錢のなくなつた時程心細く、氣が滅入つて、肩身が狭くなる事はありませぬ。そして身輕い樣なものゝ頭は仲々重いのです、妾は這麼時には態と晴衣を着て、日頃よりもドッサ

り御飯を戴き、努めて面白い事を言つて、さり氣なき風を裝ひ、泰然と構へるのですが、それでも思はず、眉に皺が寄るのでいつか、友人に悟られ、瘦我慢を笑はれるのです。

▲ピー

ピーとは何で御在ませう是は貧乏人の外は用の無い所、普通から言ふと學生などの寄付く場所ではないのです、妾も初めは名を聞いてさへ慄とする程でしたが、東京に出て大層窮した時に、到頭友人に紹介されて近付になりましたけれど、最初の内は勇氣を鼓して其家の門口まで行くには行つても、何だか這入りにくいので、二三度跡戻りして、四邊を窺つて、内の樣子をソット覗いて、辛との事で目的を達すると、前後不覺で飛んで逃げ歸つたものですが、今では餘程馴れて別に體裁が惡いとも思はなくなりました、ピーとは大きな聲では言へませぬが、質屋の事で、妾共の社會では英語の頭字ばかりを取て單にピーと申して居ります親の傍では何不自由ない方も、東京へ出られると、つひ恁う云ふ所に足を運ぶやうになります『偶々友、遠方より來る亦た金借にあらずや』とは學生の眞の苦境を穿つた興味ある挨拶です。



▲自炊の得失

自炊書生と云へば、苦學生貧書生の樣に思召すのは普通一般の見解ですが、何れかと申すと、

自炊生活は寧ろ贅澤な方です、何故なれば下宿屋では食物を第一に値段によつて選びますが、自分で行る日になると滋養といふことを專一に思ひますから、不知贅澤になります、併し心を締めて節約にさへ致して居れば、左う餘分にかゝるものではありませぬ。

自炊をして厭に感じます折は、金のなくなつた時と、時間の少い時とで、斯う云ふ時分には非常に煩さく感じますが、又た好い事には自分の思ひ通りの物を喰べられ、試驗の時や、疲勞の時などにも其を補ふ丈の滋養が取れます、ソレニ手を下して煮燒をする事ですから、一種の樂があります、ナーニ贅澤とは申せ、少し自分で引締つて行れば、時々御馳走を奮發んでも其を刎ね出す位な事は雜作もありませぬ、妾の經驗に因て見ると、自炊生活は衞生になり經濟になるは云ふ迄もなく、他日一家を組成するに付ての下稽古ともなるのですから、妾は女學生方に此の自炊生活を御すゝめ致すので御在ます。

獨逸の嫁入道具

天野誠齋

△實用の嫁入道具

獨逸の家庭では一般に質朴なる實用主義が行はれて居ますから、お嫁入りの支度なども、見榮の爲めに態態新調する樣な事は決して致しません。嫁入道具は何んでも實用品から先へ調へまして例へば手巾とか肌着とか或は靴下、シャツ、枕懸けとか、左もなくば毎日必要なる臺所道具即ちテンピ、鍋、皿、ナイフ、肉叉等のやうな品には、必ず重きを措いてあります。

日本のお嫁さんは着物を一生着盡せない程拵へて、簞笥を幾棹持つて嫁入りしたとか云ふのが大層見榮のやうですが、獨逸ではシーツとか肌着とか手巾とか云ふ品を、一生使い切れぬ丈持つて往くと云ふ風が、一般婦人社會に行はれて居ます。尤も彼國の婦人とても同じ女性の事ですから、眼に立つ華美な衣服は幾枚も

欲しいでせうけれど、日本でも西洋でも同じ事で、着物の柄は其の時々の流行がありますから、澤山拵込んだ處で、直に廢つて仕舞へば詰りは野暮な流行後れの品を着なければなりません。夫れ故着物はホンの一通り拵へて置き、シーツや手巾の如く洗濯も利けば、一生廢りもしないと云ふ實用品に充分金を懸けますが、一寸したものでも斯様に嗜みを異にして居ります。

△婦人の結婚難

一体彼國の婦人が嫁入りする時には、家庭を作るに必要な一切の物品を、お嫁さんの方から調へて往かなければなりません。日用品は勿論の事、窓掛けでも、装飾用の類でも、置物でも、又應接所へ飾付ける箪笥の如きものに至る迄も、悉く持参するのですから、お婿さんの方は誠に世話が御座いません、自分の手廻り道具でも買足せば、夫れで一家の御主人となり濟されますが、お嫁さんの方では其の支度がナカ〳〵容易な事でありません、從つて結婚問題が何れ丈婦人の胸に苦痛を與へるか知れませんが、扨孰れにしても支度が出來なければ結婚は成立いたしませんし、男子の方でも其の位の資格が無い婦人なら、妻には娶りませんのです。斯う申すと獨逸の男子は迎妻するに一種の無上權を有するやうに見えますが、ナニシロ日本と比較したら生活程度が非常に高い國故、之れも亦勢ひ止むを得ぬ次第でありませう。其の代り男子も亦妻を養ふ丈の資格を備へ、男一人前にならなければ必ず結婚は致しません。

△老嬢さんの令嬢

それですから娘を大勢持つた親は、身代を潰して仕舞うと謂ひますが全く其の筈です。中流の家庭で一人の娘を嫁入りさせるには少くも三千圓の支度を要するさうです、併し親の財産で嫁入支度をして貰へる婦人なら、是程幸福な事はありませんのですが、不幸にして親の財産が乏しく、到底嫁入支度の出來兼る婦人では止む事を得ませんから生涯獨身生活を送るの外ありません。故に六十歳位の老嬢さんでも令嬢と呼ばれる御婦人がナカ〳〵彼國には多い。併し獨身生活に滿

足しない婦人は獨力で稼いで結婚費用を作るのです。斯くの如き階級の者にはヨモヤ三千圓の入費は要りますまいが、兎に角費用を作り出す迄は、良人と定むべき人と許嫁の約束丈結んで置き、其の婦人は商店の賣子杯に入つて一生懸命に稼ぎますから、其の間男子の方でも根よく幾年でも待つて居ります、中には又例外もありますが、多くは斯樣な苦心をしなければ、婦人は到底結婚は出來ません、是等を考へて見たら日本の御婦人がたは結婚問題に對しては樂なもので、何の位幸福だか知れますまい。

△嫁入道具の公開

扨嫁入道具が悉皆調ひますと、夫れを悉く一室に飾付け、當人が平常尤も親しくして居るお友達を殘らず招待して之れを觀て貰うのが彼國の習慣ですが、何も之を以てお友達に誇らうと云ふ譯では御座いません。マブ〳〵自分は之丈の品で手落のない積りだが、或は未だ必要な物品が有かも知れないから、何うか夫れを注意して貰ひたし、又調へた品に就ての批評をも遠慮なく言つて貰ひたいと云ふ心持から出た事です。

招待されたお友達も之れを名譽な事に思ひ、且つは友達の義務と思ひます處から、腹藏なく意見を述合ひ、假りにもお世辭などは申しませんのです、自分の嫁入道具を公開し、品評して貰うのは、誠に有益な事ではありませんか。

△有益なる祝い物

兄弟親戚其他親しき友達等より必ら婚禮の祝い物を贈られますが、其の祝い物も日本とは大分趣きが違つて居ります。極く近い親戚のものなどに至ると肉叉やナイフへ紀念の徽章を彫刻して贈るのもあります。又有益なる書物を祝ふ事も非常に流行しますけれど、一般に贈物は輕少の方です、其の代り必ず夫れが心を籠めた有益な品斗りで、我國の如く形式一遍の贈物などとは全く違ひます。

斯くの如く專ら實用主義の行はれて居る國ですが、此の主義を味つて我國の嫁入道具を改良したら又以て大に益する處があらうと信じます。

季節料理のいろいろ

津川千代子

△鮭のてりやき

まづ生鮭を鱗をとり（こけはとらずにこけぐろみ使用してもよい）切身にいたし、生醤油に三十分間以上つけておき。それに金串をうち。皮めの方から六分通り焼き、表の方から四分通り焼く。これは表になる方を少く焼くのは器に盛つて表があまり焼けて居ては體裁がよくありませんからです。少し焼けた時分、金串を一寸廻しておきます。と焼上げてから串が直にぬけますし、從つて魚をこわすやうなことはございません。焼きましたら串をぬいてその上にてりをつけます。

てりは上等は味淋一升に醤油三合位を入れ、それを三合程に煮つめます。塗てりのつくり方は、味淋一合に醤油二勺ほど入れ、煮立つた處に杯に一杯のくずを杯に一杯程の水にてとき、その中に杓子でかきまぜながら煮立たせ、上に浮く泡を金杓子にて掬ひとつて捨てます。火から下して少しの間冷しておきますと、どろつとしたものが出來ますから、これを前の焼いた魚につけます。生姜を一本わきに付け合せます。

△鮭のあんかけ

生鮭を適宜の大きさに切身にして、裏表に薄く塩をふりかけて十分間以上おき、塩のしみた頃、桶に水を入れ魚を一切づゝその中に入れて、ざつと洗ひ竹の皮をその魚の大きさ位に切り、その上に魚をのせて蒸籠にならべ、湯の煮たつた處に蒸籠をかけて蒸し上りたらば器に盛り上から餡をかけます。

餡は煮出しの中へ味淋の煮返したのを少し入れ（味淋の煮返しがないときは砂糖にてもよし）醤油を少し鹹目にさして、葛を水でとき、鍋の煮たつた處を金杓子でまぜながら流し込み、どろ〳〵したものを作つて、前の魚の上からかけ、その上にヒ子生姜をおろしてのせる。

△やまかけ魚

魚は何魚にてもけよれど鮪、鯛などが殊によし、五六分位の賽の目に切り、少しの間生醤油につけておき、外にやま芋の皮をむき、すり鉢をよく洗つてその中に卸して入れよく擂り（芋はなるべくヒ子がよし）もしあまり固さうならば、煮出を少し入れてゆるめ。その中に醤油をほつちり入れて味をつける。前に醤油につけておいた魚を笊にあげて醤油氣をとり、器に盛りてその上に右の芋をかける、かけ方はまづ箸を一本づゝ兩の手に持ち、芋の中に箸を入れ兩方からたぐりながらかけると體裁よくかゝります。その上にわさびをおろしてのせ、また體裁のよいやうに青のりを裏表を火にてあぶり、よくもんで、山葵のわきに細長くふりかけます。

△利久味噌

柚子の下になる方を少しそぎて摺りをよくし、枝つきの方を三分程切りおとして、殘り七分の方を小刀か庖丁で中をくりとつてしまひ、三分の方についてゐる種だけとりすて。柚子味噌をつくつて、七分の方につめ、三分の方をふたにします。

赤味噌の上等をすり鉢にてよくすり、裏漉にかけて鍋に入れ、百目の味噌に味淋一合、砂糖三十目ほど加へ、水二合ほど入れます。(もし味淋がない時は砂糖を増せばよろし)そして火にかけ五分間ほどねります。前に柚子一個位をおろしにておろしておき、鍋をおろす少し前に入れてよくまぜます。このおろし柚子を入れてから長く火にかけてはいけません。そして出來上りましたら、前の七分の柚子につめまして三分のふたをする。

△鷄卵のおろし煮

鷄卵をこわしてよくまぜ、たまご燒鍋に油をひきて白燒にし(白やきとは味をつけずに燒くこと)それをまづ幅五六分、長さ一寸に切り、鍋の中に成可かさならぬやうにならべ、味淋一合、煮出し一合、醬油四五勺を入れ鍋のふたをして强き火にて煮る外に大根の皮をひき大根おろしにておろし、水けをなましぼりにしぼつて(あまりよくしぼらずに)前の鷄卵に味の侵みた頃上にかけるやうに入れ、また蓋をして煮る(大根をろしを入れてからはあまり長く煮す。おろしの暖まる位でよろし)それを火よりおろし、卵を器にもつて、その上に大根の汁をかけて出します。

△水仙卷

上葛粉二三合を水にて小粒のなきやうに能く溶き、トロ〳〵になし玉子燒やうの物に少許入れ、沸騰せる釜の湯に初め玉子燒の底のみを浸し、始終ゆり動かして葛の一面に不等なきやうにし、稍凝まりし時全く其の全部を湯の中に浸し、直に引揚げ、水を盛りたる桶に差し入れ、水中に葛を器より離し取り出せば、薄き四角なるもの出來るなり、是を一端よりクル〳〵と卷き庖刀にて好き程に切り砂糖を懸けて出すなり。

△蕎麥しんじよ

蕎麥しんじよはまづ濃煮汁をつくり置く、蕎麥粉七合の時は煮汁一升位に鹽輕く一攫み、醬油二勺、味淋五勺を入れ煮立て、この汁の熱いのにて前の蕎麥粉を捏る、捏れ加減は丁度蕎麥がきのかたさ位にする、別に鍋へ二番煮汁を作り、鹽五匁、醬油一勺ばかり加へ煮立て、その傍には丼に水をはり置き、まへの捏れた蕎麥に蓋を水にぬらして、これへ杓子で半月形にとつてぬれ手にて、上を滑かにならし、丼の水へ蓋のまま入れゝば、自然に水中に落ちる。これを前の二番煮汁の煮立つた中へ入れて浮きあがるまで煮る、もし客へ侑めるとき、時がたつて冷たならば、その儘あたゝめ、椀に海苔を布いた上へ半月をのせて、別に作つた

汁をかけて侑める。吸口は晒葱、山葵などを用ふ。

△胡麻豆腐

白胡麻を一夜水へつけ置き、米の樣にすり鉢にてとぐ、すると上皮はとれる、この上皮は水で二三度流して、盆又は笊へ入れて、半日ほど干す。この胡麻を煎り擂鉢にて油の出るまで擂る。これへ水を加へる（分量は胡麻五合に付水一升）それを椀で量り、假りに五椀あるときはその椀にとかね葛粉一杯砂糖三十目、鹽五匁、生酒五勺を加へ、ときて水嚢で漉す、それを鍋へ入れ火にかけ、凡そ三十分間程煉り、杓子ですくひ垂してつながる樣になつたら、他の器へ入れさまし、庖丁にて適宜に切る、坪の材料（薄葛汁）又は味噌汁の實にしてもよろし。

△牡蠣飯

牡蠣を能く洗ひ笊にあけ水を切り、飯は少し鹽を入れて强めに炊き、煮へ立つ時牡蠣を入れ、飯櫃に移して鰹魚節汁の清汁に卸大根、淺草海苔こま〴〵蜜の香料を添へて出す、又な汲は剝身を蒸で味噌鹽にて味をつけ飯の煮立たる時打込なり。

△枇杷めし

枇杷の芽を摘み水にてよく洗ひ、熱湯をかけ、暫時水に浸してよく絞り、細かに刻み焼鹽をふりかけ置き、常の飯をたき鉢にうつしながら交ぜるなり、鹽鮭を刺身の如く薄く切り、酢に投じ飯は常の如く酢を打生姜、胡麻、麻の實を煎り　酢飯に混ぜ、鉢に酢飯をしき、其上に鮭を一かはごとにならべ、其上に竹の皮を引て蓋をなししかとおした置き翌日より食すべし。

△五目飯

飯を强目に炊き、鯛を細かく切り、椎茸を薄く切り、麩を長めに切り、各々味淋醤油にて煮、玉子を煎り、くはゐと蓮根を湯出て薄く切り、鹽と味淋にて煮、梅酢の生姜を細かく切り、何れも飯の上に並べて出す、但し魚類野菜とも時の物見計らひに仕立つへし。

澤庵の漬け方

冬に漬て來年中貯へ置ものは澤庵に若くはなし、田舍の大家には漬物土藏在り、中土間四方に棚を設け二階は雜物の置場とし、下に漬物味噌醤油等を貯藏す、並の家ににても土藏と迄は至らぬも漬物部屋の設なきはなし、されど東京は大槪八百屋漬物屋より其時々に買ふ習慣にて漬物部屋の設もなく、僅かに物置小屋を利用して權實にするの風習なり。されど大勢の家にては手製すれば經濟上の得策なれば試むべし、先づ第一北向の日光のあたらざる處ろ、夏にても冷氣なる處に小屋を設て漬込べ

き也、もし四方の内一方にても日光當る事あれば漬物の味を變ずるものなり。

大根は乾き加減に等差あり、先づ一月頃に口を明る物は皮に皺を生じたる生枯の物をよしとす、次に二月分は[illegible]一[illegible]枯れたるものを撰び、三四月頃の出る頃迄のは弓形に曲得らるゝ物ならざるべからず。暑氣に向ふ頃迄のは輪にしても折ざる物を撰び、暑中に至るは二ツ折に折りても別條なき物を撰び、更に暑を越て秋に至らしめんには結び得らるゝ迄乾き充分枯萎びたる物ならざるべからず、されど東京にては兎角、置場も充分ならぬ家多ければ、一年中の用意はせずとも春には菜漬を手傳はせ、夏は瓜茄子の一夜漬もあれば、澤庵は若漬のみにても然る可きなり、普通漬用干大根とて賣物は若漬に適する物、弓形以上は別に宅にて乾すに非ざればある事なし。

漬法は凡四斗桶一本を漬るには糠七升、鹽三升あれば甘口也、是より糠を減じ、鹽を增ほど鹹口となる、風味よく爲とならば甘くすべし、久しく貯へ置くには其月數に應じて鹽を增すなり、暑を越す物は鹽七、糠三とするなり、先始に大盥、大鉢何にても大なる器にて糠と鹽とをよく混交して桶の傍に置き、先づ底に混交せし糠を布團の如く敷て大根を並べ。少し無理に押詰る樣にすべし、之より丸き處へ長き物を並ぶるなれば、何れ隙間は出來れども、成たけ隙なき樣に大小を取交ぜ、又一ツ二ツは切てもよし、偖其上に又糠を振りかけ、押ならして此度は橫に大根を並べおき入違にく〳〵、詰ては糠を掛盛上る迄にして押葢をして強く重石をおくなり。大なる石よりも女にても持得らるゝ程の物を幾個も重る方便利なり、もし石不足ならば何にても重量の物を利用すべし、又注意すべきは始め大根を買ふ際切口に孔のなきを選ぶべき也、見たるのみにて知り得らるゝものなられば、二三本を試に中央より切て少しにても空あらば取替さすべし、切たるたけの代を拂へばよし、煮て惣菜となせば損にもならず、若し數桶漬るには一二の番數を桶に附て一より口を開くべし。

薩摩芋の應用

ふな子

薩摩芋は間食時の食物に最も適當な物である所から、多くの人に愛用されては居るものゝ、東京あたりでは、蒸して喰べるか、燒いて喰べるかの二途で、其他の用法に就ては全然知らぬ者が多い樣だ、併し此の芋の最初の輸入地である薩摩地方へ行て見ると、種々の事に應用してゐる故、今ま同地方に行はれてゐる用法をお話して見やうと思ふ。

一、甘藷で葛粉を製造する。

其の法は先づ槌を以て甘藷を碎くか、又は山葵卸の類で細末にして水に浸し置き、其の含む所の白汁を全く除き去つて後、糟は絞り上げ、水底に殘る白汁は濕氣を去るため數々清水を注ぎかけ、最後

に晒し上げると葛粉の代用品となる所の一種の葛粉が出來ます。

一、甘藷で寒晒を製造する。

極寒の候、甘藷を小片にへいで、凡そ十日程水に漬けて置き、それから引揚げて日光に乾かし、搗いて細末にする時は、恰も糯米で製した寒晒に似たものが出來ます、糯米と違ひ、甘藷の寒晒は蟲害を蒙らず永久の保存に堪ゆると云ふことです。

一、甘藷で酢を醸造する。

酢を造るのには、甘藷を小片にして天日に乾し、此の小片一升に麦糀五合を混ぜ、之に水一升を加へて半煮となし、之を冷まして壺に納れ、手を以て能く混淆した後、紙で目張をし、雨の當らない日蔭に置き、其上に銅錢一個を載せて置くので、此の錢に綠青の生く時が即ち成熟の度としてある、そこで若し幾日經つても綠青が生かぬ時は酢の出來上らぬ證なのですから、此の場合には更らに甘藷二ツ三ツを燒き、壺の中に純良なる酢を少し許り撒布して、それから前述の樣に致せば屹度良酢が得られると云ふ事です、此の芋酢は色が清水の樣に澄んでゐて、毫も可厭な臭氣がなく、味も亦た至極上等で、酸氣は殊に峻烈であります、元來此の製法は同國阿兒ヶ村の農、岡本某の妻おこと云ふ婦人が發明したもので、其の以前は此の邊一帶は麦で造つた酢を用ゐて居つたが、此の發明以後は全く麦酢を廢して了つたと云ふ事です。

一、甘藷で醤油を醸造する。

此の醸造法は、甘藷を方二三分許に切り、一日程日光に曝し、充分水氣を去つて後、中を鍋で煎り、少しく焦色を帯びた所で之を取揚げ、小麦又は大麦を加へて麹にするのです、而して水、鹽の加減等は大豆製のものと毫も異りません、但し麦を加へる時に、其の煎り上げた甘藷に、水を注し、少しく蒸氣を含まして混ぜ和せるのです、殊に寒中製造の物は其の味大豆製に劣らぬと云ふ程ですけれど只だ滓の多いのが缺點だそうです。

一、甘藷で味噌を造る。

甘藷で味噌を造る法は、只だ甘藷を大豆に代用するのみで、他に異つたこともないが、鹽は少し餘計に入れるが好いとしてあります。又た一時に數樽の味噌を造る時は、酸味を帯ぶる恐がある故、先づ十日分位の食料に充てる考へで、少許づゝ製造して置けば大丈夫だそうです。

一、甘藷で飴を製する。

飴を造るには甘藷を蒸し、之を舂いて桶に移し、麦芽を加へ——凡そ一貫目に付麦芽四勺許を混入す——暫らく蓋をかぶせて置き、

三四度之をゆり動す時は、ドロ〳〵の水に變化します、そこで袋に入れて絞り、其の垂れ汁を鍋で煉り詰め、成るべく長く火にかけて置くのであります。

一、甘藷はまた飯に炊く。

芋飯を炊く仕方は、釜に仕掛た飯米の上に甘藷を厚さ七九分位に切つて入れて置けば、飯と同時に蒸されるのです、斯うして炊いた芋飯は味甚だ甘くて、口に適ひます、但し少々水加減を少くせればなりません。

此の外に粉米に小豆砂糖を和ぜて煉羊羹を製したり、或は料理に使用したり、其の用法はなほ數多くあります、然し茲には其の最も簡易のもの丈を擧げたのですから、奥樣方の御試しあらんことを希望する次第であります。

葱の調理法

葱は冬より春にかけて重要なる蔬菜にして、青葱、白葱の二種類あり、各地の習慣と料理の仕方によりて、用ひ方を殊にす東京地方にては白根を好み、京阪其他關西にては大抵青葱を使ふ、されども一般の嗜好に適するは、根深の白葱を最とするものにて東京地方にて主ら栽培する者は、此の種に屬する千住葱なり莖は長大にして純白に、質柔軟にして品位よく、風味も從て佳良なり。

其他岩槻葱と稱するあり、千住葱に類し且つ莖長大なるものなり、此の葱は一本の莖岐れて二本にも三本にもなり品質も甚だ佳良にして千住葱に次げり。

下仁田葱之れは上州下仁田に産するもの、俗に上州一本葱と云ふ、一本の莖は決して分莖することなく、殊に長くして太く、千住葱につぐべき者なり、其他秋田葱と云へるは莖更に大なれども、千住の如く長からず。

栽培は、較や濕氣ある沃土を擇み、播種の期節は春秋二季として、冬より春までの間に採收す、根深の白葱を作るには、深く耕耙して其中央に深さ凡そ八寸位の小溝を掘り開き、苗三四本を束ねて一株となし、溝の一側に沿ふて植ゑ、五六寸を距てゝ又一株を置き、順次植ゑ終りて、其反對の側より土を掩ふこと三寸位にして、低き處に馬糞を施し、又苗の生長するに從ひ、漸次土をかく、かくすれば大抵二ヶ月位にて柔軟なる長き白莖となる、岩槻にては溝を穿つと深さ三寸位にして、苗は斜に伏せ漸次土を掩ふの法を用ゆる故白莖は長けれども下部少しく彎曲し居るなり。

又葱は毎年同じ所に作れば其成長宜しからず、年々土地をかへて作るを宜しとす、種もなるべく新鮮なるを撰ぶべし。

葱の用法はいろ〳〵あり冬期の肉食には缺くべからざるの佳品なり。

巴里の室内裝飾

今こゝに、西洋諸國中社交の中心なる佛國巴里の普通家庭に於ける裝飾法を示さん。

室内裝飾は家の品格と主婦の品性を現はすものなり故に怜悧なる人は、室内の裝飾を見て其家の主婦に會見せざる内に既に其性質の賢良なるや、否やを察知すといふ。室内の裝飾は實に一家の主婦を代表したるものといふべし。裝飾の要はすべて清潔と温雅と秩序あるを要す。

▲客房‖火爐の右の方には主人の爲めの肱掛椅子、左の方には賓客の爲めの肱かけ椅子、又は長椅子を供ふべし、三四人以上客を請じたる室内には丸卓子を供ふるを可とす、丸卓子には席の上下なし、其傍には硯箱、書札、寫眞帖、新聞紙、名刺盆を置くべし、客房にガラス戸棚などはよろしからず、又各室には必らずストーフを備へ置かざるべからずと雖も、終日薪炭を焚置くやうにては入費も少なからず、さればとて若し火を消し置けば、來客の暖を採るに間に合はず、斯る時には、交際上手の人は居間に客を引き、若しくは日を定めて來客を招待するを常とするなり。

▲化粧室‖化粧室には、ブラッシ(頭髮、爪、齒、及衣服を掃除するに必要なる各種類のブラッシ)を始め海綿、粗櫛、密櫛、爪刀、毛拔、白粉箱、香水瓶等の裝飾用雜品を臺上に整列し置き又壁間には姿見かゞみを掛け置くべし、されど化粧道具は隨分贅澤を極むるものなれば、富豪にあらざれば別段に化粧室を設くるほどの餘裕はなく、寢室の一部に些々たる化粧道具あればまづ足れりとす。

▲寢室及び書齋‖普通の家にては寢室と書齋を一室に置くの風なり、又家族・故舊の畫像等は多く此室に置くを常とす。

▲食室‖には方形の卓子と椅子とを備ふべし、こゝは寢室と反對にして家族故舊の畫像は決して壁間に揭ぐべからず、されど山水風色の油繪をかゝげ、又一面に一小鏡を置くは妨げなし、但し大鏡を置かざるを例とす。

▲處女の室‖この室には裸體若くは怪異の畫を揭ぐべからず處女室はすべて靜かにして穩やかなる趣を存すべし。

婦人と風俗改良

女子美術學校にて　帝國教育會長　辻新次氏

風俗を如何に改良すべきかに就ては學者實際家の間に於て種々研究せられてゐるやうであるが、吾輩は是の改良を婦人の力に俟たなければならぬと思ふのである。先づ吾々が今日疊の上に座臥する事は現に何人も不便を感じてゐる事で、成るべく之を腰掛けるやうな方向に進めなければならぬのである、所が之れは甚だ重大な問題で、家の構造より家具其他家事向一切の事に關係が及ぶから、一時に之を改良すると云ふことは容易でない、去れば是れは是非共婦人の力を俟たねばならぬので、一家の主婦たる者が常に此の邊に注意して最も手近な所より漸次に改良の實を擧げるやうに致したい。

又衣服の如きに至つても吾輩は敢て如何云ふ風にせよとは言はぬが、兎も角も服裝を一定したいと思ふ、吾輩は近き韓國に於てすらお粗末乍らも國服の一定してゐるのを見て甚だ羨ましく感じた。之れに反して我國の狀態を見れば、衣服に就ては何等の制度も無く、孰れが果して日本人の服裝であるか、實に驚くばかり亂雜を極めてゐる。併かし乍ら今日我國の兒童等が學校用服を着けて何等の厭ふ風も見えぬ所を見れば、服裝改良は左迄難事にあらずと考へる、是れなども一家の主婦たる者が少しく注意を拂へば容易に服裝に就ての一定の習慣が出來やうと思ふ。

話は少しく筋が違へど日本人の讀書の嗜好を進めるに就ても矢張り婦人の力に依らなければならぬ。吾輩は圖書館經營に就て稍々經驗を有してゐるが、之れで見ると何か試驗のある際は圖書館も却々繁昌するが、其れが濟むと打つて變つて寂寥しくなるので平日朝仕事の出掛けに立寄るなり或は用事を濟せて入つて書を繙くといふ習慣は今日の我國ではまだ〳〵認むることは出來ぬ。世の教育家は學校に次での必要物として圖書館設立の急務を叫んでゐるが、一般人は甚だ讀書の嗜好に乏しいので、實際は左迄必要を感じて居らぬ。然れ共人々が學校卒業後實際其間に處するには是非共讀書を繼續して絕えず新智識を得る必要があるから、此の習慣を作るには矢張り婦人の手に依つて子供の間より養成せられねばならぬのである。

數へ來れば家庭の主たる婦人の手に依つて改良せられ得べき風俗習慣は固より一二に止らぬが、吾輩は一歩を進めて總べて風俗上の事柄は成るべく家庭教育に一任して改善することに致したいと思ふ。例へば先年喫煙禁止法が發布された、少年に對して喫煙を禁ずるは固より好いことには相違無いが、たゞ法律を以て禁じたるは甚だ遺憾に絕えぬ。禁烟に次で禁酒の事も亦法律で定めんとの說あるが、此等も矢張り家庭内の教育を以つて少年の飲酒癖を矯めることにせば、事柄が何程美であるか知れぬと思ふ。



年末小言の棚卸し

某氏に代りて其妻君を諭すの書

三田村楓蔭

縁あればこそ夫婦ともなりたれ、三人の子をも設けたれ。されば余は今こゝに御身に向ひて、今の女學生の如くに英語を操り、洋琴を奏で、和歌を詠み、文章を作り、普通學を修めよなどゝ、難題を持ちかけて、御身をこまらさんとはせず。言はで已むべき事ならば、余は敢て辯を好まねども、そも一家の繁榮は夫婦の和合に基するものなるに、御身も知れる如く、現に御身と余との心に障壁あり。事毎に意見の衝突を來し。謂はゆる犬も食はぬいさかひの絶間なく、一家常に陰鬱の氣もて滿され、絶えて互に笑顔を見ざるは、余の身分として知人近隣にも恥かしく。また子供のために氣の毒にもあり、誠に此上もなき不幸、此上もなき不愉快の事といふべし。思ふに御身も定めて、しか思ふならん。いかにや。されば余はつとに其の原因を究め、つく〴〵と御身に謀り、一日も早く此の不愉快なる境遇を脱して、和氣靄々たる家庭を作らんものと思ひ定めつれど、言葉の上にては動もすれば感情を損し易く、われ一語、御身一語、つい言ひ募りては、話しは思ひの外の方角にそれ、折角の目的を達しかぬる憂あれば、余はこゝに筆を假りて余が所思を述べ、以て御身の反省を請はんとす、よく心を靜めて聽きたまへや。』第一に御身は婦德として最も重んずべき柔順といふことを

缺けり。

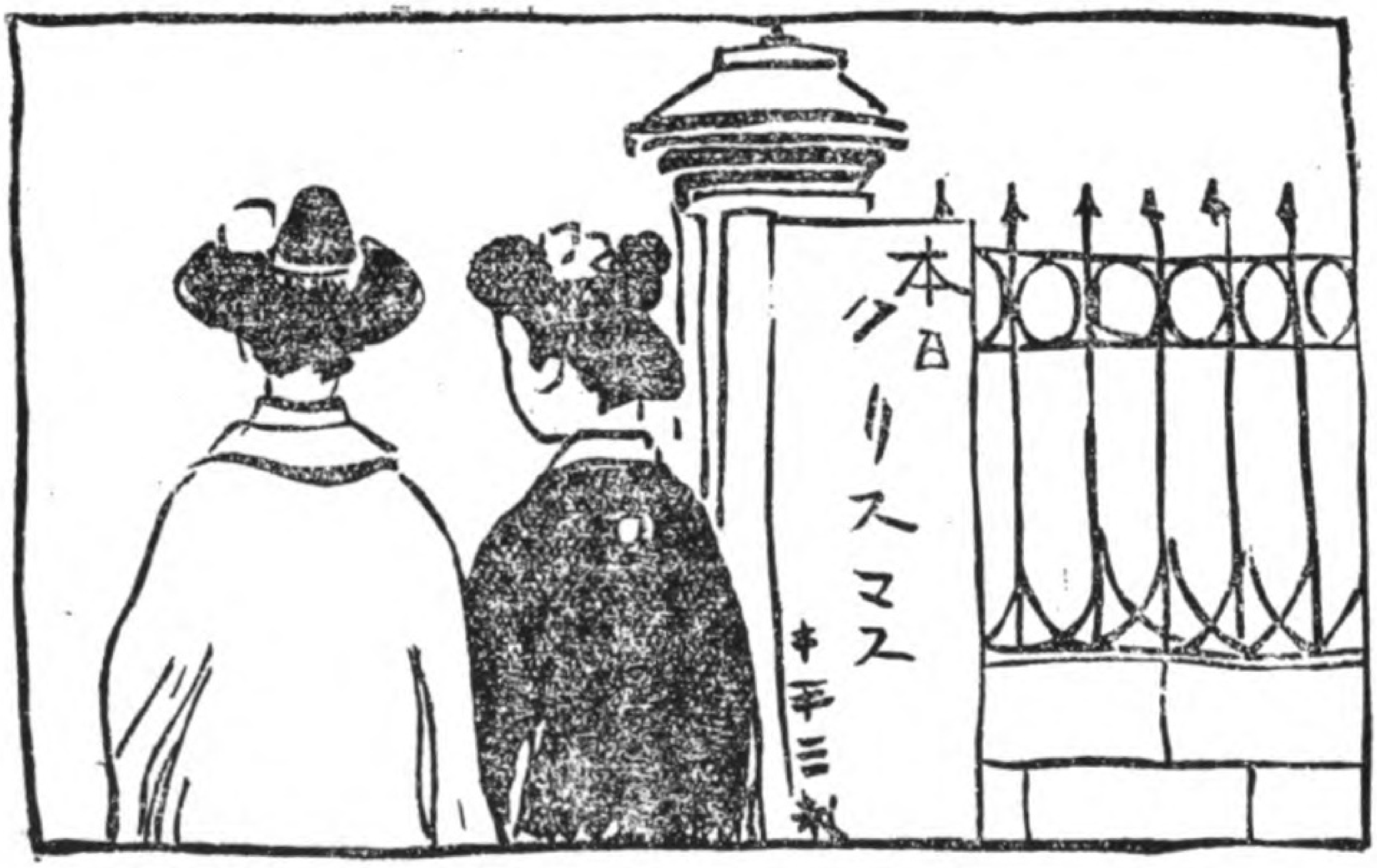
△夫唱へ婦隨ふ

是れ實に一家平和の根源なるに、御身平生余が御身にいひつくる事々に對して、果して柔順の道を守るやいかに、御身請ふ胸に手を置いて省みたまへ。余とて永き年月の間には隨分無理なる事をいひつく事もあらん。されど余の内心にては精々注意して、決して御身に出來得べからざる事を强ひざる積りなり。昔しの聖のいはれしごとく、泰山を挾みて北海を超えんとするは、これ到底人力の能はざる所なるも、長者の爲めに枝を折るは、誰しも容易に爲し能ふ所なり。さるをそを爲し能はぬといふは、能はぬにはあらで、せぬなり。余が日ごろ御身に命ずる、朝は必ずかくせよ、夕は必ずかくせよ、衣服飮食はかくせよと命ずる事々は、よもや泰山を挾みて北海を超ゆる類にはあらじ。いづれも一家の主婦として普通に行ふべき要務のみ。獨身にて世を果つる心ならばいざ知らず。苟にも人の妻となり人の母となれる身の、せではかなはぬ事のみ。さるを御身は之に從はず。よしや二三日が間は之を守るも、忽ち忘れ果てたる如くなるが常なり。何故ぞと責むれば。すぐ顏色を變へて、忙しかりし故に、雨ふりし故に、かくせんしかせんと思ふ故になどゝ、言譯するが常なれど、その言譯が、そも〳〵柔順ならぬ證據なり。此處の道理をよく考へて、今後言ひつけられたる事は一々必ず之を履行することはできぬものにや、一歩進んで、女のすべき家事は、主人の命令注意を待たでよく整理し、以て余に内顧の憂なからしむる工夫はなきか、切に御身の反省を望むなり。

次に御身の言語は餘りに不愛想なり。こは御身が育ちし家庭の事情、土地の習慣にもよる事故、あながちに責むべきにあらず、又俄に改めんとするも容易に改るまじとはいへ。心がけ次第にて上品にて卑しからぬ言葉遣ひともなるべし。こはたゞに御身の品格を高むるのみならず。御身の言葉は直に子供の手本ともなることなれば、

△我が身大切

子供大事と思はゞ、注意せではかなはぬ事ならずや。此の年月添ひ來れる御身の性質は余もよく知れり。御身は決して惡しき根性を持つにはあらで、餘りに人の善さ過ぐるなり。感情の強き性質なり心に思ひし事を、直に口に出し顏色に現はす性質なり。言ひ換ふればば少しも、お上手といふ事を知らぬなり。それ故、人の感情を損するなり。余とても決して夫婦の間に、巧言令色を喜ぶにはあらねど、諺にもいふごとく、丸き卵も切りやうで四角、物もいひやう一つにて廉だちて聞ゆるなり。われ、かくせよしかせよと言へば、御身は動もすればそんなものが、そんな事がと、頭より主人の言をけなすに非ずや。少しく氣にさわる事あれば、二たび呼べど、三度呼べど、いらへせぬに非ずや。かくては余とてもおもしろからず。つい聲あらゝげねばならぬ塲合となるなり。かくて御身が止むを得ずして發する返辭は、誠に氣の乘らぬ返辭なり。快活ならぬさも不平に堪へぬ不性極る返辭なり。いかで快く余の耳に響くべきや。余が晝の務に疲れて家に歸りたる時御身は余に對して「お歸り」との挨拶を忘れたることはなきか、子供の添乳につい己も睡りて、余の歸宅を心付かざりしことはなきか、余が毎朝、御身等を養ふべき麵包を得んがために家を出でんとする時、御身は常に笑顏を以て之を送り出す



や。御身が朝寢して

△朝餉の用意

の遲るゝ時、余は屢々先づ起き出でゝ薪炊の勞を執りたることもありき。其の時御身は余に對して如何に挨拶するか、凡そ出るを送り歸るを迎へ勞を慰め過を謝するなどは、夫に對しての巧言令色にはあらで、夫に對する愛敬といふものにて、女の第一に心掛くべき事なり。余に對する顏色言語はかく不愛想なれど、他人に對しては相當に饒舌を弄し、また余が來客と對話の際に、いらぬさしで口して余に冷汗をかゝせしことも幾たびぞ。其の他、敬稱の自他を誤り、むげいやしき方言を使ふなど。余は一々之を正さんものと、改めていはんも廉立つべければと思ひ、笑ひの中に之を諷すれば、御身は反て己を侮辱するものと思ふにや毫も其の非を改めざるは、余が常に遺憾に堪へざる所なり。

次に御身は餘りに不作法なり。余は貧しき世帶をせさする御身に對して、朝晩、紅粉を裝へといふにはあらず。またそは余の經濟の許さぬ所なれど、總じて身だしなみといふことは、女に取りて大切の事にて、朝は夫より早く起き出でゝ寢亂れ髪を梳り、食事の後には湯を使ひ、たとひ身に綺羅を飾らずとも、垢つかぬ衣類を着くるは婦たる者の役目にて、夫の愛を永遠に失はぬ道なり。さるを御身の髪かたちはいかに。常に垢つける衣をつけ、髪をおどろに振り亂しながら煮炊きする、むさくろしさ、余さへ胸惡るく思ふに、まして他人が之を見ば、いかに思ふやらん。さればこそ飯味噌汁の中に時々、長き毛髪の雜り居て余の叱責を受くるなれ、衣類の垢づきたるは、

△余が貧窮の生活

御身に多くの着更を買ひ與ふる資力なき故にて、甚だ氣の毒の至りなれど、さりとて一枚の着替なしといふにあらず、諺にいはゆる、借着するより洗ひ替せよ、御身は幸に裁縫のわざには堪能なるに非ずや。たとひ古き木綿物なりとも、洗濯糊かひを怠らずば、年中、垢衣を纏ふにも及ばじ。夜、寢に就かんとする時は、

火の用心、戸締に注意し、己が着用の衣類は、それぞれ衣桁に掛くるか、さなくば袖だたみなりとすべきをぬぎ捨てたるまゝなるが常なるは、餘りに見苦しからずや。甚しきは晝着のまゝにて寢ぬるは、餘りに不作法なるのみならず、衛生の道にもよからぬ事といふべし。子供の躾もまた之に同じ、來客のありし時は主婦たる者特に注意せねば、心の奥を見らるゝものなるに。御身は動もすれば、うかと上座を占めて、煙草など吹かすことあり。嚴しく禁ずべきことなり。御身の枕紙は常に新しきことなく、御身の脱ぎすてたる下駄は甞て揃ひたることなし、菜刀もて薪を割り、火箸もて炭を叩き、火ごてを金槌に代ふるなど。一擧一動、かしこき振舞とはいひがたし。

次に御身は不規律なり、さればこそ、御身が働く割合に家事の整頓せざるなれ。規律といふことは何事につけても缺くべからざるが中にも、一家の經濟にとりては、とりわけ緊要なり。世帶の巧拙は全く規律を守ると否とにありといふも不可なかるべし。朝は一定の時刻に起き出でゝ朝餉の支度をなし、傍ら室の内外を拭き淸め、朝餉すみて後は、必ず厨を淸め、ランプの掃除をなし、やがてまた晝飯の心構をなし、暇あれば

△裁縫洗濯

それ〴〵の事に從ひ、夕べはまた少し早目に室内を掃除して、主人一日の勞を慰むべき晩餐の用意にかゝり、夕食のあとを片付けて後は、仕事をするとも、せずとも心任せなれど、其の日の雜費記帳と、明朝の獻立とは、必ず忘るまじき事なり。毎日々々同じ事を繰り返すは、いかにも面白かるまじとは思へども、是れ細君の行事なり、細君の役目なり。病氣であらぬ限りは此の行事を規律正しく守りてこそ、細君の役目を仕おふせたるにて、一家の幸福は此の裏より生ずるなれ。此の外に、物の置きどころを一定し、使用せし者は必ずもとの所に整頓することは、一家に秩序の立つ本なり。然るに御身今日までの行を觀るに、一月の中に余に呼び醒まされずして自ら起き出づることは僅に二

三度に過ぎず。其の他は余は二度三度も言葉を和げて呼び起し、最後に余が聲あらゝぐるに至りて、始めて澁々と起き出づるなり。其の時は既に日も高く上り、余が出勤の時間にわづか二三十分しか餘裕なければ、慌てふためきて湯を沸し飯を炊ぐの大騷動を演ずるに非ずや。氣に向きたる時こそ頻りに掃除をもしつれ、いつも箒とさんはらひとを持つことを嫌ひ、詮方なしに箒を持てども、眞に形式申譯に、箒もて疊を撫づるのみ。雜巾などは其の邊に姿を見せず。否雜巾の設だにこれなきに非ずや。さればこそ、机書棚の上はいつも、埃に埋もれて指もて字を書くべく、火鉢こんろの緣の奇麗に拭はれたることなく、火鉢烟草盆の中はマッチと卷烟草との

△死骸狼籍

たるなれ。食後また食器を洗ひ清めず、故に飯釜は焦げたる飯粒を底に殘し、吹きこぼれたる飯汁の痕を印しながら、夕景までも乃至明朝までも、竈の上に据えられ、汁椀小皿は味噌精、魚骨の附着したるまゝに、流し下に堆積し、金串には魚肉の名殘を留め、俎には澤庵の切れ端を紀念に殘すに非ずや。ついぞ朝の間にランプの手入を濟したることなく、薄暮に及んで俄に油を注ぎホヤを拭ひ、爲めに屢々之を破損するに非ずや。晝飯夕食の時刻に逼るも、うかとして其の用意もなく、促さるゝに及びて急に總菜の算段に狼狽し、慌てゝコンロの炭火をおこすに非ずや。簞笥の中には、洋服と腰卷と雜居し、垢づきたる浴衣は紋付の羽織と合住居し、手袋足袋は片し片し離散の恨あり。戸棚の中、火鉢の引き出し、動もすれば、竹の皮、蜜柑の皮に占領せられ、重要なる書類は反古籠の中に葬られ、針箱の中には絲屑端切こみあひへしあひたる中に柿の種さへも雜り、

△鏡臺の鏡

曇りがちにて、引き出しよりはいつも、髮の毛と元結とを、はみ出せり、使ふた物は打ちやりたるまゝにて、もとの處へ片付くる考へなし。されば、さしあたり一枚の衣類を取り出し、一箇の物品を探がさんとす

るに、常に大騒動大混雑をするに非ずや。凡そ是等の事はいづれも亂雑といはんか不規律といはんか。かゝる有様にては、家政の整はん事、とても見込なきなり。

御身はしか思はずや。いかに、最後に、ことに心をこめて御身に告げて反省を望むは、御身の家事經濟に無頓着なること是なり。これ御身が幼少の頃餘りに榮耀榮華に育てられて金錢の貴きことを知らざるに因るべけれど、昔しは昔今は今。不仕合にも痩世帯を引き受けたる以上は、ちと經濟といふに注意ありたきものなり。前にもいひしごとく、借着するより洗着せよとは、誠に



△家事經濟

の金言なるに、御身はとかく着れば着つぶしといふ姿にて、垢づき汚れたる衣類は、箪笥柳行李の底にねぢこみて黴の生ずるに委せ、足袋、靴足袋、シャツ、腰卷など、汚れたるを洗ひ、破れたるを繕ひて用立つる心掛に乏し。御身が余に嫁ぎたる時、新しき足袋は十四五足にも餘り腰卷などもありあまる程なりしに、今は影も形もなし、想ふに汚れたるまゝに、屑屋の手へ渡しゝならん。一ダスのマッチ十帖の塵紙、たとひ

價の安き者とはいへ、これも黄金の端なるを、かしここゝに散亂し、粗末に使用するは、天の冥加も恐ろしからずや。到來の菓子菓物、またゝく間に食ひ盡し、貯へおくといふ心掛なき故、來客のありし時、茶受を買ふの必要も生ずるなり。寢ぬる時ランプの火を小さくするの勞を厭ふ故に、油屋の支拂意外に嵩み。戸棚の締りを忘るゝ故に屢々猫や鼠に食物を奪はる。竹箸は流し下のとぶ中に溺れ、石鹼は鼠の齒形の付きたるまゝ雨垂の下に投げ捨てらるゝなど皆不經濟の極なり。特に食物の良否は、一家の健康にも關することなれば、主婦たる者の最も深く注意を要する事にて、隨分、調理と取合せとに心を配り、新鮮にして原料の貴からぬものを擇みて一家を滿足さするこそ主婦の機轉なれ。よく分量を考へて過不及なきやうにするこそ、主婦の手腕なれ。人誰か珍羞美味を食ふことを欲せざらん。されどこは經濟の許さぬ所なれば、余は毎日の

△食膳に魚肉

なしとて決して不足には思はず。唯御身が心をこめたる品なれば、たとひ一尾の枯魚、一皿の冷豆腐にても滿足し、快く一陶の酒を傾けて一日の勞を洗ふことを得ん。さるを御身が余の晩餐の膳に屢々刺し身と牛肉とを供ふるは嬉しけれども、其の一方には原料を粗略にすることを遺憾に思ふなり。余は屢々磨ぎ過したる白米が、永く棚の上に放置せられて黴を生じたるを見たることあり。殘飯の流し下に捨てられたるを目することあり。干からびたる葱は錆びつき庖丁と共にこんろの傍に横はり、殘肴冷肉は戸棚の隅に押し込められて、あたら犬だも食はぬまでに至れることあり。かくては折角の御馳走も何の詮なき事といふべし。清潔といふこともまた家政上の要件にして、戸棚の中に

△鼠の糞の散亂

し竈の上に猫の足跡の點々たるなど殊に見苦しく、煮染たる如き布巾などを使ふは、唯に衞生に害あるのみならず、いかなる美味も之が爲めに味を損すること幾何ぞ。幸に我が一家族は健康にして之といふ大患に罹らねど、健康は幸福の基にして、若し一家中に一人

にても病人あらば、全家陰欝の氣に閉ぢられて、平和の春光は忽ち消え去るべし。而して健康の基は食事と衞生にあり、是れ余が御身に經濟の要を説くに臨みて、特に食事と清潔とに注意せんことを望む所以なり。

以上擧げ來れる事柄は皆御身の缺點のみなれば。御身は餘りに己を責むること寛にして、人を責むること酷なりと思はんが何とて妻の憎かるべき。可愛ければこそかくもいひて其反省を望むなれ。ゆめ悪しくな思ひそ。われとても固より夫として恥づべき行も多く缺點も多ければ、あながち御身のみを責むるにあらず。余も今よりそれらの點を改め、大に業を勵みて天晴れ財産を作り御身にも安樂せさせんとての心掛なれば、此處を諒察して今より心を入れかへて別人の如くなれ。人は心の持ち方一つにて、世間は面白くもなるべく、嫌にもなるべし、御身のこれまでの心は餘りに、厭世的なり。今少しく快活にして樂天的なれ。



御身これまでの振舞は餘りに不愛想なり。今少し萬事に愛敬あれ。御身は、何かいへば常に余が御身の衣類を無くしたることを以て余を責む。女の身に取りてはげにさもあらん。余も十分に其の心情を察すれども、余が年ごろの貧苦によりてかくもしつれ。余とても

△一箇の男子聊か前途に志ある者なり。一朝志を得ば御身が

思ふまゝに美服を作りて與へん。綺羅をも飾らせて汝を悦ばせん。妻よよく聞きたまへや。男子が此の生存競爭の世に立ちて働らくは何の爲めぞ。國家のため、人道のため、はた名譽の爲めとは言ひながら、詮じ來れば父母妻子に幸福なる生活せさせんとてなり。自分ばかり出世して、妻子に見すぼらしきなりさせて、それが何の愉快なるべき、古人も糟糠の妻は堂より下さずといへり。御身よく余と苦樂を同じくし、我を助けて世に出でしめば、御身の功はいかばかりぞ、夫婦艱苦して造り上げたる身代は、たとひ多からずとも親より受けし百萬の遺產にも勝るべし。且つ思へ余もことしは、早や不惑の齡に達し、御身も已に三十を越え、三人の子供の親に非ずや。今までの御身の行は、我が子にも恥かしからずや。御身幸に余の爲め子の爲めに、斷然神かけて行を改めよ。余は再び言はじ。

淚の話

世の中で何が不思議だと申しても淚位奇妙な物はありません、科學者は無論のこと、哲學者も宗教家も共に研究する必要があらうと思ひます。

口惜しくのとばツちりは血の淚で、嬉しいくの行き止りは熱い淚であります。泣く時も喜ぶ時も、その意味深長なる表情は彼に依て始めて遺憾なく發揮されるのであります。

淚！彼は實に驚くべき權威を持つて居ります。

若し世の首領株や兩親杯の心から、彼が現はれまして、「敵に復讐せよ」と命じまするならば、どんな辛酸を嘗めてゞも夫を成し遂げずには置きません。千金に買ひ難い生命も彼の前には塵芥同樣に惜氣なく投げ捨てられるのであります。辯と教訓で親切に諭しても、何の効力もない「わからずや」が、彼を見て忽ち本心に立歸つたる噺杯は、格別珍らしい事ではありません。若し戀人の身から彼が現はれて、何かねだりまするならば、ねだられたる當人は名譽も資產も生命も喜んで捧げてしまいます。

或科學者は彼を食鹽と水とに分析したと申します。そんな間違つた斷がどこにありませう。彼には我々が今使用してゐる言葉と、元素との名を以て說明の出來ぬ澤山の分子と意味とが含まれて居ります。

淚！彼には又澤山の種類があります。例へば將軍の淚、學者の淚、丁稚の淚、老人の淚、慈母の淚、花嫁の淚、强盜の淚、乞食の淚など、まだくく餘程澤山。

淚！彼には面白い緣者も隨分あります。誠に其二三を申して見ますると「そら淚」「ため淚」「鬼の目にも淚」「雀の淚程」などあります。

（小山かく子）

季節衛生

▲三姉妹の病──早きは木枯の吹き初むる頃より遅くも初雪の降る節になると、三姉妹の病が次第に生れて來る、長を龜裂と云ひ、次を皸裂と呼び、其次を凍瘡と名づく、何れも墮落者で、中なる娘の云ふとにや、

皸裂は戀しき人のかたみかは
ふみ見るたびにあいたかりけり

など、洒落は措置いて、是等の病狀豫防及び治療法を列記すれば、

龜裂は冬の頃寒さに當てられて手足などのあらく〱しくなるを云ひ、皸裂は同じく寒さにあてられて、手足の尖などの裂けたる如くなるをいひ、凍瘡は同じく寒さの爲に手足の尖などの爛れたる如くなるを云ふ詳しく言へば、水仕事する女達が寒氣の刺戟に依て、皮脂腺より皮脂の分泌が減少し、爲に皮膚の乾燥するのが龜裂、同じ原因で、一層症狀の甚しくなるが皸裂

又寒氣の爲に手足鼻耳等の血管に變化を及ぼし、其の部に血が滯り、初めは血管收縮して蒼白色となれども、長く寒さに觸れてる中に、血管の神經が痲痺擴張して紫紅色になり、次に腫れて痒みを覺え、殊に夜分寢床に入つて、温まると甚だしく、尚進めば破れて潰瘍となり、最も進めば壞死とて、血液の循環全く止り、筋肉骨等の脫落するに至るを云ふ。第一第二を防ぐには不性では不可ぬ、濡れた手を風に當てたり、冷たいからとて直ちに火に當てたりしてはなりませぬ、水仕事をする方は、常に乾いた手拭を腰につけおき、手を濡したる度に能く拭ひ、劇しく兩手を摩擦して、少し暖みのついた所で外出するとか、火に當るとかといふやうにして頂きたい、それから又龜裂性の人は其上豚の脂を少し塗つて摩擦してゐると、大いに豫防になるのみならず、治療にもなる、ワスリンや酒酢などは餘り感心せぬ。何となれば、一つはベタ〱するし、一つは刺戟が強いからです。斯く注意しても、皸裂になつたら、格魯胃謨二十瓦沃度丁幾十瓦を混せて

塗布し、手袋足袋を以て其の患部を被うておけば治ること妙なり。凍瘡には苛性加里一瓦、屈里設林三十瓦アルコール五十瓦、水百瓦を混せて浴後に塗布し、綳帶しておけば、これ亦大抵は治る、けれども壞疽期に及んでるやうなのは、外科醫の手術を受けねばなりませぬ。全體是等の病は常に衛生を實行して、身體を强壯にし、入浴を怠らずに皮膚を清潔にし且つ强くしてゐる人は罹り難いものだ、入浴には冷水浴、海水浴、溫湯浴、溫泉浴、雨浴、日光浴、冷風浴など有つて、何れも皮膚の抵抗力を强くするものなれど、其の中冷水浴、雨浴（如露仕掛の水を皮膚に注ぐなり）冷風浴（朝早く素裸になりて冷風を皮膚に當つるなり）は夏より習慣をつけねばなりませぬ。

▲襟卷ショールの害――凜烈肌を劈くが如き寒風の吹き荒む樺太島や滿洲へ出てゐる人はいざ知らず我が內地に於ては襟卷ショールは無くもがな、併し霜を戴ける老人や、水骨の小兒は特例として、血氣盛んの式部達が、白いショールで必ず頸から顎の邊を包まねばならぬものゝやうに心得てるらしいのは抑々の間違です、何となれば之を永く用ゐると、頸部の皮膚を薄弱にし、抵抗力を弱くして、偶々ショールを忘れたる時や、人前などで之を用ゐずにゐると、直様寒冒に罹るやうな生地無になるからです。

▲鼻で呼吸す可し――これは夏でもさうなれど冬は殊に鼻呼吸が宜い、寒風を口より吸ひ入れると、溫まらずに直様呼吸器を刺戟するから、氣管支加太兒や肺炎を起し易い、然るに鼻呼吸なれば寒風が迂餘曲折して行く中に、溫まるから、此の弊を免れることが出來るのみならず、キヽリと口元を締めてるのは、精神の懦弱ならぬを示して、いと奧床し。

▲室內の乾燥を防ぐ可し――冬は勿論空氣は冷たくて、且つ乾燥するものなるに、搗てゝ加へてストーブ火鉢などを用ゐるから、大いに呼吸器を刺戟することになる、去りとて之を用ゐぬ譯にもゆかぬ、然ればストーブには、金盥に水を入れおき火鉢には必らず鐵瓶をかけて、湯氣を室內に籠らせねばならぬ、當に乾燥せぬのみならず、室內は大いに暖かくなるもの

です。

▲避寒轉地の心得――近來人間が段々贅澤になつて、都の人などは、夏は避暑、冬は避寒なんどゝ洒落込んで、鎌倉や熱海などへ出懸る者も隨分あるが、多くは其の目的を知らずに行く、それゆゑに却て身體を弱くするやうになる、抑々身體は室内に火鉢の有ると同じで、寒氣の大に冷えてる時は、火鉢にドン／＼火を入れねば暖かく無いし、左程に寒く無い時は、僅かの火でも暖かい、身體も夏は僅かの熱を發す可き食物で宜けれども、冬は脂肪を含んだる、而も多くの食料を取つて、ドン／＼運動せぬと、三十七度の體温を保つことが出來ぬ、所が胃病肺病などの病者は、ドン／＼食物を取ることもならぬし且つ運動も出來ぬから止むを得ず暖地に入つて、僅かの食料僅かの運動で、三十七度の體温を保たうといふのである、殊に呼吸器病の人は冷氣の刺戟を避けねばならぬから、可成暖地へ移轉するのだ、然るに何の病氣も無い者が食料を減じ不運動を爲さんとするのであるから、薄弱になる稽古するやうなものだ可笑しい／＼。

衛生顧問

(問)輕症の胃腸病に一年餘も治療を盡せど更に全快せず、慢性症に成りしに候はずや療法を御教示賜りたし(因幡　白百合)

(答)胃腸病と言つても三十幾種あつて、下痢も腸病、便秘も腸病、食欲の進まぬも胃病、進み過ぎるも胃病、療治も其症に依て反對にせねばならぬ「されば斯る漠然たる問には何とも答へ難し、序に申しますが、貴女に限らず斯んな問ひが多分を占めてるから答へずにおくと何ぜ沒書にしたかと怨みの手紙を遣さる、偖て／＼困つたものである。

(問)三十倍の明礬水百倍の石炭酸水とは、如何樣に調劑すれば宜しきか敎へ玉はりたし。(筑後　田舍女)

(答)石炭酸一瓦水百瓦に溶解したのが百倍の石炭酸水なれば明礬水も其の割合です。

(問)背に大いなる灸點十あまり有り入浴の時など人に見られて恥かしく候が、其の跡の磨滅する方法を敎へ玉へ。(肥前の女學生)

(答)數十年の時を經て自然に消滅するを待つより外に致し方なし。

(問)僕は薄給の身分ですが、昨年より急に白髮が生じて頭だけは五十歳に見え日々悲しき思に沈む何卒其の療法を(男の愛讀者)

(答)悲しき思に沈めば沈む程白くなります、愉快に暮されよ。療法は思ひ切つてスツペラボンと剃つて、能く垢や雲脂を落し、鹽水で毎日洗つて御覽なさい食鹽は黑くする作用があるから半年を續けて、

(問)月經多量(一升以上)其の都度衰弱の氣味にて困ります、何卒其の療法を、(北海の妻女)

(答)原因にも依るけれど、兎に角月經時には安靜に臥し、陰部に氷嚢を當て、過格魯兒化鐵液三瓦を水二百瓦約一合に溶かし之を注入するなどの療治であるが、全體月經は二百瓦約一合を踰ゆれば過多症なるに一升以上と有つては衰弱するは理の當然です、されば之を通信教授位に安んぜずと〻人科專門の名醫に早速診療を乞はれよ。

(問)白髮染の黑色コスメチツク、月經帶、血の道クヰーン、完膏丁幾など當地の藥店にこれ無く困居候間其の買入方御教授下さい(伊豆GH生日向好美女)

(答)貴女方に限らず藥の請求方及び價格等を尋ねらるゝには何時もながら閉口します、仲には爲替金を入れて藥品を送れなどの注文が來る、私は衞生の質問には答ふるけれど、藥屋では有りませぬ、斯の如き事は何うか以後東京市本鄕區森川町順天堂藥舖へ直接に御尋ねを乞ふ。

(問)前髮が縮れてゐますが何卒之を直す方法を教へ下さい(前髮苦にする女、奈良の大佛女)

(答)縮毛の原因は醫學社會に於て未だ本當に了つて居らぬが、併し古來普通の人の實驗したる所に依れば、熱き湯氣にて一時間も蒸し、然る後手拭にて縛りおくこと每日〳〵續けて居れば直るさうです、又二千倍の昇汞水にて一二度洗つて見ることも無駄で無いとの事、又漢方家の說に依ると甘草十匁を水三合にて二合に煎じ詰め、それで洗へば直ること妙なりと、併し東洋的の駄法螺で無いかと思ふ。

(問)月經帶の作り方を教へ下さい。(AB女外五十六人)

(答)之を書くには圖解せねばならぬのみならず、私の如き拙い文では了解し難いから一度御買求になり以後それを見て御作りなさい、價の安いものですから。

(問)外陰の惡いお尋れですが、衣類身體を極めて清潔にして居りますのに、冬になると虱が發生してなりませぬ、豫防法を教へて下さい　(備前のTY女)

(答)衣服を悉く新らしき物にし、さうして襯衣、腰卷を千倍の昇汞水にて洗ひたるを用ゐ玉へ。

(問)鍛枯聲で明瞭に話しが出來ませぬが、聲の好くなる法を教へ玉はりたし。(二八乙女山上花子)

(答)診察せぬことゆえ發生器が何うなつて るのかが了らぬ、されば何とも答へ難いが、兎に角御地の醫士と御相談の上、重曹二、〇吐根末〇、〇五右よく混ぜて三包に分け、一日三回食前一包宛(一週間の連服を試みられよ)

(問)日新館藥房の肉體色白新劑は實際に色が白くなりませうか、御教へを乞ふ。(片田舍の無女)

（答）功無きものと信ず。

▲讀者へ大注意＝過日埼玉縣の或人（名を明せと有れば何時でも證據を舉げます）が新聞の廣告を見たら、大阪の某藥店が、「如何なる瘢でも二週間内に治す、若し治らずんば返金する」とある、依て之を買求めたれば極めて小さき瓶に入れたる藥が其價十三圓、それでも半面の瘢が美しく除ければ安いものと喜んで塗けたれば、二週間は愚か四週間も經てど何等の功無し、依て其の無功なるを照會したれば其の返事に「治らぬ答は無い、大方塗りやうが惡いのであらう」と、今度は又更に小さき瓶に入れたる藥を送り、これは無代で宜いとの事、早速塗けたれば、燒けるが如くに痛んで見る中に黒くなり、日を經るに從ひ瘢痕數條を遺し、瘢よりも一層醜き顔となつた。これだけ述べた所では尙々其の奸惡なる處置の眞相は了りますまいが、其の始めて送つた藥瓶には藥名から使用法藥店の住所名皆悉く書いてあるけれど、後に送りたる瓶には何も貼つて無い、それですから、之を掛け合へば左樣な藥を送らぬと知らをきるのです、乃で被害者は之を裁判所へ訴へた所で治るでも無いから泣寢入になるといふ趣向、何と恐ろしいでは有りませぬか、ですから賣藥の廣告を信じてはなりませぬ。序に申しますが何々博士の證明など書いてあつても當になりませぬ。（賄賂の無い世ならいざ知らず）

（問）長身器の結果は何うでせうか又隆鼻器は確實でせうか。（大阪のＫＨ女）

（答）長身器は六月以上の試驗を經ざれば何とも答へ難し、隆鼻器は余には經驗無し。

（問）圓城商店のホルマリン石鹼はソバカスに有効なりや敎へて下さい。（ソバカス女）

（答）何れとならば確効無し。

（問）「女學世界」第六卷第十五號の表紙の裏に「美顔水は色を白くし、きめを細かにし、（中略）玉を欺く美しき顔となるべし」と廣告して有りましたが確實でせうか（京都の鴨川女）

（答）「なるべし」の〝べし〟に味ありと思へば、間違無かるべし。

（問）記憶力の乏しくなる原因、及び煙草は記憶を惡くすると申しますが果して事實に候や。（無才女）

（答）原因は澤山有つて、一々舉ぐるに遑あらずだが、先づ神經系の故障榮養不良心配等なり、煙草は甚だ少量ならば記憶を惡しくせぬのみならず、却つて幾分の興奮劑になつて記憶を助くるものと信ず、けれども甚だ少量といふことが仲々守られぬものだ、凡て嗜好品は度を過し易く何れとならば避くるに如かず、殊に婦人の方が煙を輪に吹かしてるなどは何と無く醜いものだ。

（問）私の面部にニキビが出まして人前にも出られず、自暴自棄になつてゐます何本女を一人助けると思召して全治法を敎へて下さい。（麹町のみにくき女大阪妻女）

（答）ニキビ位の爲に自暴自棄になられるとは心得違です、療法は爪にてニキビを壓して脂肪を出し、亞鉛華軟膏を塗けて御覽なさい。

(問)火傷したる部分の爛れたるには如何なる薬を塗けたら宜いでせうか。(澤下の感謝女)

(答)これも亞鉛華軟膏。

(問)重曹で歯を磨きましたら悪いでせうか。(麹町の愛歯女、西蒲原の松葉生)

(答)害無し、最も妙なり。

(問)痘瘢を除く法は無きものに候や。(大垣のふさ子)

(答)無し、自然の時を待つに如かず。

(問)十五歳の女子月經は有れども乳嘴は黒くなり候迄支無きものに候や。(藤澤　きみえ)

(答)差支無し。

(問)晝夜足袋を穿いて居ましたら親指の爪は前に伸びず、指はつぶれて廣く、生れもつかぬ不具者になりました如何致せば治りませうか。(岩代　是非何度女)

(答)副木を當てゝ繃帶を試みられよ。

(問)鼻中に濃汁をもちたる腫物出で、醫療を受けたれば食鹽水にて洗ひ硼酸軟膏を塗けよとの事にて實行致し候へども、塗ければ塗ける程とり〳〵して透明の粘液流れ出で治りませぬ何うか十二月の誌上に治療法を御示ありたし。(遠江の鼻腫女)

(答)3%の明礬水に綿を浸して鼻中へ度々塡充して御覧なさい。

(問)私は餘り背が高くて、人に女の大砲だの、女の砲兵だのと笑はれますが何とか低くなる法は御座いますまいか御教示を願ひます。(名古屋の松村新子)

(答)低くなる法は決して無し、笑ふ者は馬鹿なのです、笑ひ返しておやり遊ばせ。

(問)入浴の時石鹸を用ゐると色黒くなるとは本當でせうか御教授を乞ふ。(筑前の何女)

(答)本當で無し。

(問)バセドウ氏病の原因、年齢療法及び綴字を教へて下さい。(神田光子、北米の大和女)

(答)原因は遺傳、月經の障害、頭部の外傷、手淫、窒扶斯などである年齢は十五歳より三十歳までの婦人に多し、療法は原因にも依るが、滋味ある冷飲、蛋白に富める食品を取り、茶珈琲酒類を禁じ、閑靜なる土地に移り心身を安靜にせねばならぬ、藥品としては悉く劇藥ならずんば奏功なし、されば内科専門の醫師に就いて治療を受けられたし、綴字はBasedowなり。

(問)訪問灸治を以て諸病を治する法ありますか、二問ありとすれば下腹部に灸を爲して不妊の患無きや御教示を乞ふ。(東海道参陽心配妻)

(答)文意を解する能はず、兎に角灸をする事は何病に限らず餘り感心しませぬ。

(問)夫二十四歳は身體弱く時々感冒に罹り、其の度毎に氣管を痛め、咳嗽や痰が出でゝ其都度醫療を受けますが、健康になる方法を御教授下さ

い。(函館蓬萊町北海の心配妻)

(答)翌年の四五月より、季節衛生の章に述べたる冷水浴温浴日光浴冷風浴等をなして皮膚の抵抗力を强うするに如かず、今は運動を專らにして發汗を促し脂肪に富める物を食べられよ。

(問) 妾事寢行儀惡くて兎角枕は頭の番人となり、爲に夜具蒲團を汚してなりませぬ何卒之を治す法を敎へ玉はりたし、これにて三度伺ひます始めに敎へ下さらば丹波の栗を差上んものを

情ある主をおもへば丹波栗
酬ゐ參らす心なりしに (丹波の山奥女)

(答)斯る問は衛生顧問外の面白半分だらうと思つたから沒書にしたのです、枕を軟かなる質にて製せられよ、寢心地善ければ脫づさぬでせう

外に刺内に實の有るものなれど
丹波の栗は如何なるらん

質問心得

一、質問は「はがき」に楷書で事實を詳細に書かれたし、(封入せる手紙はすべて後廻にします)。

一、匿名は異樣なるを可とす、愛讀女、困難女などでは餘り多く有つて紛はし。

一、姓名年齡は是非書かれたし。

一、數千通の中より撰ぶことなれば多くの沒書あることを諒め御承知おき下されたし。

一、返書を乞はるゝも斷じて應ぜず、情無きやうなれど已むを得ませぬ

一、宛名は東京市本郷區森川町一番地表北裏七十八號糸左近

一、衛生顧問外の事は博文館へ宛てられたし。

一月の豫告

「なごの喜び」と題し毛髮に關するあらゆる研究其他…………

▲**素人診斷書** 糸左近氏と云へば誰れ知らぬ衛生學の新式敎授者にして多年吾が女學世界の衛生顧問として讀者諸姉の爲めに少なからぬ便益を與へし者今亦此の著あり其内容一々いふまでもなく氏の說く所文意平明やゝもすれば無味乾燥に陥り易き醫學說に諧謔を交へて讀者をして厭かざらしむる處る氏の特色なり此の點に於て氏は實に我國衛生文學の創建者たるを疑はざるものなり。(金剌芳流堂發行、定價六十錢)

▲**琴うた通解** これは琴歌に熱心なる井上折山といふ人が古へより傳はれる和琴の歌曲、數十番を撰み解題、解義を施したるものにて、琴の歌は讀みても歌のいわれを知らぬ人の爲には勿論、日頃彈奏する人々にてどの歌は如何なる由緒如何なる事柄を詠みたるものなるかはこの解題解義によりて詳しく知ることを得るものなり、猶附錄として琴の由來、琴曲名匠の經歷小傳琴に關する名家の談話等を添へたれば斯道熱心家にはよき栞ならん。(裝釘美麗定價一圓神田今川小路明倫館發行)

米國の新聞秀作家

（小説家リーヴス女史の事ども）

最近十年間の米國小説界に注意せるものは、必ずハーリー、リーヴスの名を知らん。近頃文學の趣味ある米國人の書齋には、殆んどリーヴスの小説を見ざる事なし。華盛頓、紐育、市俄古、其他大都會の一流の劇場に於て、リーヴスの小説は、屢々舞臺に上りて、屢々大評判となれり。此の才媛は、今年二十五歳の妙齡にして、其名既に米國に於て高きのみならず、歐洲の文界にも知られ、英國皇帝エドワード七世の如きは、女史の著作を愛讀し、女史の歐洲に漫遊せる機會に於て、特に謁見を賜ひたり。女史は啻に米國文界の明星として知らるゝのみならず、又た一時は倫敦に於て交際社會の花役者として持囃されしが、今飄然として來て東京に在り、女史が日本に來れるは、普通の意味に於ける漫遊にあらず。日本を愛するの情、禁ずる能はざりしが爲めなり。繪の如き日本の風光と、詩の如き日本の人情とを、其の詩的情想に滿ちたる心鏡に映し此の好景の裡に、自ら詩中の人となり、而して後ち、此の詩歌の天地を、其の才筆によりて描寫し、以て一大小説を作せんとするにあり。

▲名門の獨娘　此の奇才の文學者に就て書かんとせば、先づ其の性格と境遇に向て一瞥を投ずるの必要あり。女史は幾多の有名なる詩人、宗教家、政治家、外交家、軍人の出でたる、米國第一流の名門に生れ、兄弟もなく姉妹もなく、母は病身なりしが故、父と家庭教師の手に教育せられたり。父は其の總ての遊樂を、此の愛兒と共にし、騎乘も、遊獵も彼女と共にし、其の熟練と勇氣とを見て至大の樂みとせり。女史は十歲の時より巧みに小銃を撃ち、又た乘馬に巧妙を極めたり。隣人は此の少女を『リーヴス家の小さき野猫』と名け、父は之れを『神の愛兒』と呼びて自ら誇れり。

此の少女は他より制御すべからざる意志を以て生長し、其心は常に奇怪なる幻想に滿ち、其性頗る感情的にして、其の思ふ所を剛情に貫きて、世間の批評など

には頓着せざる婦人となれり。然れども常に高雅なる氣品と、美容とを保ちて、之れに接するものをして、敬愛の念を禁ずる能はざらしむるものあり。

▲南方の美人　女史は自然に對して、强烈なる愛情を有す。彼女は、美なる飾帽を買ひ來りて、悉く其裝飾を取り去り、自然の花を以て之れに代へ、其の萎るゝも意とせず之れを被り、教會其他の式場に出づ。女史が無頓着に萎れたる花にて其帽を飾り居るを見て、友人は之れを氣にすれども、彼女は頗る平氣なり。女史の非常に愛するものは、犬と馬にして、此二種の動物の居らざる時は、女史の心には甚だしき寂寞の感ありと云ふ。馬を愛するの情は、女史が母より遺傳したる所なり。女史の母は、南北戰爭の頃、米國南部に於ける名高き美人にして、「美人メーリー」と云へば、知らぬものはなく、南軍の兵士は、好んで此の美人の歌を歌へり。大なる白馬に乘て、屢々野外好景の裡に現れ來れる「美人メーリー」の姿は、今尙ほ老兵の記憶に新なる所にして、彼等は、其の戰爭の追憶と共に、此の美人と其の白馬を忘るゝ能はざるなり。或時北軍の一部隊、美人メーリーの家より程遠からざる處に堡壘を造りて陣し、兵士は一夜此の白馬を奪ひ去れり。翌朝美人は之れを聞き、直ちに他の馬に乘て、敵の陣中に飛び込み、總ての危險を物ともせず、司令官の天幕に赴き、其の愛馬の返還を要求せしに、將軍は其の勇氣に感じ、其の美容に心を動かされて、彼女の要求を拒むの勇氣を失ひ、其の言ふが儘に之れを返し與へたり。之れより此の將軍と美人メーリーとは相知て交情頗る濃かなりしも、彼女は敵將と結婚するを好まず、終に南軍の大佐リーヴスの妻となれり。小說家ハーリー、リーヴス女史は、即ち此の夫婦の獨娘なり。リーヴス大佐は、北軍に對して、强烈なる敵愾心を有し、戰爭中自ら誓て曰く、戰爭終るとも、余は終生北部の地を踏まずと。爾來今日に至るまで、此人は一度も北部の地に入らず、其の愛娘リーヴス女史が、紐育に赴ける時にも、迯て華盛頓(南北兩部の界目)に至りしも、それより北方には、一歩も進まざりき。リーヴス女史の父と母とは、實に斯の如き人なり。

▲十五歲の小說家　リーヴス女史は、小學校にも、女學校にも、如何なる學校にも入りし事なく、其幼時、專ら其父と家庭敎師とに敎育せられたり。女史が未だ漸く七八歲にて、一度も小說を讀みし事なきに、自ら小說を書きたる事は、女史の小供時代に於ける最も顯著なる事の一なり。女史が初めて小說を出版したるは今より十年前即ち其の十五歲の時にして、此の處女作は、一年間に三十五萬部の發賣高に達し、非常なる評判物となり、女史は十五歲にして、既に米國文壇に高く其名を揭げし也。

▲小說著作の苦心　此の年少文學者は、其後四大小說を書き、何れも甚だしく讀書界より歡迎せられ、中には賣高の殆んど百萬部に達したるものあり。女史は、一つの小說を書くに、研究と執筆に二年を費し、次の小說を始むるまでに一年間休養す。此の休養の時期には、米國南部にある廣大なる其の所領の山地に於て、遊獵を試み、又た其の愛馬愛犬と共に、平和に氣樂に日を送る。女史は、小說を書くには、非常なる苦心と非常なる勉强をなす。其の最近出版の小說『キャストアウェー』は、詩人バイロンの生涯を小說化したるものなり。女史は之れを書かんとして、先づ有らゆるバイロン傳とバイロン論を讀み盡し、更にバイロンの書簡幾百通を得て之れを研究し、而して後ち、バイロンが流浪せし總ての地に流浪せんとて、英國、瑞西、伊太利、及び希臘を訪ひ、バイロンが住みし市に住み、バイロンが眠りし家に眠り、バイロンが俯仰せし風光に俯仰して、バイロンの感せしが如く感じ、以て大詩人の情想を了解せんとするに力め、此の小說の各章を、其の事件の實際に起りし地に於て書けり。最後の部分即ちバイロンの死を書かんが爲め、女史はバイロンが終焉の地なる希臘の一小邑を訪はんとて、小舟にて(汽船なきが故、幾多の危險を冒かし、數百哩の旅行をなし、其地に於て、義勇なる詩人の最後を書けり。女史の成功は、實に此の熱心の結果ならずんばあらず。リーヴス女史は、其の小說を書きつゝある間は、總ての快樂を抛擲し、其の仕事に全勢力を集中し、數時間筆を放たざりき、女史が執筆をなすに就て二つの室を有し、一は其の内部紅色にして、一は暗綠色なり。戀愛若しくは愛國心の激動を叙するが如き場合には、紅色の室に於て筆を執る。是れ紅色が女史の心情を興奮せしめて、此の如き場合に適せしむるを以て也。而して平和なる靜穩なる有樣を書く時には、心情を靜平ならしむる木葉色の室に於てす。

▲著作と世界の批評　リーヴス女史は、最初より文學事業に對して頗る眞面目なり。其の最初に出版したる小說が、非常なる批評を惹き起し、太西洋より太平洋に至るまで、全國の新聞雜誌が、此の小說の包含せる社

會問題及び道德問題に就て、大論爭を始め、一派は女史の見解に贊成し、一派は之れに對して猛烈なる攻擊を試み、此の論爭は、餘りに强く女史の神經を刺激し、女史は之れが爲めに不幸にして病に罹りて病院に入れり。病室に於て獨り靜かに批評家の論爭を考へ、我身が其の論爭の主題なる事を思ふて、甚だしく嫌厭の心を生じ、終に爾後小說の著作を廢せんと決心せり。小說を書て名を揚げ、社會の玩弄物となり、無名の氣樂なる生活を廢せざるべからざるの不幸に陷るよりは、筆を折て田園に退き、書卷に親み、犬馬と遊んで一生を送らんと、獨り心に定めたり。然れども、健康回復し、病院より退くや、勇氣も亦た回復し、寧ろ批評界の喧噪を一笑に附し去り、益々の著作に力めて、眞の名譽を文界に求めんと欲するに至れり。

▲女史と米國の社會　大統領ルーズベルト氏は、女史の親友の一人にして、彼は夙に女史が文界の異才なるを認め、女史の文學事業の成功の爲めに、盡せし所少なからず。女史は其の著作を必ず大統領に送り、大統領も亦た其の著述は、必ず自ら署名して、之れを女史に送る。女史が大統領の感化によりて得たる所は尠少にあらずと云ふ。

リーヴス女史が、米國の或る大鐵道會社より、生涯無賃の乘車權を得たる事は、數年前米國の新聞により て報せられたる所なり。女史が之れを得たるは、其の非常なる勇氣と義俠心の爲めなり。數年前女史が、市俄古より南部に赴かんとて乘りし汽車の遭難せし時、女史は一少女の身を以て、自己の身命を忘れて、他のものを救ひ、且つ其の機智にて、汽車を大不幸より濟ひしを以て、鐵道會社は感謝の爲め、生涯無賃の乘車權を女史に與ふを事を議決せしなり。

▲日本の研究　女史は到處交際場裡に持囃さる。是れ其の愛嬌の多きと、機轉の利く事甚だしきと、其の趣味の上品にして且つ廣きと、其の博聞强記、談話の材料に富み、且つ談話の術に長ずるとに因る。女史は今熱心に日本を研究しつゝあり。殊に日本人の趣味に注意し、既に日光と京都に紅葉を觀て、日本人の愛する秋の景色の妙趣を味ひ、又た來春を待て、櫻花の美と、大和民族の趣味の關係を考へんとす。女史は三越吳服店に至りて、各種の日本着物を買ひ、又た屢々五二共進會を訪ふて、日本人の食器を購め、以て常に日本の習俗を了解するに力む。

米國の許婚者

▲書簡の往復――米國では許嫁の男女の外は、男女間の手紙の往復を致しません。用事がある時と、若い婦女が父母の許しを得ての特別の場合との外、互に交際の爲めに手紙を往復すると云ふやうな事は御座いません。殊に善き家庭に於ては、是等に就て最も嚴しく、若し格別用事もないのに、男子より進んで交際を求める爲めに手紙を婦人に送る如き事でもあれば、婦人は迷惑して失禮な事を致します。況して婦人から用も無いのに手紙を男子に送ることは、決して致しません。

▲女子の自重――米國の男女交際が純潔に行はれるのは、女子の自重心が強いからで、少しでも男子に失敬な言語擧動があれば、彼の人は紳士の資格なきものと爪彈きをし、交際を絶つと云ふ勢ひですから、男子の方でも餘程氣を付けます。米國に於ては、男子が若し女子の服裝や髮飾などを兎や角申しますれば直ち擯斥されますが、我國の若い女子は如何でせう、男子に容貌や髮飾りを批評されても、厭はぬ者が多いやうです、是れは自重心が足りないのでありますまいか、米國の婦人が斯樣に立派に交際社界に立つて、過失の無いのは、全く自重心の強い爲めであると思ひます。

▲許嫁同士交際の用心――米國に於て旣に許嫁となつた男女は、手紙や物品の贈答も出來、女子の父母へ男子から訪問することも出來ますが、少しでも秘密に渉る事は憚ります。敎會へ行くとか、公園を散歩するとか、馬車に同乘するとか、多數の人目に觸るゝ場所ならば宜いのですが、其他の場合には、相互の友人を伴ふて參ると云ふ風で、許嫁の男子は、却て總ての場合に於て、此樣に細かい注意を拂ふて居ります。許嫁同士で日本へ渡來するには、乘込の船を別々にして參りました。これが許嫁でない男子であつたならば、其れ程の遠慮は入らないのですが、許嫁であるだけに世評を憚つて、斯樣に致したので、先づ總て窮窟さ加減は斯樣な鹽梅ですから、米國男女の交際は嚴重の極點に達して居ると申して宜しいと思ひます。日本人は男女交際の自由と云ふことを、努々も誤解せぬやうに、間違へぬやうにして貰ひたいものであります。（津田梅子女史談片）



ネルソンの一生

藤葉

紀元一千七百五十八年九月廿九日英國の片田舍なるフオルク州の牧師の家に淸き赤兒生れぬ、之なむ後世英國の歴史に一大光榮を與へたるネルソンなりき、父は貧しき牧師をつとめネルソンの兄弟は多くありしも不幸にして半ば育たず、加ふるにネルソンが八歳の可愛盛りに母は彼を置いて彼の世へと旅立ち行けり、之れよりは只父の手に依りて、何事も不足がちに生ひ立ちぬ。

彼が十二の春ふと新聞を讀みて、母の兄なるサクリンと云へる人夙に海軍に務め居たるが今六十四門の大砲を備へたるレイゾネーブル號の艦長に任ぜられしとの報あり、日頃雄々しきネルソンは之れを見て我身の上の如くに打喜び如何にもして此の叔父に依りて海軍に身を立てむと兄のウヰリヤムをして切に父に賴み込めり。

子を見る事親にしかざる父は、彼が幼き遊戲にも何事をも仕遂げねば止まぬ氣象を知りたれば身體の弱々しきをも顧みずして終に其乞を快よく許しぬ。

當時ネルソンは英國に流行せる瘧の爲めに身は痩せ果てゝ風にも耐へられまじき少年なりしが其意氣は天をつき勇みに勇んで叔父の許へと出立せり。

一七七〇年十二月ネルソンは終に宿望を達して叔父の艦に乗り組めり、時に年僅に十二、

叔父は彼の切なる請に默しがたくて今共に携ふる事となりたれ共其餘りに虚弱なる風采を見ては到底海軍の軍人にはならるまじと思ひ居たりき

星霜過ぐる事三年、彼が十五の年、北極探險の壯擧

に加はりて、北緯八十度の北極洋に達せり、見渡せば見渡す限り氷の山のみ、一本の木もなく、一株の草もなくして、水晶宮の如き氷山の高く雲に聳ゆるのみ、聞ゆるものは物凄き白熊の朝日を受けて五色に光れる氷山の巓に吼ゆると、氷の破れ間に浪を蹴りて游ぐ海馬の水音のみ寂寞として凄慘眞に之れ別天地。

チルソンは一日無聊に苦しみて、彼の友を誘ひ、當直士官の眼をぬすみて艦を下り氷の上を走りて遠く熊狩にと出で行けり、行けども行けども目指す獲物は無くして知らず識らず奥深く進み行く程に日も暮れて歸らず、艦にあるもの皆心を痛めて其行衛を氣遣ひつゝ今や歸ると甲板に出でゝ四方を眺むれど此時如何にせむ朦々たる濃霧の爲めに己が前に立つ人すらも明かに辨ずる事を得ず。

漸くにして夜のあけ方に霧の晴間を透し見れば驚くべし艦を去る程遠からぬ處に二人の青年は今や馬の如き一匹の白熊に向つて睨み合へり、餘りの事に艦よりは頻りに歸れと信號すれども、チルソンは少しも聞かず、友の諫めにも從はずして飽までも戰はん決心物凄く、あはれや彈丸は射盡して、眼を怒らし、齒を剝き出して飛びかゝらむとする熊目がけて鐵砲の臺尻振り上げつゝ進み行く彼と之れとの間には只一筋の氷の裂け目あるのみ、心は矢竹にはやるとも如何で此獰猛なる白熊に適ふべき、あはれ彼が命は風前の燈、見るさへ身の毛よだちて艦長はたまらず大砲を一發漸くに熊を追ひて此暇に危きチルソンを救へり。

斯くて艦長は太く其輕擧を責め、後來を戒めけるにチルソンは冷然として快からぬ樣子を以て、惜しき事をしたり彼熊を射ちて皮を剝ぎ父の許に送らむと思ひしにと、彼僅十五の少年にして已に膽斯くの如かりき。

此時チルソンは已に四人の水兵の長となりてよく之れをなづけ、從はしめ、勇壯にして活潑よく英國の海兵として恥かしからぬいみじき青年とはなりぬ。

斯る間に遠征隊は英國に歸り、チルソンは叔父の周旋に依りて大砲二十門を備へたる海馬號にと乘り込めり、然るに此艦はサー、エドワルド、ヒウ、の麾下に

屬せるものなりしかば其任地なる東印度に向ふべくやがて纜を解きぬ

北極洋に探險を終へてネルソンの身體は太く强壯となり、其勤勉なるは他の遠く及ばざる處とて艦は擧りて之れに感ぜざるはなく、やがて破格を以て少尉試補に任ぜられぬ。

浪路遙に來て見れば、名にし負ふ印度の熱氣に早くも此小英雄の身體は犯されて、綠滴る四時夏の莊嚴なる景色を愛づる事も能はず又もや病魔の虜となりて空しく臥床に苦しみつゝ、止を得ずして終に故國に歸る事とはなりぬ。

さはれ天何ぞ此驚くべき後世の英傑をして長く憂鬱に苦しましむべき、荒き浪枕に搖られ〳〵て一度は身の不運をかこちて、あはれ海底の藻屑とならんかと迄決心したるネルソンも刹那に胸に閃きたる忠君愛國の光明に身は我爲めにのみ生くるにあらず、國家に盡すべき重き任務の有るを想ふて、勇氣一躍、危き神の手より逃れて此時より固き決心は彼の胸に結ばれぬ。

幸にして病去りて間もなくジブラルタルに行き、一七七七年四月八日年十九歲にして少尉に任ぜらる。

斯る間に艦はジャマイカに行き、或は西印度諸島を廻る內に大尉となり、更に進みて三年の後には少佐となりて二十八門の大砲を備へたるヒンチブルーク號の艦長となりぬ。

初めて戰に出でしは中央アメリカにて西班牙人と戰ひし時にして云ふ迄も無く、其勇氣はさしもの大軍を呑みてネルソンの勝利に歸せり、二十五の年故國に歸りて初めて宮中に參內す、回顧すれば年十二にして初めて海上の生活をなし、北極探險を初めとして印度に病み、西印度、カナダ、中央アメリカにて戰ひ、勝つて、佐官に昇進して、今茲に故鄕の土を踏む、ネルソンが之れ生涯の一小段落なりき。

彼が西印度のネビス島に行ける時しも島の司ヘルベルトと云へるは夙にネルソンの人となりに深くも敬慕の念を抱き居たるを以て其家に來る度毎に厚く之れをもてなせり、此島司の姪にニベスとて醫學博士の許に

嫁ぎたる佳人あり不幸にして一子ジエシアを擧げたる後其夫に死分れて未亡人となり、ヘルベルトの許に在りしが、會々チルソンに紹介せらるゝや、元來情深きチルソンは、ニベスの可憐にして、而も容儀端正、温和なる風采に一見其心を動かし、前後も忘れて少時茫然たりしが、終に島司に乞ふて己が妻にと貰ひ受けぬ時に一千七百八十七年三月一日、チルソンが二十九の春なりき。

海の上を住家なる海軍人の事なれば閨のふすま暖かならず夫人と共に在るは僅かにて眞に妻を慰むるを得ず情にもろき英雄のチルソンは如何に之れを殘り措しう思ひけむ。

さはれ大義親を滅す、忠君愛國の決心固き彼は如何で女々しく私事に屈托せむ、チルソンの結婚を以て英國海軍の一大光榮を失ひたりと人をして嘆せしめたるも、之れ凡人の想ふ處にして、英雄の心緒何ぞ凡庸の知る事を得む、チルソンは暖き精神の慰籍を得て益々其眞勇を表はすの機とはなしぬ、只僅に書を送りて二人の中の如何なる障害に逢ふとも決してはなるゝ事を得じと契ひぬ、彼が手紙の一二を記せば、

結婚して三月の後送りたる書信の一節に吾は自己の任務に依りて屢々別るゝ事ありともいかで其愛のさむべき、否寧ろ益々其度に深くなりまさるのみと、又鹽水は愛情を洗ひ落すものぞと嘗て格言に聞きたれども我は毎朝六桶の鹽水を浴びて戀愛の情を少時忘れんとすれども、却りて深く〳〵濃厚となり行くのみ、世に君無かりせば何の愉快も無し、萬里の波濤を蹴る艦の内にも遠く御身を想ひて、有ゆる憂愁より慰められぬ、あはれ此想ひを如何にして君に告げんと。

斯くばかり愛ふかき妻の爲めには玉も炊がむ、桂も手折らむと思ふこそ世の常の人の願なるべきに、流石に俗人の上に超然たる彼は只己が職分を守り、人たるの義務を盡すに汲々たるのみ、艦長の位置に進むも上官に媚びず、御用商人が握らする黄金をさへ斷じて受けず、却つて其不正を屢ば上申したりしが、其情實四方に連絡して紛議に紛議を重ね、終に上官と衝突し

て快々として樂します。

妻と共に少時佛國に遊ばんとて故郷に父を見舞ひけり、彼の父は今や年老ひて且つ病み衰へし折から久しく見ざりしネルソンに逢ふて喜ぶ事限りなく欣々として齢の延びたらん樣に感ずと。

然るに其佛國に去るを聞きては悲しみ、泣きて止めて云ふ樣、斯る程ならば初めより相見ざりしこそよけれ、あはれ我子よ止まりて、願くは日々に汝が和しき音容に接せしめよ最早や長からぬ我命のせめて終らん迄汝と共に在らしめよと切に乞ひければ、夫れをしも振り切りて行くべくも有らす、終にネルソンは妻と共に故園に止まりて靜に田園生活にふける身とはなりぬ。



或時は童の如くに妻と共に野山を廻りて鳥の巣をさがし、銃を肩にしては狩に出で苦心慘憺漸くに小鳥一羽打得ても得々として恰も敵艦を沈めたらん程に打悦び妻に示しては誇り、隣の家迄持ち行き、或は僕の賞賛を得んと汲々たり胸に蟠まれる云ひ知らぬ悶を斯して僅に忘れ居たるなりき。

されど到底地中の者たらざる彼は職を退きて空しく田舎暮しにかく一生を甘ずる事を得ず、如何にもして再び海上に雄飛せむと頻に長上に請願すれ共彼の先

聲は不幸にも彼の爲めに注意せずして冷然と顧みざりければ蓋世の英雄も憂々として徒に日を送り居たりしが、終にフード侯爵の力を以て一千七百五十三年一月三十日アガメント號に乗り込む事を得たり。

アガメント號には水兵三百五十人を乗せたり、今や此偉人を乗せて地中海に在り。

時しも佛國に在りてはナポレオン皇帝が全盛の時にしてパリ城頭ギロチンの斧音高く、鮮血淋漓として城門に流れ阿鼻叫喚修羅の巷なりき、ネルソンはよく英國の威嚴を保ちて佛國の勢を喰ひ止め、伊太利に入りて王室を助け水陸力を合せて防ぎよく叱咤督勵せり。

此戰に不幸にして大砲の破片眼にあたりて終に一眼の明を失す、之れより獨眼龍の名益々高くなり行きけり。

白馬に跨りてアルプス山上に雨を睥睨するナポレオンと、白帆を擧げて地中海上に並び立つ彼ネルソンとは眞に之れ雙龍、兩虎、彼は全歐洲を蹂躙し、之は地中海上に王たり、將に雲を呼び、雨を降らさむとす。

ネルソンは百方力を盡して伊太利を救はんとすれ共、西班牙の裏切りするに及んで又如何ともする事能はず、英艦隊の獨力を以て、西班牙と、佛蘭西との兩艦隊に當らざる可らず、さればネルソンに向ふ艦の勝つべき樣なくあはれや散々に打破れてエルバ島へと退きしが、彼の上に立つ人の已に地中海に用なしとて引き揚げんとするに及んでネルソンも之れと爭ふ事を得ず殘り惜しげにジブラルタルを去らんとする折しも、曉のしら〳〵とあけ行く彼方を見渡せば、表はれたり敵の艦隊二十四隻

千七百九十七年二月十四日朝霧のまだ晴れやらぬ浪間に列を正して並び居たれば何かは猶豫のあるべき、セントビンセントの海戰は此處に開かれぬ。

英艦隊は僅に十四隻、賴みとするは只ネルソンあるのみ、然るに笑止なるは西班牙の艦隊よ、英艦の見ゆるや、先信號を通じて、水師提督を勵まさんとし、詐りて、英艦四十隻見ゆと、さらでだに臆病風の吹きまつはれる西班牙の軍は之れを聞いて狼狽爲す處を知ら

す勇氣まづ挫けて機先を制せられたるこそ哀れなれ。戰ふ度に敗れて兵艦の半は失ひ他は悉く戰鬪力を失ふ、英は僅に二十四人の戰死と五十六人の負傷者を出したるのみ。

敵の艦に乘り移りて接戰終に之れを降して少しく負傷したるネルソンは提督の感涙を以て迎へられ速時ナイトの爵に叙せられ、藍色隊の少將に任せられぬ。

ネルソンの燃ゆるが如き勇氣は勃々として禁ずる能はず進みて奮戰する內はからずも或日右の臂に彈丸を受け、鮮血流れて止まらず、側に在りし義子ニスベは驚きて、はやる父を艇の底に伏さしめ味方の士氣を挫かざらんとて帽子を以て傷を被ひ、僅にハンケチを引き裂きて緊く縛り終に目的を達せずして、怨みを呑みて引き擧げぬ。

ネルソンの傷は意外に重くして終に腕を切斷す、縫糸の絹糸ならずして蠟引の糸を用ゐたる爲容易に癒ゑず、殆ど三月餘り、英國に歸りて病苦に呻吟せり。

一千七百九十八年、傷漸く癒て、再びアウンガート號に乘して地中海に乘り込み、ナポレオンと戰はんとす。

巧にネルソンの眼を逃れてエヂプトに上陸せんとするナポレオンと、銳利の爪を磨ぎて戰を挑まんとする英艦と少時地中海上に探ぐり合ひしが七月廿八日ギリシャの一港に着せし時佛艦は四週間前にカニジヤの岸より南を指して向ひたりと。

斯くと聞くやネルソンは直に令を下して其跡を追ひエヂプトの海岸指して勇み進めば、先きに來りし時には港口寂寞たりしアレキサンドリアの灣頭高く無數の佛國三色旗風に靡きて翻へりたり。

一千七百九十八年八月一日午後四時ネルソンは食事をなす間も忙しげに令を下しつゝ此處に有名なるナイルの海戰は初まれり

此戰にネルソンは又も頭に負傷し、危く殘る一眼をも失はんとして漸くに免れき、されは其報酬は之れに報ひて猶餘り多し、敵の軍艦九隻を奪ひ、二隻を燒き、他の二隻も亦用をなさぬ迄になれり、其負傷三千

百五人、戰死五千二百二十五人、英は僅に八百九十五人の死傷者を出したるのみ、幸か、不幸か天に意ありてか激戰半にして彼の大地震を生ぜしめかば敵は更に多くの損害を被りたらんに此不慮の事變の爲めに僅に兩軍の戰止み佛艦四隻は二日の夜明の霧にまぎれて見るもあはれに本國指して逃れ行きぬ。

ネルソンは敵の水に溺るゝものは出來得る限り救ひ助けけれ共、如何にせん死屍は無數にして葬る事を得ず、空しく放棄したりしが、アラビア人は之れを集めて一つの孤島に投げ揚げたり、之れより三年を經てクラークと云へる博士、此島に上陸したるに死屍累々として猶其儘に積み重なりて有りしとぞ。

陸の大王ナポレオンはエヂプト遠征に失敗せしかども猶屈せず、身を以て逃れ一時シヽリー島に幽閉せられしも再び立ちて、伊太利を攻む

伊王ネープルは終に皇后、皇子を携へ、英國の貴族ハミルトン夫妻に助けられて王室の財寶を持ちて、ネルソンの保護の下に漸くシヽリー島のパルモ府に脫する事を得たり。

此ハミルトン夫人こそ稀世の才女にして且つ美人なりしが、さしものネルソンを手中に弄し、終に其生涯の歷史に一大汚點を止めしめたるこそ實に遺憾なれ、我等は此間の消息に就て多く語るを好まず、ハミルトン夫人の威はネープル王室に振ひて其勢甚だ盛なりき、一度眼をネルソンに注ぐや之れを我者にせでは止まじと、己れ夫ある身をも打忘れし仇心の終に不世出の英雄をして一步を誤らしめたり

伊國皇室の回復は着々と步を進めつゝローマの都又再び英軍の手に落ちしもネルソンの心は又昔の如くならず、故鄕に糟糠の妻を殘し置きて身は今茲に曠遊しつゝ、夢の如き日を送りけるこそうたてけれ。

斯くて一千八百年十一月一先英國に歸るや、市民は有ゆる感謝と熱情を以て彼を迎へぬ、さはれ一片暗雲の光りを被ひし彼の心には、亦妻に對する昔日の熱情あらず、露御身には過なし、又他に望むべき事も無しと云ひながら終に血の淚もて憫みを請ふ夫人をして去

らしめぬ。

あゝ英雄多情か、ナポレオン皇帝がジョセフキンを離別したると何ぞ夫れよく似たる、彼と是と其情實は異なるとも英雄終に輕薄の謗を免れざるを如何にせん。

ハミルトン氏は恐なりき、夫人の情人たるをも知らで彼のコッペンハーゲンの戰にネルソンが司令官の榮職に進みたるを聞きて其大功を空前絶後と賞贊せり、ましてハミルトン夫人は手の舞ひ、足の踏む處を知らず、人に語りては誇り、其面影を思ひ浮べては悦び極まりて涙知らず識らず下るを禁ずる能はず、あゝネルソンの幸か、不幸か。



かてゝ加へて千八百二年、かねて病の床に在りし老父は七十九を一期として終に歸らぬ旅に登りぬ、あゝ滿れば缺くる世のならひ、世界に輝く賞贊も何かせん、ネルソンが渾身の熱情を以てするも逝く者をして再び此世に呼び返す能はず。

千八百〇三年七月再び彼は地中艦隊の司令官として任地に行き同四年白旗艦隊の副水師提督に任ぜられたり、五年一月十八日一大快報は來れり曰く、佛國の艦隊は西班牙の艦隊と連合して、ツーロン港を發すと。

空しく髀肉の嘆に堪へざりしネルソンは、スワこそと直に令を下して只一息にと其跡を追ひかけたるも、不幸濃霧の爲めに行衛失ひて只茫然たるのみ。渺茫たる海上に彼處を探り、此處に窺ひ、諸島をあさり廻りしも又敵の影だに無し、終に其年も暮に近きて、敵の艦隊はトラフアルガー岬に近き沖合に碇泊せりと聞きたるネルソンは日頃の怨晴らすは此時ぞと決死の勇を以て之れに向ひぬ。

九月十九日の午前九時敵艦港を出でたりとの信號を得て益々奮ひ立ち、翌日の曉にジブラルタルの海峽に入れり二十一日の朝まだき水天相接する處敵艦先表はれぬ、續いて一隻又一隻、終に其總數四十隻。

我艦隊は之れより少なき事九隻、然れ共ネルソンは氣已に敵艦を呑みて、其二十隻は必ず打沈めんと決心せり。

其服裝はと見れば今日を晴れと着飾りたる水師提督のフロックコートに、光り輝く四個の勳章を胸に着けて、決死の勇氣勃々として其面に表はれたり。

十二時十分前兩軍の機熟して玆に砲門は開かれ、佛艦八九隻はまづ鋭くネルソンの乘艦目がけて打出せりされどネルソンは少しも騒がず、はやる少壯の士官を押へて他の艦に命令を下すのみ。

五十八人の死傷はまたゝくひまに船下に運ばれて、十二時四分を過ぎたる頃終に討ての命令は發せられ此處に花々しき彼我の砲聲天地に響き渡れり

思ひ廻せば西印度に初陣の勝利を得てより幾十度の戰をや經てけむ、其練れて練れたる軍略と指揮、部下は手足の如く、艦の一進一退は身を動かすよりも自在にして、敵陣を廻りては開き、開きては圍み火花を散して敵艦を攻め惱ます時しもあれや、僅に十五ヤードを距てたる敵艦レヅーターブルより打出したる一彈今しも何事をか云はんとするネルソンの肩をかすめて飛び去れり、無慘や流石のネルソンも、たまりかねて玆に打倒れぬ、彈丸は肩より脊骨を打貫きたるなり、さはれ神色自若、水兵をして勳章を被はしめ、負傷室に運ばるゝや、四邊皆負傷者を以て充されたるを以て

靜に醫師に命じて己が順番の來るを待つ其偉大にして到底治療の見込みもなく、只レモナード水を飲みて渴を癒すのみ、烈しき苦痛に思はず呻吟の聲を洩らしつゝも猶戰況を氣遣ひ、艦上勝利の呌びを聞きては不自由なる身をもがきつゝ喜色滿面に溢れたり、日頃より隔てなきハーデー將軍はネルソンに代りて今しも全軍の指揮に急しく、氣息奄々として頻りにネルソンの求むるも之れを見舞の暇を得ず、漸くにして一時を過ぎたる頃敵艦續々と降服せる快報をもたらして入來りぬ、曰く十隻は沈め、五隻は奪へりと。

　ネルソンが初めの決心には猶飽き足らぬ處有りしも其上首尾を喜びて、ハーデを呼び近け、其遺品と、遺髮とをハミルトン夫人に送るべく乞ひぬ、熱涙を呑みてハーデーは之れを諾しつゝも甲板の氣遣はしきまゝに少時と出で行きぬ。

　引き返して又も入り來れば今や百方の手術も施すに道なくして只其苦痛少しにても薄らがしめんとつとめたる醫師の手もネルソンは死期已に迫れり、あはれに冷へたる手を取りてハーデーは味方の全勝を告げ、額に接吻せり、ネルソンは命じて錨を下さしめ絕へ〴〵に、後の事を托しつゝ、神に感謝してあゝ我任務全く終れりと、幾度か口の内に繰り返しつゝ、秋の日の暮れ易き四時三十分莞爾として息絕へ、其靈は永久に天に歸り行きけり。

　あゝトラファルガーの戰はネルソンの死を以て一層に其光輝を增し、激烈を思はしめて長く其名を史上に殘しぬ、其遺骸は英國グリンニッチに送られて國葬を以てセントポウル寺院に葬られき。

　英國の王はネルソンの偉功を長く後世に傳へんとて、其兄弟を伯爵に封じて年金六千ポンドを與へ、一萬ポンドを其姉妹に、十萬ポンドを以て其財產となさしめぬ。

　嘗て南歐に其武を競ひたる那翁は絕海の孤島に怨みを呑みて世を去り、之れで我世の務め終れりと笑みつつ悲壯なる最後を遂ぐ、思ひ來れば英雄の末路又凡人の夫れとは自ら異なる、あゝ。

幸福論

人は誰しも幸福なる生涯に在らんとこそ望まざるは無し、然るに之を望みて得られず遂に悲觀に陥りて此世を儚なむに至る、されど世はその人々の言ふ如く苦の世界にはあらざるなり、成程人には煩悶や苦痛のなき人なかるべし、されど苦痛や煩悶は人間の特權也、人間なればこそ苦痛煩悶のあるなれ、人は是によりて訓練修養せらるゝ者なれば、煩悶、苦痛の多き人程喜ぶ可き事なり、又世には美人なれば幸福なりと思ふ者あり、されど美人必らずしも幸福ならず小野小町の容色も紫式部の文才も尚ほ其後半生涯は哀れむ可き生活を成すにあらずや、澤庵和尚の歌に、昔見し花の姿は散り失せて皺打ち寄する梅ひしほ哉、實に其通り窈窕たる千古の美人も老ひては梅干の如くなりて誰も顧る者なく秋の扇の如く棄てらるゝの時ある可し、さて又世には富貴なれば幸福なりと思ふ人あり、されど富貴必ずしも幸福には非ざるなり、曾て米國の大富豪ロックフエーラーの一嬢が富有は幸福なるやの問に答へて、誰人か金錢を以て幸福を買ひ得る者あらんや、金錢を以て代へ能はざる多くの不幸は我々にあり、放恣に生長せし人は幸福にあらず、足下は妾を怨める人々に告げ給ふ可しと言へりしとか今の世の人、一にも金、二にも金、と金錢にのみ目を曾る者大に翫味す可きなり、世の不幸は決して貧富によりて差別あるものにあらず、既に美人必ずしも幸福ならず富貴必ずしも幸福ならずとせば如何なるものが幸福なる可きか、予は曰はん家庭の圓滿なれと近者妙齢婦人やゝもすれば云ふ、妾は文學者に有らざれば嫁せず、醫學士に有らざれば夫とせずと、其極遂に獨身を主張するに至る何ぞ誤れるの甚だしきや、今日の女子が果して獨立生活を遂し行くことの出來得るや否やは別問題として、女子の獨身生活は決して喜す可き事にあらず、貧者の家に嫁すればとて其身不幸なりと稱せられず、地位なき者とて何苦しくはあらん、幸福は此等によりて妨げられざるなり、埋火の邊り長閑に團欒するには九尺四方の長屋住ひにて事足れり、「ことたらぬ世をなうらみそ蟹の足の短くてこそ浮ぶ瀨もあれ」と歌にも言へる如く不足の間に滿足と云ふものあるなり、一家の圓滿に治まるは妻の務めの如何にあり、家庭圓滿の基は婦人の愛嬌にこそあれ佛蘭西の大教育家ルーソー言へる事あり、美色は退散するも愛嬌は退散せず、愛嬌は一種の活力を有す、愛嬌は自身の能力を有す、故に良好なる内君は婚姻の後三十年の久しきを經るも一箇の愛嬌の力にて夫に悅ばるゝこと合巹の翌日と少しも異なることなし彼は每日自ら新にするの術を知ればなり、と一家の主婦となりては家事經濟は必要なる可し、されど如何に家政に達し如何に經濟に巧なるも愛嬌なき時は恰も味のなき滋養物と一般、滋養と成る可き成分を多く含むも食物として美味ならざれば身の養ひにも効力少なし、愛嬌は婦人の財產なり美德なり人に接しては勿論家にありても常に舅姑を始め其夫に能く愛嬌ある樣勉めなば一家に風波起ることなく薰風の香り家庭に滿々たらん。（眞砂女）



情的方面

男女の研究

秋霜生

◉女性に慕はるゝ本質

女性は男性の名譽と滿足を以て自己の名譽滿足として大に快感を覺ゆる者、女性は男性が喜ぶのを見てそれを何より嬉しく思ふ、謂はゞ間接の快樂を覺ゆる者だ、だから良人の成功は自分の成功の如く喜び、良人の快樂は自分の快樂の如くに樂しむを常とする、而して古來成功した男性が其容貌の醜なるに拘らず、女性に慕はるゝのは此理由に基づくのである、英雄色を好むと云ふ諺があるが、何も英雄が色を好むのでなくて色が英雄を好むのだ、斯ふ云ふ具合に女性は何でも自分より立ち勝つた人を慕ひ、其人の成功を自分の成功と喜び、其人の爲めに身も心も捧げて悔いないものであるから、男性諸君は之に鑑み女性より慕はれたくば何んでも豪くなるに限る、然れば招かずとも美人は自ら天上より落ち來るものである。

◉良人制御の一法

餘り男性に對する忠告ばかり述べ續けて、片手落ちの嫌があるから、今度は一つ女性の爲めに良人駕御の術を御教授申さう、駕御の術と云ふから牛馬を御する如く良人を御するの術だと速了されては困る、又制御するからと云ふて何も良人を坐蒲團の代りに尻に敷け

と云ふ意味でもない、大は國家の爲め小は一家繁昌の根源たる夫婦和合の術である、若し制御術と云ふて語弊があるならば、良人待遇の法と改めてもよろしい、即ち良人を愛し敬すると同時に、亦良人をして自分の人格を認めしめ、兼ねて又自分を愛し且つ敬せしめ、良人に決して不品行をさせぬことである、扨て良人を制御するからと云ふても細君が必ずしも良人よりも深い智識、高い教育を要すると云ふ譯ではない、餘り高い教育を受けた婦人は、理論一點張りで表面から堂々と良人を制御したがるから、却つて失敗する者で、斯る婦人は家庭平和の大邪魔である、兎角細君の良人に優れたるは圓く行かぬものだ、只だ常識に富み、察しが深く、愛想ありて優しく、健々しく、我儘の處がない婦人ならば其良人は甘んじて細君の制御を受ける者で、予の知て居る有名の學者、立派な紳士、知名の文士の中にも、斯う云ふ女性の爲めに全く制御されて居る男子が尠くない。又斯の種類の女性ならば、制御を受けても其良人は決して不平に思はぬ者である、否其良人は夫れが爲め誠に幸福を感ずるのである。

◉良人待遇の秘訣

良人制御の術は、良人をして自分は妻君を御しつゝあると思はしめつゝ、何時の間にか反對に妻君の制裁を受けつゝあると云ふたやうな具合でなければ、決して其極致に達した者とは云はれない、で良人制御の第一義は、良人に自分の人格を認めさすることである、夫れには良人が他の婦人の前では決して得爲さぬ事は自分の前でも又爲さしめぬと云ふ事が必要である、例へば『他人ではなし家内だから構ふ事はない』と云ふやうな事を、自分の良人に決して言はさせぬことである、既に自分の人格を認めさすれば今度は良人の感情を操つること、即ち良人の機嫌を取ることである、之には餘程巧妙なる外交的手腕を要する、外交的手腕と云ふても何も權謀や詐術を用ゐろと言ふ譯ではない、能く人情の機微に通じて、其弱點急所を捉へるのである、之には是非共諸卿が學校で習つた學問や理窟以外の人情學と云ふものを研究しなければならぬ、人情の

働きと云ふ者は極めて靈妙不可思議であつて、學問上の理窟や杓子定規では迚も測量は出來ぬ、之は諸卿が實地について自ら研究し自ら發明するより外に道はない、此點に於ては諸卿が平生人類以外の動物のやうに蔑んで居る彼の賣女の類は、諸君より餘程善く人情學の精髓に通じて居る、斯ふ云へばとて何も予は諸卿に向つて藝妓や娼妓の弄ぶ嘘八百の手練手管を眞似ろと云ふ譯ではない、爰に言ふ良人制御術は固より良人に對する誠心誠意の愛情と尊敬とを基礎としての話であるから、賣女の手



管と同日に談ずるではないが、併し世間には好く良人の愛を平生輕蔑する藝娼妓に横取りされて泣て居る細君が澤山あるやうだが、然し優勝劣敗の大原則から之を見れば、其細君等は人情學の研究に於て彼等賣女に劣るのは敗を取つたのだから、自業自得誰を恨みやうもない譯である、先あ之は極端の例であるが、世の女性諸卿は之に鑑みて、少く功夫する所ありて然るべしと予は敢て勸告する。終に一言して置く、女性諸卿能く聞召せ、男性と云ふ者は小兒と同じく御褒美目當にて妻君の制御を受

ける者である、御褒美とは何であるか、曰く細君の御機嫌の好きこと、優に柔しきこと、容貌の美なることである、殊に容貌には絶えず注意して見劣りのせぬやうに心懸け給へ、愛情と云ふ者は絶えず物を與へて養なはなければ衰弱して仕舞ふ者である、昔から云ふ婦は己れを愛する者の爲めに容を作るとは此事である。

◉忌避すべき男性

最後に女性の爲に忌避すべき男性の一例として女嫌ひの男性の事を説明しやう、夫れは勿論矢鱈彼の女にも此の女にも氣を移す女好きの男性は最も忌避しなければならぬが、扨て此女嫌ひの男性は之より尙ほ更に忌避すべき人物である、女嫌ひの男は仇し女に心を移さなくて安心で好いと云ふ者があるが、元來此女嫌ひの男と云ふ奴は、頭から女に緣のない男であつて、自分の妻君だからと云ふて、他の女性に對すると同情も戀も情も感ずる者でないのだ、斯う云ふ男は結婚したからとて、唯だ妻君と云ふ一個の女性を所有したと云ふ、所有權の觀念を起すばかりだ、尤も斯う云ふ男でも妻君を大切にする事もないとは限らぬが、夫れは取りも直さず只友人的の親切であつて、肝腎の戀情と云ふではない、總じて斯の種類の男性は、子供としては母に懷かず、兄弟に仲善からず、青年としては女性を尊敬する事を知らず、良人としては妻君の乘ずべき弱點かないから、自分の妻君の、可愛ゆき色々の動作も目に見えぬ盲人であつて、斯も彼もと氣を揉みて色々に執り成したからとて、全く無駄である、女嫌ひの男に愛を捧ぐるは恰も猫に小判であるから、要するに女嫌ひは最も忌避すべき處ろの男性であるのだ。

◉既婚女性の心得

女性の結婚年齡は勿論若い方がよろしい、寧ろ若過ぎる位で娘盛り、新造盛り、年增盛りもそれ〴〵變る美の趣をスッカリ良人に賞翫させるがよい、總じて女性美の尤も發揮せらるゝは四十と云ふ年輩である、實にや女性の四十や第二の娘盛りとも云ふべき時であつて、花盛りよりは身嗜み深く氣苦勞もせず、夫婦睦じう子供には懷かれ、體に落付きが來て、貫目も出で

衣類の着こなしから坐作進退に隙がなく、氣轉が利いて萬事に抜目なく、この年に到れば十人が十人大抵美の稱を値する者で四十の妻は良人に取りて何も云へぬ嬉しき樂しき滿足の年頃である。自分の女房に二度目の戀と云ふは此處を云ふのである。兎に角良人待遇法の神髓は、良人を自分に惚させるにあるのだから等しく美を賞翫させるにも、單調では行かぬ、絶えず變化がなければ厭が來る、女性諸君は能く此處の道理を辨へて置いて、春夏秋冬、夫れぞれ變る美の趣を良人に賞翫させるがよい、又一つ心得置くべきは良人とても悉とく聖人や君子でない、否人間の半分は動物であるから、良人に對する作戰計畫も貞とか愛とか云ふ、繩墨の理窟以外、其動物的本能を利用し善導する事を忘れてはならぬ。



佛國婦人の美點

ハナリンチ述

一寸した上流の家庭では下女を一人しか置かない、それも、ボンと呼ばるゝ子守女で、其子守女が一人で寢室の世話から臺所の手傳ひまでするので容易な事ではないが、月給はと云ふと一ヶ月四十法から、少し田舍へ行くと三十法である、其月給から主婦は一年百法の割合で間代を徴收する、斯くては剩す所幾何もないので、冬になれば凍へ、夏になれば裸にならなくてはならぬ、凡そ憐れなるものも多いが佛國の下女程憐れなるものはない。

佛國の婦人は概して閉居主義である。英吉利の女に較べると更に甚だしい、彼等は大概寢室に於て終日を送り、親しき友人は寢室に迎へ應接室に出ることすらも爲ない、だから比較的綺麗にしてある、此處で讀書し、召使ひに命令し、手紙も書くのである、客が其處へやつて來るから、寢臺も割合に美くしい、男女の關係も大に離れて居て、一家内の中で食卓に於て遇ふ位ひで、利害も、快樂も、勞働も大に相違して居る、夫婦と雖も常に利害を異にして居る、兄弟も遊ぶ時は男女別々になつて遊ぶ、彼等にして若し更に高き道德心を有するに至れば、恐らく彼等は世界の女性中完全なる者と稱せらるゝであらう。

佛蘭西の婦人は何事をなしつゝあるか、と云ふ問題は屢々外國人の話題に上るのであるが、諸君が佛國の婦人は小說で讀む佛國の婦人の如きものであると思ふならば大なる間違ひである、小說や戯曲に現はれたる佛國の婦人は頗る不道德なる者であるけれども、實際は天地の相違がある、それは佛國は絕えず多數の不潔なる女子を製造しつゝあるけれども、健全なる分子は、他國の婦人よりも健全である、加ふるに彼等は家庭を整理するに非凡なる手腕を有して居る、其手腕たるや實に賞賛すべきものである。

母としても、妻としても、又娘としても、彼等は男

子を助ける事を忘れない、事業に於ても、家庭に於ても男子の助手たる事を忘れない、母としての彼等は全然自己を埋沒して、主權を其子に與へる、唯女の子に對して自ら主權を有して居る。

＊　＊　＊　＊　＊

佛國に於ける婦人の勢力と云ふ者は非常で、家庭は全然婦人に依て左右されて居る、今日佛國が尙世界の一强國として其地位を墜さないのは、要するに婦人が財布の紐を締める事が上手だからである、佛蘭西國民が野獸の如く暴れ廻る間に、婦人は靜に、綿密に財政を整理しつゝある、實際佛國の男子の如きものには佛國の女子が必要なのである、唯此愛すべき佛國婦人が極めて消極的なる儉約、消極的なる道德に安ずると云ふ事は如何なるものであるかと云ふ議論も出るが、併し彼等の長所も此處にあれば、短所も亦此處にあるのである。

（完）

附記　如何に佛國の婦人が日本の婦人と似たるかを見よ、譯者の此處に是れを記載する所以、自ら深き意味なくんばあらず。



衛生美容法　(米國雜誌による譯)

△沐浴＝朝起る時は單に顏のみを洗ふを以て足れりとせず、一日に一回は十分に身體を拭ふを要す、身體を拭ふには海綿を用ひず皮膚に水を灑ぐをよしとす、水は雨水又は蒸溜水を尤も可とす、石鹸は十分に使用して直ちに洗ひ落し柔軟なる手拭を以て皮膚をよく洗ひ乾かし後に肢體を強く摩擦すべし、摩擦の方法は顏面肢體より眞紅色の顯はるゝを適度とす此浴法は實に簡易にして少量の微温湯と石鹸手拭を用ゆるに止まり何人も容易に爲し得べき簡便法なり、又時々熱き湯に海綿を浸し體軀より脂汁を拭き去るを要す、日光及び空氣に觸るゝは人間健康上特種の沐浴法なり、故に衣服を着る前に暫時日光に身體を曝すも亦一法なり。

△呼吸＝は肝要なるものなれば、常に適宜の運動を試み、新鮮の空氣を呼吸すべし、而して呼吸に惡臭を帶ぶるものは胃、齒、鼻若しくは喉等の病症より起るものなれば忘れず深く注意し置くべし、呼吸の臭氣を除する一時の方法はコーヒー、肉桂、丁字等の香料藥品を用ひて可なるも、若し惡臭甚だしきに至れば必らず醫者の治療を乞ふを宜しとす。

△皮膚＝婦人にして若し皮膚を美麗ならしめんとならば藥品を用ふるに及ばず、新鮮なる空氣中にて十分なる運動をなし、又浴湯の際十分に皮膚の氣孔を開き健康を助くる飲食をなし、十分に睡眠を爲すにあり、決して白粉等の重量顏料を用ふるべからず、(尤も輕量の顏料、澱粉質白粉は用ふもよし)、ニキビの生じたる如き事あれば重炭酸曹達十入ゲレーンと香水六滴を混じたるものにて顏を洗ふべし、皮膚青白き時は、微温湯を以て洗ひ粗き手拭を以て十分に摩擦し空氣と日光に觸れしめて適宜の運動を試むべし、又膚の荒れたる時は夜間グリスリンを塗り、翌朝清水とよき石鹸とを以て洗ひ去るべし、皮膚を美麗に保たんとならば、豚肉、乾酪其他の多量の脂肪質ある食物を謹むべし。

△手＝を美麗に保たんには種々の方法あり、即ち石鹸を十分に用ひて洗滌し、爪刷毛を用ひて屢々洗へば必らず清潔となるべし、皺などの生じ易きものは毎度就寢前にグリスリンを以て洗ふを可とす、冬日には糠と石鹸とを以て手を洗へば光澤を生ずる事極めて妙なり、手を極めて白く美ならしめんには二三日毎に牛乳と清水とにて屢々洗ひ就寢前に棕櫚の油を塗り毛製の手袋をはめ翌朝微温湯と石鹸とにて洗滌すべし、日光の爲めに手の燒けて黄色を帶ぶるに至れば、石灰とレモン汁にて洗へば二三回にて以前に復す手は美麗に保つと雖も、若し怠惰にして美麗ならんよりは十分働き美ならざるに若かじ。

△足＝足も能く保護するを要す、之れを善く保たんと欲せば十分清潔にせざるべからず、清潔の法は一日に一回づゝ洗足すれば申分なけれども一週間に少くとも三度は必らず行ふべし、靴足袋は、屢々取かへ、殊に歩行せし時はしば〳〵取かゆべし洗足を怠る時は忽ち不快の臭氣を放ちて人に厭はるゝものなり、洗足は温湯を用ひて十分能く洗ひ去るを要す。

△頭髪＝人に天然の美を添ゆるは頭髪なり、衣服の美、寶玉の光何かあらん、されば婦人には頭髪は最善最要のものなれば平常大切に之を取扱はざるべからず。

談叢

小學教員たりし八十歳の老媼（安東師團長母堂の事）

維新の際女流勤王家として王事に勤勞したる勳功により一昨年御贈位の御沙汰を蒙つた松尾多勢子女史と義姉妹の交りをなし、當時信州の雙璧と並び稱へられた安東喜久子女史は十四歳の時信州飯田藩士安東辰武氏の室となり四人の男子を擧げましたが、不幸にも三十歳の春當時十四歳なるを頭に四人の子を殘されて良人に先歿たれました。爾來五十年の永の歳月、貞淑なる未亡人、善良なる母としてあらゆる困苦窮乏と戰ひ、孱弱き女の細腕で子息の養育に心を碎きました結果は、並に一門中外事、二師團長、二博士何れも上流の紳士として世にも光榮ある家庭を作るに至つたのは偏に刀自か血涙の餘瀝に外ありません、長男の欽一郎氏（六十六）は鄕里飯田の銀行家として實業界に令聞高く、二男直平氏（五十八）は高等官一等の位にあつて。現に大審院の判事を勤めつゝあり、蚤に同藩の柳田家を繼いで夫人琴子（五十六）との間に順子（三十八）貞子（三十六）孝子（二十一）の三女を擧げられたが、殊に長女の順子は故矢田部理學博士の未亡人で、現代の婦人界に矢田部順子と云へば誰知らぬ者なき閨秀教育家であります。扨て其妹なる貞子はお茶の水高等女學校を卒業後、第五師團長木越中將の夫人となり、柳田家は法學士國男氏を養子として三女孝子に配し、又刀自の三男貞美氏は現に陸軍中將として姫路師團長 伊東海軍大將の令妹八重子（四十七）を迎へて夫人となし、長女隆子（廿八）次女誠子（廿四）の外に三男四女あり隆子は吉田陸軍少佐の許に嫁されたが夫 戰死の爲に今は未亡人となり次女誠子は今夏文學博士桑木嚴翼氏の夫人となり一門彌が上にも榮えて、所謂春風堂に滿つの觀を呈して居りますがサテ道の芽出度い一門を作り上げた根本の幹ともいふ可き喜久子刀自は如何なる賢夫人であらうかと存じましたので、記者は目下刀自の寄寓せられる牛込加賀町の柳田直平氏方に訪問致しまして、現代女性の參考となるべき多くの教訓を得ました。

導かれて通りましたのは極めて淡如した日本風の應接室で待つ間程なく黄八丈の被布を羽織られた刀自は靜雅に出て來られましたが、雪とも見擬ふばかりの白髪を短く切下げたると愛の泉とも見るべき眼の如き雙眸とは先づ相對して春風に吹かれるやうな平靜和樂なる風丰で、而も何處かに犯し難い凛々しい威が仄見えて自ら尊敬の念が起ります。眼鏡こそ用ゐたれ之が八十歳の老媼とは何うしても思はれぬ程の細いけれども冴へたよく徹る聲で、加之極めて恭謙の態度で、私などは昔者で何も存じませんと、先づ其經歴から談緒を開かれました。

▲良人と死別後の苦心

私は信州飯田藩の生れで父が漢學者で厶いましたから幼少時から漢籍だけは割合に能く教はりました、それから十四歳の時に同藩の槍術指南役を奉じて居りました安東家に嫁しましたが、良人に死別れましたのは私が三十歳の春で、而も十四歳を頭に四人の男の子を抱へて居りましたから其保育には隨分骨が折れました。で小藩のことではあり素より富有の筈はありませんので、一年中蠶を養つたり機を織つたりして漸く一家の經濟を支えて居りました、然し何程苦しい中と申しても子供の教育だけは怠る譯に參りませんので、各々普通の學問は授けましたが何時まで田舍に置いても仕方がありません處から、長男が獨立の出來る樣に成たのを幸ひ夫だけ郷里に殘し他は皆私が連れて東京へ上りましたが、私は一時小供の教育費を補助する爲に小學校の教員を勤めた事が厶います。丁度其當時東京で師範學校と云ふものが初めて出來まして、小學教員を養成する目的で生徒を募つて居りましたから幸に私も入學致しまして二三ヶ月其校に居りますと、校長がお前は學力が充分だから此處に居る必要はない、殊に目下教員が不足で困つて居るから是非市内の小學校で教鞭を取つて與れろ、と云はれますまゝに最初は日本橋の坂本小學校、次に麴町の富士見小學校に奉職して居りましたが、都合によつて間もなく辭職致しました。それが恰度私の五十歳の時で、二十餘年の間小供の教育には隨分骨も折れましたが其甲斐には四人共相當の人間になつて與れましたから私は昔の身分に引比へて平生神樣に感謝致して居ります、それに孫共が、祖母さん私の處へ來て被入いイヤ此方へ來て居て下さいと彼方からも此方からも引張凧の樣に妾を大事がつて與れますので時々嬉し涙にくれる事も厶います。

▲松尾多勢子女史との交情

松尾多勢子と私の實家とは遠縁の親戚で幼少時から其名だけは聞知つて居りましたが直接お目に懸つて親しく御交際をする樣になりましたのは何でも妾が寡婦となつた後の事で、妾とは親子程年齡の違ふ年長者

でムいましたけれど終には實際の姉妹も及ばぬ程親密にして頂きました。尤も彼の人は元々豪農の家に生れて豪農の家に嫁したのですから格別深い學問を修めたではありませんが、斯樣云風に勤王に志したのも決して學問から悟つたのではなく一つは天性の男勝りの氣象と一つは時勢に深く感ずる處があつたからでムいませう。で多勢子が唯一の嗜好は和歌で、妾も同じ趣味をもつて居ります處から偶々詠歌を交換して娯んで居りましたが、最後に彼の人が京都をお發ちの時に恁云ふ歌を私に贈つて呉れました。

永らへて草の庵もありやとて
又渡りませ天のなか川



夫から彼の人、勤王の目的を達する事が出來たのは無論本人の手柄もありませうが寧ろ其良人の賜でムいませう、世間普通の夫なら縦令お國の爲とは申せ女が獨で飛歩くのだから必ず反對する處でせうが、多勢さんの良人は其志望を嘉し勵ますと共に潔く遠國諸國へ手離してやつたのであります。ですから先年多勢子に贈位の御沙汰の下つた時。松尾家の人々が多勢子の石碑と其良人の石碑との大きさが同じ位であつたのを、之では天朝へ對して濟まぬと云ふので特に多勢子のだけ大く建直すと申しますから、私は然樣事をするのは第一本人の志に反くのみな

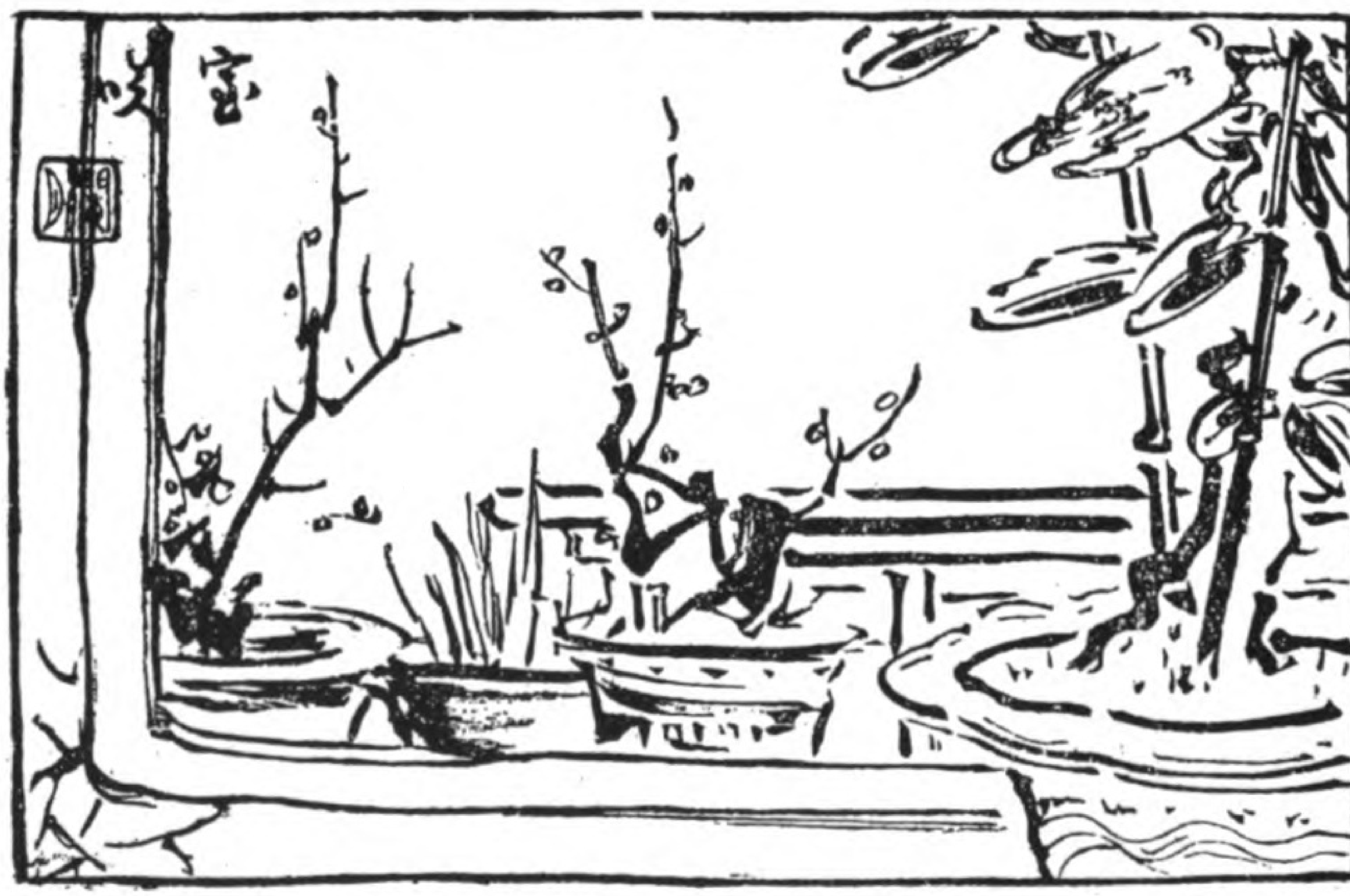
らず、元來多勢子が女流勤王家と謡はれる樣になつたのも一つは其夫の力であるからそれは宜しくないと反對致しましたので其儘中止になりました。又私は多勢子を親とも姉とも信じて居りましたから、餘程深く其感化を受けて居るやうです、次に私が師とも姉とも敬して第二の感化を享けましたのは三輪田眞佐子さんで御座います。

▲三輪田刀自との交際

私が三輪田さんと御懇意になつたのは猶且多勢子の紹介ですが三輪田さんと多勢子との交際は何れも京都で勤王の爲に働いて居ります頃、公卿や志士の間に出入して居ります内お互に肝膽相照す仲となつたのださうで、其當時三輪田さんは未だ處女であつた處から多勢子さんが媒介に立つて之も矢張り勤王家の一人なる三輪田綱三郎氏に嫁する事になりました。で私が信州から上京しやうといふ當時恰度多勢子さんが歸鄕して居りまして、頻りに三輪田さんの人格を推奨して是非一度逢つて御覽なさいと紹介狀を與れました。成程お目に懸つて見れば聞きしに優る立派な方で、年齡こそ私よりも下ですが學問と云ひ見識と云ひ、現代の數多き女流教育者中に此方程完全な仁はあるまいと今日でも深く尊敬致して居ります、其人格は勿論漢學の素養も大したものでしたが、然し漢學者の通弊とも申すべき頑固とか守舊とか云ふ嫌が更になく、常に西洋の書籍に目を通して新舊思想の長所のみを採用し夫から割出して凡て教育の主義を立てゝ行くのですから全く申分はなからうと存じます。又三輪田さんは當時有名の詩人であつた梁川星巖夫人の感化を餘程受けて居られる樣ですが、其女子教育に志されたのは良人歿後の事で、若し其良人が今日まで健在で居られたら三輪田夫人は一生涯賢母良妻で通されたであらうと存じます私の良人に別れたのは三十歳の時ですが三輪田さんの未亡人となられたのは五十三歳の時とか申されます、ですから私の方は若い時苦勞しましたが三輪田さんは年を老つてから苦勞なされた譯でムいます。

▲精神修養に資せる書籍

私が精神修養の資けになつた書籍と申して格別取出でゝお咄しする程の事も厶いませんが實父が漢學者でしたから儒教の感化は可なり受けて居るやうに思ひます、就中論語の中にある文句は立派な教訓だと存じますから今でも折々繙きます。又幼少時から嗜で讀みましたのは三國誌と水滸傳で、之は人の精神を奮起せしむる上に就て餘程功がある樣に思ひまして、小供等にはヨク是等忠臣義士のお説をして聞かせましたが非常に有益になつた樣に存じます、次に愛讀しましたのは白隱禪師と一休和尚の言行錄で、私は日本の名僧智識の中で此二人を一番信仰致



しますと共に又多くの教訓を受けました、人間も一休和尚や白隱禪師の樣に大悟徹底すれば誠に尊い者で、如何なる困難に處しましても決して慌てるやうな事はなからうと思ひます。私は何も精神修養が出來て居る譯では厶いませんけれども八十歳の今日まで隨分困難にも逢へば苦勞も致しました、分けて良人に別れた當時などは四人の子供を育てるに一通りの骨折ではありませんでしたが、元來が呑氣に出來て居る所爲ですが、今日ヨク流行致しまする煩悶とか悲觀など申す事は更に厶いませんでした、ですから今まで無駄な苦勞と云ふものをして覺えはあり

ません、唯だ自分の務めを勵んで元氣よく送つて參りました。今日の言葉で云ひますれば私の樣な者は樂天家とでも申すのでせう。それに私は哲學など云ふ六ケ敷い事は一向存じませんけれど、此頃横濱の高島（嘉右衛門）さんが易の本を贈つて下さいました其中に、靈魂不滅と云ふ事が書いてありまして、能く私の思ふ處と一致して居るので、斯いふ歌を詠んで送ました。

現身はあらずなりても靈魂は
消える世なしと聞くぞ嬉しき

兎に角クヨ〱詰らぬ事を心配するのが一番爲にならないと存じます、何でも氣を確然持つて自分の務むべき事を一生懸命に勵みさへすれば自然に樂みが其中に出て來るものと信じて居ります。

▲老後の慰籍は和歌と讀書

此樣に年を加つて隱居の身になりますと外に仕事がムいませんから毎日讀書と和歌を以て唯一の慰籍とも娯樂ともして居ります、殊に和歌は幼少の折から嗜好でしたから、今では東京でも信州でも到る處に歌道の友達が出來まして平生『天が下到るところに友ありて嬉しきものは敷島の道』だの又『同胞と契りし人を數ふれば故郷ひろくなりにける哉』など申して居る位で誠に故郷が廣くなつた樣な心持が致します。それで私は毎年冬になると信州へ歸つて冬籠りを致ますので、東京は勿論名古屋だの伏見だの姫路などの、平生仲の善い歌友が此寒空を態々信州の山奥で暮さずともモ少し温暖地方へ出て來ては如何かと種々親切に云つてくれますが、毎も

私しや信濃の雪降る里に
炬燵ばかりで冬ごもり

など洒落れて居ります、佷樣な次第で極く暢氣に愉快に暮して居りますから、薩張り無聊に苦むなど云ふ事はムいません。（濤涯）



冬の美――十月の巻

▲冬籠――金屏の松の古びや冬ごもりと翁も詠じぬ。まことに金屏に包まれて冬籠らば、墨繪の松の古びも氣になるべし。何に世渡る破庇の、隙洩る風を厭ひ寢の冬籠、そもや詫しきものゝ一つなるべし。樂しき冬を籠るにあらで、冬籠らねばならぬ身の果敢なさよ、かくてもやがて春は來るなり。

▲肩掛――風に襟をも吹かせじとや、塵に羽織を汚さじとや、いづれにしても形ちよければ羽しようるのいと輕きも、わがものと思へばぞ、霞しようるの美はしきも、花に匂への心ならん、三保の松影、天津乙女の松にぞ懸けし羽衣が、傳へて今に殘るとぞ云ふ。

▲炭――堅炭の堅ければ、爐につがれ、櫻炭の柔懊ければ丸胴の火桶に盛られて、客を待つ間の白書院に、灰の上なる糸遊も、偏に冬の馳走と云ふべし。枝炭の火ともなりては、梢の紅葉其儘に、消えて灰ともなりけん時、爐峰の雪に似通ふべし。黒白異同の辯はありとも、この炭までには及ばじとよ。

▲吾妻コート――雨に濡じの心によせて、吾妻コートの褄先長う、すらりと立ちし姿ぞ賢し。今はさまでに流行らじとも、昔合羽の俤ありて、今綾羅紗の十德に擬へり。風の吹く日も裾を亂さず、下には何を着る事ぞ、寢衣のまゝを遠く出づるも、人に目立たぬ德こそあれ。

▲衾――たしかに嵐雪の句と覺ゆ。猫の來ておもりにかゝる衾かな。それまで輕き衾ならば、嬰兒も夢に、うなされまじきを、重きが上の小夜衣、褄重ねする身の程は、上に簞笥の轉けかゝるも、知らず夜船の岸に寄るべし。

▲冬海――凄まじきものゝ一つとぞ。凩のこゝに吹き落ちては、勢一杯に入日の眺めも、沖に隻帆の影もなければ、浪の上行く浪ばかり、適に鷗の一羽も飛ぶ、島の汀に海女や興せん。

▲煤掃――雇へる人も雇はるゝも、同じ體裁の頰冠りに、疊叩いて塵を立つれば、お炊を胴上げの亂ともな

るべし。信玄の影武者も、七人あれば川中島の布團の上、同じ小僧の三人はあらん、軍配なくとも箒の太刀あり。蕎麥は來ぬかとのたまふ顔、そもや竹千代君に似たるべくや、可笑しき暮の戯れかな。

▲寒月――四十を過ぎし美人にたとへて、物凄きものの一つなり。瑠璃を流せる大空高く、風なく澄みし月の輝き、貧しき市の人なき大路を、隈なく映せし寒さの程、夜深ければ肌に粟、曉かくれば齒の根も合じ、高峰に吼る虎を聞かば、そもや丈夫も膽や消さなん。

▲古暦――用なきものとなり果てゝは、柱に貼れる古暦も、歳暮の鮭の背越しに隱れて、二四六九小も、一三五の大も、共に今年の名殘となんぬ。人住まずなりぬ柱の古暦とまでなり果てゝは、一汐哀れ深きにあらずや。

▲クリスマス――耶蘇復活の日なりとて、バザーもこゝに開くるなり。翫具に祖父も手を拍ちて、老を忘る祭とこそ、夢に入りたる稚兒の寢姿、聖き影の宿れるは、イエスの神と知るやそも！。

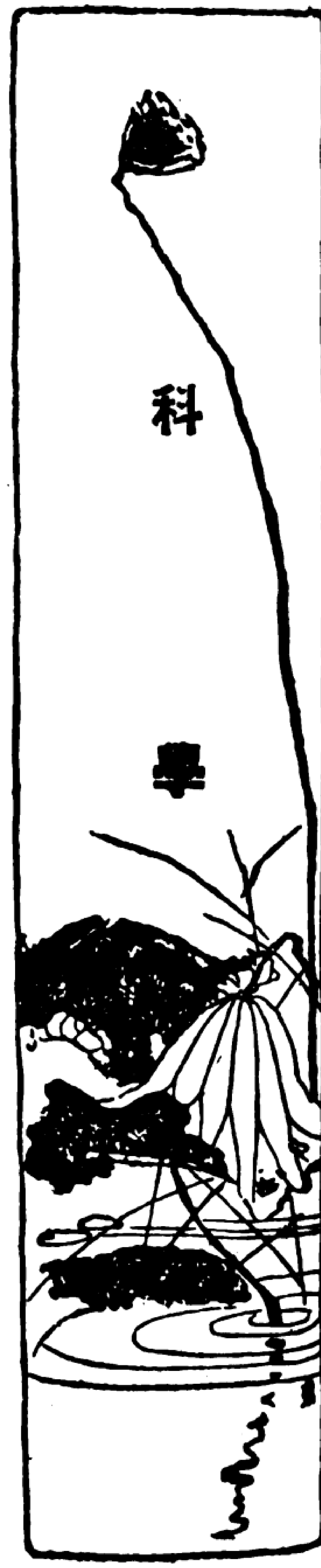
▲餅搗――力自慢の作男が搗きたる餅の豊かさよ。色の白きを自慢なる女恥ちよの色冴えたり。家は寒きに障子をはづして、ざんざめきたる庭の賑ひ、芽出度き暮の有様ならずや。

▲寒詣――迷信とな云ひ給ひそ。骨にも泌むべき夜風を突いて、白き單衣にちん〳〵千鳥飛ぶよ大路の幾群は、寒に入る日を身に浴びて、我腕進めの願事とぞ。神に御靈のおはしまさば、必らず叶へ給ふべし。さらでも、肌を風に任さば、病を拂ふ一つとならん、老いては出來ぬ業なるを。

▲冬休――短かき冬の休みとなりぬ。今年の業も營み果てゝ、春を待つなる學の窓に、歌留多も時の興なるべし。まつとせきかば今歸るの、報せは近き故郷に宛てゝ、二日路程の汽車の旅、それも可笑しき一つならん、袴は暫らく行李の中、靴は暫く庭の隅、椽に手毬の乙女いみじき。

▲除夜――明日元日を待てよの聲が、今日を送りの哀れな響きか、百八の鐘を炬燵に聞いて、餅に訪ひ寄る鼠を追ふも、今日を名殘の罪と思へば、鬼もやがては禮に來るべし。

（江　堤）



鳥の季節

駒場生

鳥の巣と雛

(鳥類哺乳叢話)

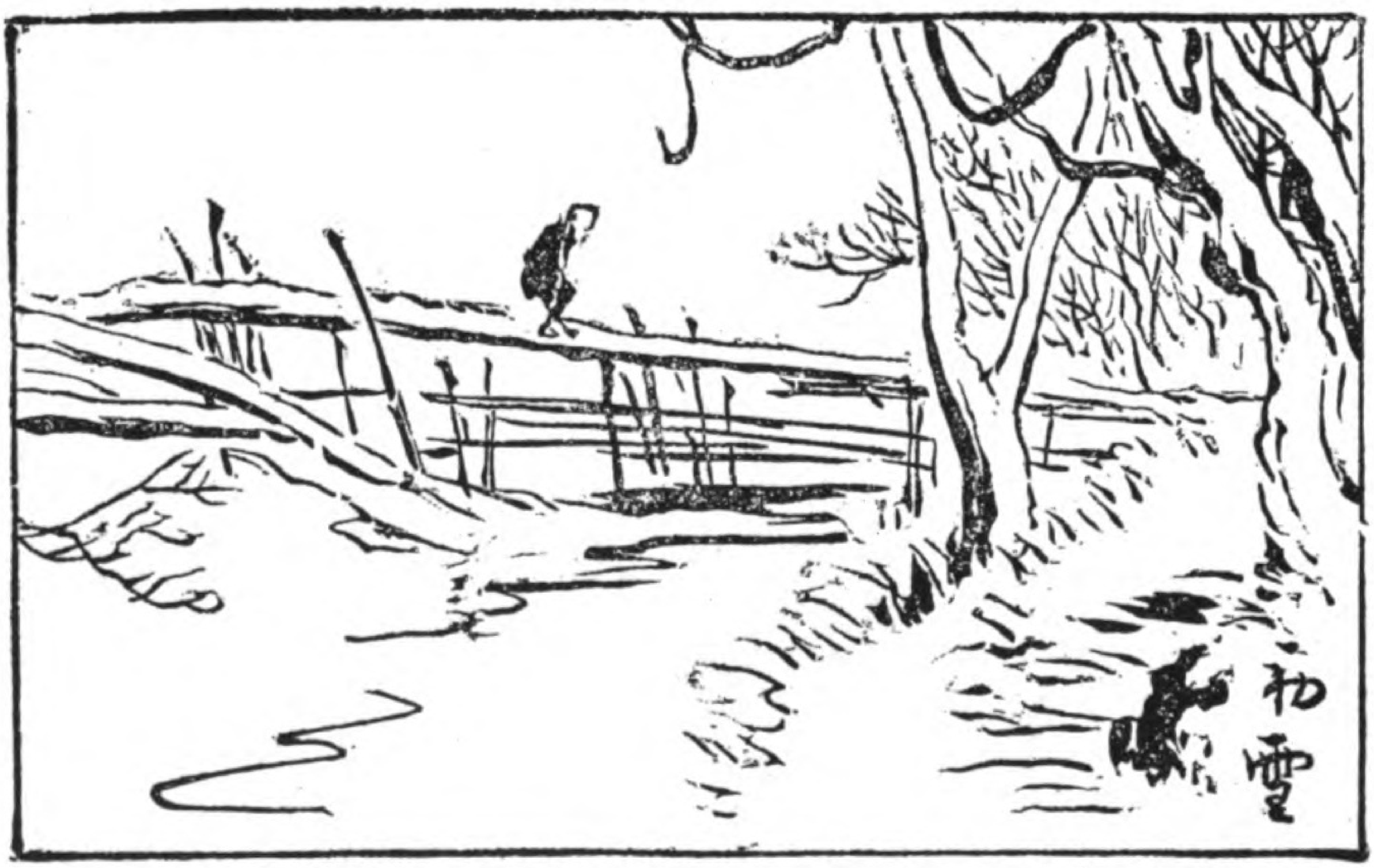
動物學の一班を窺はない人達は鳥だの獸だのに就ては唯漠然とした考を抱いて、禽獸等といへば全く吾々人間から飛び離れたものゝ樣に思はるゝ樣ですが、今日の博物學上の見解は、人間も矢張動物の内に入るべきもので唯他の動物に比べて智力の發達が著しく超越して居ると云ふに過ぎません。實際澤山の動物の習性を注意して觀察しますと、幾分か吾々人間のする動作に似た所がありまして、隨分面白い事があります。例へば鳥と人間とは餘程違つた形を持つて居ますが、雛兒のする事は小供のする事に似て居る。甘へたり泣いたり巫山戲たり喧嘩したりする樣なものである。併しこれを委しく紹介するのは到底出來ませんから、少し鳥の巣と雛兒の話しをいたしませう。

鳥の巣といひますと、必ずしも子を育てる爲めのものでなくて、時には平常の棲家として又は娛樂的に營むものもありますが、多くは卵を暖める所です。巣を作る場所は千差萬別で、鳥の種類によりまして各其生活に應じて撰ぶのであります、例へば雀は始終市街に棲んで居る鳥ですから軒に巣を營む、燕も同樣で軒下

だの煙突だのに巣を造ります、溝の中を飛び廻る鷦鷯の巣は石垣の間などにある、山林に棲つてる鳥では樹の上にするものが最も普通で鳩、烏、鷲、鷹等皆これです、鶴、鵠等の巣は高い樹の頂上にありますから遠方からでもよく見えます、低い木の間や雑草の茂つた間にするものも非常に多くて、鶯、目白、頬白、鶲、百舌鳥等の小鳥類は大抵これであります、梟、木兎は大きな樹の洞穴の中にする、雉山鳥などは地面を走り廻る鳥ですから直接地面の上にします、鶺鴒、岩燕等は岩の間や崖の中腹にするもので、水雞は水邊の草叢の間にするものです。

巣の大さには色々あり又、形にも種々ありますが、材料は皆其鳥の生活状態に好都合のものを集めるのです、雀の巣の中には古新聞の破れだの藁だの髪の毛だのが交つて居ますが無論塵溜から拾ひ上げるのでしやう。烏や鳶の巣は枯枝が主で竹片なども交つて居ます、小鳥の巣は枯草竹の葉、小枝などで出來て居ます、南洋の海岸では斷岸絶壁の岩角に燕の巣があつて柔かな海草で出來て居るから、土人は繩にぶら下つて此巣を取り食料品として賣るのであります、北方に居る水鳥は草木のない無人島に上つて卵を產みますが、別段巣らしきものはなく、唯石塊を集めて凹みを拵へる丈けです、駝鳥は砂漠に居る鳥ですが之も穴を堀る丈けです、翡翠は河の岸に棲つて魚を食ふ鳥ですが、魚の骨を集めて巣を造ります、燕や紅鶴は小石や泥で造りますから鳥渡土藏造りといふ格です、鳩は枯れ枝等で造りますが之れは名高い粗末な巣で下から卵が透いて見えます、昔神様が鳥に巣を作る事を教へられました時に、鳩は居睡をして居たといふ御伽話があります、葦切又は行々子といふ鳥は枯葦を綴つて巣を造ります、四十雀、山雀、鶯などのよく歌ふ小鳥は巧妙な巣を造るもので、球形の壺を横にした樣な形のもあり、木の葉を集めて葉と葉との間を縫ふのもあります、そして其巣の内側は美しい羽や綿で敷きつめ、苔で屋根を造つて其裏を蜘蛛の巣や山繭の糸で張つて水の通らない樣にする、乞食の小兒なんぞがこんな巣の中に居

て飽食してる雛兒を見たら、羨ましくて堪らないでしやう、シリア地方の山雀には巣の外側までも飾りたてるものがあつて、眞珠光りのする昆蟲の翅などが並べてあると云ふ事です、燕の一種は蛇の脫殼を集めて巣の內側から外側に引張つて置くそうですが、いくら裝飾でも人間が見たら慄然とするでしやう、ヤツガシラといふ鳥は其容は誠に優美な鳥ですが、汚ない壞れ物や糞尿で巣を造る、支那や西藏では墓に埋めてある棺の中を大變好む鳥類があつて、大抵一つの棺には一個の巣があり、丁度屍體の胸のあたりにあるそうですが、人間から考へると酸鼻な次第ですが雛は無論平氣です。



斯の通り巣に巧拙の差はあるが、兎に角巣が出來上りますと雌鳥はそこに卵を産み落します、大抵は春から夏の初め頃ですが、食物の最も多い時を撰ぶのだから、必ずしも春夏に限りません、秋や冬に子を育てる鳥もあります。

卵の大さや色は各異なつて居ます、鶯の卵は赤黒い色の小さな卵であるとか、目白の卵は薄桃色であるとか、頰白の卵は白色で細い黒線があるとか、雲雀の卵は一面に黑褐色の斑點があるとか、駝鳥の卵は大きくて瓜位あるとか云ふ樣な工合です、色や斑紋のある卵は地面又は上の開いた巣に多く、中には其色

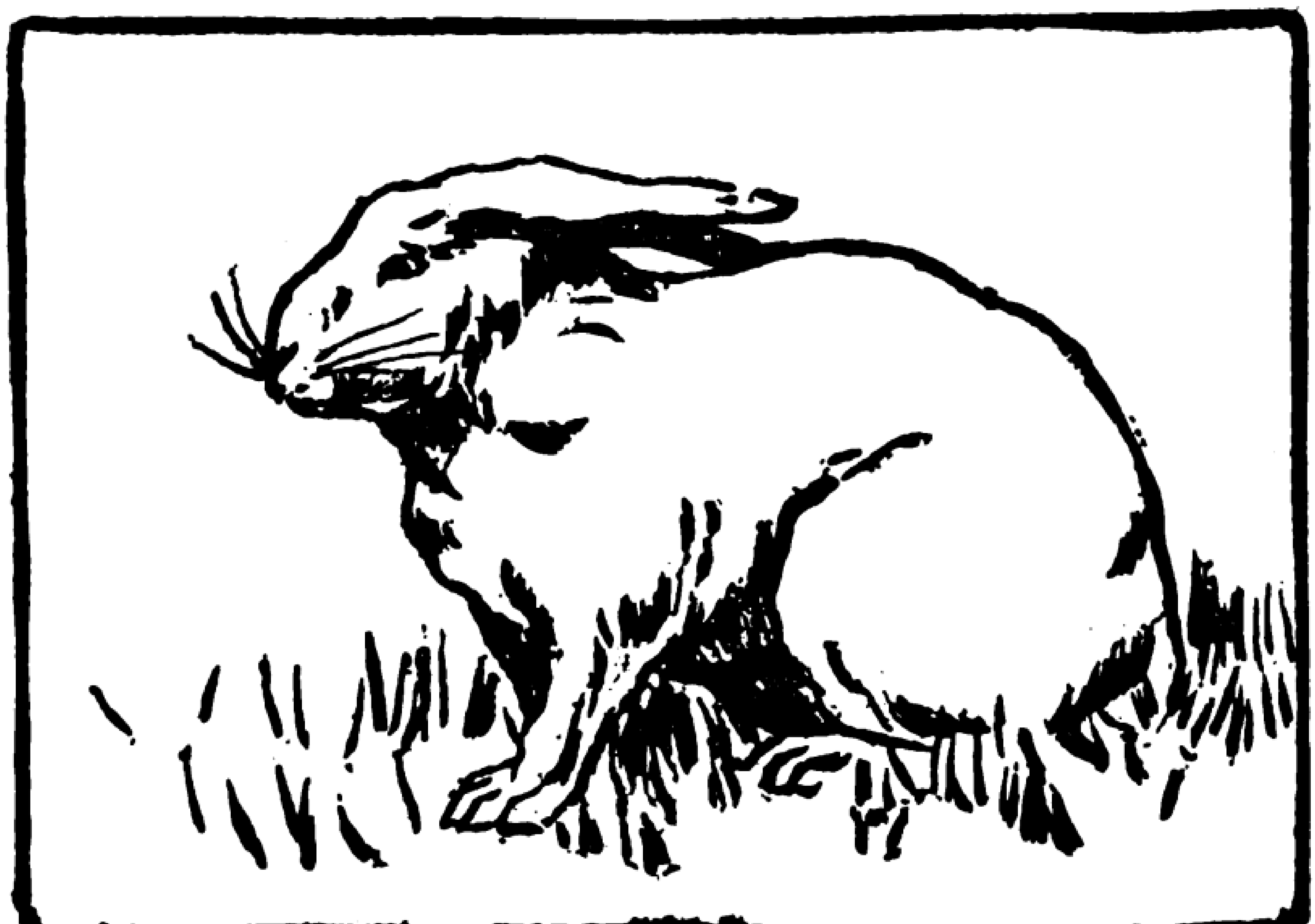
彩が周圍の色と同一で見分けの付かない樣なものもあります、之れは他の動物の容易に見附け難い爲めに出來て居るので、所謂保護色の一例です、卵の數も鳥によりて違ひます、鷲や鷹は一個、鳩は一個又は二個四十雀は八個乃至二十個、雉十二個梟は二個乃至四個等です、此數に達しなければ温めません、奇妙な事には雉だの駝鳥だのには落し卵といつて巢以外の處に產んで顧みない卵があります、雞の卵は人間が毎日泥棒をして仕舞ひますから、何時まで經つても數が足らないと思つて一生懸命に產むのであります、兎に角巢の作り方、卵の形、色、大さ等は鳥によりて皆違ふから、色々な鳥の巢を集めると頗る面白い、西洋などには丁度骨董でもいぢる樣に是等の鳥の巢を採集して貯へるヿが流行してゐるそうです、鳥になつて見たれば迷惑此上もないでしやう。

卵を温めるのは雌鳥ですが、稀には雌雄交代に温めるものもあるそうです、南米に居るアメリカーナと云ふ鳥は雄鳥が卵を温めると云ふ事ですが、人間に譬へたらどんなものでしやう、いづれにしても親鳥は殆んど寢食を忘れて巢の上に座つて居まして、其熱心は非常なものです。

所が茲に例外があります、それは捨兒否捨卵をする鳥です、昔から人口に膾炙して居る「郭公は鶯の繼子だ」と云ふ句がある通り、郭公は自分の巢を作らないで、鶯鶲鶺鴒鵯等の巢を搜し出して、主人の留守に卵を預けて置きます。併し鶯だの鷦鷯だのゝ巢は苔や枯草などを堅めて球形に塗込めたもので、一方に小さな出入口がある計りですから、郭公にはとても這入れない、又上の開てる巢にしても多くは草だの木だのが密に茂り合つた中にありますから、郭公の樣な比較的に大きな軀體や長い尾を持つた鳥は、此處に來て卵を產み落す事は出來ない、それならば何麼事をするかと云ふに、外で產んだ卵を口に啣へて來るのでせう、巢の主はそれとは知らないで皆自分の產んだ卵だと思つて、一生懸命に育て下げると郭公の子と自分の子とが出來るのであります、家鴨の卵を雞に温めさせると、雞は自分の卵のつもりで育て上げるが、雛は暫くすると水に入りたがる、親鳥は氣を揉むと云ふ滑稽がありますが、それと同樣です、こんなに他の鳥の厄介となつて育つ鳥は他にもありまして、アメリカに居る椋鳥にもあります、少し六ケ敷い理窟ではあるが、郭公は何故此麼狡猾な事をするかと考へて見ると、郭公では雄の數に比べて雌の數が非常に少ないのと、此鳥は始終居所を換へるの

でける〱巣を營む暇がないし、又靜かに巣の上に坐つて居る暇がない、殊に郭公は一つ卵を產んでから次の卵を產む迄に數日の間があるから。巣を造つて自から暖めると非常に早く孵化する卵と遲く孵化する卵があつて實に都合が惡いから、經驗上から此應便利な方法を覺えたのでせう、其證據には同じ郭公の類でも米國に居るものは、自ら巣を造つて卵を孵化するし、又歐洲に居るものでも時々甚だ粗糙な巣を作つて卵を溫めるものがあります、併し經驗といつても決して一代ばかりの經驗ではない、先祖の鳥が經驗上より得た智識が幾分か其子に傳はつて長い年月の間に次第に積み重なつて、終に此鳥の習性となつたので、生れてより後に敎へられたのでもなく、又他の鳥のする事を見倣つた譯でもありません、此習性が即ち本能であります。

さて親鳥が精出して卵を溫めて居ますと雛が出て來ます、暖める間の日數は鳥によりて差があつて、雞ならば三週間家鴨は四週間足らず、駝鳥ならば七週間です、雛は中から嘴を以て殼を突き破つて出るのですが、鳩の一種メンフラーでは自分で破ることが出來なくて、死んでしうまものがあるから、飼主が世話して出してやる、云はゞ人間が產婆の役目です。



卵から出た儘の雛兒に時として綺麗な愛らしいものもあるが、大抵は隨分見苦しいものです、勿論親鳥の目から見れば決して醜いとは思はれないでしやうが赤裸のむき出しで眼玉の所は未だ開かないで紫色である、おまけに口が不恰好に大きく、どう見ても醜いとしか云はれません、併し雛兒でも雉や鷄のは生れると直く勢よく走り歩いて、實に愛らしいものです、醜い形の雛も時日が經つに從つて毛が生へ、眼が開く樣になりますと多少可愛らしく成ります、唯軀體の不釣合な事は長い間直らないで、千鳥などは未だ發達しない翼や尾

に比較して足が馬鹿に長く、いくら力を入れて立つても今にも引繰返りさうで危險千萬な感がします、濠洲に居る野雁の一種の雛は、喉の下を膨らし尻長を高く上げて頗る奇妙な形をします、又鷲だの隼だのゝ雛は、頭上に冠の樣な白い綿毛があつて、中々厳めしい面構ですが、悲しい事には腰の方が未だうまく立たないから、尻餅をついたきりです。

雛の仕事は喰ふことが第一です、未だ眼の開かない中から、親鳥が來たと知つたら、潤い口を力一ぱい擴げて、餌を落してもらう、親鳥は終日餌を運んでは雛兒に食はせる、これは燕の子を見て誰れも知つてる事であります、併しもつと奇妙な方法で養つて貰ふ雛兒も隨分あります、鳩の子の口中を見ると、鳩の乳といつて白い汁があるが、之れは親鳥が雛兒の喉に嘴を押し込んで注ぎ入れたものです、鵜の中には丁度之れと反對なことをするものがある、即ち親鳥が雛兒の口に嘴を入れるのでなく、雛兒が嘴を親鳥の喉に突込むのであります、鵜は水の中を潜つて小魚を充分丸呑みにすると巣に歸りますが、歸るといきなり、、、雛兒の頭を呑み込むのであります、雛は之れより深くは翼が邪魔になつて這入れないといふ處まで首を突込みまして、今親鳥が食つて來た小魚を頂戴するのであります、實際に此れを目撃すると實に面白いが、雛兒は薄い毛が生へて皮膚の色が紫黒色であるから、頗る見苦しいものである、ペリカンと云ふ鳥も矢張自分の食物を雛兒に取らせるものであります、昔の西洋の諺には自分の胸から出した血で其子を蘇生させる樣な事がありますが、それは嘘で、此鳥は下の嘴に大きな袋がぶらさがつて居て、食つた魚を此處に充たして置いて、雛鳥に取らせるのである。

雛兒も初めの間は巣の中におとなしくして居ますが、暫くすると時々巣を飛び出して、親鳥が餌を持つて來るを迎へに出ることもある、地面にある巣は特に多くそうです、併し食物の爲めでなくて運動をするものがあります、南米に産するホーチンといふ鳥は、極幼稚な時から木登りの藝當をやるので名高いものですが鳥の翼は一寸見ると吾々の手とは丸きり形が違ひますが、中の骨を調べて見ると、指に當るものが明瞭にあります、ホーチンの雛兒には、親指と前指とに當る處に小

さな爪があつて、之れを枝に引掛けて、巣を匍ひ出して、枝から枝へと旅行するのであります、其進み方は隨分危い藝當で、丁度赤ん坊が襖だの戸棚だのにつかまつて、危く歩行するのと少しも違はないのです、此爪は雛兒の時にのみ用ふるもので、飛ぶ力が出來ると落ちてしまいます、此鳥の博物學上面白い點といふのは、此れが今日生存して居る鳥類中最も幼稚な形のものであると云ふ事です、元來生物といふものは幾千萬年を通じて一定不變の體形や習性を持ちて居るものではありません、今日の生物はずつと昔の生物から色々と變移してなつたもので、此事を生物の進化と申しますが、昔の鳥が地面の下に埋れて、化石となつて表はれたものを見ますと、鳥類は爬蟲類即ち蜥蜴、鰐魚などの類と、共同の祖先から進化したものであることが



解ります、ホーチンは此祖先の形から鳥類に進化した第一歩の形で、云はゞ鳥の中で先祖に近い、從て爬蟲に近いものです、ホーチンの翼は生長した後でも甚だ不完全で、到底上向けに翔び上ることは出來ない、唯高い枝から低い枝に移る時に用を爲す許りであるにも係らず、雛兒の時には他の鳥には到底出來ない木登りや枝渡りの藝をやることは、明かに其證據であります、尤も卵を出づる前に、今述べた樣な爪を持つて居るものは間々ありますが、實際使用するのはホーチンばかりです、雛兒の内で碗白なのは梟です、梟の子は眞白い綿毛で包まれたよく肥へた雛兒ですから、宛然たる白粉刷毛で、見た處甚だ柔和な樣に見えますが中々どうして、兄弟喧嘩もすれば親鳥にも突き

かゝる、うつかり巣のある洞の中に手でも突込まうものなら、痛い程突つゝかれます。

併し多くの場合に雛兒といふものは、實に弱々しいもので、親鳥は少しの敵でも皆防いでやる、親鳥も之れには隨分苦心します、鴫の巣が近傍に人が近づくと、親鳥は態と人間の近くに寄つて、跛歩を引いたり、羽を痛めて飛べない樣な風をして、人間を外の方へ誘つて行かうとすると云ふ事ですが、雀は蛇の通つて來る路に硝子や陶器の破片を植えつけて防ぐとの事で此他にも雛兒自身に護身の方法を有するものがあります、即ち羽毛の色が周圍の植物や土石の色に似て居て、實際雛兒が動かなければ、中々見附からない位です、雛兒の方でも亦遺傳的本能があつて、此保護色は最も安全なる身の守りであることを知つて居るから、早くから之れを利用する、圖は鴫に近いストーンカアリユーと云ふ鳥の雛兒であります、卵から出たばかりの雛兒は、何か奇難が迫つたと思ふ時には、砂地に砂色をした軀體をピツタリくつゝけて首を成る可く前方に延ばし、身動きもしないでジツとして居ますから、土の塊の樣で中々見附からないのであります、生れた計りの雛兒がこんな上手な隱れ方をするとは頗る驚くではありませんか、之れも前に述べた本能であります、鷄や家鴨の兒は犬猫はさまで恐れませんが、鼬鼠等は非常に恐れる、雛兒の頭腦で犬猫と鼬鼠とを識別する力はありますまい、之れは犬猫も鷄の先祖は大に恐れたに違ひないが、慣れるに從つて恐れなくなつて、それが遺傳して來たものでしやう。

時には多くの雛兒が狹い巣の中に居て、ゴチヤ〳〵の合宿所の樣な暮し方をするものがあります、小鳥の巣は大抵五六匹の雛兒で一杯になる位ですが、小鳥は前に述べた通り子澤山のものだから、十二三匹の雛兒が上になつたり下になつたり、朝から晩まで頭の踏み合ひをやつて居ます、郭公の雛兒は大きくて力が強いから、鶯の雛が巣から押落されることがよくあるそうです。

小鳥の類では穀物を喰ふ鳥でも、雛兒の時は虫で養

はるゝものであるから、六匹位の雛を養ふにも親鳥は早晨から黄昏まで、毛虫を集めるのに忙殺さるゝ有樣です、鳥が食物の多い折を選ぶのも此爲めです、雛兒の喰ふことは中々盛んなもので、生長の早いのも其結果でしやう、雛がいよいよ巣を見捨てゝ巣立ちをする樣になりますと、今まで飛んだことの無いのに、譯なさそうに飛び出します、初め少し難澁の樣でも暫くの間に熟達するのであります、鷄は雉は孵化すると直樣走り廻るが、當分は親鳥が伴れて廻る、肉食鳥等などになると、餌を捕へるのに大分練習を要しますから、長い間親鳥と一緒に飛び廻る、それでやつと一人前の鳥となるのであります、鳥によりては候鳥といつて、冬は暖かい國に移轉せねばならぬものがありますが、方角も何も皆目解らない、茫々とした大洋を横ぎつて初旅をするとは、實に大膽なものではありませんか。

之れでざつと卵から雛の生涯を述べたのでありますが、序に雛兒の毛色のことを述べやうと思ひます、進化論で有名な英國の學者ダーキン氏は、多くの鳥を調べて次に記す樣な決論を得ました。

第一、雄の方が雌よりも美しい鳥では、雛兒の羽毛の色は雌の方に近い、
此例は多くの鳥の場合が皆そうです、

第二、雌の方が雄よりも美しい鳥では、雛兒の羽毛の色は雄の方に近い、
此例はあまり多くありませんが食火鳥などは之れです、

第三、雌雄同じ位の美しさの鳥では、雛兒の羽毛の色は一色特別の色である、
白鳥の子は少しく色があり、丹頂鶴の子が茶色なのも此例です、

第四、雌雄同じ位の美しさの鳥では又、親のものに似て居ることがある、
鴛鴦、翡翠等は之れです、

第五、親が冬と夏とで羽色が變る場合には、大抵は冬の羽色に近く、稀には夏のものに似る、そして雌雄色を異にする場合には雌に似る場合があり、雌雄同じ樣な時には、兩方の色に似たり又は全く別な色であります。

第六、稀に雛同志で雌雄色の違ふことがあつて、雌は母親に雄は父親に似る事があります。

つぐみなどは巣に居る時から雌雄が分ると云ふ事であります。

處で此法則の意味を考へて見ると、面白いのであり

ます、第五、第六は複雜だから、預りとして、第一と第二では雛は美しくない親に似て居る、生物は進化するから、鳥の羽も次第に變化し來つたものであるが、美しくない方に似て居る事は此色が昔時の色に近い色で、美しい方は或原因（此原因に就ては色々議論もあるが）の爲めに著しく變化したものであると云つてよろしい、第三では兩親共に變化したもので、第四ではあまり變化しなかつた事が解る、かう云ふ風な進化の徑路を、實例と理論で研究するものが即ち進化論であります。

裁縫の德

一家の主婦たる者が家政を整理する上に於て裁縫は缺く可からざる業務なれば、貴賤貧富に拘らず婦人處世の一要務として、よし自ら手を下して爲さゞるも、必ず普通裁縫の心得は何人もなかるべからず、之れ既に婦人の一般認識する所にして今更ら喋々の必要を見ざるものなり。

婦人が一家の主婦として家政の衝に當り、萬事を處理する上に於て必要なる精神上の要素、四ツあり曰く忍耐、曰く綿密、曰く節約、曰く清潔、而して此等の諸德を修養するの時期は是非共子女教育期に於て之を望まざるを得ず、教育上直接に此等の諸德を涵養するの道は修身學あり、家政學あり、理科學等ありと雖ども予輩は寧ろ女子教育上、殊に此等の諸德を涵養するに恰當なる間接の學課は裁縫術にありと信ず、裁縫は固より一科の技術に相違なけれど其技術中に存する精神をば適當に發揮し應用せんには將來婦人が家政を整理する上に於ての利益蓋し、少なからざるべし、何となれば裁縫術なるものは頗る忍耐を要し、綿密、節約、清潔を要するの業務にして衣服を裁縫するの際もし此等諸德の一たりとも缺ぐる事ある時は到底完全なる仕立物を仕上る事能はざればなり。故に裁縫術には必ず家政上に必要なる此等の諸德を履行實踐せしめざるべからず、裁縫課教授上に於て此等の諸德を涵養せしむるは女子教育上殊に將來家政の衝に當るべき一家の主婦たるものを養生する上に於て切要なるは勿論なり。

自由結婚說

神學博士　リギヨル

今日の如き文明の世の中に自由結婚說が流行するのは洵になげかはしき事である、就中日本の如き女子の淑德の名高き國に於て如此忌はしき說が漸く人の口に上て來ると云ふのは、外人ながらも此の東洋の君子國の爲に殘念で堪らぬ、今や自由結婚說は滔々一瀉千里の勢を以て全世界にはびこり、公然之を口にし、公然之を實行するものあるも、人は何とも思はず、憂世愛國の士すらも之れを憤慨せず、社會の公德すらも之れを默々に、附して置くやうな形勢となり、天下の青年男女が滔々相率ゐて此の暗潮に入るのは、社會の道義の爲に將又國家の將來の爲に眞に寒心すべき現象と云はねばならぬ。蓋し日本の青年男女の多くは自由結婚說とは如何なる性質のもので、又如何なる人が主張しつつあるかを知らぬであらう、余は之が詳しき事は他日書に筆して之を公にする積であるが、今玆に其の一端だけを御話申上げやうと思ふ。

自由結婚說の由來

自由結婚說が如何なる原因より出で來れるものかと云ふに、人は一寸聞て信せぬであらうが、實は家庭を破壞せんと欲する革命論者の底意より起つたものである、御承知の通り革命主義の原理は彼の民約論の「人は自由に生る、然るに到る處桎梏の裡に在り」と云ふ初一頁の言に含まれてある、自由と云ふものは人の一番氣に入るもので、人生の大好物とでも云ふべきものであるから、革命論者は此の自由と云ふものを利用して、否、濫用して、人間社會の萬事を破壞せんと企てたのである、乃で玆には家庭を破壞しやうと云ふところであるから、自由結婚說と云ふものを唱道し、家庭の根本となるもの即ち婚姻を第一着に亂さうと企てたのである。

自由結婚と云ふことも之を正當に解して、一男一女

が父母などの意見を伺つた上、自由意志の撰を以て婚姻を執行ふと云ふ意味に解けるならば毫も差支はない、寧ろ是れは知慧分別自由の德を備へて居る人間の取るべき道である、然しながら革命論者の意は決して玆に在るのではない、家庭を根本的に破却せんと云ふ腹の黑い心より出るのであるから、自由の正解者とは天地の相違がある、今革命論者の深意を簡單に述ぶれば左の如くである。

家庭と云ふは人間の樂むべき所で、謂はゞ現世の極樂である、處が今迄のやうな家庭制度では人間は迚も樂むこと出來ぬ、何せなれば男女一たび約束して夫婦となりたる以上は、一生の間、夫婦の義務だなどと云ふ美名の下に相互に縛られ、相互に繋がれて、身を終ふるまで離れること出來なくなり、甚しきは自分一身の處分さへも出來ない有樣となつて居る、是れ豈奴隸中の最も甚しき奴隸ではあるまいか、此の如くんば、人間の自由と云ふものは何くに在るか分らぬ、人間は自由に結婚すれば、自由に離婚も出來る譯である、何を苦んでか人間の第一に樂むべき家庭に於て義務づくめにされて一生自由を獻げなければならぬ理屈があらうぞ云々と。

是に於て乎盛んに自由結婚說を提唱し、天下の靑年男女たるもの、今迄の窮屈な法則の下に縛られる譯はない、自由は天賦の德である、宜しく結合したければ結合すべし、離れたければ離るべし、相互の間には自由意志の外他に規則と云ふものあるべき筈がない、と斯う言ふのである。

然し自由意志によりて結合するはよいが、今迄の國法をも、道德法をも、習慣法をも打破りて、未だ結婚期に達せぬ內から自由結婚された日には大變である、それも結婚のときは自由で、後は永久繼續して行くのなら善いが、彼等の所謂自由結婚說は直に是れ自由離婚說なので、婚姻は今日行はれて、明日破れても、一向差支はない、合はせものは離れものだと云ふのである、然しそれは先づ善いとしたところで其間に子供でも出來た日にはどうなるであらうか、誰が之を養育す

るのであらうか、彼等は曰ふ、養育の任は社會に在りと、社會は實に大變な迷惑である。

是れ實に自由結婚說の由來であるが、之を主唱し、之を實行したるものは誰であるかを語らなければならぬ。

自由結婚說の宣敎師衆實行者

余は其の最も名高き人を擧げる積であるが、それは日本にも疾から名前の知れて居るジャンジオーク、ルーソーである、彼は自由結婚說を人に敎へたばかりではない、自ら之を立派に實行した人である、而も一生之を實行したのである、御承知の通りルーソーは一回も家庭を作つたことのない人である、然し子供は澤山あつた、是れは皆んな自由結婚の結果である、彼が種々の婦人と自由結婚を實行したことは、誰も知らぬ者はない、然し其の子供は如何したかと云ふに、御主義の通り皆な之を棄てゝ了つた、養育の任社會に在りと云ふ積であつたかも知れぬが、社會は乳母ではない、



自ら之を養ふことは出來ぬものである、去りとて子供に、罪はない、之を見殺しにする譯にもゆかぬ、可哀想な話であるが、元來義務づくめの話の大嫌なルーソー先生は之を養育するの義務ありとは思はぬ、矢張り御主義を飽迄も實行せんため、子供を殘らず捨兒にしたのである、幸に此時宗教社會の慈善家が之を拾ふて育てたのであるが、此の先生にしてエミールを著はして教育の事を喋々したのは滑稽の極である。

世に慈善家がありさへすれば、人の子を育てるに於て差支はないと云ふものゝ、若も慈善の德が薄らぎて萬事金の世の中となつた日には、人の子を育てる婦人は一人もあるまい、あれば大金儲をしやうと云ふ者に限る譯である。

偖此等の事柄に議論を費すと云ふことも、無駄であるから、自由結婚說は其儘打棄てゝ置いても善いやうなものであるが、然し日本の靑年男女の間には流行せたくないものであると云ふ老婆心より、議論ではなくホンの注意的一言を獻上して見やうと思ふ。

自由結婚說の大打擊

茲に一の誰も考へぬ事がある、元來自由結婚と云ふことは人間のする業ではない、動物のする業であるから、此後自由結婚者に限り、人間社會一般の法律を廢して、動物社會の法則を當篏めるやうにしたならば如何かと思ふ、御承知の通り動物は多く自由結婚者である、一たび相見て相交はり、後又直に相忘れて了ふ、此の理由は動物の中には育兒の任が牝のみで擔當するからである、牛、馬、犬、猫及び家禽は皆其の通りである、然し牡の助力を要する動物に至るときは、人間の自由結婚者よりも夫婦仲が善く、相互に忠實に扶け合つて居る、それは兒が自由なる天地間に一本立の出來るまで、其の通り繼くので、愈よ兒の獨立を見るや茲に初めて牝牡寧ろ雌雄が夫婦離をするのである。(禽鳥は大抵その通りである。)

處が人間には母ばかりでは一人で子供を育てゝ行くとは出來ない、是非父の力を要する、故に父なき子を以て人生の大不幸となすのである、實を言へば、人間

社會に於ての子供の教育は父母の壽命の繼くまで繼くと言つてるがよい末子が一人前になるときは、父母は最早六十歳以上に達して居る、此の如き老夫婦に向つて自由結婚説でも、自由離婚説でも持出すのならば、差支はない、夫婦の義務と父母の義務を充分盡した後であるから、彼の禽鳥社會の雌雄が兒の發達を見て初めて自由離婚をすると同樣、大害はないのである、處が今日の自由結婚論者は此の如き老夫婦には決して其道を弘布しないで、却て天下の青春妙齢なる男女にのみ自由結婚説を鼓吹のである、然し家庭及社會の將來は丁度此青年男女に繫つて居るを忘れてはならぬ。

右は議論でも何んでもなく、ホンの注意までの話である、動物の規則を人間に當欲めるのは、餘り人を侮辱した話だが、然し自由結婚者は自ら動物になりたいと云ふのであるから差支はなからうと思ふ、自ら侮つて後、人之を侮ると云ふ諺は丁度此に適中して居る。

交際上手

米國婦人の交際上手な事は必ずしも學校で練習させる次第でも無く、家庭傳來の自然教育によつて知らず〳〵巧くなるのです。學校でも女禮式のやうなものを教へる處はありますが、唯だ相手に善感情を有たしめ惡感情を有たしめない樣にとの精神で、何々の場合何の話を持ち出してはならぬと云ふやうな呼吸を呑み込ませ置きます、徒らに形式的の虚禮ばかり教へるのではありません。御承知の通り米國の婦女子は、快活で臆面が無く、席に着くにも互に讓り合ひもせず、招ぜられた通りズン〳〵着席すると云ふ風で、チヨツト荒々しい樣に見えますが、さて相談の際談話を致すのは、却て我國近代の婦人方より秩序ありて愼み深いやうです。我國の婦人方は家の中だけの事は立派に出來ますが、社交場裏に立つて外國婦人と列ぶ時には、モ一一呼吸と思はれる點が見えます。勿論家庭も大切でありますけれども、今後追々外國婦人との交際頻繁となるのは自然の勢ひですから、交際には善く熟練して置かればならぬと存じます。西洋婦人は社交に忙しくても、家の內は却々整然と片付けて、下女なども實に善く仕込んで居ります。これは周圍の空氣も違ふのですから、一概には申されませんが、要するに一家の規律を嚴重にして居るので、內外多端の用務を容易に處理し得るのでせう。(津田女史の談片)

染物の栞

染物は何色に限らず濕氣を受けては堪りませんが、其中にも茶色と來たら、殊に弱り方が甚しいから、濕氣を受け無い樣に、しないと染返して二度と用ゐる事が出來無くなります、元來茶色の染料は、アクも澁の強い物だから、醜く生地を弱らすのださうです。

染物中で最も丈夫で、經濟上爲になるのは、藍氣の物に限る、鼠色物の中でも、藍鼠などは餘程徳用向です、併し藍鼠の染物でも、鐵漿を使つた物はいけ無いから、紺屋へ染に遣る時は、鐵漿を使は無い樣に斷つて置くが宜しい。

甚だしく變色して仕樣の無い染物と云へば、アリロナリン染で、直段の安い黑の羽織などは、皆此染ださうですから、新調して間も無く、羊羹色に化けて了ふ、其他縞物でも、アリロナリン染の色の入つた物は、矢張り變色します、又之を色拔に遣つて無地に染樣としても、此染色は何うしても、奇麗に拔け無いさうです。

△紫にも種々異つた色が有りまして、何れも染上げた時は、美しい好い色ですが、偖之を用ふ段になると、追々と色が褪めて、終には白つぽくなつて仕舞ひます、紫の中にも、今紫、鳩羽、藤紫と來ては、幾ら京都染でも、色が保ちませんが、比較的永く色の褪せないのは、古代紫です。

△當節は縞物でも無地の品でも悉皆色を拔いて、御好み次第の色に染直して、此色拔計を營業と致て居る處が東京には澤山あります、紺屋は之等の色拔屋へ品を廻して、其が出來上つた處で始めて染に掛ると云ふ順序です、處で色拔も京都の方が餘程手際が好いさうで、東京では奇麗に出來難い物も京都へ遣れば見事に眞白くして與れる、併し幾ら京都の拔屋でも、旨く行かないのは、東京染の黑で、之は何故かと云ふに、黑の多くは、彼のアリロナリン染だからで、茶色が殘つて仕方が無いさうです、今一つは堅牢紅で、之も到底色が拔け切らないそうです。偖又、此堅牢紅は、色拔が出來ない程ですから、水が掛らうが、酒を掛け樣が、普通の紅染の樣に、色が散つて他の着物を汚すやうな事はない。

△次に申たいのは京都の染賃です色染は鼠色物で、一反の染賃が、紋付で一圓八九十錢位、同じ無地で一圓廿錢位から一圓三四十錢位、又染返し物でも、一旦色拔をするから染賃は新しいのと同樣との事、東京の染物では、鼠色物の紋付は、一反の染賃が一圓四五十錢、無地で八十錢から一圓位、染返し物は三割引位ださうです、又黑は京染で二圓二三十錢から四圓位、色揚は其半値段ですが、東京では一圓五六十錢から三圓五十錢位迄で、色揚は新しい時の染賃とすれば、八十錢から一圓二三十錢です尙東京市中で　、京染一式を營業して居るは日本橋檜物町の楠田、南茅場町の鶴屋などです。

社會

家庭が造りし犯罪人

原胤昭氏談

多數の犯罪人に就て、彼等は如何にして斯くも恐ろしき惡人に爲つたかを取調べて見るに、人に依つて種々樣々な原因はあるが、其の犯罪人の過半は、子供の時に親の躾方の惡るかつたと云ふ事が其大原因と爲つて居ます。其の例證を擧げると私の知つてゐるばかりも、澤山あるので、家庭教育上忽にすべからざる事と思ひますから、爰に最も顯著一例を紹介して、お互に子供の躾方に就て一層の注意を拂ふ事に致したいと思ひます。

△自殺せる大犯罪人

頃は昨年四月十八日の事、鹿兒島監獄に於て一人の犯罪人が自殺を遂げました、その名を天部乙槌と申しまして、年齡はまだ僅かに三十八歳、前途尚ほ有爲の壯年であつたのであります。此の天部乙槌とはそもそも如何なる犯罪人であつたかと云ふに、その一生を全く犯罪で暮した男で、竊盜や强盜は素より其の數知れず、そして幾度か監獄へも繫がれましたが、たゞ此の男は驚くべき程破獄に妙を得て居たので、其の度每に獄を破つて逃げ出し、出でゝは又々惡事を働らくと云ふ始末で、普通の獄舍では迚ても彼れの自由を制し切れなかつたのであります。私はずつと以前から彼れを知つて居りました、彼れが十九歳にして兵庫の假留監へ繫がれた時に、私は敎誨師として丁度彼の地に居りましたので、初めて彼れと相識りました。罪人の事なればその時は赤色き見苦しい姿を爲て居たが、その性質は至つて溫順で、且つその容貌といひ品格といひ、まことに申分の無い立派な青年でありました。敎育も普通にあつて口を利かせても立派なものだし、それに人に勝れて親思ひの方で、鐵窓の下に瞑目しながら絕間無く親の身の上を氣遣ふと云ふやうな甚だ殊勝な所もあつたのです。後ち間も無く彼れは釧路の監獄へ送

られたので、自然彼れとは分れましたが、相分れて後も時々手紙の往復は遣つて居りました。尙ほ左に彼れが自殺の原因を述べるならば、いかに彼れが珍らしき大罪人であつたかゞ御解りにならうと思ふ。

△自殺の原因如何

私は彼れの育ちたる家庭の事情を聞いて、彼れの境遇を甚だ不憫に思ふて居た所へ、今度彼れが自殺を遂げたと聞いたので、深く同情の感を懐きましたが、併し何故彼れが自殺したるかは私には全く解するとが出來なかつた。彼れの經歷に徵すれば、彼れは破獄をこそ企つれ、自殺を爲やうとは思ひも寄らず、去らば彼れは發狂したるか、兎も角も一度調べて見たいと思ひまして、先頃鹿兒島へ參つた序に、監獄に就て其の顚末を聞いて見ると恁うであつた。即ち彼れ天部乙槌は前には東京大阪名古屋等を始めとし、全國幾多の大監獄を破つて巧みに逃走したる經歷があるので、鹿兒島監獄では之に鑑みて非常に警戒を加へ、爲に三四度企てたる彼れの破獄の計畫も遂に全く不成功に了つたのであります、かゝれば流石の彼れも此處では破獄は到底不可能と斷念したものと見える、けれ共さて破獄が出來ぬと爲つてつら／＼自身に立ち返つて見れば、彼れの境遇たるや甚だ憫れむべきであつて、殆んど其の一生を彼れの不愉快極まる牢獄の裡に暮さねばならぬやうに爲つて來ました、彼れの記錄を調べて見ると、其の罪刑は啻に一二に止らず、以前より積り積つて非常に多くなつて居るので、一々之に服役して靑天白日の身と爲るのは何時であるかと指折り數へて見ると、實に彼れが七十七歲の高齡に達する時であつた、破獄は迚も出來ぬと悟つた時には先づ此の事が彼れの胸を刺したに相違ない、彼れは即ち此の活き甲斐なき苦しき境遇に失望落膽して、遂に今度の自殺を決心したものであらう、と其の係りの者が話して居りました。

△家庭と彼れの生立

天部乙槌は如何なる犯罪人なりしかはこれで略々御解りだらうと思いますが、この男は決して生來の惡人では無かつたのである、彼れが生れてから犯罪を行ふに至るまでの事情を考へて見ると、其の父母たる者の言行、子供に對する躾方、其他家庭の關係が、この男をして斯かる大

犯罪人と爲らしむるに至つたものと思はれる、其の責任は本人三分家庭七分と謂つてよいのである。彼れは中國筋で昔は藩の代官役を勤めた程の家柄に生れ、二人の兄と二人の妹があつて家は富裕であつたけれ共、實の母は早世して繼母の手に依つて育てられました。一體斯樣に澤山の子供を繼母の手で養育するのは、事已に容易で無かつたのに、此の繼母なる婦人は、少しくお心好の方であつたから、乙槌の四五歳の頃は、何でも彼でも都合よくさへ育てればよいものと思ひ、氣儘勝手に甘やかして置いたのが、乙槌の將來に大なる殃と爲つたのでありました。それに父なる人も亦た乙槌は末の男兒である所より、萬事大目に見て放任して置きましたところが、乙槌は次第々々に增長して參つたのでありますこれは實に家庭上免れ難い數であります。併し彼れは斯かる家庭に育ちましたものゝ、學校の成績は何時も良好で上席を占むるのが例でした、十四五歳の頃になりますと、土地の小學校の訓導かなんかになつて敎鞭を執るほどになりましたから、父も一方ならず彼れを愛して誇りとするのみならず彼れの文才は土地で頗ぶる評判高く、人は皆彼れを神童として前途に大なる望を屬して居たのでありました。



△惡心の萠芽

さて斯の如く彼れが父母、幷びに彼れが郷黨も乙槌の前途に對して大なる望を屬し居たにも拘らず、いつしか彼れが容易ならぬ仕業を爲て居ることを發見した。それは彼れの十四五歳の頃である、或る日父が探し物をすると、彼れの留守中その室にある書物を引出して見ると、其の間から五圓札が一枚現はれて來ました、如何して此處にあるかを訝りつゝ更に一二葉撥つて見ると、又又一圓札が一二枚現はれて來た、父は甚だ不思議に思

ひ直ちに母を呼んで尋ねて見ましたが、矢張り出所が判らなかつたので、兩人でいろ〳〵と考へた末、漸く父から盗み取つたものと分明りました。然うなつては父も中々に棄て置き難く、第一近所の人に顔向がならぬといふので、彼れが外より歸るや否や、母の詫をも省みず、ひどく彼れを窘めて其の日の中に家を追ひ出して仕舞ひました。放逐されたる彼れは、其後果して何れの處にか彷徨へる。

△其の責は家庭に在り

何の不足も無き富裕なる家庭に生れたる彼れが、何故斯かる惡心を起したるか、私は之れは全く家庭の不規律に原因すると思ひます。父は大酒家で母は前にも言つたやうな愚もので、母の手腕では金の仕末が出來なかつたか何うかは知らぬが、兎も角も父は平常多くの金を母に與へなかつたので、母の巾着は何時もカチ〳〵と言つたやうな按排であつた。そこで乙槌の方は何うかと言ふに、出入の者や近所の者が若様やお坊ッちやまやと下にも置かぬ待遇なれば、乙槌はぐひと偉らくなり、友達共には金の有るに任せてお菓子を買つて遣るやら玩具を買つて遣るやらと、小使が段々增して來たので、是迄母から貰つてゐる小使ばかりでは迚も足りなく爲つて來た。此に至つて乙槌はそろ〳〵惡心を起しまして、最初の中は母の巾着より一錢二錢と取り出して使つて居りましたが、是れでも足りなく爲つて來たので、今度は父の懷中に眼を着け、毎夜父が晩酌をやる際に、御機嫌を取りつゝ其傍に侍り、父が醉ひ倒れるのを待つて財布より少しづゝの金を取出し、之を自分の小使に充てゝ居たのであります。併かし乙槌は父の怒に觸れるまでは左程の惡事とも思はずして、斯んな事をやつて居たので、然ういふ事を久しく氣附かなかつたのは、全く兩親の手落でありませう、加之ならず然ういふ事を爲すやうに爲つたに就ても、親達に充分惡い所があらうと思ひます。

△流浪して盗を働らく

さて乙槌は家を放逐せられて後、自分の爲したる事が斯程に惡い事であつたなら親達は何故今まで然うとは言はなかつたらうと、聊か父の仕打を怨みつゝ、悵惘として獨り旅路に就きました、當所は京都なる兄の許であつた。兄は當時京都にて警察官を勤めて居たので、先づ之れを便つたのであるが、不人情にも程こそあれ、あらう事かあるまい事か、兄は深くも聞き敢えずして、彼れを側に置くとは自分の職務に對しても相濟まぬとの理由の下に、さそくに彼れを排斥して頑として受け入れなかつたのであります。併かし乙槌は食はずに居る譯にもゆかず、兄に嘆願して漸く受人に爲

つて貰ひ、或る所へ丁稚奉公に這入り込んだが、何分にも御代官の家庭に贅澤三昧で育つた身の長持仕やう筈も無く、二三度ばかり彼所此所變り廻はつた末、再び兄から追ひ出されました。恁う爲つては樂みも段々不潔と爲り、國へ歸れとて與へられたる纏つた金も、惡い所で費ひ果し、今は國へも歸られなく爲つて來た。其れより神戸の師範學校に居る友人を訪ねんと態々彼處へ行つて見たが、友人は生憎く歸國して在らず。友人も居らねば金も無く、進退維れ谷まつて、恰度學校の廊下に在つた一册の本を、何等の意思も無くふと懐中に入れて歸つたのが、彼れが盜を働いたる抑もであります。此の時は八ヶ月位の處刑を食つて、首尾能く服役して



出獄致しましたが、其の間に多くの惡徒に交際つて、餘程人間が惡く爲つて參りました。で其の出獄の時に傳言を依頼せられて、或る家を便つたのでありますが、其の日は雪空の極めて寒い天氣であつて、耐えられぬ程冷たく感じたので、其處を辭する際に、盜まうとは思つた譯で無けれ共、傘と下駄とを持つて出た。之れが爲に又々捕へられて、再犯として前よりも一層重く罰せられました。之を濟ませて後、今度は直ちに國に歸へるやうにと、旅費まで與へて出したのでしたが、知人があるとかで彷徨て居る中に、恐るべき强盜罪を犯し、三度捕へられて兵庫の假留監へ繋がれました、之れが丁度私が彼地に居た時で、前に述べたるが如く此の時初

めて彼れを識つたのであります。

△謹愼三年も水の泡

斯く逃べ來れば、彼れは生來惡人であつたものとは申されません、私の見た所では孝行の心も確かに有つた、彼れが訓路の監獄に居る中に、父の死亡を聞き、非常に後悔を致しまして、其後三年間ばかりは極めて謹愼であつた所を見ても、略々彼れの心事が察せられる。が不幸にして又々此處を逃走し、續いて邯鄲師と爲り、遂には類稀れなる大犯罪人と爲りました。恁ういふ事に爲つたのは、あながち本人の爲故とばかりも謂はれないので、外部から附け加へてそして恁んな者が出來上つたものと思ひます。誰れが造つたかと言へば、私は父母であると謂はざるを得ません。彼の家庭のしたらなき事や、子供を戒めの爲めと云ふでも無くして單に自分の外聞の爲めと云ふさもしい考で乙槌を放逐したる事などが原因と爲り、之に種々なる事情が加はつて、可憐の靑年天部乙槌をして遂に日本一の大犯罪人と爲るに至らしめたのであります。

我より見たる我妻

別邸の主

男心のさま〴〵なるその妻に對する感想も、其人により異なるべけれど、概して世の良人となるものは、どんなものであるてふことを申して婦人達の御參考に供へませう。

△家を思ふて呉るゝ妻

良人としては何時も同じ事ですが、殊に新婚の際など別して嬉しく感ずるは妻がよく家を思ふて呉れることである、良人としてその妻が一日も早く自分に同化することを望むのは人情故、其の妻が色々と我一家の祖先から、其の命日なぞを聞きたゞして、自分の忘れて居るにも關はらず、妻はよく其の忌日を記憶して、佛檀に向て禮拜し、今日は誰れ々々樣の命日故御香を遊ばせ、なぞと云はれし時は、嗚呼斯くも我家を思ふて呉るゝかと、泌々嬉しく思ふ事もある、又姙娠でもした場合に、妻は良人に向て是れでこそ何家何代の世繼が出來て嬉れしい、是れから毎朝神樣に向つて安

産を祈りましやう、なぞと云はれると涙も溢れんばかりに喜ばしい、兎に角自分に同化して呉れて、よく我家を以て家となし呉るゝかと是れでこそ理想の妻なれ此の賢婦を得たる我は如何に幸多きことよと思ふのである、然るに其妻が毎日のやうに實家の富貴榮耀を口走りなどするとなんとなく可厭な感じがする、我は是れ程迄に愛して居るのに、何故あんなに實家が戀しいのであらうか、彼れは實家あるを知つて、未だ我家あるのを知らないのだと云ふ



やうな感想が湧き出でゝ自分ながら妻に對する愛情も薄らぐやうな心持がする、又妻が何氣なく話す言葉でも、度々他の男の事でも云はれると、是れ又嫉妬ならざる迄も、不快の念が出て來るものである。

△歸宅を迎ふ妻の擧動

我家にはさぞいとしき妻か待ち佗びて居らうと終日の苦勞も忘れて、家に歸り來れば、家の愚妻は滿面喜びの色を湛へ、飛びたつばかりに、我を迎ふる時は我れは得も云はれぬ嬉しさを覺え、終日の勞苦も忽ち是が爲めに慰するのである。然るに途すがら妻の事を想像しながら家に歸つて來る

と、妻は迎へにも出て來ぬが、出て來ても無愛想な面でもして居ると、我れは電氣に感じたかのやうに、忽ち不快な感想が胸に滿ち、妻に言葉を掛けるも可厭になつて仕舞ふ。

我れに對する唯一の慰籍者は妻である、其の妻たるものはどんな者だ反て我れに煩悶を與ふる者と忌々しくなつて來る、なぜこんな無愛嬌者を貰らつたのだらう、世の中には、妻に隱して藝者狂ひをしたり、茶屋浸りをしたりするのを見て、隨分馬鹿者もあつたものだと思つたが、よく考へて見るとつまりこんな不愉快が動機になつて遂に他に慰籍を求めるやうになつたのである、之に反して妻が愛情に富んで、良人を慕ふ事が切烈で良人の歸りを一日千秋の思ひで待ちあらば、例令宴會の席にあつても、遲ならば妻は案じ煩ふであらう、よい位に切り上げて歸らふと云ふ心持になり、同輩より他の場所に誘はれるやうの事ありても、我を待つ妻を外にして何んで、そんな馬鹿な眞似が出來るものかと云ふ心になり、友人より妻君孝行者などと笑はれても頓着せず家に歸るやうになる、從て家庭の神聖を保つばかりでなく、良人たる我身も妻の御蔭で品性が保たれ、一家の幸福を得らる譯で、世の妾を蓄へたり酒色に溺れたりする人は其者の人格卑く修養足らざる爲ではあるが、中には妻が良人に對する道を知らぬ結果、此の邪道に陷らしむるものも間々ある。

△學問を鼻に掛ける妻

妻の行の中には良人として色々癪に障ることも多いが中にも、妻が少しばかりの學問があるのを鼻に掛ける驕慢心ほどいやなものはない、針仕事や、御飯炊も碌に知らぬ癖に、英語など家の中で振り廻したからとて何も役には立たぬ、學問は品性を正ふし、物の道理を辨へ、身を脩める爲めだのに、たゞ文字を讀み得るのが學問だとばかり思つて居る妻ほど憐れなものはない、臺所の事は知らんでも、下女や下男があると云つて威張るけれど、能く下女下男を使つて、一家の經濟を整理して行くのは、此の微細な臺所の仕事にあるのだ、妻としての本領は文字を知るよりは、下女の使ひ方、臺所の整理、家務の處理、育兒の方法等にある、其れに學問を鼻に掛けるほどいやなものはないと良人たる自分がさう思ふ位だから、他人はどんなに不快に思ふだらう、妻に對する誹りは、我れの誹である、なんとしてこの憐れなる妻を矯正して、物事に謙讓な淑徳な立派な者にすることが出來るかと思へば悲しくなつて來る。

之に反し我妻は學校を卒業して居つても、學問を修めて居ても、少しも自慢する樣子もなく、謙遜に柔順にして居ると、我れはその妻を何となく氣高いやうに思ひ、心の内密かに畏敬の念が生じて來る、此の如き妻こそ夫としての理想の妻である。

△實家を誇るの妻

第二に不快千萬に堪へないのは、我妻が其の實家を自慢するのを聞く事で、實家の庭にはどんな樹がある

とか、實家の別莊の茶室はどうであるとか、實家の食物は甘いとか、實家には奉公人が何人、猫が何疋居るなぞと自分の前や、來客の前などでさも得意氣に話すほどいやになる事はない、此の奴は未だ實家の財產や家柄なぞを夢みて居るのだな、こんなに愛して居るのに、まだ愛情の有難味や眞味を感じないものと思へる地位や財產に目を奪はれ、虛榮心に驅られて、愛情の眞味を知らんのだなと自然



に侮みの心が起るのである之に反して我妻が、いとも謙遜で溫良で、地位あり財產ある實家を忘れて仕舞ひ朝から晚迄家事にいそしんで呉れるのを見ると、良人たる我れはいとも氣の毒な感じを起し、もし彼れが實家に居たらば多くの女中にかしづかれお孃樣〳〵と云はれて居るべき身であるのに、今の自分の境遇は彼のやうに女中兼帶といふ按排であるのに彼れは何の不平もなく常に何事によらず

愉快らしく盡して與れる殊勝さは、女神とも云ふべきか、何時迄あゝして置くべきか、奮發して地位を作り、やがて澤山の女中をも置て彼れに安心を與ふるやうにならねばならん、と深く心に決して事に勉强し、一層いとしの妻に愛情を捧げるやうになるのである。

△終日鏡に向ふ妻

我れは我妻の醜きよりは美なるを希ふのであるけれども、其れよりも一層希はしきは心の美ならんことである、花顔月容の美に醉ふのは、結婚當座の事だ、同棲日を經るに從ひ、妻の容貌の美醜は、心の美醜に壓倒せられて來る結婚當座は妻が鏡に向ふて美容を飾るは、珍らしき感じもするが、少しでも美容を懶る氣色がみへて朝夕鏡に向て暇つぶしをして居るのは、不快の念を與へる、若し鏡に向ふの暇あらば、なぜ着物の世話をして與れぬか、なぜ臺所の世話をして與れぬか、なぜ家計帳を記して與れぬかといふ心が起る、自分は第一不潔にせらるゝのを好まぬが我妻が扮裝にも振りにも構はず、能く家事の全きを計つて與れるのを何より嬉れしく感ずる。

△隱し立てをする妻

妻が秘密を自分に打ち明けぬのも不愉快千萬のものだ、少しの事でも隱立てをすると癪に障ッて溜らぬ、其れも或る事を話せば、夫れが爲めに夫に非常な心配を與へるから、苦しくとも夫に話すまいとの、我れに忠實なる心からならば、假令隱し立てをしても其の心根のやさしきを反て嬉れしく思ふが、さなくとも我れを憚りて秘して居るのならば、不快に堪へぬ、夫婦は一心同體であるのに、彼れは尙ほ夫として崇めては居らないのかと思へば腹立たしく、自然妻に對する情も薄らぎ自然自分も妻に打ち明けるのが面白くなくなつて來る、從て夫婦の間が、自然疎隔して眞の愛情を保つことが出來なくなるのだ、次に秘密を保つべきをを約しながら、妻が其事を他人に打明けられたほど、いやなものはない、之れが爲めには往々不測の禍を來すことがある。

我れが右と云へば妻は左といひ、何事でも反抗する言葉使ひは、假令心なくしての事でも甚だ不愉快に覺ゆる、然も我れは黑を指して白なりと誤解して云へる時、妻は我命とならば何事でもいふ通りにして與れるからとて喜ぶものではない、一時は我言ふ通りに從ふも、我が心の靜かなる時を見て、先刻の御話しは可と仰せられたが、あれは可くはありませぬと正された方がよい、我が可と云ひし時妻は直ぐ否いと云へば、何となく我れは反抗らしく感じて不快の感を催ふすも、時過ぎ心靜かになりし時、誤解を正さるゝと、自分は我が誤りなりし事を氣付き、妻に對して面耻かしき心となる、此の邊の所は時と塲合により臨機に處置したならば至極よからうと思ふのである。

醫者の見たる
女子墮落の豫防法

糸左近

近頃男女學生墮落の原因及び救濟法等に就いて、新聞に雜誌に喋々と甲論乙駁することが流行してゐる、雖然余の見たる所だけでは其の論や何れも淺薄にして所謂救濟法が救濟法にならぬ、イヤ寧ろ救濟法は益々墮落せしむる原因になるでは無いかと思はる、例へば放蕩者に對し放蕩の不善なる理由を說くに千言萬語を費しても放蕩者本人の身になつて見ると、不善なる理由は疾くの昔に知つてるのみならず、其の放蕩を止めても、これに代る他の興味ある物を與へてくれぬから說かるゝ事が一々癪に障り、口では御尤と言つても、腹ではセヽラ笑つて遂に益々自暴自棄になるやうなものだ、女學生の墮落も亦然りで、學問も爲ようと思ふ者が女の操を破つて、揚句の果には醜業婦同樣になり下ることの惡い位は、大家博士の漠たる道德論を聞かされずとも、固より承知してるのです、「操を破ることは善惡何れであるか了らぬやうな無邪氣な時に破るものでは無くて、十分了つてから始めて破るのであること」を世の論者は氣附かぬやうだ、乃で余が今論ぜんとする墮落豫防法等は、世の論者と大いに趣を異にし、極めて容易に出來得る衞生法から說いて見ようと思ふのである。

▲(1)大食せよ――諺に「色男金と力は無かりけり」と言ふがこれは女にも能く當嵌る、即ち「色女金と力は無かりけり」だ、金の問題は別として、力は抑々何に依つて生ずるか、他にも種々の原因あるとは言ふものの、第一に食物である、食物は活力を生ずる所の王で、この供給が不足すると、貧血・胃病・腦病・神經衰弱・歇私的里等の病に罹る、縱し病と名の附く程にはならずとも、身心共に精力に乏しく、活潑なる動作、愉快なる思想は次第に退いて、之を形容すれば、「今日は寒いから止さう」といふやうな何事も引込思案にな

る、斯うなると、意志は益々弱く、反對に感情は愈々鋭くなつて、其の極端は嫉妬虚榮悲觀などの惡魔が頻々として來り、續いて劣情を制するの勇氣も挫け、忽ち泣く代りに、忽ち喜び、男が少し情有ることを言ふと、直ちに依頼心を起して、輕々しくも、二世も三世もと約束が仕たくなる、(其癖實行も出來ぬのに)能々注意して世の墮落女子を御覽なさい、强健なる者に少くて、神經質の即ち薄弱な體質を有つてる人に多いことを、而して其の薄弱なる體質の源を探れば、食物の不足に原因することが尠く無いのである、換言すれば食物の不足より榮養不良を起し、榮養不良より神經質(神經衰弱も含む)を生じ、神經質より薄志弱行者を出し、薄志弱行は即て墮落の母となるのである。余嘗て某女學校に生理の教鞭を取つた時、生徒の辨當を見て、實にこれで命が有るものかと驚いた、小猫の喰べる程と言はうか、雀の食ふ程と言はるか、兎に角十六七歳の娘盛が、甚だ僅な飯と、甚だ僅な副食物とを取つてゐるのである、で早速大食論を滔々述べ立てたれば、是等が校長の御氣に障り、僅かに一週間で余は免職となつた、斯る管らぬ話は十年の一昔、今や衛生思想も大いに進んだらうと、過日又午餐時に、或る女學校を參觀したれば、依然として小猫的辨當雀的辨當が行はれてゐる、この時余は飜然として、墮落の種は茲に在り、身を亡すの原因茲に存す、と悟つたのである、實に奇妙變梃な悟り方だ、けれども眼を大きく開いて、歐米各國の狀態を御覽なさい、婦人の操最も正しきは英米で、最も墮落せるは露佛では有りませぬか、而して其の生活法を尋ぬれば、露佛は衣服の如き外觀を美にして、肝要なる食物を麁にするに反し、英米は質粗なる衣服を着るにも拘らず、滋養に富んだる美味をドシ〱食ふ、又退いて眼を小さくして見ても、我國の工場女や、藝者輩は、其の雇主が大抵殘酷にして、十分なる食料を與へず、何時も飢じい〱で暮してるから、身體は榮養不良となつて、精神は益々墮落するのである、けれども田夫野人の家に育てる婦女子は、大食して能く働くが故に、教育の無きにも似ず、其の節操の有ること、

却つて小猫的雀的の及ぶ所で無い、思うて茲に至れば、大食せずんば有る可からずである、然りと雖も、余が所謂大食は品質の如何に拘らず、時の如何を考へず、牡丹餅、お薯、何でも御座れで、間無しに酸い噯氣を御出しなさいと云ふのでは無い、滋養に富んだる物、即ち能く消化吸收する食品を、十分に取つて、五時間以内には何一つ撮み玉ふなと申すのです、斯樣にして居れば、三度の食事には、美味津々として大食するを得、從つて三度の食事外には、左程欲しく無いやうになる、之に反して外見にポッチリ食べてるやうな人は直ちに空腹を感じ、已むを得ず陰で撮むやうになる、換言すれば取る量は少くて、之を用ゐる時間が不規則であるから、胃に休憩を與ふるの暇無く、遂に種々の病を惹起さゝる



までも榮養不良に陷るのである、この道理を能々御聞分の上旨しく料理して、ドシ／＼御遠慮無く召し上らんことを、偏に願ふのです、これが墮落豫防の一つ。

▲(2)大いに運動せよ＝衞生思想より割出した論だか何うかは知らぬけれど、支那の古人が小人閑居シテ爲ス二不善ヲ一と言つてゐる、余は實に千歳不磨の金言と嘆賞する、何となれば閑居すれば勿論不運動になる、不運動なれば身體薄弱になる、身體薄弱なれば善い思想は浮ばぬ、善い思想が浮ばねば遂に不善を思ふ、不善を思へば從つて不善をなすやうになるは、理の當然であるからだ。佛國のジョン・エレメンスと云ふ高齢者が運動の効能を列擧したる中に、「運動は心配を除く所の箒である」と言つてゐる、是も實に名言だ、クヨ／＼と萬感胸を衝くやうな折に、出でゝ原野を一廻り走つて來ると、思想は頓に新らしくなることは、余の屢〻實驗したる所である、女學生でもさうだ、ワンツルチンの着物を着て、毎日郊外の散歩をしたり、或は鐵啞鈴でもカリン／＼動かしてるやうな者には、「戀の病」などは取りつかぬ、昔でも劍術薙刀などの稽古をして運動を怠らなかつた婦人は、氣高い精神が有つて時に男子が袖褄引いても、之を拂ひ退ける所の勇氣がある、それで冷酷な心かと云ふに、決してさうでは無い、我が良人に對しては、綢繆纒綿たる優しい情が有つて、而も嬌た所が無い、彼の赤穗四十七士中なる小野寺十内が、仇討に出懸る前、それと無く我が妻に告別の辭(歌は忘れた)を述べたれば、妻は、

　筆の跡見るに涙のしきり來て
　　言ひ返す可き言の葉もなし

と返した、「言の葉も無し」に千萬無量の情が籠つてるのみならず、意志の確乎たる所を示してゐる、若し之を「仇討止して頂戴な、妾良人と離れること厭よ」としく／＼泣いた日には、ハヤ論ずるまでも無い。宜なり十内の妻は、藩中でも薙刀の名人であつたさうだ、名人になるまでには幾多の運動をせねばならぬ、運動なる哉運動なる哉、其他運動は食物を消化し、筋肉を締らせるなどの功能は、余屢〻本誌に説いたれば、今更

に之を省く、何うか諸姉、室内の體操、野外の散步、十分に細胞の新陳代謝を爲られ、夜は草臥れて何の思ふ事も無く、明日の朝まで、雨降らば降れ風吹かば吹けで、一眠りにせられたい、運動は熟睡せしむる所の魔醉劑です、熟睡する者には神經質無し、神經質ならぬ人に墮落者無しと知り玉へ、この一語は實に名言である。これが墮落豫防の二。

▲(3)遊藝を程にせよ――「藝が身を助ける程の不仕合」とは能く穿つた言葉だ、それは借置き、爰十年來は非常に遊藝が流行して琴・活花點茶・和歌、下つては踊三味線乃至は月琴といふやう



に、華族の姫樣も裏店の娘子も學校外には又之を習はねばならぬかの如くなつてゐる、五時間の授業も終りヤレ嬉しやと家に歸れば、又琴責花責に遇ふ、實に可哀さうなものだ、斯る風流事は美想を養ひ、心を愉快にするものなれど、今日の如く儀式的に課業的に、厭でも應でも習はねばならぬに至つては、實に身心を傷むること一通りでない、遊藝專門を以て世に立たうと思ふものならいざ知らず、花美しき晨月明き夕親しき友垣と松濤の音を聞いたり、或はコロリンシャンと奏づる爲にせんとならば、日曜に一度なり、或は土曜の晩なりに氣

の趣いた時、氣任せに習ふが宜い、何も中免許を取らねばならぬとか、奥免許を受けねばなどの競爭す可き性質のものでは斷然無い、競爭して敎はつたやうな野卑の人が彈ずる琴、活ける花には風韻の籠らう筈は無い、されば心を美にす可き物を敎つて心を野卑にし、疲らせ、身體を弱くするに至つては實に言語道斷だ、遂には神經衰弱・歇私的里とまで行かざるも、意志の大切な發達盛りの娘に、學校以外で責め立てるから、薄弱なる、墮落のし易い娘が出來るのだ、全體學校の學科からが過重になつてるのに、其上琴責に逢ふのであるから、如何に强健なる女も心身に影響せずして止んや、返す〴〵も慨かはしい次第である、斯う申すと論者或は曰ん「學科こそ腦を費せ或は疲勞を來せ、琴三味線乃至は活花の如きに至つては、却て疲勞を醫し、健康を助くる所の結構なものだ」と、然れどもこれは生理を知らぬ愚人の言だ、何となれば心に愉快を感じつゝ歌ひ或は奏づる唱歌音樂でさへも、數時間の後に疲勞檢査器で檢査して見ると、矢張夫々の疲勞を來してゐる、況んや厭々ながら世の風潮に伴うて習ふに於てをやであるからだ。朝からの授業引續いての稽古に腦は非常なる老廢物を蓄積し果は鈍頭痛を感じつゝ歌はことさらなんだいがちに、よめたやうでもよみおほされず、てにはちがひに心をつくし……と敎つた文句を呟きながら歸る途中、フッツリ鼻緒の斷れたが緣の緊ぎ『すげて上げませう』が身に沁みて、親の意見も馬耳東風、果は『藝は身を助ける程の不仕合』實に穿つた句だ、されば遊藝を程にするが墮落豫防の三。

▲(4)小説を讀む勿れ——戀の觀念を開發し、歇私的里の種を蒔く者は現今我國に行はるゝ小説に如くは無かるべし。さらでだに世は頻繁になつて、汽車電車の音は轟々と晝夜精神の安靜を破り、新聞は殺人强盜乃至は人の榮枯盛衰を報ずるなど、眼に觸るゝ物耳に聞ゆる物、人の心を刺戟し、青年の男女は神經質に、厭世的に、自暴自棄的になり易いものだ、然るに、現今の小説を見ると、戀愛悲哀を目的とし、失戀・離緣子

別・短命・殺人等悉く神經を刺戟し、感情を鈍くせぬ仕組で無いのは無い、況んや思想文章何れも箱庭的で、高雅なる意見を含ませたり科學の趣味を吹つ込んだりしたやうな有益な物は殆んど無いに於てをや（若し有つたら見せて下さい）試に讀んで御覽なさい、作者は異つても思想文章は千篇一律實に詰らぬ思想に、管々と形容文句をクッ附けて、終は尻切蜻蛉の考へてくれ主義、換言すればクスグタイやうに寫して、餘韻有る如くに氣取つてるのだ、現今小説家の紋切形です、紛々たる、當時の小説家皆然りである、有名なる蘆花の作



でもそこである、色情を早める種にならずんば泣く材料にならぬは無い、獨り夏目漱石氏の物は比較的に此の弊を免れて「坊ちゃん」「草枕」の二篇頗る讀むに足るべしと雖も而も舞臺が狹ひ、嗚呼讀者、勿れ小説を讀むことを、これが墮落を防ぐの四、さすれば將來小説家も筆を改めて猷私的里を癒すやうな雄大なる文字を書くや必せり、それまでは待たれよ。

▲(5)貧乏人は學問するな——貧乏にも程度があるし、學問にも依りけりだが、仲には纎弱き女の身を以て、家計甚だ困難なるにも拘らず

醫者にならうとか、文學者にならうとかと、專門の學理を叩かんとする者往々有る、其志や立派なやうなれども、先天的に烈女の資格が有つて、而も拔群の體格を具ふるに非ずんば到底成功せざるのみならず、人間の活力を生ずる所の衣食住に供給不足を告げるのであるから、心身次第に衰弱し、悲觀に陷り、依賴心を起し、遂に男子の奴隸となつて墮落呻吟するのである、嘗て二六新聞紙上に、青年男女の墮落と題せる實話を長々と揭げたるを見るに、多くは(5)の原因である學問せんとする娘學問させんとする親、大いに我が身上を考へてかゝらねばならぬ、學者になるばかりが此世の名譽では無い、これに就ても倘々論じたきこと有れど、餘り長くなるから次は結論に移りませう。

▲結論――以上述べたる五ケ條の豫防法は亦以て既に墮落せる者の療法ともなる、又之を總括して言へば大いに食して大いに運動し、夜は熟睡して疲勞を醫し、過重の藝を習ふ勿れ、神經質に導く所の芝居小說を見る勿れ、身體の榮養を顧みずして學問する勿れと云ふにあるのだ、これに背けば神經質になる、神經質と薄志弱行は正比例し、薄志弱行には戀が伴ひ、戀は即ち墮落の基なることは、如何なる論者が我を反駁しても、それは口で言ふので、心を欺いてるに相違無い、倘終りに臨んで一言したきは、大食運動加ふるに、遊藝を爲さゞれば、優美の思想は取れて、卑しい風姿になりはせぬかとの疑も起らうけれど、それは以ての外で、大食は皮膚筋肉の色艶を宜くし、運動はデブ太りを癒して姿を立派にし、齷齪をしたる心を除き、從つて優美にするものなる事は、歐米各國の生理心理學者は之を實驗してゐます、必ず心配するには及びませぬ、先はこれにて筆を止めます。（終）

清國婦人の風俗

（我が目に映じたる清國婦人）

在上海　多湖喜代子

△奇異なる結婚

清國の結婚は日本や歐米の結婚とは大分趣を異にして居て一種の人身賣買である、で婚約の成立は勿論結婚後同棲すべき兩人に依つてなされるのではなく兩親によつてなされるのである、いよ〳〵結婚が成立すると男子の家より娘の家に其娘の養育費（身の代金）として二三千圓（中等にて）を贈るのが例である、が其養育費を多く出す程美しい娘を貰ふ事が出來るのである。つまり嫁を貰ふのではなく嫁を買ふのである、で上流社會の人は兩親が嫁の費用を一切負擔するので丁年未滿の者でも妻帶する事が容易であるが下流社會になるとそうは往かない、自ら勞働して其得たる金を以て妻を迎へねばならぬので上流社會の者の如く容易に結婚は出來ないのである。隨つて婚期は餘程遲れて來るが併し其結婚なるものは勞働者にとりては生涯の一大目的で彼れ支那勞働者が世界至る所に於て殆んど牛馬の如く働くのは一は彼等の先天的の習慣とは云へ一は是を以て結婚せんとするが爲である。

で娘を持つた親は娘を一種の賣物と心得て居て、出來る丈け化粧に念を入れさせ少しにても他人に美麗に見せて高價に賣り付けると云ふ支那人特有の通有性を持つて居る、斯の如き結婚であるから婦人に取りては餘り幸福ではない、寧ろ苦痛である、で婚禮の當日娘は泣きながら生家を離れると云ふを見ても明らかである、殊に女は一旦結婚した以上は絶對に生家を見捨て夫の家族の一員となるのである而して兩親は其娘に少しの權利も持たない事になるのである。

△家庭に於ける主婦の權力

清國婦人の家庭に於ける婦人の權力は存外偉大なるもので假令良人の命令たりとも己の意志に適はぬ場合には決して盲従は爲ない、飽く迄反對する、が男子は之を腹立てて打擲したり罵詈したりする樣な事はない、少々の事は大目に見て置くので婦人は益々己れの權力を振り廻すと云ふ有樣であるが茲に不思議な一現象がある、夫れも其夫が第二妻

第三妾と妾を蓄へる時のみ、決して異議を云ふ事が出來ない、何故なれば嫉妬は婦人の第一の不徳で且つ恥辱としてある、其嫉妬を起す婦人は貞操の缺て居る者として非常に他より擯斥されるからである、一方に於ては妾を多く蓄へるのは我家の地位、名望、富貴を他人に示す唯一の手段と心得て居るからである、以上の理由で上流社會になると一家の内に多くの妾が蓄へられてあるが彼等を統御するのは第一妻たる本妻の義務で、夫れがよく統一され、よく家族が和合して往けば賢夫人たる名譽を博すのであるが然しそれは外面のみの和合であつて決して内面は和合をして居ない、始終ゴタゴタして紛擾の絶へる時がない、斯かる家庭であるから子女の敎育などは彼等の眼中には更にない、まるで、野育ちと云ふ狀態である、で小兒が漸く成長して相當の玩具を欲するも夫れさへ與へられない(勿論支那には兒童の知識を開發する如き相當の玩具はない)で兒童は止を得ずお錢で賭博の眞似をして遊んで居るが成長するに從つて實際の博奕を遣る樣になる。

△婦女の貞操

支那婦人の貞操を重ずる事は實に歐歎の外はないのである、如何なる下流社會の女にても一旦夫に死別れたからは決して再婚などは爲ない、いかに貧苦の中にも貞操を固く守つて立派に寡婦暮しをして居る、夫れが第一妻即ち本妻は勿論であるが第二妻第三妻など云ふ妾に至るまでも必ず再婚は爲ない、茲に至つては實に婦人の美德と言はねばならぬ、是れ因習の然らしむる處とは云へ、貞操は婦人の生命として重じて居るからである。

△深窓の貴婦人

清國上流社會の婦人は所謂深窓の貴婦人であつて常に室内に閉居して外出などする事は甚だ稀であるそれは勿論纏足より及して來た所の弊害であらうが一は因習で婦人が男子に面を合せる事は一の罪惡の如く思つて居るからである、で男子の訪問者がある時は婦人は奥深くにげ込で決して面を合さない、假令良人の親友であらうと親族であらうと甚しきは良人の兄弟にさへ面會を拒絶して逢はない位であるから偶々外出する事があつても深く簾を垂れた駕籠に乘つて外部より少しも見えない樣に嚴重に警固して外出するのである、又彼等は貴婦人としての威嚴を保つ爲に多數の下婢を使つて己れの身の廻りの事は一切彼等の手を煩はして居る、一例を擧ぐれば一寸喫烟するにも自らは烟

草をさへ、詰替へない、一度々々に下婢の手を待ッてなされるのである、夫れのみならず子供の教育は乳母に任せ、家事經濟は家從が司どると云ふ有樣である、で彼等も終日室内にあッて、何一ッ成す事もなく美衣美食に飽き無聊に苦しみながら、睡醒夢死の間に空しく歳月を經過して居る良人の寄生蟲に外ならない、之が淸國貴婦人の常態である、若し貴婦人が自ら家事經濟の任に當り或は小供の教育を掌る如き事あれば貴婦人としての眞價のなきものとして他より非難を受けると云ふ實に哀れなる境遇である。

世界奇聞

◎木上の生活

佛蘭西の巴里より一時間程汽車旅行にて達し得る處にその住人の多數が皆樹上の生活をなし盛に巴里人を誘ひつゝある奇妙なる一小村あり、この村の名をシオーと呼び以前は只樹木のみ茂る寒村に過ぎざりしが今を去ること凡そ五十年前クエセニンといへる人が自己所有の地所内に蓊鬱たる一老木あるを幸ひこの枝の中に料理店を開かば定めて好奇の客を吸集するを得んとて一個の小なる食堂を樹上に構らへ田舍風の梯子段より之に昇り得るの仕掛となせり、その食堂は殆んど鳥の巢の如きものにて外面よりは見るに難き位なれどその中に座する時は四面皆靑葉にしてその葉越に遠近の風景を見渡さるゝなど頗る妙にして、夏向など目も覺るばかりなるより忽ち非常の評判を取り、彼自らこの木をロビンソンと呼び（ロビンソンクルーソーを脫したるもの）しが文人も美術家も紳士も爭ふてこのロビンソン號にて食事を取るべく態々此の地に出掛るに至れり。

さてこの評判の高きにつれその模倣者は次第に顯はれ年々樹上の料理店を增し今日にては二十以上の老木に茶店、料理店、圖書室、寢室等を有するに至りシオーの小村の大部分はこの樹上の生活者より成立つに至れり、又最も高き樹木には三段乃至四段に渡りて家を

構ひ宛も三四階造りの觀をなせり。尤もこの樹上の生活が大流行を極め居るは昨今の暑中にて新緑の頃より新婚旅行者がこゝにその甘露月を消するの數年々幾千の多きに上るといふ。

されぱこの奇異なる林の創立者ともいふべきグエセンは目下非常の資産を作り、デフォーがロビンソンクルーソーより得たる資産に比すれば却つて霄壤も啻ならずとは驚くべし、猶甚だ奇妙なる樹上の家は米國サンフランシスコに程近きテマルペイス山の麓にもありそは大なる赤樫の幹を繞りて建られたるものにして地上を距る事五十呎の高所にある二個の室と小なる庖厨とより成りその周圍に廻廊を設け純然たる日本風の建物なるがこれは日本の大工が作れるものなりと持主はジョージマーシランドといふ人にて同人が二年前に新婚旅行の際作れるものなりしが若夫婦はいたくこの樹上の生活を好み今日にては常住の場所となせりと。

◎珍食の材料

習慣と風土の如何によつて人々食物の嗜好を異にする事勿論なるが、避遠未開の地に至りては猶吾人をして奇怪の感情を起さしむるもの多し、中央亞弗利加のモンガ人は食鹽を得ること難きを以て魚類を鹽藏すること能はず、故に肉を裂き臼にて杵き、拳大の玉となして貯へ入用の時削りて汁の中へ入るなりと、されど旅人の談によれば彼等が嗜好するこの魚團子は實際腐敗物なるに過ぎずして臭氣堪ふべからずと。又南米の土人中には鮒を日光に乾かし半かば腐敗したるものを嗜好する風習あり。墨其斯の内地に於ては麥粉を捏ねて魚を包み、火にて少しく炙り半ば腐れたるものを嗜み、印度にては魚を玉蜀黍の皮に包み、炙りて食す又ハイランド地方にては魚を貯藏してアンモニヤ(糞臭)の臭氣あるものを食す、されど腐敗物を嗜食するの習慣は強ち野蠻人のみならず英國の或地方にては古きチーズに蛆の生じたるを洋箸にて潰して食するを嗜む、

日本人が鹽辛を嗜み、秋刀魚の腹を食ふがごときも又一種の蠻風ならんか。

◎蛇の料理

亞弗利加内地の土蠻中にて蛇を食ふといふ事は曾て聞いたが開明に誇る米國人中にも又この蠻行をするものがあるとは聊か驚かる次第である、處ろはローチスター市にてグルーバーと稱する蛇專門の動物學者あり一日友人を會して其の自慢する蛇料理を馳走したり、當日の献立表を見るに、(一)水蛇シチウにて附合に胡瓜、(二)響尾駄フライにてバタソース掛け、(三)蟒の煮肉に鷄卵ワース掛、(四)蟒ロースに、ロールパン、(五)鷄肉サラダといふ珍無類の献立なりしと。

◎女子美術學校卒業式

秋酣なる十月三十日教育勅語御下賜の紀念日を卜して第十回卒業證書授與式を擧行せり午前十時君が代の合唱を以つて式は始められ勅語捧讀の後證書授與式あり次で千家知事、尾崎市長等の祝辭、辻會長三宅博士の演說ありて後來賓一同に茶菓を饗し、生徒の製作にかゝる衣類刺繡、編物、造花、繪畫等を自由に觀覽せしめたり。

◎本派本願寺設立女學校

本願寺裏方大谷籌子の方は夙に女子敎育に心を注がれつゝありしが今回毛利公爵母堂、木戸侯爵夫人、柳橋絢子其他數多の貴族紳士の夫人等と語らい築地本願寺内に事務所を設置し後藤環爾、三松永成等の同山役員其中心となり奔走中なるが巳に多額の寄附金を得たるを以て愈々本月工事に着手し麹町中六番町に校舎を新築し來年四月學期より開校すべしと。

◎文藝女學校の設立

眞宗の碩學宿老を以て聞へたる島地默雷上人は麹町番町なる白蓮敎會内に女子文藝學舍を設立して旣に二十年の歲月を經、同學舍より出身して良妻賢母となりし婦人尠からざる由なるが今回同舍を改築して一大女學校となすべき計畫にて本願寺を始め毛利、三井、木戸、其他の諸家より寄附ありたり。

落葉のしをり

◎女子大學秋季文藝會

文學研究の目的を以て同校生徒の間に組織せらるゝ文藝會は去る十一月廿六日午前九時より同校々堂内に於て秋季大會を催し大學部各科生徒を數組に分ち趣向を凝らして仕組める演藝對話(愛國)英語暗誦、對話(眞)ピヤノ、(グリーグの曲)對話(かゝやき)、合唱)を演じたりしが其技いづれも巧妙にして學校演劇としては比類なき上出來なりき且つ當日は特に高輪に御在せらる 內親王殿下 閑院宮妃殿下、東伏見宮殿下の御臨場牧野文相、大隈伯蜂須賀侯樺山伯其他貴婦人方には岩倉、鍋島近衛、大隈等公伯夫人を始めとして其他交際社會の各夫人令孃等にて近來稀なる盛會なりき猶右に就ての詳細並に技藝の評は次號に讓る。

◎大日本婦人教育會總會

同會第廿回總會は去月十七日芝 高輪毛利公爵 邸に於て開かれたり。會場は邸の後園に定められたるが園内は秋の風物に滿ちて見渡す限りの楓葉は麗かなる小春の日和に照されて蜀 紅の錦を織り出し、玉と碎け霓と輝やく噴水の此方には一羽の丹頂の優々と水を漁るあり、此處彼處には數箇の休憩所をしつらへ、茶、菓子、しるこ、水菓子、すし等を備へたり式場の席定まるや總裁閑院宮妃殿下(薄桃色の服を召されて)御臨場毛利公爵母堂會長として開會の辭を述べ、一同敬意を表せる中に妃殿下は左の令旨を賜はりたり。

創立以來本會の事業は諸氏の盡力に依り益々盛大に趣きしも戰後國運の發展に伴ひ尚一層女子教育の普及に勉められんことを望む

會長の答辭ありて次に毛利五郎男は幹事に代りて會務の報告を爲し、柳澤文部次官は女子教育に關する一場の演說をなし休憩の後餘興に移りて三番叟、鏡山奥庭の場、鳥居喜登の筑前琵琶、花舞臺霞の猿曳等の催ありき。

◎東洋婦人會總會

同會は去月十日有樂町三井倶樂部に開かれ會長鍋島侯爵夫人開會の辭に次ぎ山脇房子女史創立以來の經過を報告し役員改選は全會一致を以て前任者を再選するに決し清國提學使の演說ありて後ち肝付海軍中將は大隈伯の祝辭を代讀し引き續き婦人に對する希望とて有益なる講話あり右終つて餘興に入り午後三時頃解散尙ほ同會の事業として、清國に派遣すべき女教員養成所を麴町區中六番町十四番地に設け昨年五月より授業を開始したるが成績なか〳〵良好にして目下入學希望者多數ありと云ふ日清の國交益々親昧を加ふの今日婦人界の活動を見るは喜ばしき事にこそ。

◎第三高等女學校秋季運動會

紅葉錦を染めて菊の香ゆかしき小春日和の此頃運動會には絕好の好時節なり府立第三高等女學校にては秋季運動會の催しあり十一月十一日午前八時日ヶ窪なる同校庭内に開かれ生徒一同校歌の合 唱に初まり君が代の唱歌を以て閉 會を告げたるが其の間午前午後共に卅回餘の競技あり殊に尤も此の校新 案の遊戯なりと稱せらるセンターボール夕立競爭、四拍子行進、平和の旗風、操棒列舞など至極面白くバスケツトボール、綱引は手極よくは行かざりしかど却て觀者をして興を深からしめたり斯くて運動會の無事閉會を告げたるは午後四時半なりき當 日來賓の重なるものは德川伯、土方伯、大島子、棚橋女史、溫羅公使館員等其他父兄保證人卒業生等無慮二千餘名。



◎稚ごゝろ

泣琴女史

僕の家にだつて、姉さんは居たよ。二人も居たよ。だつて、つまらないヤ、皆居なくなつちもうんだもの。大きい姉さんは、お嫁に行つたし、小さい、僕の一番好きな小さい姉さんは……死んで終つたもの——そして、僕まで今度は惡くて、今日は大變熱が有るんだと、何故だらう。士官の兄樣からは、早く直らなくては、軍人にはなられないつて寄越したと、お母さんが先刻、お藥を呉れる時に言つてたが……あゝ、僕は、小姉樣の樣に、もう、直らないのだらうか……嫌だ。さう弱くては大將になられないよ。

だけど、僕の小姉樣は、京都の學校に居た時、餘り勉强したから病氣になつて弱くなつて終つたと言ふから、僕は、宜いのだらう。僕も、勉强は嫌ではないのだけど……死にはしないよ。さうだ〳〵、勉强し過ぎるから死んだのだ。僕は死なゝいよ。だつて——僕が死なゝいつたつて、小姉樣が居て呉れなきや、僕は、駄目だよ。僕は、小姉樣が一番好きなのだもの。

卒業して歸つてからは、毎晩、僕と川の方へ散歩に行く。其時には、毎も唱歌を習つたのだ。又、お部屋で御本を讀んでる時、行くと、彼の赤い机の傍に座らして、義經や、正行の話をして呉れたのだ。僕ば、正行が好きだ、僕だつて、十一になりや、お父樣に別れても、屹度、賊を降參させてやるよ。僕は、正行になるのだ。小姉樣も大贊成だもの。それから、宜い日和の時、お庭の燈籠の傍に在る、長い石に騎つて、馬よ〳〵つて喜んでると、やつてきて、京都には、船が坂を上るの、生きた松で造つた船があのつて、寫眞を持つて來て見せて呉れ、僕が斯うして居るのも、士官の兄樣が歸つたら、うつして貰はうなんてたが、兄樣は彈丸の中に居ても、生きて凱旋つたのに小姉樣は、もう居なくなつてしまつたんだ。あ、死んでは、駄目だ〳〵。ホント小姉樣が居

ると、此頃は、毎日、枕下にゐて、廣瀬中佐や、乃木大將の豪いことを聞せて呉れるだらうに……そして、又、あの、琴を彈いて――噫、大姉樣は、他家にだし、お母さんは、忙いから、小姉樣でなくつちや、彈いては呉れない。何時か、大小の姉樣が合奏してると、士官の兄樣が尺八を吹く。平生は、物も言はないお父樣が、面白いつて、お母さんも八雲琴で、皆やつた事がある。僕は、行儀よく、お父樣の側で聽いてると、

「藝無しは坊ばかりだねえ」といふから

「あら、お父樣もだ」と謂つた。すると

「何々、さうだつたか。それは參つた。では……」ツと大事に納つて有つた、古い本を、小机に擴げて、大きい聲を上げたり下げたりして、やつたよ。お能だと言つたつけ。それで愈、僕だけになつたから、僕は、四の翁に習つてたのをやつた。サーベルを取つて來て

「大日本帝國萬々歳。坊ちやまも、萬々歳」

皆、大笑すると、小姉樣は、「上出來々々々」つて褒めて呉れた。何でもお祭典の夜だつたねえ、今一度、あんな事をやると冝いになア――其とも、一人でも、小姉樣が、お復習して呉れると冝いになア。僕は、琴でも何でも、好だか、琴が一番好だ、悲しくも、つらくも無い折、きいても、涙が自然に出る程、嬉しいのだが……あゝ、小姉樣さへ居れば、すぐ、彈いて呉れるのだに

斯樣な事を思ふと、頭が一層痛んで來るヮ。あゝ、かういふ時に、小姉樣が居るとなア――

もう、小姉樣は生きちや呉れないか知ら。僕は、小姉樣さへ居てくれるなら、喇叭だつて、木銃だつて、要りやしない。小姉樣が居さへすりや。

僕は、嫌だ。何故、かう頭が惡いんだらう。弱くちや、戰爭も出來やしないよ、墓山で。墓山。あ、彼墓山には僕の大事な小姉樣が居るのだ。いつまでも寢て居るのだ。婆やは、「もう、覺める事はない」と云つたが、僕も、小姉樣が、呼ぶのだらうか。そりや、小姉樣は淋しいはなア。僕、行つてやらうか、小姉樣が居るのだから。嬉いよ。小姉樣も喜ぶヮ。だつて、だつて、彼所で、あんなに寢たら。もう、覺められないといふぢやないか。戰も出來なくなるし……そんな事は嫌だ〳〵。其れより小姉樣が生きて來りや、其が一番だ、けれど小姉樣は、矢張、寢て居たいので、それで、僕をよぶのだか知ら。だつても、僕、困るなア。

ナニ、小姉樣は其んな事をいふものか。小姉樣は、一日も早く僕が全癒る樣に祷つてゐるよ。さうだよ。さうだ。そして僕、よくなつて、大きくなつて、大將になつて、お墓に詣つてやる、喜ぶだらうねえ。萬歳、萬歳、兄樣が海軍の大將、僕が、陸軍の大將、兄弟して、又ロスケでも、ドイツでも、すぐに討つて降參させて、桃太郎の樣に淨山の寶をお土産に歸國つて、大きい〳〵國土を天子樣へ獻上るのだ。愉快〳〵、早く癒ると宜いなア。癒ると、また、戰爭をするのだ。新宅の米ちやんも、萬壽屋の熊さやんも、皆、僕の方だ。從卒の、勇一、貴方の勇一は、強いからなア、早く全快れ、〳〵、僕の病氣は速く全快れ……

だツて、小姉様が居ないから、やつぱり、駄目だよ、小姉様は僕を一人ぼつちにして何ともないのだらうか——

夢!? なに、夢ぢやない。僕は、慥に聞いたのだ。寐てる時、お父様とお母様と談してたのを、聞いた様に思ふのだ。眞實だらうか。僕ん家へ。姉様が來るんだと。士官の兄様のお嫁に——僕の、姉様だ、亡くなつた小姉様の様だと可いがなア、若し、さうだと僕は、また〳〵温和しくして、能く謂ふ事を聽いてやるよ。今だつて、お父様のいふ通りに、靜に寢て居るのだもの。其姉様は、何家から來るんだらう。末ちやんの姉様か、何、彼の姉様は首ばかり振るぢやないか。駿ッ子の虎の様だ。怒つたつて眞實だもの。それに、琴は、彈かないで三味線ばかりなのだ、三味線は駄目だよ、お父様の年賀の時にお白粉つけた姉でも彈いたよ——あ、彼奴は、無暗に僕を負んぶしてやるつて追うて來たつけなア。嫌だ、嫌だつても、矢張。ついて來たので、僕は腹が立つたから、突然、盃を投げつけてやつた、すると、お母様は、あんな奴に、お詫をしたつけなア、お母様も弱かつたよ、追ひ返しさへすりや可んだけど。僕は、あんなのは、嫌だ。では、鹿ちやんの方の姉さんだらうか。僕は、好だ。だけど體が小いねえ、士官のお嫁は、大きいのが可いのだ。誰だらうなア、早く分ると可い。

萬一方のお嫁は、僕の家來さへすれば、「坊ちやま」つて負んぶして吳れるから、僕は、いつか、お母様へ、

「僕にも、お嫁を、買つて吳れないかえ」

と謂つたつけ、皆は、笑つて、何故、ときくから

「萬方のお嫁は、毎日來ないから。僕は、毎日、負んぶして吳れるお嫁が可い」といふと

「大きくなつてから、よ」

「大きくなつて負はれては、人は笑ふワ」

小姉様が。頭を抑えて、

「偉いねえ、よく、分つた〳〵」

と褒めて吳れた事があつた。お嫁つてものは、兄様の様に、戰に行つて、勳章を貰つて、それから貰ふのだなア。さうだ〳〵、僕も、はやく戰功を立てゝ來て、そして……だつて其折には、はや、大きくなつてるから、負はれられないよ……、ナニ、構はない、其代り、お馬に乘つて、山でも、川でも、飛び越えるのだ。お馬石より可いよ。大きいのに乘つて、敵を平らげて來るのだ、あゝ、小姉様が生存てると、それこそ、大變よろこんで吳れるだらうに。

や、もう、思ふまい。今度、姉さんか來りや、同じだよ。何所からだらう。お母さんは、十八だと謂つた様だつた。すると——僕より、十多いのだ。あ、亡くなつた姉さんと、同じぢやないか、では、小姉様が何處かに生きてるのだナ。だつて、亡くなつた時、姿が見せて吳れたらう。目を閉ぢて、兩手を合せて……嫌だ、小姉様は、墓山に寢て居るのだよ。ぢや、誰だらう。僕の家へ來てくれる姉さんは——(備中小田郡大江村龜舍川合汝琴)

◎亡妹

嚴海

棠棣の花鄂として韡々たらざらむ、實に骨肉の情、手足の愛、家居を同うしたる玉友、机席を共にしたる金昆、殊にそれか、

私に於ては、天にも地にも、唯一人の妹であるから、友愛の深きは、通常で無い。

妹、名を友枝と呼べり、十九歳の春、廣島の高等女學校を卒へてからは、温がなる父母の膝下に在りて、硯を嚴海の波に洗ひ、筆を彌山の翠に染めて、漢詩に、和歌に、其の雅懷を洩しつゝありしが、間も無く、母の甥、澄永完に嫁した、澄永は山陽鐵道の技師を勤めて神戸に住まへり。

私が、島根の中學から、明



石の農學校に轉任した時に、其の喜悦は、非常なもので、まだ任地に着かぬ先きから、はがきに封書に、前後五六回、祝詞やら、案内やら。これも、なつかしさの餘りか。

赴任の當時は、何や彼やと忙殺されて、來る日曜には來る日曜にはと、思ふ間に日が延びて漸と第四の土曜日に、明石驛から汽車に乘りて、神戸驛に着いたが午後の五頃であつた、驛前より俥車を馳せて澄永の宅を楠町に訪ふた、黒板塀高く廻らし、門構へいかめしき邸宅、俥車を下りて、急ぎ玄關に上り、書生や下女の案内を請はず、「オイ〜自己が來た自己が來た」と、云ひつゝ、奥へ通れば、妹は出迎へて「ヤレヤレ兄さま待ちましたよ」と、私は導かれて客間

に入りぬ。珈琲一椀、薄茶三椀、徐に庭園の結構を品し、閑に林泉の布置を評し、花卉盆栽の種々を眺めける折しも、主人澄永も會社より歸宅し、妹から「唯今兄さまが來ましたよ」と聞きて妹婿も大喜悦び「ナア兄さむコレヘ〳〵、其れより。其の夜は硝燭煌々、薰風堂に滿ち、山參酒佳肴は、盛りて卓上に堆く、和洋折衷の饗膳、心隔てぬ三人鼎座し眞味の情話に更を深かし、漸く床に就いたか、午前三時頃でしたらうよ。父母は嘗て云ひ給へり、「汝が掌中の玉ならむには、娘は譽上の花なむめり」と。

私は家事上の都合にて、明石の學校を辭して、故郷に歸り、妹は依然神戸に殘りて在りけるが、春の始めつ頃より、腸胃を病みて、漸々に重り行けば、婿の澄永も心安からず思ひて、當時看護に來れる親戚の誰彼とも協議して、神戸病院長佐野醫學士、江島醫學士、大野横山など云へる醫士の診察を受けつゝ、看護に餘念なかりしが、春も半を過ぐるに、病は愈々輕からずなりぬ、澄永は病める妹を慰めむとて、

束の間に梅も櫻も散りしかど月は心の儘になめがむ

と詠みければ、妹は重き枕を少し擡げて、朱脣綿衰苦しき息の下よりも「然あれかし」とのみ、微に傾きたり、一日突然大野醫士來診せられければ、妹遽かに「よゝ」と泣き出しぬ。看護の人々、訝り怪みつゝ其故を問へば、「阿兄樣が〳〵」と云ひつゝ「おなつかしいけれどモー言が云へれば」とて、指もて疊に書い示しければ、傍にあり合ふ人々は、サテモ大野氏と阿兄と見誤れるまでに、モハヤ視力が衰弱したるか、且又かゝる重症の中からも阿兄を慕はるゝかと。互に袖を霑ふしつゝ、急ぎ電信もて「ナマイオモシスアコイ」と、予が許に報じ越したり、頓て又もや聲高く電報と、第二の報道は來れり、婢は周章しく受け取りて妻に遞しぬ、妻は徐々と携へ來りぬ、予が心臟は鼓動し始めたり、妻に命じて讀ましむ、今正に緘を開きて讀み下す一刹那、電光石火「イマシス云々」此の時、此の聲、鋭く鼓膜を透して、鋭く胸を剪きたり、されども予はムシロ聾の如く、啞の如くなりき。

玉に擬せられたる身は、石や瓦と共に全きも。花に比せられたる妹は、脆くも散りけるかな。

山陽頼氏が妹を哭するの詩に、忽ち凶音を得て又讀むで又疑ふ[illegible]兄に寄するの語ありと。ア、眞か夢か、將た幻か、アハレ妹は終に逝けるが、二十六歳を一期として、棠棣花上雨蕭き夕。

五七日の忌に、私は神戸に上り、先づ澄永の邸を訪ひ、眞に其の新墳墓に奠すれば、香樹叢竹影を交へて、塞禽啼く、鵑聲彷彿幽に梵音と和して聞こゆ、一瓶の枯骨に對して、燃香一瓣、心身肅たるの際、膝上頭に豐富の清雅たるを覺えたり。

翌日何かものせんとて、妹が平日愛讀したる書帙を檢したるに、中より一葉の短册正く妹が手跡にて、

草公去後無知己、空眼孤頭獨倚條、

題簽と書せり、そもやそも、コレ　妹が遺念の絶筆。

夫婦

むらさき

一

「ネー清さん、ほんとにもう僕の事をあきらめて、どうぞもつとまさつた人を夫にして、楽しく暮しておくれ、お願いだから。」

「あら旦那様いやな、いつ私がそんな心になりました、いつも申上る通りまさつた夫を持てくれなんて、此世界に私が夫としてかしづくお方は、外には一人もありません、それでは去年神様にちかつた言葉と違ふじやありませんか、あの時何とおつしやいまして、あれ程神のみ前でちかつたのにいくら、病氣だとて、今更そんな事が出來るものですか」

「でも母君のお心もお察し又家の事も思はねばいかんじやないか、この私の病氣が子孫にでも遺てごらん、それこそ大變だ、いくらさはいでも取返しがつかないよ。それにあびる程薬をのんだのでもう肺といふ名がついちや死ぬを待つより仕方がないもの、罪もないお前に不幸を見せるは私の本意じやないもの、ねあきらめておくれよね、清さん。」

「何とおつしやつてもいやで御座います、私そんな事は一體母さんも分らない方だ、まだ私が年が行かないからと申上げたのを、むりにかうして置きながら、御病氣が出たからつてやめるなんて、あんまり無法といふもんだは、御自分だつて不如歸をよんで浪子が可愛そうだと涙をこぼしなすつたくせに、只男と女と逢ふだけで譯には少しも變りはないわ、それだのにあんまりひどいわ、もうよしましよう、こんな面白くない話しは、御病氣に障るといけませんから、なに直らないなんて事があるもんですか、私の一念でも屹度よくして以前よりもつと御丈夫にしてお目にかけます、そうして愉快に暮らそうじやありませんか。」

「あはゝゑらい勢だね。」

ある病院の一等室で物語つてゐる男女があります。男は村井靜男といつて年は二十八九でもありましよう、目鼻立のりゝしい當世風の人だが、色あくまで白く、そうして少しやせすぎて見えるは病氣のせいでしよう、女は去年十七である女學校を優等で卒業したとの事、愛くるしい丸ぽちやで笑ふとゑくぼのいつて一寸人すきのする顔だちです。

二

今しも清子はゆあみをすまして、はでな浴衣に涼風ふかせながら、池のほとりに立つて一心に月を見つめてゐます、定めし去年の夏二人で月見した事でも考へてゐるのでしよう、そのうちに目から涙がおちました。

「アゝどう遊ばしたらう、矢張り病院の窓からお一人でながめてゐらつしやるのだろう。」

私ほど不幸のものは二人とはないだろう、兄弟は一人もなく、父君も幼い時におなくなり遊して母君の手一つに育てられ、やう〳〵夫を迎へ

る樣になれば其夫は病氣で、今迄やさしかつた母君もあんな無法の事をおつしやるし、學校にゐた時分には快活な人だと先生にもお友人にもいはれたのに、こんなにぐちつぽくなるのも境遇のせいだらう、けれど、もう〳〵本とうに世の中はいやになつた、旦那樣はどう遊ばしたらう、先達もあんな事おつしやつて、

と一人心の中でつぶやきながら庭をあてもなくあるいてゐます。

折しも母君の聲で「淸さん一寸おいで話しがあるから、はいといひながら急いで參りました。

母君のお部屋は南の方の椽の八疊で、小じんまりしたきれいな座敷です。

「淸さんかいおは入り。」

「母樣何御用。」

といひながら淸子はしとやかには入つて母の向ふにすはりました。

「淸さんお前不承知だらうけれど、まあお茶でもおあがり、外でもないがね、靜男は昨日離緣しましたよ。」

「エ母樣ほんとですか。」

「さア驚くのも尤だが前から話してあつた通り、あの病氣の出た人と一所にすんでゐて、一人ぎりのお前に迻うつつてごらん、此母をどうしてくれる困るじやないか、お前もうれんれいじやなしするから、家の爲先祖の爲と思ひ切ておくれ、これさ淸さん、泣てゐちやいかんよ、これ淸子や。」

淸子はつと立つておのが部屋へと去つてゆき、机の上にうつぶしたなり暫く顏も上げませんでした。

その翌日から淸子は、おのが部屋にこもつたきりあまり人にも逢ひませんが始終こういつて居ました。

「屹度母さん夫を持てとおつしやるだらう、けれど、御病氣で一人淋しくゐらつしやるものを、私にはどうしてもそんな不人情な事は出來ないは、うちにゐちやいやでも仰に從はればならないから、いつそ看護婦になつて御病氣の爲に盡くそう。」

とそれから一週間ばかり經て村井家では、淸子が見えなくなつたと大さはぎをしたとの事です。

紅恨

なてし子

一

栄ある夜、此宵の　天地靜に更闌けて　二人の戀の末長く　睦じ
かれと愛神か　囁く聲か密やかに　徒に音でる風の音。
戀の力に醉はされて　現ともなう思ひ入る　「宮」が面に散りかゝ
る　梅の花片美しう　火影に背く片頰に　燭の光は流れつゝ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

花の裝ひ美しき
「宮」を朝宵見るにつけ
此手弱女を未來の
妻と思へばしかすかに
若き心は勵みつゝ
彌益進む學び業。

面と面を見合せて
互にかはす微笑に
深き愛も融くるらん
若きに親を失ひし
孤寂しき貫一の
荒野の胸も花咲きて。

物思はしげなる身を浮世の竹柱に凭せつゝ、「金色夜叉の歌」を幾度となく繰返したる喜美子はふと大息して弱肩をすぼめ乍ら、山寺の塔に落行く雁金を恍惚眺めしが、得耐えぬ樣して胸を押へて、卷を掩へばせき來る紅涙、珠と散りしく惱みの響きに、今日も夕暮の雲は迫りて、懐しき山も見えずなる迄、柳の軒の薄暗き景色や。



「あゝ、斯うして二人は……
……。」

喜美子はそゞろ追懐の念に悶へて、深き同情を「戀の人」に注ぎつゝ、「戀」に對する死活問題を、最弱き觀察力に依りて縱横より解釋したる果は、五色の糸の亂をほぐして、正しき絣に捲き直しゝ其と均しく、一筋一筋に強弱ある「やさしき力」は靈異なる運命を結び合せて、只其繰出すが隨に捲れ行く心の、遂に複雜なる綾となり錦となり、染布となり襤褸となりて、短き歴史を織りなすにも似たるが、筬の通ひに煌く思ひを、或者の肌に傳へしが是かと、とりとめもなき憧憬に耽りし、胸の秘扉の内に籠れる、情の光の

暮れるこそ口惜しけれ。返す〴〵も恨めしの世の運命や、と愛のほつれ毛咬切りしも本意なう、早暮切りし朧夜の空に、怪しき影を認めし切なさ、甘き薫りは美しき歎息より湧出でて、直に其實現を證せるに非らずや。

喜美子、十九の若き悲ひに、やつれ姿を見返るも耻しけれど、今更苦しき戀を捨てかれて、又果しなき「うらみ」を繰返すなりき。

二

「げにも冷たき心かな　人の情を忘れても　石に心のあこがるゝ　卑しき汝を知らずして　われ二十五の今日迄も　深くたのみし愚さよ。

あゝ美しく、凛き人と思ひて慕ひつゝ　胸に抱きし其の影は　見るにも聞くも厭はしき　操破りのたはれ女と　化りしことの口惜や。」

怒は胸を劈きて　腸煮ゆる苦しみの　抑へ難さに蹌踉と　砂に倒るゝ貫一の　身は戦々と震ひつゝ　迫れる息の凄ましく。

「如何に、君よ」と取縋る　「宮」の片頬を眺めつゝ　力なげにも手を把りて　「宮子よ貴女と諸共に　語るも今日を限なる　十七日を忘れされ。

あゝ來ん年の此宵は　何處に月を見るならん　何處に月を見る迚も　恨も深きこの宵を　我は忘れじ永久に　涙に月をくもらせん。」

恨こもれる「貫一」の　言葉を聞くに堪かれて　熱き涙に咽びつゝ　取寄る「宮」を突退けて　立てば亂るゝ砂の上に　二人の影は暴みたり。

＊　＊　＊　＊　＊

幻心地、徐々に　進めば「宮」も慕ひ來て　「若し外人に嫁ぎなば　君は如何に」と占問ふを　憎き問ひやと憤る　男の面は朱と照りて　勵む心に「宮」を蹴る　其足さへも震ふかな。

「まア、何と云ふ慘劇だらうね。」

喜美子は更に痛酷なる嘆息を洩して、

「戀人に副はれぬ「宮様」も可愛相だが、「宮様」に捨てられた間様こそ、如何程口惜しかつたか知れないとよ、其を思ひ、此を思ふと、妾どうしたつて、高田様と結婚することは出來なくつて……。」と、とつ追ひつ。

又從兄の高田文學士は、喜美子の父の爲に其學資を與へられ、高等文官として今は某省に月桂冠を戴きたる者。其には幼馴染の「敏子」と云ふが有りて、互の戀路は千里の果にも靡きせじと聞くに、父は冷たき情を強て、喜美子を高田の妻と爲す可く、既に其内意をも取定めたるが、高

田は此一難題を課せられても、絶對的に排斥するの勇氣なく、恩惠者に報ゆるの義務として、人情として、忌はしき結婚にも服從せざるを得ぬ有樣。去迚、喜美子を厭ひてにはなく、「敏子」を振捨てゝ戀に死せしむるの苦痛に忍びざるの一事は、他の見る目も憐れなる程なりき。然り、「高田榮」には、熱誠なる「敏子」あり、美しき「敏子」あり、優しき「敏子」あり、才高き「敏子」あり、最濃厚なる戀草を抱ける幼馴染の「敏子」あるなり、よし、王侯の顯位を以てするも、此戀人を捨つ可くもあらぬに、心に副はぬ結婚を首肯するの止むを得ざるに及びし儚なさ。若し、「榮」にして喜美子と結婚するに至らば、「敏子」必狂死の慘劇を演ずならん、かくての「榮」は煩悶に煩悶を重ねて、つれなき夢を結び、自然、家庭を冷たき闇となして小說的の哀史を實現することもあらんを、內氣の喜美子も敏子に劣らぬ愛を捧げて、殊に美しき心を傾注しつゝ有るを見れば、何れ芳ばしからぬ境遇に彷徨ふ可しと識者の噂。

明白に言へば、高田文學士には切つても切れぬ敏子のあるを、義理のかせに強られし結婚の切なきことよ。

其と知りたる喜美子も、亦戀のほむらに膓を爛らして、左やせん、右やせんと、小さき胸に餘る苦しみや。

をかしき比較なれど、三つの心の「榮」は「宮」にして、「敏子」は「貫一」の其かとも思ひやらるれば、喜美子一つの心にて「貫一」をも救ひ、「宮」をも救ひて、愛の光は美しき家庭に満ちわたることゝ信ぜられつ、寧、身を犠牲に供して、「金色夜叉」を焚かばやと迄決心したりしが、又、我戀を、と胸を躍らせて、春の夢路に彷徨ふなりけり。

三

と見れば霖雨の空は霽氣に沈み行きて、春の愁は若きを誘ふ鐘の響きや、風なきにはら〳〵と散る櫻花の、砂に螺鈿を鏤めたるも何となう情趣あるに、優しき榮と戯れに耽りし節を描きては、記念の多き庭園の其處此處、別て此離座敷には二人の夢を封じたることもありしなど、忘れがたなの思ひに溺りたる喜美子は、むら〳〵と嫉妬の炎を揚げつ、一途に榮の愛を占めんものをとさへ敦圉きたりしも、同情にたえぬ敏子の戀賊は、いたくも喜美子の胸に刻まれたるものから、執念を貫かんとする力は脆く挫けて、深き「おもひやり」に又一入の苦痛を感じつゝ、自ら「金色夜叉」の人となりて、空き冥想を辿るこそ痛はしけれ。

何の用ぞとあまたゝび　問はれて頬をば赤め背　あげし面をそれと見て　「宮」かと迹は言葉なく　切齒なせる貫一の　胸は怨みにみたれつゝ。

「歸れ」とのみに立上る　袖を捉へて咽び泣く　「宮」の心やいかならん　死ぬとも今日は歸らじと　涙乍らに訴ふる　言葉もしどろもどろにて。

いと情なくも擧動へる　戀しき人の其の聲を　六年振ぞと思ひては　荒き言葉も懷はしく　慕ひし我身を投伏して　許せと計り願

へども。

「貫一」は只忙然と　深き思ひに誘はれて　罵る可きか責むべきか
将鎮ばんか叱らんか　吾を吾とも分けかれし　胸は狂ひつ亂れつゝ。

「せめて殺せ」と身を投げて　泣伏す人もかへりみず　「自ら死れ」と捨言葉　纏る「宮」をは排しのけて　行かんとすれば姫萬の　力執念くからむかな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

狂へる人をかい抱き　「宮」よ、汝は狂ひしか　汝を赦すと云ふ言も　得分ぬ迄に狂ひしか　赦すぞ「宮」と貫一は　語る聲さへ震ひつゝ。

出來し方な此方ぞと　狂へる「宮」を追ひて來し　母も涙に袖ひぢて　「貫一君は此處ぞ」とて　其耳近く囁けど　あはれや宮は只泣きて。

傍に見る人々の　袖も濕るや貫一は　宮の面に接吻て　可憐と落す一しづく　涙や狂ふ花の人の　亂れし胸に通ふらん。

又一音樂隊の　奏づる音の顫ひに　「宮」は不圖しも眼を擧げて
貫一君と取すがる　脊族でつゝ貫一の　ひとり寂しき思ひ哉。

眦と瞋めし眼は夢見る如に曇り行きて涙は卷に迸しりつゝ「富山」の

不幸を憐み、「満枝」の憤怒を憐み、「宮」の狂氣を憐み、貫一の失意を憐みたる喜美子が、今や新なる感應に觸れて、胸の秘扉を押開きつ。才華に活動せる情の人となりて急奔せる運命を審に含味し、「宮」の爲に起りたる波瀾が深くも社會の根を洗ふに至れる思ひ到れば、「敏子」の命を奪ひ、「榮」の戀を奪ひて、冷たき家庭に苦悶の色を罩むるの慘劇に堪えず、我怨み水に流しなば二人の戀は美しき光となりて輝かんを、と斷然、我に誓ひし刹那の動機よ。

「さう、お父様が何う仰しやらうとも、妾さへ承知しなければ其で可いことよ、其ともお父様が強制しなすつたら、最後の手段を……、妾、榮さんの幸福を祈る爲には、甚麼苦痛をも忍ばればならないは。」

飜然大悟すれば、光風霽月の胸は安らかに、春風春水一時に到つて、無限の快感は渾身に流れつ、平和の影は喜美子を裹みて、淡き灯に夜の色を鎖ひたる折しも、天津乙女の金鈴を振る如に、初音洩らして泉水の河鹿や、生暖き風に又一顆、花は吹雪と散亂れて、春の姿のしどけなき趣は、物なつかしき想ひに迫りぬ。

■

「榮」との婚約成りしことを父より聞くや、喜美子は明かに結婚を厭ふの意を示して突然其姿を隱したりしが、紅き圏點付の「金色夜叉の歌」は、「戀幸を祈る」との一語を加へられて、「榮」の許に送られしとか。

人儚なさの花の涙に、春はうらみの空に行きけり。

（完）

和歌

（天） 冬月　　足尾　森照野

磯立の松の葉白く霜見えて
月さえ渡るよさの浦づら

評。格高調諧。

（地） 鋸山の初雪　　越後　坪井わか子

朝戸出の風は身をきるばかりにて
初雪しろしのこぎりの峯

評。身をきるの語、鋸の語と相響きて興あり。

（人） 題知らず　　美濃　山田愛子

別れにとむすびしまゝに秋の來て
君はかへらずちる柳かな

評。結びしまゝの語老什の生命也。

秀逸

○○失題　　牛込　平塚白百合

わがさとは錦にかざる山を背に萩の花浮く小川を前に

好境可羨。

○○題しらず　　安藝　松坂梅子

かじ枕千鳥の聲にね覺むれば磯山松に月落んとす

此時の景、此時の情眞に詩也、況や精錬の辭を以て之を出すをや。

○○秋月　　東京　田中常子

友を思ひ故郷を思ひ身をおもひ月に默ひのしげきころかな

月に對して感慨多し。

○○失題　　近江　宮城梅子

手折りなば露ちるらんのたゆたひに蟲なき出でぬ萩の下枝

露を愛みてたゆたひ、蟲の音を驚かさゝらむとして空く手を收む、愛情の溫かなるを見るべし。

○○秋風　　東京　野口榮子

萩の花こぼるゝ頃とはやなりぬ吹く秋風よこゝろしてふけ

秋風佳人を驚し易し、ひとり萩花を吹き落とすのみならず。

○○紅葉　　麴町　三澤花子

常磐なる松のみどりもかはるまでくれなゐそむる庭の紅葉

秋色深き知るべし。

○○旅泊　　和歌山　植木梅子

かぢまくらゆられ〳〵て今宵また如何なるなみにうきねをかせん

巧に旅情を歌へるもの。

○○逸題　　周防　貞弘やちよ

春姫と袖をつらねし頃はなほ身の行末も思はざりしを

芳朝過ぎ易く、人生恨事多し。

○○題知らず　　岩代　岸野菊子

よむふみの上をてらせるともし火はやがて身にそふ光りなるらむ

好教訓歌。

○○歳暮　　堺市　平野輝子

いとまあるもいとまなき身もいろともに心せわしき年のくれかな

人情自ら然り。

〇〇題知らず　越前　島　萬壽子

裸木の柿の梢にもずなきて夕日さすなり岡の一つ家

村落の光景躍るが如し。

、〇〇菊　橫濱　吉川折枝

見る度におのがむをかへり見きあまりに淸き白きくの花

、〇〇題しらず　神戸　鹽屋とみ子

うす墨の繪しまの沖のあけぼのをわがふれながらたれかうつさむ

景は是れ畫中の景。身は是れ畫中の身。

、〇〇逃題　兵庫　柳田白百合子

木枯に野守がいほの灯もきへて木の間にすごき片われの月

、〇〇もみぢ　岩代　眞田芳子

いづれをかもみぢとわけて手折らなむ山くれないいに水くれないいに

下句面白し。

〇〇紅葉狩に誘へる友か文の返しに　筑前　木村こま子

香こめし紅葉のいろにたらへつゝくりかへしみる君が玉づさ

〇〇失題　大阪　北川種子

れむげなる小猫の聖の様にして針の手はこぶ山茶花の宿

實景。

〇〇折りにふれて　麻布　淸水すみ子

四方川の眺めのみかは人心うつれば變る世にぞありける

人事眞に愼むべし。

、〇〇月前雁　備前　駒井友子

月見つゝふるさとこふるをりしもあれはつ雁は啼てきにけり

〇〇失題　京都　四辻まさ子

山茶花のはなまたひとつこぼれけり枝うつりする鳥の羽ふきに

佳調

○　築地　いく子

燃ゆるとも消ゆとも淡き陽炎のそれとはかなき我身かなしき

まどひ　岡山　田上濱子

幾度かみ墓の前にぬかづきぬとやせんかくの歎きまどひに

海上月　廣島　房子

しまもなく鳥だに飛ばむ玄海の浪てりかへすかたわれの月

惜紅葉　淺草　春江

何時までと惜しむ限りはあられども紅葉を散す野分けうらめし

歳暮　大阪　節子

いたづらに過しにけりと年々に云ふ甲斐なくもくるゝ暮かな

惜歳暮　伊豫　渡邊梅子

市といふ市に出れとうる人のなきは今年の日數なりけり

○　淺草　いゝ子

さらぬだに哀れをつれの秋なれどきぬたはるかに蟲すだく頃

○　越後　師岡つるゑ

夕ばへの雲のゆきゝのおかしさを母とかたりしふるさとの軒

○　伊賀　服部かつ子

折るも惜しいなむもつらし今更に望みし人のうらめしき哉

庵守　本郷　堀江花子

鐘に暮れ鷄に明くる我庵は浮世の外にのどけかりけり

○　神戸　今西操

くれ竹の明日來る春を待つ身にも過ぎし年波惜しまるゝ哉

○　大阪　後藤八重子

吹きよわるあらしの遠に泣く兒ありチヤーチをめぐる冬の夜の星
○　埼玉　萩原はな子

秋薔薇の花ほの白う夜霧して蟲の音しげき山かげの村
○　備中　藤村　停

水の畔蛙の歌を夢にきゝて夜のさみだれさびしくもあらず
○　前橋　宮内りき子

山寺の鐘のひゞきの野に落て木枯し寒し夕ぐれの雨
○　愛知　ますみ

琴の音も今宵ばかりは身にぞしむ月にすみ行くいざさらばの曲
○　大分　加納豐子

八重ひと重色さま〴〵に九重の御園や菊のさかりなるらん
○　京都　中村正子

君が給ひし薄紅梅の綾絹をひなの被衣ときせても見つる
○　神戸　なみ子

刈り入れむ稲の千束穗八千束穗黄金の波の世はゆたかなり
○　芝　松本美枝子

ゆめの野に胡蝶となりてあすよりは天津み空の春を見てまし
○　名古屋　國司峰子

立田姫たちますあとの衣ずれにはら〴〵と散る溪のもみぢ葉
○　奈良　葛城昌子

行く秋をとゞめかれてかすゞむしが庭の小萩にねをのみぞなく
○　美濃　西村秋子

おのづから落て流るゝ谷川の木葉や秋をのせて行らん
○　熊本　安田文子

打ちけぶる民のかまどの賑ひに夕ゐるきりも色をそへつゝ
○　麹町　平井靜子

むつまじく女波男波と打よする磯のほとりに一人たゝずむ
○　伊豆　佐藤初子

朝霧によべ凪ふ身に媚びんとや夢の型とる菊の白露
○　下野　高塩かつ子

枯れはてし尾花がそでに霜見えて朝戸出寒むし那須おろしの風
○　廣島　勝子

曉鐘の音も幽かに川そひのひと村霧に秋はくれゆく
○　栃木　小森谷好子

利根の川堤も白う遠う冴えてひときわ寂し雁の一と聲
○　築地　堤いく子

文ますとふと菊園のまぼろしにかほるの秋はたれこめてのみ
○　遠江　宮城楳子

送り來て別れをおしむ霜の道かたみにつまん草花もなし
○　大阪　沖ふく子

世をすてゝ住めるあるじの友ならむ竹のまがきの白菊のはな
○　群馬　袖野

雨にあひつゝしばしと軒にたゝずめば内よりもるゝ稚兒のなく聲
○　越後　宮入須子

手枕に暫し乳兒もるつかの間もたゞ郷里の母をしぞ思ふ
○　新潟　すゝき

里の子を笛にさそひて風けぶる柳の堤飴賣の行く
○　高崎　小池たま子

くれてゆく里の柴の戸草の庵みのれる秋のうたぞ賑ふ
○　肥前　嬉野金子

逝りてし師は世にまさず去年の秋の今日の別れを誰にかたらん
○　甲斐　矢野千代

生ひ茂る庭の草葉の白露に淋しく宿る秋の夜の月
○　韓國　松田春子

さゝ波をまくらに眠る水鳥も浮しずみして世を渡るらむ
○　山城　古川よれ子

八束穂のたりほの稲をかりつみて賤がのきはの秋ぞにぎはふ
○　能登　栗倉菫子

静かなる町野の里の小春日や節あたらしきひな唄きこゆ
○　長門　菫女史

さらば又あすもこゝなる松影によきこときかす君をこそまて
○　武藏　青柳霧生子

露深き野邊の尾花に月落ちて遠ざかり行く鹿の聲かな
○　京橋　福島喜美子

秋田もるいほりのあたりつゆちりて衣手さむく秋の風ふく
○　若狹　山中露子

徒然に奏づる琴の緒きれて寂しき夜半をほとゝぎすなく
○　甲斐　小澤富美江

かたぶきし寺の小ゑんに日はおちて今たそがれの鐘なりわたる
○　信濃　松尾節子

あかず見し庭の紅葉の霜かれて心ぼそくも秋くれんとす
○　廣島　坂部伸子

木枯に吹きよせられし庭もせの落葉にかゝる今朝の初霜
○　尾道　中尾みつる

事ならず都を後に歸り行くわが影痩せぬ冬の田面に

木枯のたえ間〳〵にましらなく木曾の小宿の霜の夜半かな
○　牛込　重子

うち招く尾花がもとにかくれつゝ色にすがたに野菊ゆかしも
○　伊豫　珠川朋子

夜の間にや秋も浮世と別れけん夢さながらの今朝の初雪
○　青森　智恵子

月の姫今出でますとこほろぎは小さき琴とる花草の原
○　芝　松永久子

水車静にめぐる水音に神代の如きよは明けにけり
○　牛込　遠藤霞子

れさめしてきけばきびしきしばの戸をあけがた近く友ちどりなく
○　紀伊　たま子

秋風は萩の上葉に訪づれてさびしさまさる秋の暮かな
○　淺草　吉村とみを

すゞむしのなくこゑかなしきりふかく萩のみだれの露重き夕
○　大阪　やす子

君行かばたが培やさんこの畑をみのりの秋はいまだ遠きに
○　肥前　萩の舎子

かへります君がためにはつらかれと語るにうれし夜半の一あめ
○　飾磨港　藤濱やを子

湖の月はのぞみ滿つ身を染めて出ぬ寛に似し雲のみな消える後
○　上總　桐谷牧子

さゆる夜はわきてたらちれ戀ひまさる夢路の末に千鳥なくなり
○　備後　立神墨子

○　羽後　波奈子

草もかれ木の葉も落ちしあれ庭に月影さむく初霜のおく

○　和泉　津田なみ子

待わびて軒端ちかくにたゝずめば戀ふしかの遠ざかり行く

○　伊豫　熊谷友枝

忘るなよ海山遠く隔つとも馴し學びの窓のむつびを

○　芝　新野壽枝子

まれかれし尾花のそでもうらがれて夕霜しろしいなのさゝ原

○　臺灣　大波春帆

我が宿を深山のおくにうつしてん浮世の風のさそはざるべく

○　東京　笠原節子

秋の夜のさやかにてらす月かげに沖の小島も見えわたるかな

○　岡山　靜子

霜白き川石傳ひ水を汲む女の髮を朝風の吹く

○　越中　杉山喜代遠子

さむき夜も文の林にわけいれば花いろ〳〵の春を見るかな

○　姫路　高橋德子

散き落葉に小雨しと〳〵と思ひ出多き夕暮の窓

○　駿河　貞子

しほあみにつどひし人のあとたへて浦風寒き秋の夕ぐれ

○　美濃　依島敏子

ほゝえみて眠れる稚子の枕邊に足のはなれし犬はりこかな

○　駿河　ゆかり女

堀川のゆるきながれにかけとめて千代もと匂ふ白きくの花

○　名古屋　淸水みさを

流れ行くもみぢの落葉せきとめて今はの秋のかた見とやせん

○　岩代　横山楣子

只ふたり母と向へる影淡くむかし語りを月にきかせて

○　長崎　田中たれ子

軒端もる月影さへて露しけし人待ち顏の菊の一もと

○　山口縣　佐々木綾子

岩間もる淸水に月の影さえて一聲高く猿のなく

○　大阪　山崎京子

月の前琴を合奏せし五年の榮華も夢なり君は逝きしか

○　安藝　松坂棒子

溫泉の宿の思出多き折しもあれ風なき庭に山茶花のちる

○　新潟　池田つる子

立ち出でゝながむるひまもなかりけり夜うつ夜の秋の月かげ

○　上總　松田貞子

しと〳〵と降る夕雨を凌ぎつゝつらなり渡る雁の聲々

○　長門　佐々木あや子

鐘樓を靜かに下る老僧のころもの袖に紅葉かず散る

○　長崎　兒玉まき子

枯野原片破月のかげすみて鐘の音細く旅僧の行く

○　大阪　向坂節子

葉がくれし宿もあらはになりはてゝ木立にすごき風の聲かな

○　岩代　菅野和子

かれし木に春や來てさく六つの花すだれまかれとあかぬながめよ

○　周防　岡崎綾子

はつ雪は霜にいくらもまさられば なびきもはてぬしのゝをすゝき

短文

◎印入賞

◎あはれ孤菊

愛知　小栗幸子

背戸の井戸端踏石の間に、毎日水を浴せられては踏れ〳〵て、根元の葉すつかり落ちた一本の菊、やつれたがまゝ日一日と育つて今は邪魔になるので、引拔いて捨てやうと思つた處、可愛い其は〳〵やさしい綺麗な花が二輪咲きました、オヽ忍耐な菊よ、其日からふまぬ樣に水を汲みました。

（評）類似の想も多けれど、かく目出度く書き流したるものはすくなし、情あり景あり、その變化のところ、如何にも筆路の自在見えて、嬉しさ云ふばかりなし、言文一致もこゝに至れば、毫末も、文章の品格をそこなふ虞無し。

◎秋の日和

栃木　大出谷子

今日は能き日和なので裏の紅葉の木に洗濯なして居りましたら 後から可愛らしき聲で姉ちやんと呼びながら 驅て來たのは今年漸く入學した妹靜子（七歳） 今日は半どんでもうおしまいして來たのよと云ふより早く洗濯盥の石鹼水を見て古き筆の軸を以て其水を付けては吹き アヽ玉屋が出來たなどと遊び居りしが 其の水玉の秋の微風に透ばれて妾の髮の上に落ちたと見え あれ姉ちやんは奇麗なお簪を挿してと手を打つて喜ぶのよ。

（評）御婦人の文は斯う書いて願いたい、短文はこれ位にして願いたい、あどけなき小兒へ、うつくしき姉を配合して居るところ、それと云はずに其塲所が見えるやうな、御婦人の文は斯う願いたい、短文はこれ位に願ひたい。

◎落葉

岩代　岸野常子

蘆の穗の眞白く映る里川の堤に立ちて、沈み行く夕日の影を眺めて居ると、何處からともなく秋の神を載せた落葉が二つ、ひら〳〵と舞て來たが、一つは汀近く風に吹きつけられて、またする〳〵と水面に辷つて行くと、一つは落ちかゝつてまた高く舞ひ上り、川を越えて向ふの水車小屋の後ろに落た。

（評）落葉の形容、珍らしきにあらねど、これは特に面白く新しく覺えておかし。

◎赤ん坊

美濃　可兒ひさゑ

おかしきは蛙の子、すが〳〵しきは雞の雛、夢のやうなは金魚の子、嫌はしきは蛇の子、勇ましきは馬の子、いとしきは燕の雛、可愛らしきは猫の兒、世にうれしきは家の赤ちやん！

（評）輕いは此筆、珍らしいは此想、短かいは此語、面白いは此文。

◎秋の一日

栃木　齋藤そめ子

天高く晴れ渡りて一點の雲一陣の風だになき 秋の一日を終日散歩に暮した瘦せたりと雖も淸らかなる流れ 美しき鎭守の紅葉彼方此方にきこゆる賤の 女の豐年唄子守の一群雀の幾群村を取まく夕烟一として我が心を悦ばせぬものはなかつた やがて樂しかりし秋の日の舞臺は短く蟲の樂隊に夜の幕を引かれてしまつた。

（評）蟲の樂隊、夜の暮、一寸よろし。

田舎の夕暮

大和　井上正子

片破の月がほんのりと、鎭守の森の上に懸かつて、水車小屋のあたりから、田の風を渡つてくる風の冷たきころ、遙かの木蔭の廢屋には、燈火二つ三つ明又滅、何處からか聞ゆる馬の鈴音、續いて起こる美しい聲。……田舎々々と輕蔑するな――色のよい花山に咲く……餘韻細う、靜寂な野末の堤の邊に消えた。

（評）俚歌を挿んだ手際が、何ともいへぬ巧みです。

姉

下野　野尻よし子

頂いたこの勳章、このお金、一寸でもさげさせ持たせて見たかつたなと頑是なき幼兒と物語る姉を見ると妾迄も實に同情の涙に噎ぶのである、姉さん物は考へ樣です、お兄さんは君の爲め國の爲めに…………といへばあゝそうだつた、そうだつたと………。

（評）此は是れ今日遺族一般の情、武士たるものも亦たつらいかな、されど日本の花と思へば……。

黃菊と老蝶

鹿兒島　遠山柳子

きのう花園からうつした、白黃赤の秋菊、そぼふる雨にうなだれ、そよふく風に、ゆらるゝ風情、うつとりと、みています程、春の女神に捨てられて、老いやせた黃蝶の、まひきまして、亡き父のいとゞめでました、黃菊に、一寸つばさをやすめて、又もしほ〳〵と長ふて行きました。

（評）文は稚なり、想に取るべき箇所あり。

女の美

濱田かすみ

舅姑は良人の生の親である、義弟妹も良人と血を分けたものである、召使も自家では慈悲の袖もておほはむ親が有るのである、人驕慢ならば己れの證の足らぬなり、荷も朝夕鏡に向ふの女先づ心の美を發揮せしめよ。

（評）眞に女の美、人の妻たるもの、此心掛あらば、舅姑みな親しむべく、小姑も鬼千疋には當らざるべし。

月

芝　新野壽枝子

月を憂きものとは誰が言ひ定めけん、秋の實、花の下、雪の夜、何れか興の到らざるはなきに、また秋のものとは何時云ひ定めけん、影朧なる春の夜、眺め凉しき夏の夕、光すさまじき冬の夜半、弦月の高く懸れる何れか佳ならざる、まして滿つれば缺け缺くれば滿ち輪轉不偏深く世道を察し人心を戒むるものを、一時一所一人の喜憂に私せし此の定め言を深く恨む。

（評）確論。

平和

岡山　靜子

見渡せば玉と實つた稻の上を秋風ざら〳〵と吹いて金波がゆらいで居る此處白米のなる木は未だ知らぬと歌はれし吉備の在所今日鎭守の祭り里の子等が鐘太鼓などを打鳴らし賑やかさ月每の團欒は濁酒粗肴に

舌鼓打ちてや折々聲高く笑ひさゞめくのも聞こへる 嗚呼此の平和芳潤佳肴に飽く都の人は竟に知らないのである。

辰ちやん

備後　立神花子

今年三つになる甥の辰ちやんは 色の黑目の愛くるしい何時も肩で風を切つて歩むまけぎらいの子です、昨日私は日曜日を幸ひに辰ちやんをつれて道程一里ばかりある親類の内に菊見に行きました、途中手を引いて上げやうと申しましたら辰ちやん如何にも「不平らしく僕はいやだ夫婦のやうだから」とすましてゐました。

（評）惡い文ではありませんが、斯うあつては小兒がませすぎたやうで、可愛ところがなくなります、作者の方ではこゝが命かも知れませんが、選者はあまり感服いたしません。

影

大阪　後閑八重子

お日様は嫌、私のはでな縞を目立たせます、お月様もいや、私の顔を白く見せます、いつそいつでも影に映つた姿のやうに見えたい。

（評）これ等が眞個短文と稱すべきもの。

お清書

栃木　玉野とし子

清ちやんは今學校から歸つて來たのです、清ちやんにおとうさんと呼ばれたのは、三十格好の頑丈造り、火にかざす腕に氣味惡きまで彫物が見えるのです、「おとうさんお清書見てお吳れ、れえこの二重圓」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

近所のお芋屋では何時も五厘の清ちやんが、今日は一錢だけ買ふ事を知つて居るでせうか？

（評）罪の無い文、輕く走る筆。

人情

能登　栗倉菫子

花ちやん!!! そは私の妹の名で今年八歳であります、今は全癒しましたが此春醫師も首を傾けた程の大病に罹ッたのであります、それからと言ふものはたゞもう譯もなく 花ちやんが可愛ゆくて此頃の様な寒い朝などは學校へ行くのさへも可哀想な氣がしてたまらないのですもの、是も人情の一つでせうか。

授業料

下野　白澤きく子

あと三月で終るのだな……といひつゝ母上があの寒いにも、雨風にも、足袋もはかず、汗水と共に搾り出して下すつた今月分の授業料、妾はどうしてなくしてしまうたのであるか、實に實に意氣地なしな事をして妾はどうしたなら……。

月夜

岐阜　酒井登美子

歩み行く自分の影がはッきりと地にうつる、淸ひ月の様でありました、私の前を背に子負つて向ふへ行く人があります、背の子は何だか嬉しそうに、母様と語つて居りましたが、其間に、「御月様幾年十三七ッ……」と、母様はそれにつひて言ふのです、ア、其十三七ッを經れば、其背の子もあの母様の様に、背に子負ふて、御月様幾年をくりかへすので、あろうかと……思ひました。

（評）おかしきことば、うれしきことば、たくみなくしておのづからたくみあり。

水鏡

麻布　奥居たへ子

昨日都へ去つた姉様私も共にと、袖に縋た甲斐も無く取残されて、昨夜一夜を涙に明かし、今朝はせゞら小川の澄む水に、憂きを洗ひましよ、涙をぬぐいましよ、又來る夏を樂しみに、と手拭片手に楊枝をくわえて、小川のふちに立ちて眺むれば見渡す限り霞たなびきて、まだ晴れやらぬか胸の中、東の空は漸く紅づいて霞も追々晴れゆきぬいざさらばと邸屈めて打ちのぞくせつな「姉様」とさけんで立ちあがればあはれ行水の泡と消え去りぬ。

（評）げに其容貌の似たるならめ、うつくし。

姉の思

東京　貞子女史

姉様は昨日御縁付に成りました母様は昔風だから貞さんは明日から自分で髪結ふのですよと仰やたのも昨日きりで……今朝初めて束髪結ては見ましたがどうしてもく思ふ樣に出來ません學校はなくれるし手は疲れて來る終りの果にはくやしくてく涙さへこぼれましたそして私はあゝ姉樣程有難いものは無いと初めて悟りました。

（評）樹靜かならんとすれど、風止まず、豈獨り父母を亡ふの感のみならんや。

お墓まゐり

牛込　平塚白百合

私は今日も亦露子さんのお墓へおまへりをしようと思て手には露子さんのお好な白菊を持つて山茶花のさく山路を登て奇麗に草花のさいて居る露子さんのお墓にまゐりました其時ふとハンケチに顔を包だ丸髷姿の奥樣を見ました。あゝ露子さんが私に秘密があつてよとこればかりは打ちあけなかつたがと見ると其の横顔露子さんにそつくり。

（評）こゝに一篇の小説がありさうなれど、説いて盡さゞるふしあり、隔靴掻痒の感なきを得ず。

小松山

神奈川　ゆかり子

雨風烈しい日であつた、失戀の痛手を負た妾は、此の苦みから、遠く、阿波の姉の許へと、汽車に乘組だ、と見る彼方の丘、嘗ては戀人と、樂しく語り暮した小松山!!!　思出の、涙は頻を流れるのである、汽笛一聲、懷かしい小山は、闇に霞で行く……　ア、其折の妾の心中!!　其れも今は四歳の昔！　然あれ思はゞよ、涙は長久に盡きないのである。

（評）文は佳いが、歡迎すべき想では無い、しかも世にありふれたる趣向にて、今は陳腐に屬するを奈何せん。

花には嵐

水戸　小山よし子

庭のお池に、芳枝さんの姿が寫て居るのよ、其の姿の、まあ！靜々しい事、妾しも暫時は……赤ひ楓の枝に青ひ蛙、芳枝さんの姿にみとれたのでしやう、水音高く、飛び込ました……後は漣が、岸をさわくと……あゝ無情の風、一度吹きましたら其の靜々しい、姿もいつしかは……

（評）一寸文想があるが、文字が及ばないのでまとまつて居ない。

落膽

堀井　片山千里

是非此家のお嫁さんを、と云て貰ひに來た媒介の口、年は二十七、中學卒業後一年志願兵で少尉となり、男子は十人顆、直接國稅二百圓以上納める家の令息、と聞て、父も大分乘地になりて話しかゝり、立聞して居つた自分の眸も四五寸、虚で妥が御相談、一昨年奥さんを迎へられたが小さな緣兒を殘して死なれた後、と聞て愿はすぐんにやり。

（評）落膽にあらずきて落語めしたい、しかしながら短文の滑稽としては面白き一口話を雅文に化したる腕前を多とす。

僞盲目

岐阜　度會よし子

旦那さんチリン〳〵、誠儀不自由の此盲目な、どうぞ御助け下さいと表に立つ乞食一人、突然横合から出た小犬が、噛み付樣に吠え立てた、乞食驚きはつと目開いて、二三丁すた〳〵逃げ行き、又もや、もうし旦那さんチリン〳〵。

（評）滑稽諷刺、雨つながら之を得んとして、雨つながら之を失ふの瑕あり、今一と息の呼吸也。

拾物

名古屋　小山かく子

「いゝ物拾つた！」と、にこ〳〵顏で持つて來た綺麗な小包、雨紙の上には優しい女文字で＝妙子樣へ―園より＝「あの警察に屆けやうか」「まア開けて見よう……」二人は「あツ?!」と眼を丸くした、ボロ綿に包んだ襁褓が六疋現はれた。

（評）一口話！

招魂祭と聞きて弟の許に

豊前　長野年枝

竹ちやん、あなた、おいくつの、なゝそー〳〵今年とつて六つだわれ、才ホヽヽヽ嬉しいわ此度の兵隊さんの招魂祭には、お父樣のおかたみの、あの、小劍を持ち父樣の御いはいの前で屹度?

野分

越前　片山千里

野分いたく吹き荒む夕、父上や母上と共に門へ出て、本年の米作など氣遣て話して居ると、今年八つになつた妹の芳子、「姉さん天も矢つ張りこんな大風が吹きますのね」と云ふから、「どふして芳ちやん」と問ふと妹の答が面白い「今お星さんが一つ吹き落されましたよ」

夜長

相模　廣守千能子

まばゆき燈火の下、父上は和田の叔父樣と碁を戰かはせ、母上は、敏なる妹に、弟妹等の蟲母上のみ膝に靠れつゝ、次々にお伽噺促がすを、微笑みつゝ。靜かに、小守歌うたい居給ふ。妾は、晴着の仕立に忙がはし、戶外には、一としきり木枯の音、落葉ハラ〳〵と雨戶うちぬ。

女ごゝろ

福井　榎並保子

愿ひ出は秋ばかりでなく何時でも女の胸を泣かしむるもので御座います、此の冷たう〳〵冴へた月を見ました時は女の身の殊に故鄕遠く離れて居る妾の如何して色々の事が愿ひ出さずに居られましよう、たゞ譯もなく泣かされるので厶います、氣弱いと自ら愿いますけれども、やはり女の身で御座いますもの、嗚呼この初冬空の寒夜を故里の妹が夢はどんなでしよう。

ものはづくし

◎印は入賞

○福々しきもの

杉形に積む俵 尾張 大野かなへ
梅ヶ谷の腹 岩代 五十嵐幸子
大山元帥の笑顔 大阪 かつ子
下り目に丸顔 遠江 宮崎 梅子
ふくれた革袋 岐阜 度會よし子
金満家の楽隱居 周防 笑 子
銀行の風呂敷 尾張 津田こと子
紙幣のお顔 越後 坪井 わか
秋のとりいれ 甲斐 りたか
米倉の俵 仙臺 わくり
肥えたる老夫婦 出雲 坂田いち子
七五三飾りの橙 遠江 丸山 もと
御正月の床飾り 濱田 かすみ
惠比須顔の老人 滋賀 信 子

○痛々しきもの

◎小兒の霜やけ 能登 栗倉 董子
飼犬の臨終のうめき 尾張 穗積 榮子
◎營養不足の赤子 大阪 中西 琴
醜女の夫に捨てられたる 小樽 門倉 優子
乳離れの小兒 下野 松本 仙子
病人の譫語を聞く 岐阜 酒井登美子
敗國の兵隊 甲斐 矢野 千代
八字髭の補助輪本 鳥取 横山 龍子
霜夜に捨てられし猫の聲 麻布 池田 濱子
寒中の死人に單衣一枚 大阪 とよ子
將校未亡人の水仕事 越後 よし枝
小兒の天然痘 長崎 岡崎 よね
妙齢の縊死 大和 井上 正子
自由を失しなつた癈兵 大阪 なか子
外科手術室 岡 竹本 靜枝
下女の顔 羽前 久保澤鐵江
美人の夏痩 栃木 いづみ
初産にて死せし花嫁 越前 高岡 花子
乘合馬車の馬 小石川 つばき女
小兒の負傷 本郷 久米まつ子
失明軍人 靜岡 つぼみ子

○憎きもの

◎口眞似する人 美濃 育 子
無教育の女を欺す學生 鳥取 紅 梅
惡友の手紙 長崎 白菊 女史
好かぬ縁談の媒介人 富山 杉山喜代子
◎行賞賜金の横奪 羽前 谷山たに子
アイヌの咳拂ひ 伊豫 竹本 女史
◎継母の長煙管 淡路 かきつばた
血を吸ふ蚊を逃したる 長野 鈴木 壽子
米國の排日問題 富山 鈴木つる子
葬儀の時頭上に啼く鴉 上總 市原 貞枝
ませた口きく女 牛込 平塚白百合
小兒の大人ぶり 米澤 岩井 淑子
鼠の穴 住吉 高原 鶴子
剽窃文士 岩代 阿部つぎ子
教師の依估贔負 東京 貞 子
夫を訪問する美人 九州 市 子

▲來年の新題

▲目出度もの ▲はづらはしきもの
▲くだ〳〵しきもの

謎々

◎印は入賞

「許嫁」、「歳の暮」、「五二共進會」とかけて
◎許嫁……工場の汽笛と解く、心は時が來れば夫婦(フーフ)となる 長門 久保 糸子
▲歳の暮…鶯の兒飼と解く、心は忙しけれども春の樂しみがある 南海 高原 鶴子

▲許嫁……接木と解く、心は末を樂む　群馬　山崎　德子

▲歳の暮……夜汽車と解く、心はあけるを待つ　京都　濱部　郭公

◎▲許嫁……殺人犯と解く、心は血痕(結婚)が氣にかゝる　美濃　杜若會育子

◎▲歳の暮……切手貯金をする人と解く、心は貼る(春)を樂しみに篏く　下野　永井　きく

◎▲歳の暮……火山の破裂と解く、心はやがて四方灰(四方拜)となる　長門　久保　糸子

▲歳の暮……寡閑の巣屋と解ぐ、心は明けるまでは忙はしい　遠江　丸山　もと

▲五二共進會……講參りの勸誘と解く、心は「佛參し(物產)の奬勵が目的　京都　笠間茂登子

▲五二共進會……カンボチ十王と解く、心は姿(實)か馬鹿に多い　越後　坪井わか子

▲許嫁……邊鄙の村落と解く、心は待遠(町遠)　下總　谷口　駒子

▲歳の暮……天の岩戸と解く、心はあけて目出度き日を拜む　牛込　廣江　女

◎▲許嫁……借用證書と解く、心は負債(夫妻)の約束　岐阜　青山いく子

▲許嫁……唐草縮の帯と解く、心は蟲がついたら結ばれぬ　備後　立神　峯子

▲許嫁……青の針箱と解く、心は親裏(兄妹)と見える　牛込　平塚白百合

來年の新題

▲遊獵家　▲汽車のレール

▲冷水浴

一口ばなし

尾張　伊藤みつ子

或人手紙の宛名へ敬語の落ちて居たので、局員「御名前の下へ様とか殿とか御入れなさい」と言へば「ナーニ旦那コリヤ私の娘ですもの」

○　岩代　江川　年子

在人が町に行きて尻切襦袢をきて行くを見て町人「君中切をきて居ると科料を取らるぞ　在人「科料つて錢がないからサッカイありません

○　群馬　柿沼　芳子

敎師「そー目はものを見るものですれ、そーすると鼻はどうする處ろです

一生徒「先生知つて居ます、あのー鼻は寢てつから鼾かくところであります

○　大阪　吉野　ます

或小供「御母さま内の御祖父様は果物の種で電氣燈を發明したのでありますか　母親「イヽヘ、ナゼ　小供「でもその人が皆御祖父様の事を批杷の種だの電氣燈だのといゝます

○　神戸

ハイカラーの下女吳服屋にゆき「アノーオレーフの……」と云はんとせしを意地惡るの小僧「へ……アノ油屋さんはお向いで……

○　大阪　藪本　孝子

新聞に出た豫言者を父が頻る感心して居ると凸坊「豫言者だつて偉らかないや坊だつてやるゾ」父「遣つて御覽」と笑ふ凸坊すかさず坊「コーット今十一時だからもう一時間するとお父様は飯を召上る」

○　東京　濱　子

奥様「お竹今度の試驗に坊か一等によくできたんだつて

竹「まあ坊ちやんが……奇た………

奥様「あの竹戸棚にあるお菓子を出して坊やに御褒美をやつておくれ、そしてお前も一所におあがり

竹「は御有難う御座りますほんとに坊ちやんわお悧口れ」

人事判斷

△在韓國大和婦人へ‖眞人の最後の動向は内地と與す、成るべく同居せらるゝがよし。

△中國の捨小舟女へ‖先考の遺された婚資を以て美術學校へ入學なさるは期が遅れました、兄掛りの氣苦勞はお察しますが、同國人に限らず大抵の處は辛抱して結婚なさるが吉、其裏は追善の美行で交通は益々便利となり何處に居ても其餘暇は得られませう。

△心配なる母親へ‖母としての御心遣は最もです、長女の婚期も餘程迫つて來ましたから來春早々にはお心配がなくなるでせう。

△大阪英子女へ‖獨立なさるには及ぶまい、許嫁の從兄との結婚は將來幸福にあらず、他に眞緣を求めらるゝを吉とす。

△山野櫻子女へ‖今の内にお極めなさい、如何な處が宜しいかは、求婚者の中にて幾分貴女の意に滿ちた方をお取りなさればよし。

△岩間せき子女へ‖嫁付て身の納りを付けなさるに限る。

△奥みどり女へ‖求婚をお斷りなさい。

△湖南の心配女へ‖從兄との結婚は將來無事なり、心配する程でなければ貴女の隨意になさるがよし、進まなければ破談されても他に緣あるべし。

△不幸なる露子女へ‖兩父母の御意に從ひなさることを勸告す。

△兵庫縣しのぶ女へ‖母御の病氣は急に全快するに至らず、來る春分の後に至らば大に元氣付くべし。

△東都の秋風女へ‖今から尋常師範生となりて高等師範入學の準備とは如何にも廻り遠い矢張り豫備を勉强されて入學試驗に應ずるが至當です、來年の入學には合格の見込ありお奮發。

△無學無才の丸川女へ‖廿五歳の人とは合性最もよし、次は二十四歳の人です、來年五月迄に結婚疑ひなし。

△北國オールドミス女へ‖近き將來に緣談あるも望み少し、自活の道を採らるゝも損にならず徐ろに眞緣をお待ちなさい。

△麻布の心配女へ‖相性は宜しからず、常に貴女の方が勝つて眞人をいじめ付なさるのでせう、向ふ一年の内には受胎の象なし。

△雪國の迷女へ‖遺傳性の病氣があるから他家へ嫁すとは眞心が許さないゆゑ獨立生活が希望とは、感稱の事だが、併し親御のお許しなきも親子の情です、段々醫學も進歩して惡疾も治術が出來るやうになりましたから、攝養に注意なされて人生の幸福を御受けなさるがよし。

△播磨羅漢小舟女へ‖人の噂も七十五日中傷的無實の記事なれば御心配に及ばず、根なし草は今に枯れます、此れは貴女に取つて好き訓であつたので一層愼み深く事に當られたら開運は間違ひなし。

△遠山女へ‖結婚は早きを吉とす遅くるれば悔あり、職業年齡の如きは求婚者を待つての上になさい。

△神田の小心女へ‖如何にも相性は眞くありません、實は貴女の方が氣が强よ過ぎるやうですから、成るべく控目になされたら夫婦の間は幾久しく圓滿でせう。

△片田舍心配女へ‖眞人は浮き性、貴女は沈み勝ち、それで夫婦間の行末が氣掛りだとのことですが、既に愛兒もあるとなり夫れは取越苦勞と云ふもの心配に及ばず。

△門司のみす女へ‖希望は達し難し及ばぬ考へを起して彼是れと心を遣はよろしくなし。

△埼玉羽衣女へ‖再嫁の緣がないとて、家出するは此上なき不心得獨立生活は廻りませぬから親御の指圖に任せらるゝがよし。

△南清の眞願生へ‖約婚の婦人を正妻となさるゝに對して父兄の同意は慥に得られます。

△寡婦の煩悶女へ‖貴女の現情はお察し申す併し貴女が是非育てればならぬ遺兒のあると云

ふのでなし、今は實家へ戻り居らるゝ事でもあり、故良人へ對しては斯くあるべき答なれど親御のお勸も無理のない處ですから、再嫁されても女道に外れず時と場合で心を取直す事肝要。

△神戸の受難女へ――他郷にお出でなさるを先づ二三年間は間違ひなし、手術が功を奏して病患が癒ゆれば受胎すると受合良人の愛は永久で若し失ふと出來なば、そは貴女が婦道を踏みたがへた時でせう。

△北河内の左近女へ――因果極る身のかたまり云々とは謬見です、世に妻となり母となるは女性の天職、眞に尊く此れを措いて他に女道あるへからず、貴女が悟り顔に御殿女中とか尼法師とかいふ事が大の誤り或は浮草々人の模樣を取るなどと生中可な考へこれ行末貴女の身を誤るもとです、早く女の天職を空くしない工夫をなさい。

△廣島ちゑ子女へ――父上を無教育なりとてさげすみ、自ら女教師を望んで勉學を志したり、又兄妹共々商業して一旗擧げんかとも考ゆるなど、中々野心多き女性です、親御を無教育呼ばはりするまでの教育はやはり親のお蔭です、親御の同意のないことを強て企てゝ煩悶するより、最早や年頃ではありませんか女性として取るべき道は他にありませう。

△枯野のきゞす女へ――老父を捉いて一人娘が上京遊學するなどとは、男子と違ひ此上の無分別はありません、その結果面白く行く筈はないから老先き短き親御へ孝養を缺かないやうになさい、孝は幸福の基とは此處のことです、必ず開運します。

△近江三階堂女へ――婿養子を得るの期は今です、成るべく同地位より迎へたいとの希望よし地位低くとも人物さへ別條なければ却て將來の仕合です、貴女の内助に依て他日立身せしむるの餘地はありませう。

△廿一年三月生女へ――商家に生れて農業を好み、一人娘で嫁入りを望み、年頃でありながら今二三年獨身で居たいとは隨分我儘ものと思はれますが、併し今の内が花ですから結婚なさるがよし、農家へ嫁入る望みあり。

△備中不幸女へ――一男一女を擧げて間もなく亡ひなされたので、舅姑の意に違ひ離婚沙汰が持上つたとのこと、實にお氣の毒に存じます、併し大切な良人が在るから未だ輕々しく進退を云ふ時でなし、過分に心神を遣はぬやうにして只管身體の攝生をなされたら屹度受胎します。

△京都野洲村桝女へ――大好であつた繪畫の研究が厭やになつたので成功が覺束ないとのことですが、此處か一段の進境を見る時です此のいやな處を押して押し通したら成功の彼岸が望まれるのです、一奮發を要す、次に意中の軍人との成婚は有望。

△上の山里女へ――貴女は三人姉妹の長女であり、一家に取つては相續人であり、身分を云へば人の師であり、何れの方面から云ふても貴女の行爲は一點疾しきことがあつてはならないのです然るに情人を養子婿に迎へる如きは家庭紊亂の緒です、不謹愼さへ恐るべき次第なるに斯る非行は斷じて御中止。

△片山里の不幸女へ――友の續々女學校を卒業するを見て無學の不幸を悲み、遊學の念止み難しとのことですが、貴女が家庭に在て家事に盡くされた經驗は學問以上の修養にもなつて居ります、友人の錦衣歸郷を羨ましく思ひなさるも束の間のこと、やがて嬰兒を抱くやうになれば勝利は貴女の上にあります、次に從兄との結婚は將來幸福です。

△越の受難一婦人へ――今一ヶ年十分攝養を加へて御覽なさい、受胎の見込みあり決して悲觀すべからず。

△かつらめ女へ――御兩親には逝かれ兄上が邪推深く嫂御が邪見で家庭が何時も不和とはお氣の毒です、そこで貴女が身の進退は早く縁付なさるに限るのですが、而も大家の令嬢にあらう

とか不釣合な情人を持ち將來を托せうとは大なる間違ひで此心が改まらなければ眞緣は來らず。
△京濱の稲子女へ‖妻女となつて氣苦勞多し早く結婚したいとは無理のない所です、友より話しある多望の男子を見込みあり進で交際なされて吉。
△東京秋代女史へ‖單身生活は老後に望み少なし、開運は結婚奉見の後です。
△東京君代子女へ‖貴女の單身生活も永續せず、求婚者のあるうちに大概の處なら我慢して嫁きなさい。
△長野縣よし子女へ‖女學校へ行く計りが學問でありません、其心さへあらば日々見聞するとは皆修養の學問で、貴女は實地に修業されて居るのです、從兄との結婚は有望でありません
△芙蓉女へ‖貴女の理想の良人は海軍士官ですが、是れは一寸考へもの軍人の令夫人としての成功は如何ですか、不安。
△北海道のむもれぎ女へ‖既に自ら厭世病者であるを知り、又自らの缺點さへ知り居る上は缺點を矯め病患を醫するとも難事でありません其處で女性の義務として結婚なさい新光明は此間より認め得られます。
△本郷なみ子女へ‖意中の男子との結婚は成立すべし。
△重かきつばた女へ‖結婚の出來ない筈はありません、併し急に眞緣がある譯でありませんから徐にお待ちなさい、又學問なくとも獨身生活も出來ますが、貴女の得意な技藝を何せ一つ專攻なさるがよし。
△南總の心配女へ‖良人の放蕩將來をお案じなさるは最もですが、而も母としての務を完ふなさんとを勸告します。
△深山女史へ‖伍長との結婚は成立し難し。
△肥前きよ子女へ‖結婚は快樂のみにあらず良人が無趣味なりとて夫たる資格に缺ぐ所あるにあらざれば大切にお事へなさい、此緣永久です。
△陸奥の賤女へ‖軍人及び官吏には緣遠し、他行の目的は面白からず。
△但馬の困女へ‖同心一體我儘を封じ込めての共稼ならば開運出世疑ひなし。
△秋の千草女へ‖商人から求婚ありとのこと、實業家へ嫁付たいの御希望には丁度持て來いと云ふ所でせう、進んで應じなさい。
△鵜の濱女へ‖女子で母親に邪見にせられては眞に立つ瀨がありません、近き將來に緣談もありますから必ず落膽なさらないで今暫しお待ちなさい、貴女の優しきお心根には屹度好き報があります。
△濱寧の白雲女へ‖親族會議の通り次兄が家督相續されます、貴女は他へ嫁入なさるが吉、多分新春には嬉しき福音あるべし。
△むらさき女へ‖將來の目的として醫學の研究は餘り有望でありません、渡米は時節わるく横濱に出でゝホーイ奉公は危險です、故に再嫁なさる方針で眞緣を待たるゝとを勸告します。
△秋の菊女へ‖今暫らく時節をお待ちなさい此緣必ず覆水盆に反るの喜びあり、妹御の離緣沙汰は取引はなさらぬがよし、斯る我儘は通るものでありません。
△菜女へ‖嫂を迎へなさらない以前に嫁付たいとの御希望は多分達せられませう。
△田舍の泣蟲女へ‖貴女の境遇に同情せないで却て困らせる令弟令妹は大なる心得違ひです此れは少し學問したものゝ常で自分達が多少教育を受けさせて貰つた有難さを感謝せで、教育がないとて大事の姉樣を輕蔑するのです、斯る教育學問ならばなくとも世に立て行けない筈はありません、必ず無分別な考を起してはなりません、良人との復婚は見込あり絶望すべからず。
△信州佐久の心配女へ‖母上の開運は今五年計り先の事です、それまでは心遣ひでせうが辛抱してお暮しなさるやうに心添えてお上げなさい△酒屋の姫女へ‖今一二年故らに結婚を見

合はすに及ばないとです、良縁を見付け次第嫁入なさい、當時運動中の婿には多少望みあれば今一歩進んで御覽なさい。

△飫舟女へ‖姉上の職業は繪畫、美術に關する手藝等が宜し、令弟の將來は有望、案じ事は大をお探りなさい。

△秋野白露女‖そこが妙です貰ひに行て呉れなくとも、待では甘露の日和とやらで年頃になると縁談が出て來ます、御心配なく良縁をお待ちなさい、天下の處女は皆な同じとです。

△五月生の悔悟女へ‖貴女は獨身のお考へで數多の求婚に目も呉れなかつたが、老親の心配に面じて結婚する心になられたとのこと、サー斯うなると煩悶でたまらない、併し遲くとも悔悟なされたが幸福です、煩悶は去るとながら聊か婚期を失したオールドミス黨がず良縁をお待ちなさい。

△出雲の小さくら女へ‖農家の嫁は矢張り農家へお片付なさるが家業の上から云つても經驗あり將來は仕合です、陸海軍の士官を亭主に持つ野心を止めて、他日母となりて軍人をお育てなさるが間違ひなくてよし。

△梅月女へ‖高等師範入學は甚だ望み遠し、又意中の男に憧かれて親御の不同意と知りつゝ結婚を望まるゝはよろしからず、第一ならぬ中から教育受けさせて下さつた親御の恩を仇にして斯る我儘は通さぬが身の爲めでせう。

△北河の女へ‖養子婿女道樂して三年止ます常に心配であるとのこと、相性は宜しからず、且つ縁淺き象あり。

△廣島ふみ子女へ‖故らに下女奉公せずともその心掛けあれば家に在て家事を手傳ひ自修なさるれば差支なし、來る四五月の頃縁談あるべし取結ばれて吉。

△小石川心配白緒へ‖姉娘の運勢は今暫くは現情のまゝなるべし、妹娘の技藝は上達する見込あり、令息の健康は今一二年立たばかたまるべし開運はその以後のこと、餘りくよ／＼心配なさらぬがよし。

△山中の不幸女へ‖父母を養ふ爲に人の妾となり、前妾の虐待に堪へ難く主人と手を切りたいとの貴女の境遇今一ヶ年計りは如何とも動き難い運命ですから、もと親御の爲に犠牲となられた其心を忘れないで時節の來るのをお待ちなさい、幸運は屹度見舞ます。

△佐賀縣の栗山女へ‖飽かぬ中をお別れになつたのですから御落膽は尤もですが、貴女は貴家に取ては大事の相續者家の爲に總べてを耐忍なさるとを勸告します、次に遠方へ行かるゝは此際餘り有望でありません御一考なさい。

△長崎かり舍女史へ‖終身縁のない筈はありません、貴女が多少家の犠牲となられたので兄弟から世話せられる道もあり、又自活の出來る伎倆もあるとゆゑ、自然結婚に大事を取らるゝから縁がないのでせう、年配が年配ゆゑ、後妻は勿論のこと多少繼兒の面倒をも見なさる決心で求婚なされたら容易に配者がありませう。

△廿三歲女へ‖商業は先づ從來のまゝが善し父兄の衝突は一家の不幸ですから家の爲に双方讓歩なさらなくては不可、義叔父との間は行末望み少し此れまでの縁なるべし。

△煩悶中の十九歲女へ‖交際して居なさる男子よりの求婚に父母の許諾はドウでもよしなどと迫り來ては以ての外です、斯る男子と關係なされたら將來は決して幸福ではありません恐るべし、又裁縫と生花との教師となつて獨立生活せうとの考へは出來難きにあらざるも苦痛です。

△梅野香子女へ‖法學生よりの求婚は有望です。

△東京心配女へ‖現時の勤先は今暫く實體にお勤めなさるが吉、將來の方針かへは結婚後の事となさい。

△中京の迷乙女へ‖約婚も私事ではない必ず先づ父兄の許諾を得なければならぬ、縱令當人同志の私交で成立しても愈成婚の場合に父兄が

否と云はるればそれ迄でせう、故に男女間の文通などは誤解を生じ易きものだから、たしなみある女子は決して斯る不謹愼な振舞はいたしません、呉れ〴〵も間違のないことを望む。

△一生の願女へ＝呼年十五位の乙女で意中の人を拵へて憧かるゝとは飛入つた沙汰です、今日は女學生らしくその學科を專一に勉强して、結婚談は先づ卒業の上まで封込めお置きなさい然らざれば貴女が一身を誤るを疑ひなし恐るべし謹むべし。

△秋田の野の花女へ＝職業學校を卒業なされてから朝夕針を共としてお暮しなさるとて、野の花の如く人知れず一生果つべきかとのお尋ねですが、此の優しき世話女房を何時までもそのまゝで措くべき、來ん春には良縁がありますから樂しみてお出でなさい。

△無學願ひ女へ＝貴女が希望の結婚は成立の望みあり、遠慮なく話をお進めなさい。

△水仙姫へ＝貴女の親類の交際先きには大臣や大使や華族などがあるとのこと、お盛んのことです、世に虚榮を夢みる女性は貴き親類、遠き縁者でも有福とか權勢家と云へば、以て誇りとし我肩身の廣きやうに吹聽するが常なれど、貧困或は零落せば近き親類、厚き縁者でも他人の如く顧みないもの多し、貴女が斯る涙なき女性ならざることを望む。

△妹思ひの花子女へ＝令妹と軍人との結婚は成立の見込十分です。

△AB女へ＝世帶女房に學問させる男は先づ少ない方ですから嫁入して高等教育を受けんとの希望は達し難し、又中等にも段々とか華族にもいろ〳〵ありますが、さて爵位ある方へ嫁付きたいとは一寸過分でせう、斯る考へのある間は結婚談は物になりません。

△上田うん子女へ＝貴女の天眞は利口にして能く物事に氣の付く性なり、女性は柔順なるをよしとす、希望は六分以上は達せられます。

△不幸賤女へ＝脚氣病は必ず治す、脚氣は胃病から起りて心臟痲痺に斃れるのです、治療は素人にても出來る、先づ胃を健全になさい。

△神田煩悶女へ＝初婚に懲りて再嫁を恐れるは去ることながら、然かずともよきこと故相當の縁あるを待つて片付きなさるが吉、奉公の餘暇に學問するとか、又學問させるとか云ふものもありますが其結果は良縁でありません、それも時間を限りて勤むる譯でないからさもあるべきこと、貴女は矢張り父上の下で孝行娘てふ名譽を全ふなさるが道です。

△深山のすみれ女へ＝令妹が年を取られると自然に氣が付いて直ります、今は駄目ですから貴女が姉樣顔なさらず、氣に掛けなさらぬがよし。

△家を憂ふる妻へ＝お氣の毒ですが家運未だ挽回の域に進まない、神經家では思切つて冒險の勇氣もないでせうから、今二三年は現狀に甘んじなさらればならぬ。

△北海道花子女へ＝來秋に受胎の象あり身體の健康に注意して置きなさい。

△浮舟女へ＝繼母が貴女の婚嫁に苦心して下さるは有難く感謝なされてよし、繼母の誠意は身に通じて良縁も得られませうが、貴女は身の不自由を忘れず折角自活の精神で居なされば末は幸福です、職業は手工の内にて貴女の得意なるものをお撰みなさるがよろし。

△失望女へ＝折角理想の良人だと嬉しくお取極めなされた方が、借財持ちやら何やかで破談とのこと失望お察しいたします、貴女の一心で此際無分別のことをなされたら立つ所はありません未だ婚期に遲くれたと云ふでもなし、徐に來る良縁をお待ちなさい。

△楠の葉女へ＝家運は未だ良好に向はず、老後の樂みは養子殿の立身をお待ちなさるに如かず。

△心配女へ＝令兄の成功には未だ手間が入ります、貴女は明年夏季の頃縁談あるべし、選せ

られて吉。

△心痛母親へ‖受難の暦は屹度と平癒します餘り氣をあせりなさらぬがよろし。

△谷間の姫百合女へ‖貴女の將來は平穏です相當の養子縁も得られます、所で貴女が身の不具を忘れて僅かな教育を鼻に掛けなさるやうなとがあれば、期せざる悲境に沈む恐れあり御注意なさるべし。

△三河島の拾女へ‖然るべき人を以て談判なさらぬ内は何時までも打捨て置くなり、斯くては結婚の妨げですから一日も早く其運びをなさるがよし。

△千葉の若子女へ‖今のまゝならば此縁未だ全つたからず、一度は破裂の期あるべし、心得て置きなさい。

△高輪望子女へ‖向ふ一ヶ年間には受胎の象なし、其先きは他日更に尋ねらるべし。

△磯の不幸女へ‖良人の惡遊は容易に改まらず將來は餘り目出度からねば、貴女は今の内に不自由な病氣を治療なさるべし、決して他のとを案ずるに及ばず只管身體の健康を恢復なさるとを勧告します、萬事はその上の事です。

△静月の不幸女へ‖良人の失敗はお氣の毒ですが、時節が惡しく運は開けませんからあせればあせる程深みに陥る計りです此處は自重の策をなさるがよし、又貴女は良人に従ふが道です人生浮沈があるので面白いのです。若い時の苦勞は買つてでもせよで、良き經驗であります。

△茅濱の浮濵女へ‖再縁は當分良縁なし、緩るゝ來春桃天の候をお待ちなさい。

△夫の前途を懸ひやり女へ‖良人の地位は先づ御心配なさる程でもありません、矢張教育家で居なさるが安泰でせう、彼れ是れと周章なさる時にあらず、寧ら方針の變更は篤と熟慮の上になさるべし。

△都のうもれ木女へ‖貴女の境遇には實に同情を表しますが、貴女の如き地位にある方は誰も貴女のやうな考へを持つもので、是れ勢ひ止むを得ない次第ですが、殊に令嬢育ちの貴女の如きでは目的は十中十まで殆んど達し難いのです、殘念でも口惜くとも此處は相當の良人に嫁きなされて同心一體順序を辿りて立身の路を講ぜらるゝが萬全の策です、呉れ〲も誤解なきやうに斷る。

△鉄の白萬女へ‖貴女の御心配はお察し申しますが、折角父上も眞面目になつて居ますが、未だ開運の時が参りません、貴女は母上の御意に従つて婚嫁なさる方針をお取りなさるがよろしい。

△山路の秋草女へ‖九月の誌上で一應お答いたして置いたから御承知でせう、且つ最早や手續きも濟まされたとと信じますが、念の爲め、貴女の希望が叶はんとすれば、幸ひ令妹の近くに在らつしやるとゆゑ、貴女になり代つて父上へお詫びのとを取成しなされ、一方男子より正式に求婚の手續をなさしめらるゝがよし、條理が立てば父上とて何時まで頑固でもありません、皆な是れ將來身を誤らせまじとの厚き親の情けです。

△大阪緣遠女へ‖故らに母上や令兄が不承知で纏めなさらないのでもありません。未だ縁がないからです、來ん春には嬉しきたよりもあるでせうから、心閑にお年を迎へなさい。

△猖立女へ‖目的は七分成立の見込あり。

△伊勢の濱女へ‖渡米中の良人は多少とも成功の福音をもたらさるべし、貴女の渡米も惡しからず、勿論良人との縁は貴女の實家に故障なき限りは永久です。

△大阪にて姫の母へ‖虚弱でもなんでも老母の壽命は萬歳、姫御の結婚は來年前半期の中にあるべし、配者の年齢、職業は求婚者を待てお調べなされて後くありません。

△石見益田の一女へ‖今一二年の間は受胎の象なし。

△大阪のたど村女へ‖眞人の放蕩は先づ改悛の見込なし、貴女の心痛は御最もです、一朝の用意に琴の稽古は遠慮ある女子の嗜みです、人の兎や角の非難は顧みるに及びません、熱心にお遣りなさるべし。

△秋本菊女へ‖貴女が一切關係なく御親任せになされた縁談も將來は至極圓滿で愛婿との間は永久變りません、祝福いたします。

△豐前の白菊女へ‖尼になるの、養家へ歸るのなど、トンデもない不心得を起しなされたものです、縁あつて此家へ嫁ぎ家内安泰何不自由なき此上の仕合がありませうか、養父母も貴女の身の納りの付たを見て安心して亡くなられたものを今更ら斯る不量見を出されたら第一恩義ある故養父母に對して大不孝でせう、よろしく三思なさい。

△ヒミツ持女史へ‖結婚は急がず中高等の教育者が理想の眞人で、若し外れたら如何なる方針を取るがよきかとの事ですが、教育家へ嫁付かるゝは先づ今日で見込少し、歳月は人を待たず急ぎなさらなくとも既に婚期も熟してることだから來婿者ある内に然るべき候補者を見立てゝ結婚なさるが吉、理想に拘泥してオールドミスの歎を招がるゝは褒めたことではありません。

△旭日靈子女へ‖令兄の短氣は一生直らず、貴女は他へ嫁入らるゝが吉。

△ゆりの花子女へ‖御宅は無人なれば貴女が他へ出らるゝと差當りお困りであるから、此處は辛抱して家事にお骨折なさらなければならない、女學生時代と異り一家の主婦となつては友達同士往來して遊ぶことは誰れも出來ないものと諦めるが當前です、出入の婦人が彼れ是れ申したとて根なし草は間もなく枯れます、これに鑑みて能く〳〵身を愼み眞人の成業をお待ちなさるべし、次に眞人の開業は明年内は先づ六ヶ敷いでせう。

△千葉の心配女へ‖結婚後三年、眞人に氣苦勞なく只金の心配で夜も眠られず日々痩せる思ひとのこと、それは天の嫉妬かも知れない、折角御辛抱なさい今に開運の期が來ます。

△三浦郡TN女へ‖向後眞心から眞人の愛にお答へなされば、處女時代の過ちは自然と消滅することが出來るものです、然るに尚ほ將來眞人を咲ひする據合ならば、到底貴女の立脚點はないのです、謬りましたか、今日は一意他念なく眞人に事へなさるのです、即ち幸福は永久です。

△苦勞性なる二子の母へ‖貴女は六十以上の長壽でありますから二娘の結婚ばかりではなく愛孫を抱くことも出來ますとは保證して措きます生命保險でも付けて御安心なさい、會社は喜んで契約するでせう、御心配の丙午生の妹御が却て姉さまより先きに縁付かるゝかも知れない、杞憂はおよしなさい。

△京都百合女へ‖姉樣大事とお仕へなされて居なさるがよし、その内には眞縁も出來縁付かれたら此れまで總べての不幸は忘れられます。

△岩代の不幸娘女へ‖貴女の如き境遇で眞に意志が堅たければ、女子として初めて獨立生活を云ひ得らるゝのである、東京の私立學校なれば大抵缺員があるから年中何時でも入學する便宜はあります、又親元が慥であれば下宿屋でも保證して呉れますから御安心なさい、さて下宿屋にも眞からぬものありますから撰擇が大事です、依て東京に知人の婦人が居なさるとのことゆゑ委細を話して探してお貰ひなされたら間違はありません。

△紅葉きく女へ‖貴女の結婚は慥な處に明年五六月頃の話しでせう。

△病女へ‖全快は來春彌生の候です。

△山田里心配女へ‖貴女の縁談は明年挿苗頃に治まり輿入は九月なるべし。

△讃岐のなでしこ女へ‖兩親の命令にお從ひなさるが上策です、僅かの技藝を習ひ覺えたとて軟弱き女子の身で獨立は容易の業でありませ

ん、我慢はおよしなさい。

△鐵心女へ‖經濟を研究し家計の助けをなされる考は天晴れです、その精神で勉強なされたら成功は勿論間違ありません。

△桑都なる野菊女へ‖貴女は家再興の責任あり、養子婿の如何は大なる關係がありますから親戚の縁もありませうが、成るべく廣く候補者をお求めなさることを勸めます。

△加納菊子女へ‖結婚は無難に成立ちます、その擧式は先方の都合に御任せ置きなさい。

△大阪心痛女へ‖貴女が折角の貞節も良人の眞心に徹せず御遺憾のことは察します、此上は貴女のお考へ通り進退なされてよし、向後は養女を相手に一家經營なさるべし。

△東京緑子女へ‖目的は容易に成り難し、結婚は田舍に縁あり、多分明年中に身の納付きませう。

△山陽なる山梨柿女へ‖三十八歳男子との結婚は將來最も有望です、外に養子婿を探さるゝも中々得難し、決心して結婚なさることを勸めます。

△播州の迷女へ‖甲を採りなさい。

△都直女へ‖同齢の男子との結婚は將來先づ無事なるべし。職業の撰擇は結婚の後になさい

△大阪天王寺の不幸女へ‖良人の不身持、實家より離婚をお勸めなさるは貴女が可憐そうとの親御の情です、されば貴女が愛護の爲め歸家の心なきも同じ情です、親の心に二つはありません、此處は貴女の心のまゝになさるが道です美術に關する手藝即ち刺繍とか造花とか編物の類がよし。

△大阪心配女へ‖先方が五黄の寅でも此方が七赤の酉であるから相性は極々大吉、廿九歳の男子との結婚は將來幸福です。

△北海道の苦勞女へ‖良人の墮落、離婚は易し、併し成るべくは良人を眞人間にしたいとの御希望如何にも人の妻女としては斯くあるべき答です、中年以後の放蕩は大抵止み難く、首も回らないやうに成て始めて氣の附くのでなく、止むを得ず離すと云ふ樣なものですから、餘程の辛抱をなさられば貴女の芳志も遂し難し、此處賢婦人の及第試驗のお積で婦道を完ふせらんことを望みます。

△東都煩悶女へ‖御兩親の申さるゝが道理ですお從ひさなるより外なし。

△安房のはかなき女へ‖耳の治らないのは専門の醫師に治術を受けないからです、必ず全治します、又職業には音樂などが適して居ますが田舍では如何のものでせう、農家へ縁付かれたら、萬全です。

△岩代白蓮生へ‖過慮故の取越せではありませんか、勿論將來子のない筈もなければ徐に受胎の期をお待ちなさい、併し向ふ半ヶ年の内には六ヶ敷でせう。

△駿河の心痛女へ‖結婚は早きをよしとす、學問の爲、妙齢を空過しては養子婿が得られ難し。

△長野縣地方愛讀女へ‖結婚に限る、それなれば所謂占はずして吉です。

△吉橋錦子女へ‖岐阜よりの求婚は望みなし陸海軍參謀官への婚嫁はやゝ達せらるべき見込あり。

△越後花子女へ‖親御の御希望通り家に在て商業に勉強されたら將來は幸福です、貴女の地位で他の事をお考へなさるは宜しからず。

△夏山みどり女へ‖約婚のまゝ三四年結婚をお待ちなさるは後日破談の兆あり、令兄の勸告通り寧ろ今の内に破約されて他に縁を求めらるがよろし。

△東京白菊女へ‖廿歳の男子と成婚しても將來は圓滿に參りません再考すべし。

△山口縣の活發女へ‖養子に行くは行末出世の見込あり、希望の幾分は遂せらるゝでせう。

△山口縣子女へ‖陸海軍將校の夫人たる事難し。

△伊勢町の無筆女史へ‖商家のとですから商家へ縁付たいとは最な希望ですが、併し何も縁ですから銀行員、醫師、又美術家などの處へ縁付かれても將來は幸福です、又縱令病弱でも令兄あり、貴女は他へ縁付く方よし。

△夕陽女子へ‖義姉の病氣は打遣て置いてはイケない今の内なら平癒しますから早く御手當なさい、母御の全快は慥かですが不養生すると再發の恐れがある、次に貴女の縁は急いでは駄目。

△兵庫縣の絹子女へ‖約婚の方とは良縁です結婚式は先方の望み通り早く濟せてよし、まて再縁でなければ納らないと云ふとは、初婚を苟且にするからの事、故に婚約も輕々しく極めず大事を取られればならぬ。

△美城縣子にこがれ女へ‖初戀の愛兄を亡くなされては自然悲觀に陷り易いから無理もありませんが、一陽來復の節に心身恢復の上は健全なる受胎があります。

△花薗繁子女へ‖兄の勸め通り結婚なさるが吉、奉職の片手間に勉強された處でその進歩は知れたもの、獨立生活の基礎としては到底薄弱を免れない、法學士との結婚は將來有望。

△大分縣春野雪子女へ‖媒御の婿には廿四歳の銀行員をお採りなさるが大吉、直接の回答は總て謝絶。

△大和方角女へ‖方角の吉凶、善惡は年に依て變り、又月に依り日に依て善も惡となり凶も吉となることがありますから黄道吉日を撰で入輿なさるべし、なほ安心の爲め一應方位家にお尋ねあるもよし、廿七歳男子との結婚は幸福です。

△田舎の迷女へ‖何れも餘り有望とは云へず併二十六歳の男子ならば先づ無難。

△本所埋れ木女へ‖一生縁がない筈は無論なし、兎も角父御が存在中に話のあつた先きですから、他へ縁付かるゝ以前に一應御話しなさるが順序。

△片瀬の富遊子女へ‖老親が隱居されたい希望で、一人娘の貴女が身の納りをお急ぎなされ養子婿がなければ嫁入らせうとのこと、併し此處は縁遠くとも養子婿をお迎へなさるが道です、必ず良縁がありませう。

△江の島女へ‖結婚に何等の理想もなしと此の優しいお心掛ならば未來は有望。

△神田の芳子女へ‖易者が初婚は遂げられないと云つたそれは初婚が大事ぞとの警告で、もし苟且に結婚すると易者の言葉が事實となる、此の道理が解れば煩悶に及ばず即ち輕々しく一生の大事を決するやうなことなく十分に御注意あれ、處で多年交際なされた意中の方との成婚は難ひなし、されど合性はよくないのですから易者の警告を忘れなさらねば此縁全ふせられます

△横濱僞りなき女へ‖意中の男子との成婚は遂せられます。

△野の露女へ‖現情に同情す、昔を言へば何時も涙の種時節とお諦めなさい、世間にはまだまだ薄運な方も澤山ある又女子は嫁付けば舅姑に事へればならぬ身、實母に對してその振舞では末が案じられます、おたしなみ肝要。

△太田春子女へ‖女嚴しき叔母の育て方は怨み處か、行末貴女に取つては大仕合となります、廿二歳の大學生との結婚は將來幸福ですから、何とかその運びをおつけなさい。

△本所の薄命女へ‖女子は同情が必要、貴女の薄命も試に先約の婦人になつてお覧なさい、天下晴れての所天を横奪せられうとする場合でしたのでせう、それから見れば罪は淺く諦めの付き易い話です、將來の交際は婚嫁の妨となる考へものです、金は勿論返金なさるが至當です縁のなかりし男と別れたとて修身獨立生活をせうとなどは理窟が合はない。

△山陰の尾花女へ‖一地方の習慣などは氣にするまでもない殊に早婚は不幸の一、貴女はまだ晩婚と云ふ齡でなし是れからが眞に女性の花です良縁は二三年の内に在り。

!●●結婚道しるべ●●!

▲本誌の結婚紹介は信用確實なり▲申込者は博文館女學世界交信部宛の事▲申込者は住所姓名番地を詳記する事▲本人の寫眞を送らるれば保存して希望者に紹介す▲照會者は雙方への通信料として三錢切手三枚を送らるべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送らるべし

行き度き方

▲呼年七歲の女兒身體至極壯健、未だ一回も病氣せし事なし生家中等血統正容貌普通肥えたる方相當希望者へ養女にやりたし 但し敎育費として三百圓を持參せしむ（姬路の赤人）

▲廿五歲初婚容貌並血正身體健全精神健固 地方高等小學校卒業後一科の技藝を修め裁縫普通、遠近を問はず相應の人にて成可はキリスト敎信者の方に嫁きたし（埼玉の神女）

▲歲廿八血正初婚者家計中流高等女學校卒業後家庭にあつて 女子一切の技藝を習へり 性質溫順交際上手貿易商又は高等敎育ある人に嫁したし都合により再婚不苦（在阪の一女子）

▲年二十二初婚體格強健容姿通常作法素茶等 最も熟達し生花は練習中なり三十歲以上四十歲以下の軍人か官吏或は銀行會社員に嫁したし（木瀬愛女）

▲明治十八年生血正快活容貌並家計中等普通敎育を修了して 裁縫に熟達し琴三味線を習ひ挿花茶の湯の心得もあり 係累なき前途有望の官吏又は會社員の所に行きたし（桑名の女）

▲今年廿一歲の女子一昨年迄中流の家庭に育ちしも不幸つゞきて辛き浮世に泣ける者 三十歲前後にて一定の職業ありて眞心より同情を寄せらるゝ方の許に行きたし 但し學業は高等女學校三年にて退學す（安藝不幸女）

▲年二十歲血正容姿普通女學校卒業後 家庭にあり家事を實驗す家は米穀商にして地方に屈指なり十八歲の實弟一人あれども 養子を向へたき希望なり大阪神戸の内にて相當の人を求む（備中の女）

▲年二十歲血正容姿普通女學校卒業後家にあつて 茶の湯生花音樂裁縫を修め殊に文章に妙なり 家は傳來の地主にて家庭は嚴格なり前途有望の軍人或は高等敎育を受けし人に嫁きたし 但し三四ヶ月間潔白なる文通交際の後定めたし（福岡近傍生）

貰ひ度き方

▲青年二十一歲過去三ヶ年間米國の中央部に在り 起業の計畫中なり性質至て快活 十七歲より十九歲迄の高等女學校の卒業者又は在學者と約婚して志想交換の上結婚したし（米國の起業者）

▲年二十二歲高等敎育あり只今私塾設計中なり 高等女學校卒業程度にして裁縫に熟達し字をよく書く十八九の淑女を求む（八王寺の梅雲）

▲呼年二十六目下敎職にあり月收二十五圓 他に財產あり二十歲以下の高等女學校卒業或は修業中の處女と至急結婚を望む（和歌山生）

▲知人年三十永年北海及樺太に大望あり 事業緒に就けども資金足らず現金五萬圓を拾ヶ年間年利六分にて貸付け、更人の事業を補佐するに差支なきものと結婚したし（北海札友生）

▲年廿七血正目下某公廳奉職中 月收三〇別に係累なし容貌普通一七以上二二迄にて逆境に處したるもの又は困苦を共にせんとする 初婚の女子を求む約婚不苦（濱松S・K・生）

▲地方名家の二男年廿九歳現役陸軍々醫 生家は大地主たり體質健全容姿美にして高女卒業以上 二十三歳までの初婚の女を迎へたし都合によつては養子縁組するもよし（岐陽生）

▲年二十三京都理工科大學二學年生卒業迄の學資を補助しくるゝ 地方在住の處女と約婚したし（京都ＡＢ生）

▲年廿五歳血統正讓備軍人にして目下會社員 家庭は中流以上別に係累なし 十八歳以上二十歳以下にして女子大學又は高等女學校卒業の處女を求む在學中なれば婚約不苦（東京ＡＭ生）

▲年廿七某私立大學卒業 韓國某港の新聞に筆を執れり抱負あり財產なし敎育の有無に拘らず 常識發達せる女子にて渡韓して夫の事業を補佐せんとするものと約婚したし（長野山人）

▲十五年八月生京に移住して五年爲す事 悉く失敗無財產無借財無學力只慈愛深き父母と普通敎育と愛情とを有す目下日給四十錢 十八十九廿一廿二年生の淑女にて貧苦を厭はず 外交に巧み將來抱負を有する女を求む（東京才翁生）

▲友人年三十七歳永く小學敎育に從事する士族にして父母あり 財產なけれども進取の氣象あり 同情に富める子女にして敎員又は手に相當の職を有する二十歳位の溫順なる女子を求む（大阪の男）

▲知人青年醫溫厚篤實にして美男子在京專門病院にて實地研究中なり。女學校修業中の柔順なる可愛らしき子女と約婚を望む 都合によつては養子となるも可、望により寫眞送呈（ハイカラ生）

▲明治四年生地方第一流門閥家の二男 血統正質溫厚愛情に富み目下在兵庫某豪商支配人勤務 女學校卒業位にて溫和なる相等配偶を求め溫暖新家庭を作らんとす都合により養子縁組するもよし（明石求婚生）

▲兄は辯護士を業として地方にあり 年二十二にして醫師を業とし體格容貌普通にして前途有望なり、十八歳以下高等女學校卒業若くは其見込ある者にて悪疾素因なき淑女と婚約したし 但し東京在住ならば妙（孟急生）

▲年三十六親子兄弟なく 醫學藥業に失敗し遂に石版印刷製版を實習し即今雜誌記者たり、石版印刷業若しくは雜誌發行を協力し、且つ當の心得あるか、又は百圓以上の資產ある婦人と中年以上交際して 結婚を望む（東京士族生）

▲年二十四歳陸軍々人志想高尙 體格健全容姿美にして家庭嚴格なり中流以上の家又は資產家に生れ高等小學又は女學校に在學 又は卒業者の十五歳より十八歳迄の女子と約婚 又は三ヶ月以上文通交際の上結婚したし（東京武夫生）

▲數年前赤手北米に渡り美術學校を卒業し 目下歸朝中壯健にて進取の氣象に富み 逆境又は苦學の經驗ある淑女と再渡米の目的を以て求婚したし（成功の男子）

▲年廿二歳血正にして性溫厚且儉なり 眞宗に信心厚き家の養子となりたし、目下高等工業學校二年級に付在學中學資月七圓づゝを補給しくるるならばその淑女を迎へてもよし（美濃の里人）

▲年五十二海上業月收百四拾圓一男の外係累なし 三十四歳或は三十七歳にして 體格強壯品質美普通敎育を有し品性高尙逆境に處し賢母たらんとする淑女を求む婚約不苦（神戸ＴＯ）

▲歳卅二中等敎育あり血正係累は父一人家計中等現今實業に從事す、容貌普通可成離儀に育ちし 處女を求む但仕度の有無を論ぜず（中國男子）



道交ひ

あき子

上

さあね、然うも參りませんよ。

と瓦斯燈の火影をわざと避けてか、細つそりとせし白の看護服の黒板塀に密着、

其れに彼の何ですもの、怎うも面白くないんでねと、心細げに吐息をつきて、

何しろ、主治醫のお話しでは一週間は保つまいつてので御座いませう、儂眞個に可哀相でなりませんのよ、未だね芳紀なら十九だつてじやありませんか、何ね、病氣と云つた處が胃が些つとばかし不可ないばかりなんですつて、だけれど、何か斯う始終妙に滅入り込んで泣いたりなんかするんでね、其れでもつて思ふ樣にお藥も利らないし、此の二三日と云ふものは、丸でもう全然衰弱し切つて仕舞つて、主治醫も此の上什麼にも治療の方法がつかないつてね、氣の毒に若いものがつて仰つしやつては居らつしやるのよ。

其れやもう仰つしやつて戴く迄も無く、儂にした處が、參上り度いには參上り度いんですけれど……

あら、一寸彼の三號室の？

相手は進る樣に息喘ませて周章しう犇と寄り添うた、是れも暗にはくつきりと鮮明かな看護服の立ち姿、

え、然うよ、大里末子さんつてね、美しい、眞箇に綺麗な女なんですよ、其ら毎時も銀杏返しに結つては、未だ病氣の其麼でなかつた時分、窓から首を出して何か小聲で……其れはね聞き取れ無い程の小さい聲でもつて歌を歌つてたんですよ。甚麼歌か知らと思つて、密そり後ろから足拔きして戯ら紛れに側へ行くと、直ぐにもう聞こえつけて仕舞つて「厭やですよ」つて振り向きながら淋し狀に莞爾して止めて仕舞ふの、自分では何とも云つて聞かした事がありませんがね、何でも親も兄弟も無いんですつて、夫で大變に薄倖の女だつて云ふ事なのよ、僅々一人の實の姉さんがおありだつた狀でしたけれど、其れもね、後から能く聞いて見ると、慥か一昨年の夏、然う夏だつたつて事でしたわ、井戸へ……

えッ井戸へ？

然うですよね、何故つて私も能く存じませんが、井戸へ入水つたんですつて、矢つ張り病氣のせゐなんでせうよ、若い者が貴女、幾ら切ない事があつたつて自分でなんか死ねるもんじや無いと思ひますわ、だから、先刻主治醫も其樣系統もある事だからつてので、隨分注意して呉れつて、然う仰つしやつた位なんですのよ。

然うねと相手は足まらでか、しんみりと悲しげ。だつて貴女、之れが職務一片の冷たい心地で人を看護してるんなら、其れや私些つとも介意ひませんわ、けれど可哀狀に、彼樣になつて居るものを見捨て……ねえ然うじやありませんか、とおろ／＼聲。

思ひ切つた樣に、明了した調子で重ねて、宜う御座いますか、此度の御依賴は主治醫に伺ふ迄もなく御謝絶致しますよ、失禮ですけれど、と。

御道理です、じやあね、私も急ぎますから、とスリツパの音流石に淋しう五六步、一人は小走りに門の內へ。

見歸る門の百日紅仄黑う、こんもりと繁茂りし新綠

の香氣。

下

行き歸り朝夕通ふ道ながら、友を待つ間のおぼろ氣に耳に入れし話しの、扨て丁度今日で十日。

其れにしても助かつたであらうか、死んだであらうか。年も未だ十九だと云ふのに兄弟も親も無いと云ふ、而して一人の姉樣迄が悲慘な橫死、甚麼事情のあつたか知らぬけれど、定めて人並々の苦勞をした人ではあるまい、影か幻か、十九の小さき胸の奥の奥に木嵐凄ぶ一夜、覺え初めし云はれぬ寂寥み、抑も之れが病の原因では無かつたであらうか、思ひ迫つては寢られぬ涙の宵々、戀とも云はゞ愛とも云はじ、我れから死なばやと悶えた事もあつたであらう、うら寂しい病院の呻吟幾月、手術室の垂帳さやさやと風に搖れて電光淡りし夕暮れ或る日、血に飽きし流星の靑山邊りの原を高うすつと流れはしなかつたであらうかと、心に念じて、自分ながら何とも云へぬ果敢ない氣持ち。

と何處から迷ひ出でゝか蜻蛉一つ、深沈と露に濡れて木立ちの繁み、何やら門標をすれすれにか弱い羽をのして闇を見えつ隱れつ心細げに飛むで行つた。

* * * * * * *

不圖氣が付くと、もう靑山の賑やかな大通り、足袋屋の橫丁を曲つて三丁目へ出やうとすると、摺れ違ひ樣二十恰好、細輪の銀杏返しに衿足の一際美しう、思ひなしか力の無さ狀な浴衣の足取り、げつそりと痛々しう肩の瘠せ迄見えて喘ぎ喘ぎの息使ひ、如何にも苦し氣な。

人の妻かさらずば。

未だ見ぬけれど、先の病院に居ると云ふ哀れな患者と、何處か俤が似通うて居る樣な氣がして、人事ながら後姿見送つて幸あれかしと、吳れ吳れも心に祈つたのであつた。

ひとり身

菱花

一

「君のやうな前途有望の青年がだね、大いに外交の手腕を揮つて呉れんぢやァ困る」と松谷伯爵は悠然とした語調で頼もしさうに相手の顔を目戍りながら斯う言ふと、

「いや、奈何して有望處ぢや御座いません、此の七月にやァ如何やら斯うやら大學だけは卒業とした處で、如何なります事やら」俯向いて居た面を上げると、曇のない清しい眼を懐しさうに向けた、青年は隔を置かぬ間柄の、伯には一人の可愛い者で有る。

「ハ……今つから後の事なんぞ考へんでも好い、私が引受けとるから何も案ずる事は無いさ、まァ確然と遣り給へ、卒業試験は大切だからなァ」と伯は椅子を離れて、稍々片影に成つたライオン色の窓掛を搾つて、暫時其處に立つて居たが。

「ハ……相變らず描とる、功さん、滿喜は畫が好きでなァ」と振り返つて莞爾して元の席に着いて、冷えきつた紅茶に口を潤して、

「大分春めいたなァ、是れぢやもう君、うか〳〵してると小金井も遅く成りはせんか、如何だ功さん、此日曜邊に皆なで一遍出掛けやうぢやァ無いか」

「は、是非お伴を致しませう、此陽氣なら屹度好いでムいませう、あ、もうお庭のも、ちらほら咲き始めましたな」

此處からは見通せる奥庭の芝生を隔てた植込の葉影に、畫筆を執つて居る華奢な姿が僅かに動いた、無雑作に束ねた洗髪のはらりと落つる鬢の遅毛が頬を掠めて戰々と、劃然とした襟足を見せて、日影に背向けた横貌はいとゞ透き通るやう、功は思はずも瞳を凝して打目戍る、何に驚いてか今迄舞ひ連れて居た胡蝶が、翩々と立ち昇ると、櫻の花の二片三片、ほつれた髪に散りかゝる。

功はふと心付いて向き直ると、端無くも伯と貌を見合せて、何とも無く微笑んだ。

軒を渡る輕い風が戦々と微かに香を持つて流れ入る伯は葉卷に火を點けて、何か言はうとした時、背後の洋扉を靜かに開けて、入室つて來たのは令孃の名を則といふ。芳紀廿の上を二つか三つ。前髪を思ひきり出した束髪を眞珠入のピンで止めて、厚化粧の眉を作つて、上向き加減に取り澄した顏、オリーブ色の立枠の縞お召の一枚小袖に白襟を重ね、燻んだ色の琥珀の袴の後を少し長めに裳を引いて、衝と入ると眼鏡越しに瞥乎と見上げて。

『あら、芹澤さん』と人懐こさうな媚を作つて、一寸頭を下げたが、此方は慌たゞしく椅子を立つて、恭しく禮をする。

『あの、阿父様、只今歸りましたの』と甘えたやうな身の容態、伯の傍の貴婦人用案樂椅子に倚りかゝつて。

『あら、まア貴郎つては、お掛け遊ばせな、ねえ、否でムいますわ、那麼にお改り遊ばすと私、もう彼處へ參つて了ひますよ、オホ……あの阿父様、功さんては眞實にお酷いんで御座いますよ、此頃ではもう全然お見限りで些少とも私や阿母様のお部屋へなんか來て下さら無いんで御座いますの、眞實にもう餘りな方よ』と態とらしく睨める、功は眞に受けて『決して那麼、那麼譯ぢやア、眞個く、少し其多忙しいもので御座いますから、遂い其失禮斗り致しまして濟みませんとは心に思つて居りながら、遂い』と口籠りながら。

『心にも無い此様御無沙汰を……』と倘ほも辯疏をする。

『存じませんよ、那麼言譯なんぞ遊ばして、私もうお世辭なんか仰有るお方は大嫌ひよ』と語尾を强めていふ。

『否え、決してお世辭なんぞ……眞個其此頃は非常に多忙で、何だものですから……もう暇さへ有れば始終參上つて居り度いので御座いますけれども……』

『噓ばかり、何時でも、何時でもお口では彼麼お上手な事計り仰有つて、私最う貴郎には敵ひませんわ、ね

え阿父樣」
「ハヽヽ其麼に苛めるもんぢや無い、偶々出て來て其樣に言はれるともう來んと言ふやうになる、なア然うぢや無いか、功さん」
「あら、まアお父樣までも功さんの肩をお持ち遊ばして、餘りですわ、其かはり宜しう厶いますよ、光來らなかつた罰として、功さんあのテニスを遊ばせな」
「私ですか」
「あゝ夫れが好い、功さんは上手だから則を一つ負かして遣つて吳れ」
「奈何して、奈何して、お相手がお相手ですから、とても則子さんには敵いません、何しろ華族女學校第一の名手で居被る則子さんと……」
「はい、はい、もう好う御座いますわ、澤山おなぶり遊ばせよ、眞個に最う私存じませんから」と昻然と拗ねて橫を向いた、伯は唯だ笑つて居る。
「則子、庭へ行つて滿喜にも功さんが被來しやつてるから話に來るやうにな、お前が行つて左樣云つて來い」
「はア、呼んで參りますとも、滿喜さんは私の味方で厶いますもの」
「ハ……父さんは敵かな」
「如何うで厶いますかオホ……」と氣輕く立つた則子を見送つて。
「ハ……」と二人は意味も無く笑つた。
「如何も相變らず我儘者で困る」と獨言のやうに言つたが功は默して其れには答へず。
「や、大變長く御邪魔を致しまして」と俄かに席を立つたので、伯は驚いて眼を見張つゝ。
「まだ好いぢやア無いか、左樣急いで歸らんでも」
「は」
「夫れとも何か用事でも？」
「は、いや何、併し」
「ならまア好いさ」
軈て廊下を步む音のして華やかな笑聲に洋扉が颯と開いて、則子の後から續いて入つて來た滿喜子は淑やかに挨拶をして靜かに則子の背後に身を進めた、功は

立場を失つて座るともなく、席に着いた。
『あの阿父様、今日ね婦人會の幹事方の集會が厶いましてね、私歸りに寄りましたの、面白う厶いましたわ、肝腎の御相談なんぞ其方のけで、大騒を致しました、夫れは夫れは可笑しう御座いましたの、大一番のお髭に結げた方なんかゝ舞踏を遊ばしたり、餘り可笑つて苦しく成りましたわ』
『ハ……則子達のは那麽ものだらう夫れで、遂う〳〵相談はまとまらずか？……』
『オホ……夫れでも漸と極りましたわ、此度の會の時には誰様でも入場を許ので厶いますつて、而して皆様で音樂や何か種々な事を致しますんですから、何卒ぞね功さんもお友達の方々へ御紹介成さつて下さいな、貴郞は御交際かお廣くつて被居るから、成たけ多く私の手から入場券を出し度いので厶いますの、何卒ぞ何分皆様へね』
『は、夫れは好い御考へです、して其時則子さんは何を遊ばすんです？』
『私？　私は不滿らないもの、當てゝ御覽ん遊ばせよ』
『左様、何でせうか、ピアノ？　ヴアヰオリン？』
『オホ……當りませんわ、夫れよりか功さんも是非光來して下さいましな』
『則子も多忙しいのう、運動會には出るし、婦人會にも出席せねば成らんのだし、交際家は違つたものだ』
『あゝ、彼様事を仰有つて、お父様はお口が惡いオホ……、まア私は全然忘れて居りましたわ、運動會のおさらひをして置かなければ……夫れからあの……お父様』と一寸言葉をきつて、
『あの、ねえお父様、私はダンスをするので御座いますよ、夫れでねお父様に……あの……』と口籠りながら、
『あの……あのデコールテを』
『デコールテ？　持つとるぢやア無いか』
『だつても……』
『だつても？』
『でも何ん何んですもの、もつと薄い色ので無くつて

は、皆様だつても、何なんですもの」
「だから新調へて呉れと言ふのか、うむ〳〵」
「あら、お宜しいの？　阿父様」と嬉しさうに莞爾する。
「此度だけはまア仕方が無いが、ちと滿喜のやうに温順しくせんけれや不可ん」
「だつて滿喜さんは別ですもの、學校へ行けば私だつてお温順過ぎる方ですわ、もつと、何んですわ皆様は」
「他の人はまア好いさ、則子は那麼になつては困る、功さんに笑はれるぢやないか」
「あら、だつても」と欣々しながら起つて。
「功さん、あのテニスを致しませう」と椅子を離れて首掛時計を卓子の上にはづして。
「ねえ、遊ばせな」
「は、下手ですけれども……滿喜子さんもお出に成りませんか」
「はア、私は……」
「然うだ、滿喜、お前も行つて遊ぶが好い」
「でも阿父様、私は、あの些少とも出來ないので御座いますもの」
「然うね、滿喜さんはなさらないから」と則子は口を添へる。
「出來んのかな？」と伯は則子に答ふ。
「何んで御座いませう、お氣にさはるとでも思つて居被るのよ滿喜さんは、ねえ、乾度左樣でせう、滿喜さん」
「いゝえ、那麼な事は……、あの阿父樣私眞實に些少とも解りませんの」と優しげな笑を浮べて見返つたが、功が凝と見て居たので慌てゝ俯向いて羞しさうに耳の根までも染めて居た。

二

「やア君相變らず遣つてるね」
話が途絶えたので、四邊を何心なく見廻すと、机の上に今しも開き掛けた謡曲本に目を灑いで斯く叫んだ、毬栗頭の色の黒い大きな眼の、火鉢を中に正服の

膝を崩して、年頃の同じ程の芹澤とは中學時代からの親しい友の一人で。功は掌で火鉢の縁を撫でながら少し返身になつて。
「何有ね、久しく遣ら無かつたものだから、もう忘れたらうと思つて先刻ね獨で謡つて見たのさ、よく伯爵の留守なんぞに行くとね、奥方が非常に熱心だもんだだから、一つ願ひませうなんと言はれるんで實に閉口するからね」
『ふむ』と友は功の貌を暫時打目戍つて居たが、やがて。
「芹澤、君も才子に成つたなア」と冷やかな笑を浮べて。
「久しく逢はん間に君が斯變つて居やうとは思はんだつたよ」
「功は羞明しさうな眼をして。
「變りやしないさ、矢張僕は僕だもの」
「時に君、もう何時だらう？」
「まだ好いよ、久濶で來たんぢや無いか、まあ悠然して行き給へ」
「ぢやア左樣しやうか、今歸つた處で別に用事も無いんだから、先刻話掛けた續でも聞くとしやうかね」
「何んだつけね」
「何さ、松谷伯の令孃の事……」
「うむ、彼か、彼れは隨分持餘者だね、生意氣で、嫌に澄し込んで、金縁眼鏡で庇でね、小面憎い女だせ、僕は實際彼樣女は大嫌だ」
「併し君、世間ぢや、否僕等の仲間ぢやね君が其令孃と結婚するやうな噂をしとる奴が幾人も有るから、口ではやれ、芹澤も養子なんか行がんでも好さゝうなもんだなんて言つてるが皆其實羨ましいのさ、やれ華族中の金滿家だの、令孃は絶世の美人で華族女學校第一の秀才だ事の、芹澤は甘い事をしたなんて言てるせ。」
「馬鹿なハゝ、那麼事が有るもんか、肝腎の御當人は些少とも御存じ無しさ、よし又然うにした處で僕如きだね、君、一介の貧書生を君、誰れが好き好んで養子になんぞ爲るもんかね、考へて見給へ、ね左樣ぢや無

いか、未だまだ僕等におはちが廻る迄には、のつぺりした若殿の候補者が幾人も有らうぢや無か」

「併し君は幸福者だよ、左樣人から思はれる丈でも已に幸福ぢや無いか。」

「何が君幸福な者か、併しね夫れやまア假令だよ、伯爵の養子に成れば外見は非常に立派なもんだらう、併し其實自分の氣にも入らん女房なんか持つて終生頭も上らずになんか餘り下さらないぢや無いか、僕は眞平だ、だから何時でも僕は伯爵を見ると左樣思ふね、可愛想だ全く其心中を察するとね、可哀想だよ、氣の毒な者さ自分が全力を捧げて愛して居た女は退けられる、不平も有らうさ、則子さんの快活なのに引換へて可憐な滿喜子さん、を見たら眞に伯爵は辛からうと思ふね。」

「併し何だらう君、其滿喜子さんとか云ふのは則子さんの令妹ぢやア無いかね。」

「うむ妹さ、妹は妹だけれど異腹なんだ滿喜子さんは妾腹の子なんだね、貌も性質も丸で正反對で、極温順しい優しい氣質を持つたね、則子さんなぞの比に非ずさ、畫が好でね、將來は畫工に成るんだつて、まア自分では言つてるんだ、夫れに付いちや憐れな履歴を持つて居るんだよ、左樣だ、丁度もう三年位に成るだらう滿喜子さんの、いや其妾がね伯爵家から暇を出されて歸る時に滿喜子さんに泣いて左樣言つたさうだ、男と云ふ者は皆無情な者で決して賴みには成ない、私も最う此年に成つてせめては滿喜子さんの成人になるのを樂しみにして居た、縱令私は生涯日蔭者でも何でも構は無い、滿喜子さんと一所に居られゝばと思つて居ましたけれども、もう此樣事に成つて了つて、お暇には成るしもう再び此家に來る事も成らない、滿喜子さんにも逢つては不可んと仰有る、私はもう貴女にもお目に蒐りますまい、思ひきりませうと言ましたけれどつく〲自分の身を考へますと心細くつて、生の貴女にさへお目に蒐る事も成らず、是れが長い長いお別れに成りますかと思ふと、滿喜子樣 私 は那麼惡い事をしたと思召ますの、阿父樣と貴女丈けは私をよく御存

じで居被いますね、女と云ふ者は皆辛い者でムいます、斯云ふ辛い思ひを遊ばすのがお嫌なら貴女様はお獨りで氣樂にお暮し遊ばせよ、貴女はお畫が好きですから畫工におなり遊ばせ、其方がお恰悧でムいますと言つてね其晩別れたのださうだ。」

「夫して何かい、君、其妾と云ふのは今何處に居るんだらう？」

「夫れぎり音信不通なんだもの解らないさ、伯爵も非常に氣に入つて居たんだが、勝氣のきかない女だつたさうだが、奥方や則子さんに對しては夫れは感心な者だつたさうでね、世間によく有る奴で段々意張出したり、奥方を追出さうなんて、那麼考へを持つた女ぢや無い、好く奥方に從つて居たけれど何しろ我意一杯に育つた一人娘だもの夫れに家附ぢや有るし、妾が餘り優しくするのも吃度何か思わくでも有るやうに思つて、まア氣を廻したと思ひ給へ、夫れを又ひどく氣の毒に思つて執事の何とか言ふ奴だ、夫れが妾に話して居た處を奥方に目付かつて執事と共に解雇されて了つたのだ、併し伯爵は夫れを決して信じては居無かつたけれど左樣しなきや家が治らなく成つたから暇を遣つたのだらう、其時可笑しかつたのはね、流石奥樣も氣持が好く無かつたんだね、奉書か何かの立派な包を遣つたら妾は夫れには手も付けずに突返したんださうだ、奥方非常な立腹で眞青に成つたから仲に入つた奴が吃驚して、漸くなだめて妾にしたんだね、すると妾も勝氣い奴さ、見て居る前で女中達を皆呼んで世話に成つたからとか何とか言つて水引も掛つたまゝ遣つて了つたんだね。」

友は熱心に耳傾けて聞いて居たが。

「伯爵は何んと言つたらう。」

「無言つて居たらうさ、妾だつて其位の事をしたつて仕方が無い、全體伯爵が惡いんだ、以前の通り滿喜子さんと一所に日光に置いとけば此樣事にも成ら無かつたらう、滿喜子さんだつても妾と名こそ付いてるけれど、自分の母の傍に居る方が何程好いか知れやしない。」

と言ひながら卷煙草の灰を拂つて膝を組直して

「全く可哀想なのは滿喜子さんさ、見ると矢張思ひ出すからだらう、此頃ぢや成る丈け遠ざけて居るんだらうね、併し當夫那麼事も有るまいけれど……僕が行つても餘り出て來ないよ。」

「何故那麼に冷かに爲んだらう、如何に滿喜子さんが似て居るたつて、何も遠ざけたりなんか爲るにも及ぶまいぢや無いか、夫れで滿喜子さんは何とも言はんのかね。」

「うむ、溫順しい者だ、自分でも餘逢はんやうにして居るかも知れないて、僕なんかゝ行つても滅多に來ないもの、併しね君考へて見りや彼の親子位憐れな者は無いね。」

「夫れや自業自得さ、左樣ぢや無いか、名譽や地位に目が眩んで愛しはしない夫んなで持つて那麼に好きな地位なんかに束縛されたんぢや無いかね、言はゝ心柄さ併し其樣な人は幾人も有るのさ。」

「左樣かなア」と思ひ入つたやうに。

「だが愛を捨てゝ迄も……然うかなア。」

「左樣さ、先づ差し當り君なんかゝ怪しいぜ。」

「馬鹿言つちや困る、僕は……那麼……。」

「ハヽ、何も那麼に眞に成らんでも好いさ。」

三

薄紫のさゝやかな包を腕に掛けて縱横縞の洋傘、棕櫚竹の柄を少し傾げて夕日を浴びながら、生溫い風に微り眼の緣を染めて急いだ故かしつとり汗ばんだ額を拭もやらず、爪先上の路を登り切つて、立ち止ると思はずホツとして片手に袂を探りながらレース入の手帕を出して襟邊にすら〳〵と風を送ると其所果所となくえならぬ薫。

「滿喜さん、滿喜さんぢや有りませんか。」

背後から追縋つて來る者が有る。

滿喜子は振り返つて。

「おや、芹澤さん」と計り輕く頭を下げる。

「や、先日は失禮致しました」　薄鼠色の中折を脫つて小脇に挾んだ細い金頭の杖に持ち添へると綺麗に分

けた澤かな髪を一寸撫でゝ。
「お一人で何處へお出でゝしたの？」
「はア、あの先生の處へ、餘りお暖でしたから、運動がてらと存じまして」
「は、夫れは好くお出掛に成りました、しかし是れから直ぐお歸りですか」
「は、今日少し早く歸るやうにと申されましたので厶いましたけれど、ぶら〳〵參りましなので遂いあの此樣に遲れまして」
「あ、左樣で厶いましたか、私も實は今日一寸阿父樣にお目に寬度と思ひまして、實は是れから伺ふ目算で出て參りましたのですけれども……御在宅で御座いませうか」
「はア大抵何處へも參りは致すまいと存じますが……萬一留守で厶いましても母や姉が宅で厶いますから、何卒御越遊ばして、昨夜も姉と噂申して居りましたの」
「私の？」何が無しに功は赤く成つたが周章てたやうに。
「あの、女貴只今でも矢張畫を遣つて被居んで御座いますの」
今更聞かなくとも知れて居る事をと功は極りが惡くなつたが、滿喜子は夫れには氣も付かず、そゞろに步を運して居たが。
「はあ、ですけれども此頃では遂いもう怠惰けて計り居まして些少とも畫けませんの」
「併しもう餘程久しく爲つたので厶いませう何か專門と云ふやうに伺ひましたが」
「專門なんて貴郞、とても那麼オホヽヽ專門と申しましたら大變で厶いますけれども、私のは唯だ幼い時から好きで厶いましたものですから」
「いや眞個畫は宜しう御座いますね、嘸ぞお樂しみな事で厶いませう」
「出來ませば樂しみで御座いませうけれども私なんかは唯だもう苦しい計りで厶いますわ、夫れに此度展覽會へ出す事に成りましたものですからオホヽヽ甚麼のが出來ますやら心配で厶いますけれども……近日また

日光へ參りますのよ」

「え、日光？ぢやまたお目に蒐れんのですね」

「はア暫時の間で御座いますわ、ですけれども參りますのは私計りで厶います」

「何日頃御歸に成ります」

「何日つて、夫れは分りませんわ、私の事ですもの、何時でもお可笑しいので御座いますよ、私が日光へ參りますと、幾等早く歸る目算でも參つても乾度遲く成りますの、那麼に懷しいのかつて、いつでも父に笑はれますけれど、長く居りました故か眞實にもう懷しくつて耐らなく成る事が御座いますの、那麼時には寫眞でも出して見ましたり致しまして眞個に自分でも可笑しくつて」俯向いて居た目を上げると滿喜子は淋しく微笑んだ。

「併し直きお歸に成るんで厶いませう？」

「はア、直き歸る目算で參りますので厶いますけれども……何日頃に成りますやら、萬一かすれば最う是れ限り歸らないかも知れませんわオホヽヽ、田舍者に成つて仕舞ひ度う御座います」

「何故です、貴女がお在宅に成らんとお宅は御寂しいでせう」

「私なんぞ居りましたつて仕方が厶いませんわ」

「併しお留守だと思ふて伺つても何んだかね、寂しくつて」

「オホヽヽヽ、私なんぞ那麼に仰有つて下さるのは貴郞位な者て御座いますわ」

華かな笑ひ貌、正面に受けた夕日の光に照り返つて輝く計に美しかつた。

功は偶然と何か思ひ付いたやうに。

「あの……滿喜さん」と言ひかけて少し躊躇つて居たが思ひ切つて。

「あの、何んですか貴女は此先奈何遊ばすお考へなんですか」

「如何つて？」

「まア、早く言へば」

「まア、早く仰有れば」

「あの、その……何なんです」
「オホヽヽヽ分りませんわ」冗談のやうに笑はれたので功ははつとして我にも非ず口を噤んだ。滿喜子は何となく接穂を失つて居たが。
「功さん、一寸御覽遊ばせよ、夕日が綺麗ぢやア御座いませんか、あゝいふ處が書けましたら甚麼に好う御座いませうね、美しいぢや御座いませんか」
滿喜子は恍惚と目を遣つて居たが功は夫れには答へ無かつたので、いさゝか拍子拔けがしたやうに其儘下を向いて默つて了つた。
「滿喜子さん」と偶然呼びかけて。
「あの貴女、何なんで御座いませう、あの貴女、此先何づれ何處へかお嫁に成るんで御座いませう？」
滿喜子は洋傘を傾げたまゝ。
「あの、私突然此樣事を伺つて、滿喜子さん貴女、嘸吃驚爲すつたでせうけれども、滿喜さん、貴女お氣に障りまして？」と氣遣しさうに言ひながら、竊かに氣色を窺つたが、滿喜子は唯だ笑つて答へなかつた。
「貴女、お怒り成すつて？」
「いゝえ」
「眞實に、滿喜子さん」
「那麼事……」と笑つて。
「あの、私ねお先へ參りますから」
と言ひ捨てゝ家は目の前に近づいて在りながら二人は後先に門をくゞつた。
何時か日は落ちて名殘の光は破璃窓を射て、風も無いのに窓掛がゆら〳〵と動いた、微かにひゞくピアノの音は則子の調べで有らう、何の曲か夫れさへも功は氣が付かなかつた。

四

試驗がもう目の前に迫つて來た爲め計りで無く、久しく訪問し無かつた伯爵家から突然俥を持つて迎ひに來たので何は扨て置いてもと功は早速馳せ付けたが、別に常とは變りたるも無く、靜かなので如何した事か、また不滿らない則子の用事でも賴まれるので有らう

と、忙然待つて居ると、此處へと直ぐ隣の應接室に案内をして置いて出て行つて仕舞つた。

功は一人で長椅子に倚つて前に在つた洋書を讀むでもなくはぐつて居たが、常日は直ぐに伯の居間に通されるものをと妙に氣が改つて、自分の家も同樣に思つて居たのが、客にでも來るやうに、なりも崩さず、いぶかしさうに眉を顰めた。

其時前の掛時計が半を打つたので、偶然首を上げると、つか〳〵姿見鏡の前に立つて、ダブルカラーの淺黄の縞の襟飾のなりを一寸直して、新しく見直した時、叢の男が靜かに洋扉を開けて。

「御待ちかねで御座います、何卒ぞ、お居間の方へ、お出で遊ばして」と一禮して先に立つて、功は天鵞絨氈のしつとりとした上を踏みながら、伯の居間に續いて行つた。

「や、君、待つて居ました」

伯は立つて迎へて、常よりは一層親しげで有る、何故とも功は知らなかつた」

日影が一杯に差した障子をたてきつて、羽織の紐を解くと肩を辷つてずるりと裏の返つたのを脱ぎ捨てたまゝ、しと〳〵と美しい後姿を見せて、机の前にちやんと座り直した。

遙かに隔つた彼方の書齋から伯の笑ひ聲やら折々は功の話聲も交つて漏れるのを、滿喜子は聞くとも無く耳を傾けて居たが、何か思ひ出したやうに片頰に笑みを浮べて欣々と立つた。

廊下傳ひに幾廻りもして葉影に成つた父の書齋を背に、半ば開いた應接室を一寸覗いて見た。窓掛を漏るる日は稍々傾いて、螺鈿の棚を斜に石膏の半身像に薄い光を投げて居る。

滿喜子は何心なく見廻して居たが偶然卓子の上に開かれて有る洋書が目に入ると何か賴母しいものにでも出逢つたやうに、すつと入室つて暫時くり返しては當もなく見詰めて居た。

次の間の邊りで人の氣勢がしたので密と四邊を見廻して見たが夫れなり本をふせて、椅子を離れると、内

から洋扉を開けて玄關へ出た無造作に丸るめて在つた外套や襟巻を見るより滿喜子は手に取つて裏を返したり、表を眺めたり餘念もなく微笑んで居たが、ふとした物の拍子にばたりと落ちた皮の手袋、拾ひ上げると己が手にそつと嵌めて見て。

『オホヽヽヽ大きくて何んだか可笑しいわ』

獨言を言つて飽かずも眺め入るので有つたが、絶え間勝にちやら／＼敷石を踏む音がしたので、はつと胸を轟かしながら衝立の陰にかくれて覗いて見たら、夫れは家の番犬の鎖を引ずつて來るのであつた、滿喜子は可笑しさに思はずもふき出したが、袖を蔽ふて笑ひを忍んだ。

其時居間からにぎやかな笑ひ聲に則子の聲も交つて聞えたので、滿喜子は俄かに眉を蹙ちせて嫉ましさうに振り向いて凝と見て居たが、怪しくも胸が迫つて、何んともなく情無いやうな、今迄ついぞ覺え無かつた妙な心地で其身を引き返すと其儘、化粧の間の鏡臺の前にぞ、髪をつくろつた。

『お孃樣、私がお髪をお撫付申しませう』と甲斐々々しく後へ廻つて。

『あの、お孃樣も何んで御座いますの、お客樣の處へお出で遊ばしますので厶いませう』

『いゝえ、私は行かないの、だけども姉樣はお客樣の處なんだらう』

『はあ、左樣で厶いますとも、だつてもお孃樣はあの、芹澤樣がお出でなので御座いますものオホヽヽ、御學校からお歸り遊ばすともう直ぐにお出で遊ばしましたの』

『まあ、左樣、あのお姉樣は芹澤さんがお好きなの？

『如何で御座いますか、お伺ひ遊ばしてごらん遊ばせな』

『芹澤さんは何んで被來したんだらうね』

『ホヽヽ、何んでお越し遊したので厶いませう』

『お前知つてるの？』

『オホヽヽ、私は存じませんの、さあお綺麗にお成り遊ばしました、些とお化粧でも遊ばせよ、お孃樣』

意味有りさうな笑ひ顔をして、満喜子は凝と見て居たが別に心にも留めないで軽く階子段を踏んで、自分の室に歸つて障子を開けて的も無く庭面を眺めて居たが。

「お立ちですよ、満喜さん」昇り口の下で呼んだのは則子の聲で有りたので、二足三足行きかけたのを引き返して、満喜子は廻椽の角に立つて居た、一目に見ゆる玄關にやがて、下りた功の姿を凝と見て居たが、功はちらと見上げた眼と端無くもはたと合ふと俄かに面を背向けて、門を出て飄然り俥上に乘り移るのを、満喜子は本意無くも見送つたので有つた。

「満喜さん、お父様がお召ですよ、さ御一所に行きませう、お迎に來て上げましたよ」

常になく莞爾やかに笑つて、閾際に立つたのは伯爵夫人で有る。

「あら、お母様、恐れ入ります」

満喜子は慌てゝ馳せ寄つて小腰を屈めながら。

「芹澤さんはお歸り遊ばしまして？」

「あ、歸りましたよ、只つた今、おや知らなかつたの？」

「はあ、ちつとも」

「左様、則子さんが呼んだやうだが、さ早く來被い、お待ち遊ばしてゝすから」

「はあ」とばかり夫人の後に從いて伯爵の居間に入室つた。むつとするやうな暖さと洋酒の馨に思はずも後ずさつた伯は長椅子に身を投げ掛けて恍惚と見て居たが。

「満喜か、さあ早く私の處へ來るが好い、お父さんと一所にお掛け、否かハヽヽヽ」と他愛もなく笑ひながら、小手招ぎして。

「お父さんの處へ來い、さあ、満喜」

則子は何かしきりに讀んで居たが、顔をも上げ無いで。

「お掛けなさい、満喜さん」

「ハヽヽヽ満喜、早く姉様にお祝を言はんか」

「あら、嫌で御座いますよ、お父様つてば」

「ハヽヽヽ満喜お前も喜んで與れ、なあ満喜、お前

になあ兄様が、來たんだよ、兄様が、仲好くせんけりや不可ん、お前も功は好きだらう、だから喧嘩をしちやア不可んよ、功さんはお前の兄様だ、嬉しいか滿喜」

「お父様、あの……あの眞實で厶いますか」

「眞實とも、眞實とも、お父様は嘘なんか言ふものか、嘘だと思ふならば姉様に聞いて御らんなさい」

「あら、厭よ、そんな事お父様」則子は莞爾滿喜子は無言で後向きに窓から貌を出して冷やかな夜風に吹かれながら、庭の木立のほぐらひ邊を凝と見詰めて居たが。

「お父様、あの私を日光へ遣つて下さいな」と悄然としてうなだれた、梢を漏るゝ月の光も微かに煌めく星影も徹塵に碎け散つた希望の光明かとばかり、滿喜子の眼にはいたましく見えたので有らう。

再びうるんだ聲を振り絞つて。

「お父様、私を日光へ……あの日光へやつて下さいましな……」

新撰 女子書翰文　　服部躬治氏著

この書は當代の歌人中若くして才識に富めりとの評ある服部氏が新たに組み立てたる新式の女用文なり、この書簡文は從來の消息文に有觸たるまいらせ候や、はべるかしの古風なる冗長文字を、悉く省きて現時の生活に、適應せしめたるものなるが、文例尤も簡捷にして實用向なれど、さればとて言文一致の無趣味と卑俗には陷らずして優美高尙なるは流石なり。（定價四十五錢本石町寶文館發行）

社會研究 高原生活　　伊藤銀月氏著

俗にいへば一種の妙筆、氣の利きたる書き振りと評すべきか、筆に妙文とか才筆とかいふ丈にては銀月氏の文は評し盡されざるなり、本書元より片々たる一小册子、又其書かれたる物も唯富士の裾野、富士登山の觀察、八郞潟の風物觀察に過ぎず、之を爲酙がましくも社會研究などゝ、くつ付けたのは、異樣の感なきにしもあらずと思へど、そこには著者自らの見地ありて讀み行く内には成程と首肯せらるゝなり。何は兎もあれ銀月氏の文當代の異彩として讀書界に推奬するを惜まざるもの也。

百號紀念 こゝろの花　　竹柏會出版部

歌界の智囊佐々木竹柏園主人の機關雜誌號を重ぬること百回、一個歌學の雜誌にして百回の紀念號を見るまでに成長せしめたるこの一事以て竹柏主人が如何に經營の才に富めるかを知るに足るべし。但し心の花は決して單純なる歌の雜誌には非ず、其内容の豐贍なる、文章論あり、翻あり、美文あり、小說あり、飜譯文あり、外國通信あり、批評あり、紀行文あり、雜然たる排列なれども、記事に趣味あり、文に才藻あり、往年のしがらみ艸紙などゝ併せ見るべき好雜誌ならんか、本號は鷗伴の爪鳴外の朝顏、兩名家の小品を始め、芳賀、萩野那博士の考證的隨筆其外、分量は少けれど内容に饒かなる文多し、且つこの雜誌包容の廣きこと竹柏氏の包容の廣きがごとく然り。

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	…金二十錢
四冊（三ヶ月分）	……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊 / 增刊四回……一、四、七、十月價格同一）	
郵税 一冊	二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置ハ切日等御照會次第御報可致候

注文規略

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年十二月五日發行　第六卷第拾六號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番


西洋菓子
◉歳暮 クリスマス
御進物品の御撰擇には
森永の西洋菓子に限ります
フレンチ
メキスト
バナナ
マシマロ
森永
チヨコレート
クリー
スター
◉新意匠にして優美なる包裝は
品質の精良と喫味の秀絶と相俟つて
御進物界の隨一との評判であります
◎市内及全國到る處の洋酒食料品店及菓子舖にあります◎
製造元 東京 森永商店

女(後付の一)

見よ四十年度の太陽を

太陽

三色版……黒田畫伯筆摘草

新年大附録……白馬會員合作東洋未來雙六……本誌八頁大石版着色

●口繪（光澤紙刷四頁赤門紙刷十六頁◎本誌獨得の光彩也◎最も珍貴なる寫眞を集む◎清國名士風景等未だ紹介せられざる珍器多し）

●時事評論（萬般の問題を論評す◎論旨公平復た痛快なるは既に定評あり◎明春の論壇に異彩を放つは此欄也）

●人物月旦（鳥谷部春汀子が特有の筆端に現はるは誰れぞ活殺自在の筆法、年改まると共に更に好趣を發揮す）

●論說（論壇の木鐸也◎盛名ある大家又新進の論客が意見を聞かむと欲する者は本欄を繙け◎堂々たる論文數篇毎號此の內に在り）

●清國時文（清國時文を以て、東洋に關する名家の意見及び事件に關する論評を揭く◎清國を啓發するは本欄の任務也）

●文藝（文藝の美此の欄內に鍾まる◎新氣運を以て充滿す◎文藝壇の北斗たり◎時評頗る俊嚴也）

●學藝（深奧なる學理を平易明快に說明す◎科學の進步、衞生の要訣、總て科學を本としたる記事此の內に光彩を放つ）

●雜纂（最も多方面の一欄也◎歷史地理紀行文娛樂記事海外思潮等皆な此の內に納めらる）

●時事彙報（社會各方面の出來事を系統的に記述し且つ輿論を紹分す又終りには日誌と附す◎後日の參考として最も信べきは此の欄也）

●英文欄（模範的英文也。吾が日本を海外に紹介して最も正確なるは此の欄也◎清國時文欄と相俟つて本誌を海外に發展せしむ）

毎月一回一日發行年刊十二冊
臨時增刊年四回
正價一冊參拾錢郵稅三錢
十二冊參圓貳拾錢
外要郵稅

懸賞寫眞課題……新年松……一月七日締切

讀者文壇課題……男爵後藤新平君

販賣用電話 本局二千六百廿番

東京本町 博文館

振替貯金口座 第二百四十番

（後付の二）

文藝俱樂部

毎月一回一日發行　第十三卷第一號　四十年一月一日出版發賣

▲奈何にして丁未の吉春を迎へん???▼

戰後の日本文壇は果然吾人が期待せし豫想に差はず空前の大發展大膨脹を事實に示すべき好機運に逢着せしは、吾人が讀者と相共に一大白を擧げて心から祝賀すべきなり茲に於てか常に自ら其の微力を顧みるに遑なくて我が文壇の爲めに犬馬の勞を取らんとする本誌が夢寐にだも尙忘れ得ざりし理想を現實し文藝の歡樂鄕に悠々自適し讀者と共に其樂みを等しうする第一關門に入らんとするは正に來ん丁未の年にあらずや。此の希望に滿てる吉春を迎ふるに當り本誌は層一層其記事の材料を精選するは呶々するまでもなし東洋に發行する文藝雜誌中唯一無二の十三年の隆全なる歴史を享有する光榮に浴するの幸運を感謝し讀者が積年の眷顧に酬ふを期し初刊には本誌が創刊以來未だ曾て有らざる底の最美最艶の大附錄を添ふ。讀者希くは本誌が試意を諒とし倍舊の扶掖指導を吝します日本の文藝として宇內に冠絶するの實を擧ぐるに一臂の力を假し賜はんことを!!!

▲希望の曙光は吾人の眼前に在り!!!▼

毎月一回一日發行＝年刊十二冊＝定期增刊年四回
正價一冊廿五錢郵稅貳錢五厘＝前金＝四冊金九拾
五錢八冊金壹圓八拾錢十六冊三圓五拾錢外要郵稅

東京本町　博文館

（後付の四）



四十年度の計畫

月々共に榮へ年を迎ふる毎に盛なる本誌は、今や其第十三齡を迎へんとす、興廢常なき少年雜誌界に在りて、獨り卓然として群を拔き、以て少年學界の一大明星たるもの、一に愛讀者諸君の賜物にあらずして何ぞ、本誌が新衣裳の如何に美しくして其內容外觀の共に兼備せるもの之實に諸君が多年の愛顧に酬ゆべきもの、乞ふ左記の要目を見て、本誌改頁の要旨を知り給へ。

一 第十三卷の少年世界は、記事挿畫を專ら、小學校乃至中學初年級を以て程度とし、常に國定教科書に連關して學校教科の補習とす。

一 第十三卷の口繪は、西野氏の動物標本畫は更に其步を進め大下藤次郎氏の水彩畫は專ら初學練習者の便に供したり。

一 卷頭お伽噺は舶來光澤紙二色刷を用ゐ、他雜誌に比類なき趣味津々たるお伽噺は小波氏の文と桂舟氏の畫と相俟つて光彩を放つ。

一 **新年大附錄**としては巖谷小波氏立案尾竹國觀氏筆の小學教科双六と題する石版四度刷本誌八頁大の美麗なるものを呈す。

▲記事▼

『羊太皷』とは如何なる音の出る太皷なるか小波氏の外恐く之を知るものなからむ『日本の國體』は菊池男爵の修身談にして『羊の種類』は例の石川博士の動物談御題に緣ある『松の生態』は三好理學博士之を述べられお正月の食料たる『鰊仔の話』は水產大家岸上鎌吉の筆にして御馴染の岡村博士は『春の若布』の歷史を語らる其他近藤基樹氏の寶船の說明の如き櫻井陸軍中尉の『陸軍始め』窪田中監の『進水式』の外江見水蔭、押川春浪、武田櫻桃の諸氏各其得意の方面に彩筆を振はる利益と趣味の無盡藏なりと云ふべし。

▲少年文壇▼

每號題を課して少年諸君の金文玉作を募り記者丁寧に之を撰評して誌上に萬朶の花を咲かしむ而も之を挿むに懸賞寫生畫ありポンチ畫ありて一層の美觀を呈せん又少年新聞は面目一新全く讀者諸君の娛樂場とし學事顧問を再興して新智識啓發の舞臺とせり

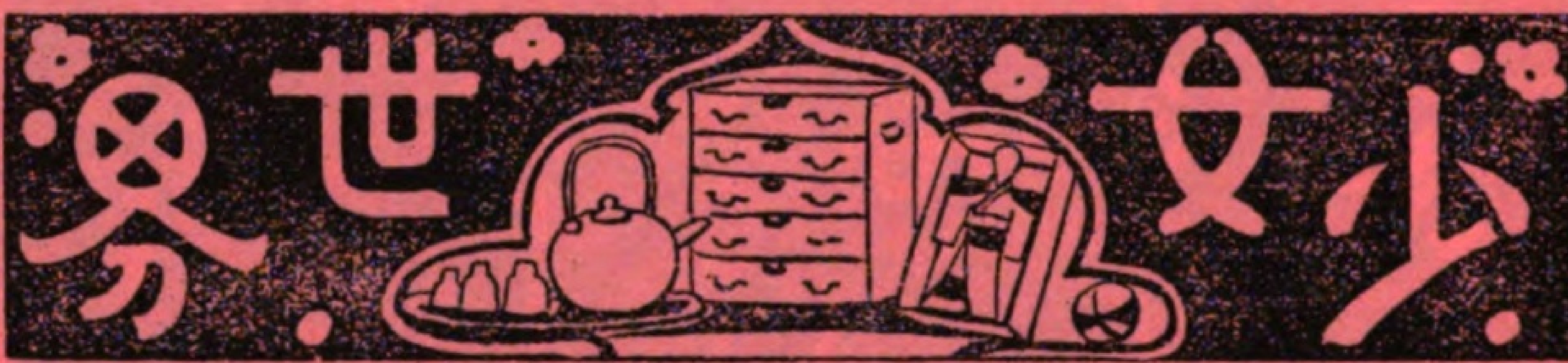
▲定期增刊▼

二、五、八、十一の四ヶ月に至りて之を發行す其二月十五日に出すべきは題を**少年寶庫**と云ひ、諸君が日夕机上の友として智識と娛樂とを兼ね求むるに足るべき新趣向のものとせり詳しく之を新春の誌上に披露すべし。

每月一回一日發行　定期增刊年四回（定價同一）
●壹冊正價拾錢　▲郵稅壹錢五厘
前金 四冊參拾八錢●八冊七拾五錢●十六冊壹圓四拾錢外要郵稅

販賣用電話 本局二千六百廿番
東京 本町 博文館
振替貯金番號 第二百四十番

（後付の六）



來年の新發展

本年九月呱々の聲を揚げた本誌は、更に來年一月より一大發展を致します、夫は記事を増加し、發行日を繰り上げる事で、從來の行數に對し、一頁に於て六行を殖やして、二十行としますから、全體では十頁以上の増加と同じ割合に成るのです、隨て趣味深い有益なる記事も、より多く掲げる事が出來るやうに成りました、且つ發行日も繰り上げて毎月一日としたのです、で先づ第二卷第一號、即ち來年一月發行の本誌の内容は左の通りであります。

●**お伽話** 巻頭には小波氏が小松小綠と題する得意の作を掲げ、猶當時の小說界に於て、名聲隆々たる、廣津柳浪氏に囑して、最も興味あるお伽話を書て貰ふ事としました、柳浪氏が小說に於ける手腕は世の知るところでありますが、お伽話は果してどんな面白いものが、出來るでありませうか、其他二三の大家が各々得意の伎倆を揮はれます、諸孃樂んでお待ちなさい！

●**少女訓** には津田梅子女史の有益なるお話を掲げ、

●**史談、園藝、手藝** の方面に於ては、櫻井中尉の内親王殿下拜謁の記、前田曙山氏の箱むろ、金子紫草氏の和蘭の女王、白井準繩氏の印度の繪詞、また前號より引續いては、白崎女史の造花の話、赤沼女史の裁縫の手ほどき、三木女史の編物等いづれも見落す事は出來ぬもので、其他木村小舟、竹貫直人氏等も例に依つて有益なる記事を寄せられます、又第二號以下からは、少女衞生、料理法なども、時に掲げる事と致します。

●**少女會館** 開館以來非常の歡迎を受けた本館は本號より一層擴張して各室共、少女諸君の投書を滿載致します。

◎**新年大附錄**

新案の小學教科双六といふのを附錄とします、尾竹國觀氏の筆に成る、大版極彩色刷であります。

毎月一回一日發行（四十年より）定期増刊年四回
正價一冊拾錢郵稅一錢五厘●前金四冊參拾八
錢八冊七拾五錢十六冊壹圓拾六錢外に要郵稅

販賣用電話 本局二千六百廿番

東京本町 博文館

振替貯金口座 第二百四十番

（後付の七）

中學世界

明治四十年度の新發展

發展と改良と努力とは以て顯はれたる三十九年の中學世界は、幸にして天下の青年學生數十萬の熱烈なる同情と愛顧とを博したり。今また改年の事近きにある に當り吾等の用意は更に一層密ならずんばあらず。即ち、その發展をして益深大あらしめ、その改良をして益光輝あらしめ、その努力をして愈永久的ならしめ、以て當初の目的を貫徹せしめざれば止まざらんと欲す。乞ふ今その內容に就て少しく洩すところあらしめよ。

◉新年附錄

これ特に吾等が豫め諸君の大期待を要求する所の目的物たり。頁數六十餘頁そはすべて當今の文學大家諸氏の筆令、態と其名を傳へずと雖も學生諸君が新春第一の讀物たるべきは今更云ふを要せざるなり。

▲思潮評論　當今第一流の思想家諸氏に口嘱して、學生進路の光明を齎す。桂月また舊に依つて氣焔を吐くべし

▲修養談　現社會の光明たる數多の名士の經驗、感想若くは其方法を傳へて品性の修養に資す

▲理科講話　執筆者はすべて專門の諸博士也。實益を經とし趣味を緯とし美的に通俗に深遠の學理を了解せしむ

▲文學　淺膚なる見識を以て一概に文學を排するは吾等の取らざる所也恐るゝものは來てこの氣高き清泉に浴せよ

▲繪畫音樂　文學と并びて本誌の一光彩也。寫生紀行、繪畫談、音樂、講話、共に一致して斯道の趣味の普及に力むべし

▲衛生　糸左近氏專らこれを擔當し、親切、忠實の態度を以て諸君の心身保護者を以て自ら任ずべし。

▲學生々活　これ本誌の獨壇なり。現代學生の嗜好と風俗と、氣風と秘密とは悉く擧げて此內にあり。眞に學生社會の一大パノラマ也

▲受驗案內　受驗者にして本欄を見ざるものは鍵なくして金庫を開かんとするに似たり試驗の準備、心得、問題の解釋等專ら受驗の便利をのみこれ圖る。

▲運動界　專門記者の筆により、野球、庭球、柔道、劍道、ボート等あらゆる運動競技に對して、公平なる批評を下し且つ重要なる出來事を報導す、尚以上の外

◎學事顧問◎學校月旦◎海外通信◎立志談叢◎時事解說等の要目はすべてこれを網羅して餘す處なかるべし。

毎月一回十日發行

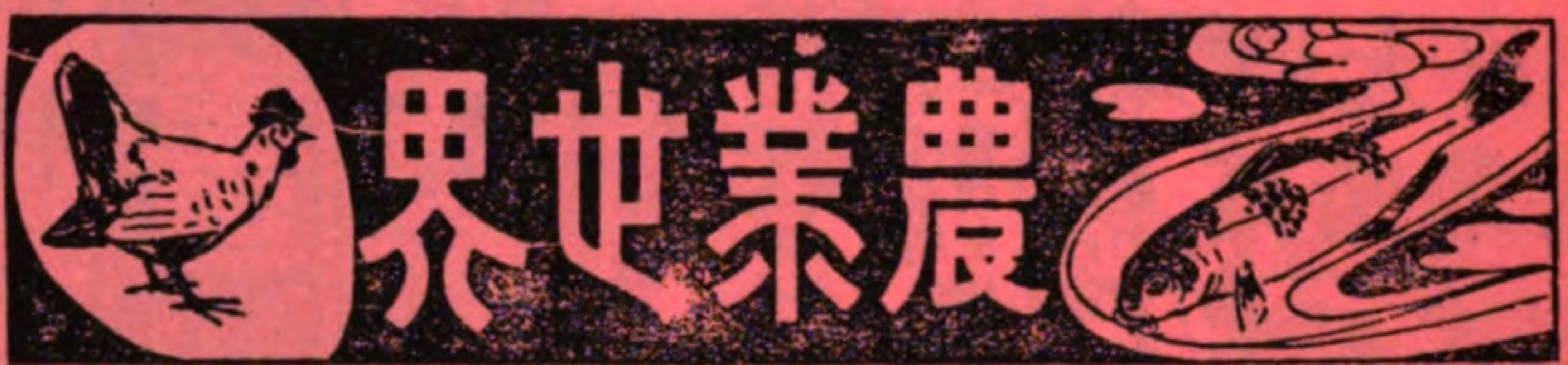
定期增刊年四回

▲定價一冊貳拾錢　郵稅一冊貳錢

前金　四冊金七拾五錢　八冊金壹圓四拾五錢　十二冊貳圓八拾錢　外に郵稅

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(後付の八)



毎月一回
十日發行

第貳卷第一號

四十一年一月十日
出版發賣

本誌戰後經營の指導者を以て任じ、今春呱々の聲を揚げしより未だ一歳ならざるも、好評嘖々既にあらゆる農業雜誌を後へに瞠若たらしむるに至れり、茲に於てか本誌は益自重奮勵して、更に來年より材料を精撰し、記事を豐富にし、以て農界に一大光明を垂れんことを期すべし、其の內容の詳細に至ては、之を來春發刊の初號に就て見よ。

●本誌は農業、林業、水產に關する朝野名家の有益斬新なる明論卓說」耕種、園藝、釀造、養蠶、畜產、土地改良、林業、水產、副業等の各事項に涉れる各專攻の學者實際家の執筆に係る學說實驗」農政問題、自治農村、產業組合、耕地整理等に對する意見と經驗」とを揭げ、斯界を改良指導することを期すべし。

●本誌には農業、林業、水產業者の人物經歷、事業言行逸話等」農家が家庭に要すべき育兒、攝生、娛樂、料理、雇人待遇、家風家法等」を揭げ一は農界の人物を獎勵し、一は農家の家庭を改善することを期すべし。

●本誌には各地方に於ける冠婚葬祭、祝事娛樂、奇蹟、奇談等の風俗習慣」農界に行はるゝ俳句俗謠、俚歌より詩歌美文小說の類」を揭げて文藝的趣味と娛樂の念とを與ふべし。

●本誌には內地に於ける農林水產に關する狀況及時事を明かにし、倫滿韓、西比利亞、南北亞米利加、布哇に於ける各國の農事の模樣、移民の狀況」等を詳記して讀者の參考に供すべく、讀者より提供する各種の質問に對し一々叮嚀親切に解答して其良師たるを期すべし。

新年附錄 として農家年中行事十六頁菊判二倍の光彩燦爛たる石版色刷と三色版刷とを添ゆふべし

中村不折先生新著

畫道一斑

―(新刊發賣)―

洋裝クロース上製
口繪三色版寫眞版入
本文三百五十餘頁
定價八拾五錢郵税十錢

目次

▲附裸體研究の理由

從來日本人の手になつた統一ある畫論と云ふものはない、實に此の畫道一斑が始めてゞある。說の良否などは問ふまでもなく卒先者として此の書のあらはれたのは實に日本畫界の光榮として喜ばねばならぬ。

一斑とは全豹に對しての名稱で謂はゞ未定稿の姿であるが繪畫の性質學理なぞに就いては解說十二分にして懇切を極めて居る。一言一句みな著者が多年の經驗より得し實驗實說である。無形の理論などは悉く除いてある。畫道一斑それ總てが實地に伴ふた理論である、實際畫を描く上に就ての密接ある事柄は詳細に述べてある著者は實にこれがために多大の油汗を灑いだのである。苟も畫道に志ある諸士は必す此の書を一度讀ねばならぬ。

最大好評美術叢書

再版● 繪畫講話　橋本春郊譯　●定價六拾五錢 郵税十錢

五版● 水彩畫手引　三宅克己著　●定價七拾五錢 郵税八錢

再版● 繪葉書趣味　日本葉書會編　●定價參拾五錢 郵税六錢

新刊● 塑像と石膏　牧野等著　●定價參拾錢 郵税四錢

發賣元　東京本所　博文館

發行元　東京小石川　日本葉書會

文（後付の一二）

明治卅九年十二月五日發行 每月一回五日發行
第六卷第拾六號
明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可

（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊽
明治39年11月（第6巻第15号）、12月（第6巻第16号）

2008年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3387-1　C3321